

馳 上 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

はせ がみ 遺 跡

発掘調査報告書

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した馳上遺跡の調査成果をまとめたものです。

馳上遺跡は山形県の南東部に位置する米沢市に所在します。米沢市は室町時代に伊達氏が本拠を構え、江戸時代には上杉氏の城下町として栄えてきた街で、豊かな歴史や文化に恵まれています。

この度、主要地方道米沢高畠線道路改良工事に伴い、工事に先立って馳上遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代から平安時代までを主体とした住居跡ほかの遺構や河川跡が確認されました。また、これら遺構に伴って多くの遺物が出土し、文字資料としてたいへん貴重な木簡なども見つかっています。発見されたこれらの資料は、当時の生活状況を探る上でも重要と言えます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が埋蔵文化財保護の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木村 幸

## 例 言

- 1 本書は主要地方道米沢高畠線道路改良工事に係る「馳上遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県置賜総合支庁建設部道路計画課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺 跡 名	馳上遺跡	遺跡番号	353・355（米沢市遺跡地図）
所 在 地	山形県米沢市大字川井字元立		
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受 託 期 間	平成12年4月1日～平成14年3月31日		
現 地 調 査	平成12年5月10日～平成12年10月20日		
調 査 担 当 者	調査第三課長	佐藤 正俊	
	主任調査研究員	氏家 信行	
	調査研究員	須賀井新人（調査主任）	
	副調査員	黒沼 幹男	
	副調査員	佐藤明日香	
	副調査員	渋谷 純子	
整 理 担 当 者	調査第三課長	佐藤 正俊	
	主任調査研究員	氏家 信行	
	主任調査研究員	須賀井新人	
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県置賜総合支庁建設部道路計画課、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、米沢市教育委員会、東南置賜教育事務所等関係機関の協力を得た。また、木簡・墨書土器等の文字資料について三上喜孝氏（山形県立米沢女子短期大学）からご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成は須賀井新人・黒沼幹男・佐藤明日香が、執筆は須賀井が担当した。編集は松田道雄・須賀井が担当し、全体については佐藤正俊が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。

遺構の写真測量については、	国際航業株式会社に委託した。
理化学分析については、	パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
木製品の保存処理については、	関東都文化財保存研究所に委託した。
- 7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…竪穴住居跡	SB…掘立柱建物跡	SK…土 坑	SD…溝状遺構
SG…河川跡	SX…性格不明遺構	EB…柱 穴	EK…住居内土坑
EL…カマド・炉跡	RP…登録土器	RW…登録木製品	P…土 器
S…石	W…木		

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 土層観察において、遺跡を覆う基本層序をローマ数字（Ⅰ～Ⅳ）で示し、遺構の堆積土については算用数字で表した。

4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 調査概要図・遺構配置図等に付す座標値は、平面直角座標系第X系による。図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は、 $N-1^{\circ}30'E$ を測る。

(3) 遺構実測図は1/10～1/300縮尺で採録し、各々にスケールを付した。

(4) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

(5) 掘立柱建物跡実測図中の網点スクリーンは、柱根を表している。

(6) 遺物実測図・拓影図は1/3を基本として採録し、異なるものについては各々にスケールを付した。遺物図版については、任意の縮尺で採録した。

(7) 遺物実測図中の断面黒ベタは須恵器を示し、その他のものについては断面白抜きで表した。また、土器実測図中の網点スクリーンは黒色処理を、砂目スクリーンは自然軸を表している。

(8) 遺物観察表の出土地点・層位欄で「F」は遺構覆土（河川跡堆積土）内出土を、「Y」は底面密着で出土したことを示している。また、計測値「口径」欄の（ ）内数値は図上復元による推計値、「器高」欄のそれは残存値を示している。

(9) 遺構覆土の色調の記載については、1997年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	4
III 遺跡の概観	
1 地形と層序	6
2 遺構と遺物の分布	9
IV 遺構と遺物	
1 竪穴住居跡	10
2 掘立柱建物跡	100
3 土 坑	115
4 溝跡・河川跡	118
5 その他の遺構内・包含層出土遺物	138
V まとめと考察	
1 調査のまとめ	143
2 遺構・遺物の変遷	144
報告書抄録	150

## 付 編

「馳上遺跡から出土した柱材の樹種」

「米沢市馳上遺跡出土木簡」

## 表

表1 調査工程表	2	表5 遺物観察表(4)	99
表2 遺物観察表(1)	96	表6 掘立柱建物跡観察表	112
表3 遺物観察表(2)	97	表7 遺物観察表(5)	141
表4 遺物観察表(3)	98	表8 遺物観察表(6)	142

## 挿 図

第1図	地形分類図……………	3	第34図	ST1337出土遺物……………	52
第2図	遺跡位置図……………	5	第35図	ST1382住居跡、 出土遺物(1)……………	53
第3図	調査概要図……………	7	第36図	ST1382出土遺物(2)……………	54
第4図	調査区横断面と基本層序……	8	第37図	ST1420住居跡……………	55
第5図	ST6・21住居跡……………	11	第38図	ST1420出土遺物……………	56
第6図	ST6・21出土遺物……………	13	第39図	ST1440住居跡……………	58
第7図	ST23・88住居跡……………	14	第40図	ST1440出土遺物……………	59
第8図	ST88出土遺物……………	16	第41図	ST1878・2272住居跡……	61
第9図	ST106住居跡……………	17	第42図	ST1878・2272出土遺物…	62
第10図	ST210住居跡……………	19	第43図	ST1878出土遺物……………	63
第11図	ST210出土遺物(1)……………	20	第44図	ST1914住居跡……………	65
第12図	ST210出土遺物(2)……………	21	第45図	ST1914出土遺物……………	66
第13図	ST271・279住居跡、 出土遺物……………	23	第46図	ST1923住居跡……………	68
第14図	ST337・338・583住居跡、 出土遺物……………	25	第47図	ST1923出土遺物……………	69
第15図	ST338出土遺物……………	26	第48図	ST1960住居跡……………	71
第16図	ST354住居跡……………	27	第49図	ST1960出土遺物……………	73
第17図	ST363住居跡、出土遺物…	29	第50図	ST1968住居跡……………	75
第18図	ST426住居跡、出土遺物…	31	第51図	ST1968出土遺物……………	76
第19図	ST458住居跡、出土遺物…	32	第52図	ST1976住居跡……………	77
第20図	ST790住居跡……………	34	第53図	ST1976出土遺物……………	78
第21図	ST790出土遺物……………	35	第54図	ST1979・1980住居跡……	80
第22図	ST823住居跡、出土遺物…	36	第55図	ST1980住居跡……………	81
第23図	ST835住居跡、出土遺物…	37	第56図	ST1980出土遺物(1)……………	82
第24図	ST1156住居跡、出土遺物…	39	第57図	ST1980出土遺物(2)……………	83
第25図	ST1181住居跡……………	41	第58図	ST1993住居跡、出土遺物…	85
第26図	ST1181出土遺物……………	42	第59図	ST2069住居跡……………	86
第27図	ST1213住居跡、出土遺物…	43	第60図	ST2069出土遺物(1)……………	87
第28図	ST1224住居跡……………	45	第61図	ST2069出土遺物(2)……………	88
第29図	ST1224出土遺物……………	46	第62図	ST2069出土遺物(3)……………	89
第30図	ST1294住居跡……………	47	第63図	ST2074住居跡……………	91
第31図	ST1294出土遺物……………	48	第64図	ST2074出土遺物(1)……………	92
第32図	ST1315住居跡……………	50	第65図	ST2074出土遺物(2)……………	93
第33図	ST1315出土遺物……………	51	第66図	ST2128住居跡……………	95
			第67図	ST2128出土遺物……………	96

第68図	SB573建物跡	101	第87図	SG1155出土遺物(2)	124
第69図	SB574建物跡	102	第88図	SG1335河川跡	125
第70図	SB641建物跡	103	第89図	RP50出土状況	126
第71図	SB577建物跡	104	第90図	SG1335出土遺物(1)	126
第72図	SB585・631建物跡	105	第91図	SG1335出土遺物(2)	127
第73図	SB1217・1501建物跡	106	第92図	SG1335出土遺物(3)	128
第74図	SB1088建物跡	107	第93図	木簡	129
第75図	SB1505建物跡	109	第94図	SG1497河川跡	130
第76図	SB2222建物跡	110	第95図	SG2131河川跡	131
第77図	SB2224建物跡	111	第96図	SG2131出土遺物(1)	133
第78図	SK1627・1653・1830・ 2174土坑	115	第97図	SG2131出土遺物(2)	134
第79図	SK412・518・520土坑、 出土遺物	116	第98図	SG2131出土遺物(3)	135
第80図	SK428・440等土坑、 出土遺物	117	第99図	SG2131出土遺物(4)	136
第81図	SD1296溝跡	119	第100図	SG2131出土遺物(5)	137
第82図	SG583河川跡、出土遺物(1)	120	第101図	遺構内出土遺物(1)	138
第83図	SG583出土遺物(2)	121	第102図	遺構内出土遺物(2)	139
第84図	SG1155遺物出土状況	121	第103図	包含層出土遺物	140
第85図	SG1155河川跡	122	第104図	竪穴住居跡の規模	144
第86図	SG1155出土遺物(1)	123	第105図	住居跡出土土器の変遷(1)	145
			第106図	住居跡出土土器の変遷(2)	146
			第107図	住居跡出土土器の変遷(3)	147
			第108図	住居跡、河川跡の時期区分	148

## 図 版

- |      |                  |      |                    |
|------|------------------|------|--------------------|
| 図版 1 | A調査区全景 他         | 図版36 | ST1315住居跡 (1)      |
| 図版 2 | B調査区全景 他         | 図版37 | ST1315住居跡 (2)      |
| 図版 3 | 調査風景             | 図版38 | ST1337住居跡          |
| 図版 4 | ST6住居跡           | 図版39 | ST1382住居跡 (1)      |
| 図版 5 | ST21住居跡 (1)      | 図版40 | ST1382住居跡 (2)      |
| 図版 6 | ST21住居跡 (2)      | 図版41 | ST1420住居跡          |
| 図版 7 | ST23住居跡          | 図版42 | ST1440住居跡 (1)      |
| 図版 8 | ST88住居跡 (1)      | 図版43 | ST1440住居跡 (2)      |
| 図版 9 | ST88住居跡 (2)      | 図版44 | ST1878・2272住居跡 (1) |
| 図版10 | ST106住居跡 (1)     | 図版45 | ST1878・2272住居跡 (2) |
| 図版11 | ST106住居跡 (2)     | 図版46 | ST1914住居跡          |
| 図版12 | ST210住居跡 (1)     | 図版47 | ST1923住居跡 (1)      |
| 図版13 | ST210住居跡 (2)     | 図版48 | ST1923住居跡 (2)      |
| 図版14 | ST214住居跡         | 図版49 | ST1960住居跡 (1)      |
| 図版15 | ST218住居跡         | 図版50 | ST1960住居跡 (2)      |
| 図版16 | ST271住居跡         | 図版51 | ST1968住居跡 (1)      |
| 図版17 | ST279住居跡         | 図版52 | ST1968住居跡 (2)      |
| 図版18 | ST337・338・583住居跡 | 図版53 | ST1976住居跡 (1)      |
| 図版19 | ST354住居跡         | 図版54 | ST1976住居跡 (2)      |
| 図版20 | ST363住居跡 (1)     | 図版55 | ST1979・1980住居跡     |
| 図版21 | ST363住居跡 (2)     | 図版56 | ST1980住居跡          |
| 図版22 | ST426住居跡         | 図版57 | ST1993住居跡          |
| 図版23 | ST458住居跡 (1)     | 図版58 | ST2069住居跡          |
| 図版24 | ST458住居跡 (2)     | 図版59 | ST2074住居跡 (1)      |
| 図版25 | ST790住居跡         | 図版60 | ST2074住居跡 (2)      |
| 図版26 | ST823住居跡         | 図版61 | ST2128住居跡          |
| 図版27 | ST835住居跡         | 図版62 | SB573建物跡           |
| 図版28 | ST1156住居跡        | 図版63 | SB574建物跡           |
| 図版29 | ST1181住居跡 (1)    | 図版64 | SB577建物跡           |
| 図版30 | ST1181住居跡 (2)    | 図版65 | SB585建物跡           |
| 図版31 | ST1213住居跡        | 図版66 | SB631建物跡           |
| 図版32 | ST1224住居跡 (1)    | 図版67 | SB641建物跡           |
| 図版33 | ST1224住居跡 (2)    | 図版68 | SB1088建物跡          |
| 図版34 | ST1294住居跡 (1)    | 図版69 | SB1217建物跡          |
| 図版35 | ST1294住居跡 (2)    | 図版70 | SB1501建物跡          |

- |      |              |       |                |
|------|--------------|-------|----------------|
| 図版71 | SB1505建物跡    | 図版90  | 住居跡出土遺物 (13)   |
| 図版72 | SB2222建物跡    | 図版91  | 住居跡出土遺物 (14)   |
| 図版73 | SB2224建物跡    | 図版92  | 住居跡出土遺物 (15)   |
| 図版74 | SK171土坑 他    | 図版93  | 住居跡出土遺物 (16)   |
| 図版75 | SK449土坑 他    | 図版94  | 住居跡出土遺物 (17)   |
| 図版76 | RP50縄文土器     | 図版95  | 住居跡出土遺物 (18)   |
| 図版77 | SG538河川跡 他   | 図版96  | 住居跡・土坑・河川跡出土遺物 |
| 図版78 | 住居跡出土遺物 (1)  | 図版97  | 河川跡出土遺物 (1)    |
| 図版79 | 住居跡出土遺物 (2)  | 図版98  | 河川跡出土遺物 (2)    |
| 図版80 | 住居跡出土遺物 (3)  | 図版99  | 河川跡出土遺物 (3)    |
| 図版81 | 住居跡出土遺物 (4)  | 図版100 | 河川跡出土遺物 (4)    |
| 図版82 | 住居跡出土遺物 (5)  | 図版101 | 河川跡出土遺物 (5)    |
| 図版83 | 住居跡出土遺物 (6)  | 図版102 | 河川跡出土遺物 (6)    |
| 図版84 | 住居跡出土遺物 (7)  | 図版103 | 河川跡出土遺物 (7)    |
| 図版85 | 住居跡出土遺物 (8)  | 図版104 | 河川跡出土遺物 (8)    |
| 図版86 | 住居跡出土遺物 (9)  | 図版105 | 河川跡出土遺物 (9)    |
| 図版87 | 住居跡出土遺物 (10) | 図版106 | 河川跡・遺構内出土遺物    |
| 図版88 | 住居跡出土遺物 (11) | 図版107 | 遺構内・包含層出土遺物    |
| 図版89 | 住居跡出土遺物 (12) | 図版108 | 包含層出土遺物        |

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

馳上遺跡は米沢市教育委員会により、353・355番として遺跡地図に登録された周知の遺跡である。この地に「主要地方道米沢高島線」道路改良工事の計画が県土木部より示されたのを受けて、県教育委員会では事業との調整を図る目的から平成10年9月に試掘調査を実施した。遺跡地図に示された範囲のうち、事業にかかる予定地内を対象に重機を用いたトレンチ掘りを行い、遺物包含層の有無や遺構検出面までの深さ、またその遺存状況等が確認された。調査の結果、遺跡は地図に記載されたとおり奈良・平安時代を主体とした集落跡と認識され、遺跡にかかる事業面積は約12,000㎡と判断された。なお、米沢市遺跡地図の馳上a遺跡(353番)および馳上b遺跡(355番)は、その範囲を補正し統合した上で「馳上遺跡」とする修正が行われた。

この調査によって得られた資料を基に、県教育委員会では遺跡保護の観点から事業者側と協議を重ねたが、計画路線や工法の変更が困難との結論に至り、事業施工前の平成12年度に遺跡の緊急発掘調査を実施して記録保存に資する運びとなった。

発掘調査に至るまでの主な協議等は以下のとおりである。

- ◆山形県知事より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「米沢高島線道路改良工事の実施に伴う地区内の埋蔵文化財発掘調査」の依頼(H12/2/15)
- ◆県埋蔵文化財センター理事長より山形県知事あてに、発掘調査を実施することおよび経費見積りの回答(H12/3/7)
- ◆県土木部管理課と県埋蔵文化財センターとで「土木公共事業にかかる埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約」を締結(H12/4/3)

### 2 調査の方法と経過

当初の現地調査期間は、平成12年5月10日から11月22日までの120日間で計画した。東西300mにおよぶ調査対象区域は大半が水田であり、南北方向に農道や用排水路が設置されている現状である。これら農道や水路部分は共用しながらの調査となるため、調査区をあらかじめ4区域に分割し、東側からA～D区として扱った。事業用地の両側是水田として作付けされることを考慮し、通路の確保や壁面の崩落および漏水防止のため境界から4m幅の余裕を残して調査区を設定した。そして、住居跡や建物跡等が調査区縁辺において検出された場合は、後にその部分のみ拡張する方法を採った。このことから、実調査面積は最終的に9,280㎡となった。

各調査区設定後に重機による全面の表土除去を行い、遺構の規模や数の把握あるいは分布の度合い等を確認し、各区にかかる仕事量と日数を全体計画の中で考案した。また、表土除去と並行して座標となるグリッド杭の設定を行った。基準にしたのは、計画路線のセンター杭に当たる任意の2点を結んだ東西線であり、グリッド座標の南北軸は磁北に対して $N-1^{\circ}30'-E$ の傾きを有する。調査はA→B→C・D区の順に進め、経過の概要を以下に記す。

表土剥離後の面整理を経て、5月26日からA区の遺構検出作業を実施。A区は道路改良に関

連し先行して現地を引き渡す予定であるため、7月中旬までの調査工程である。プラン検出後に遺構配置の略測図を作成。6月2日より遺構掘り下げ開始。各遺構の土層断面を観察・記録しながら、住居跡や建物跡等については遺物出土および完掘状況の実測図を随時作成。遺構精査は7月5日に終了。翌6日から冠水状態にあるB区を後回しにして、C・D区の遺構検出を行う。13日にA区の空中写真測量を実施。14日にはA区を対象とした調査説明会を開催、終了後に現地を引き渡した。なお、当該時点で8月より調査員1名・作業員10名を増員して、調査期間を約1ヶ月短縮する工程を事業者側と協議し了解を得ている。

7月17日よりB区の遺構検出に着手。住居跡はA区同様に削平が著しく、ほぼ床面での検出となる。地下水の噴出に悩まされながらも、略測図作成と並行して26日から遺構掘り下げを開始、8月のお盆休みを経て9月1日に精査・記録とも終了した。

C区は9月4日より再度の遺構検出作業を行って、6日から掘り下げを開始。中央部にある河川跡を挟んで調査区内で最も遺構が密集し、遺存状況が良好なため遺物の出土量も多い。図面等の記録は住居跡・建物跡を中心に進める。これと並行してD区の遺構再検出、および略測図を作成。21日には先に調査終了したB区について写真測量を実施。28日からはD区においても遺構掘り下げに着手。掘り下げ精査は10月17日までにほぼ終了し、翌18日にC・D区の空中写真測量を行った。なおこの間、9月18日に地元公民館主催の遺跡見学会、10月14日にはB～D区を対象とした2回目の調査説明会を開催している。C区では遺構数の多さと住居跡等の遺存状態が良いこともあり、最終日まで平面図等の記録に追われたが、10月20日で調査をすべて終了。同日、現地引き渡しと機材撤収を行った。

表1 調査工程表

		5月	6月	7月	8月	9月	10月
表土除去							
面 整 理	A区						
	B区						
	C区						
	D区						
グリッド設定	A区						
	B区						
	C区						
	D区						
遺 構 検 出	A区						
	B区						
	C区						
	D区						
遺 構 精 査	A区						
	B区						
	C区						
	D区						
記 録	A区						
	B区						
	C区						
	D区						

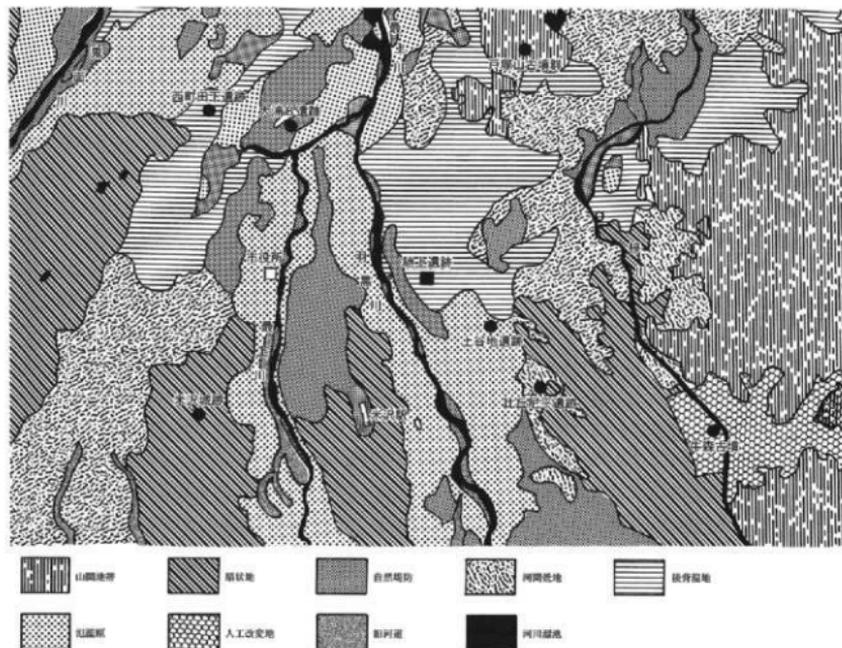
## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境 (第1図)

馳上遺跡の所在する米沢市は山形県の東南隅に位置し、豪士山・駒ヶ岳・栗子山といった奥羽山系の嶺々に東を限られ、磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻の山塊が南を画している。これら東南に聳え立つ山々が、福島県との境界ともなっている。米沢市はこれらの山並みと、西部を低くならぬ玉庭丘陵によって囲まれた典型的な盆地と言える。したがって、気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型で、県内でも降雪量の多い地域である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する幾筋もの水流は、鬼面川・松川・羽黒川などの河川となって氾濫原を形成しつつ北流している。これらは、やがて合流して最上川となって県内を貫き、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。馳上遺跡は米沢市役所の東約1.5km、標高240m前後を測る水田中に位置し、羽黒川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡西側を北流する羽黒川は、北方約2km先で最上川と合流する。

遺跡周辺の地形は、羽黒川によって形成された緩やかな自然堤防の後背湿地にあたり、排水状況が良好とは言えない。土地利用状況は水田が主体であり、他に一部で畑地なども利用さ



第1図 地形分類図 (山形県発行5万分の1地形分類図「米沢」を使用)

れている。表層の地質は第四紀に形成された未固結の沖積・扇状地堆積物であり、細粒・軟質の砂や泥からなる。耕作土は細粒強グライ土壌が大部分を占め、わずかに畑地部分に中粗粒褐色低地土壌が分布している。グライ土壌は非固結堆積岩を母岩とし、地下水位が50cm前後と高い。土性は粘質で還元状態が強く、各種養分は多いが排水能力に乏しいため生産力が高いとは言えない。

## 2 歴史的環境 (第2図)

米沢市では650ヶ所を超える遺跡の存在が知られている。中でも本遺跡の南東方に位置する八幡原周辺は密集地帯となっており、縄文時代早期から中世まで各時代の遺跡が確認されている。狩猟・採集を主としていた時代から、稲作を根幹とする生産基盤を持つ社会を通じて、当地域が生活の場として利用され続けてきたことを示している。

周知遺跡の約半数が縄文時代の遺跡であり、南・西部の台地上を中心に分布している。代表的なものとして、縄文時代前期初頭の石器工房跡と推定される大型竪穴住居が検出された国指定史跡の一ノ坂遺跡、土偶をはじめ中期中葉の遺物が大量に出土し大規模中核的な集落跡とされる台ノ上遺跡などが挙げられよう。弥生時代の遺跡は極めて少なく、縄文時代との複合遺跡として登録されているものに限られる。

古墳時代には周辺の丘陵や山麓を中心に、大小の古墳が築造される。市街北東部には193基の群集墳である戸塚山古墳群、北西部には成島古墳群が存在する。北部の窪田地区には東北地方でも最大級の前方後円墳である寶領塚古墳をはじめ、窪田古墳・八幡塚古墳などが点在している。また、本遺跡の南東約1.5kmに位置する比丘尼平遺跡では、県内で初出となった前期の方形周溝墓が発見されている。

奈良・平安時代の遺跡は、主要な河川に沿って平野部へ広範囲に分布する様相が窺われる。具注暦の漆紙文書や布目瓦などが出土し置賜郡衙跡とも推定された大浦遺跡群、木簡・墨書土器や円面硯などの出土から古代置賜六郷の一つ「広瀬郷」との見解もある世原遺跡などは、官衙関連遺跡として捉えられている。平成12年9月に国史跡の指定を受けた古志田東遺跡は、出土木簡等の解析から、多くの労働力を集約して大規模な農業経営や、船による交易などを行っていた10世紀代の有力豪族の居館として注目された。置賜地方は、『日本書紀』持統3(689)年の「陸奥国優咄曇郡」との記述が史料的に初見である。そして、和銅5(712)年出羽国建国の中に「置賜郡」の名が見られることから、陸奥国から分割されて「出羽国置賜郡」が誕生したとの解釈がなされている。

中世に入ると、鎌倉期の武將大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、暦仁元(1238)年米沢に居城を構えたと伝えられるが確証はない。その後、大江氏は長井氏を称して八代約200年におよぶ支配を続けたが、天授6(1380)年に伊達宗遠の侵攻によって滅び、置賜地方は伊達領となった。十五代晴宗が当主になって米沢に入部するまでは高島が置賜支配の中心であり、米沢を本拠とした伊達の治世は輝宗・政宗と続き、1591年に政宗が岩出山へ移封となるまでの210年間にわたった。存在する中世城館跡は200ヶ所以上とされているが、築城者や築城時期の不明なものが多い。



- |          |           |             |           |           |          |           |
|----------|-----------|-------------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1 築上遺跡   | 2 元宮遺跡    | 3 上野地C遺跡    | 4 上野地棚跡   | 5 東原敷遺跡   | 6 西谷地a遺跡 | 7 西谷地b遺跡  |
| 8 八木橋a遺跡 | 9 大南遺跡群   | 10 東川2遺跡    | 11 西町田下遺跡 | 12 西の原敷遺跡 | 13 上新田遺跡 | 14 上新田a遺跡 |
| 15 中川原遺跡 | 16 金ヶ崎a遺跡 | 17 保良別堂遺跡   | 18 新原遺跡   | 19 中里遺跡   | 20 窪田古墳  | 21 外ノ内保跡  |
| 22 八幡塚古墳 | 23 菅原塚古墳  | 24 米沢城跡     | 25 船山平塚   | 26 大津遺跡   | 27 生薬寺遺跡 | 28 船山園跡   |
| 29 一ノ原遺跡 | 30 成島古墳群  | 31 矢子大日向a遺跡 | 32 下小菅遺跡  | 33 大神跡    | 34 西方塚跡  | 35 京塚c遺跡  |

第2図 遺跡位置図(国土地理院5万分の1「米沢」を使用)

### III 遺跡の概観

馳上遺跡は、米沢市遺跡地図に奈良・平安時代の集落跡として記載・登録されている。遺跡の範囲は、平成10年度の試掘調査により東西幅約300mであることが確かめられている。また、南北の範囲は分布調査による遺物散布状況等から、約380mにおよぶと推定されている。現在の地目は大部分が水田であり、西側の一部が宅地や畑地となっている。今回の発掘調査区域は、遺跡範囲のほぼ中央を東西方向に横断するものである。

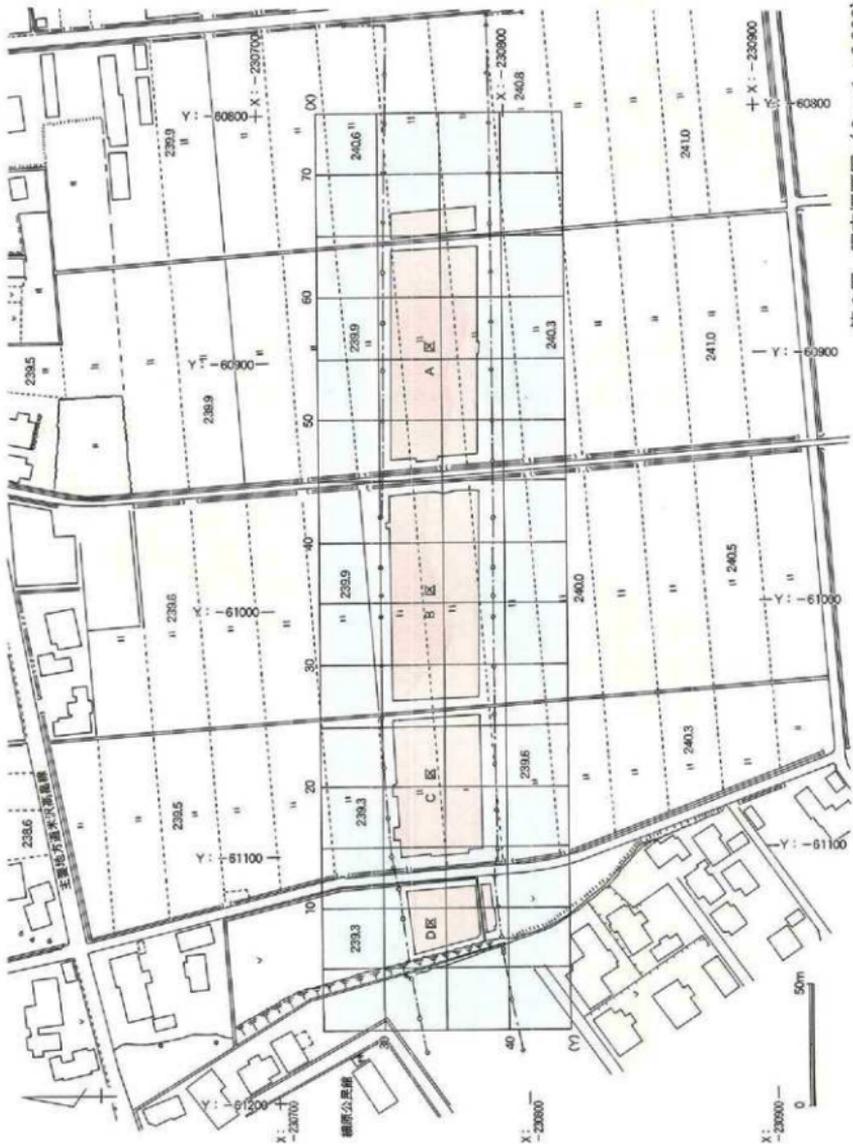
#### 1 地形と層序 (第3・4図)

羽黒川沿いの地形は自然堤防が狭い範囲で発達しているが、遺跡の立地する元立地区以北には広く後背低湿地が形成されている。このため、土壤はグライ化の強い粘質土である。遺跡の現在の地形は耕地整理によって平坦化され、標高240m内外の水田地帯となっている。遺跡範囲西辺には河岸段丘が形成されたことを示す高さ1m程の段差が生じ、遺跡は高位の段丘面に立地している。現在の田面は西から東へ、および北から南へ高くなる地形である。

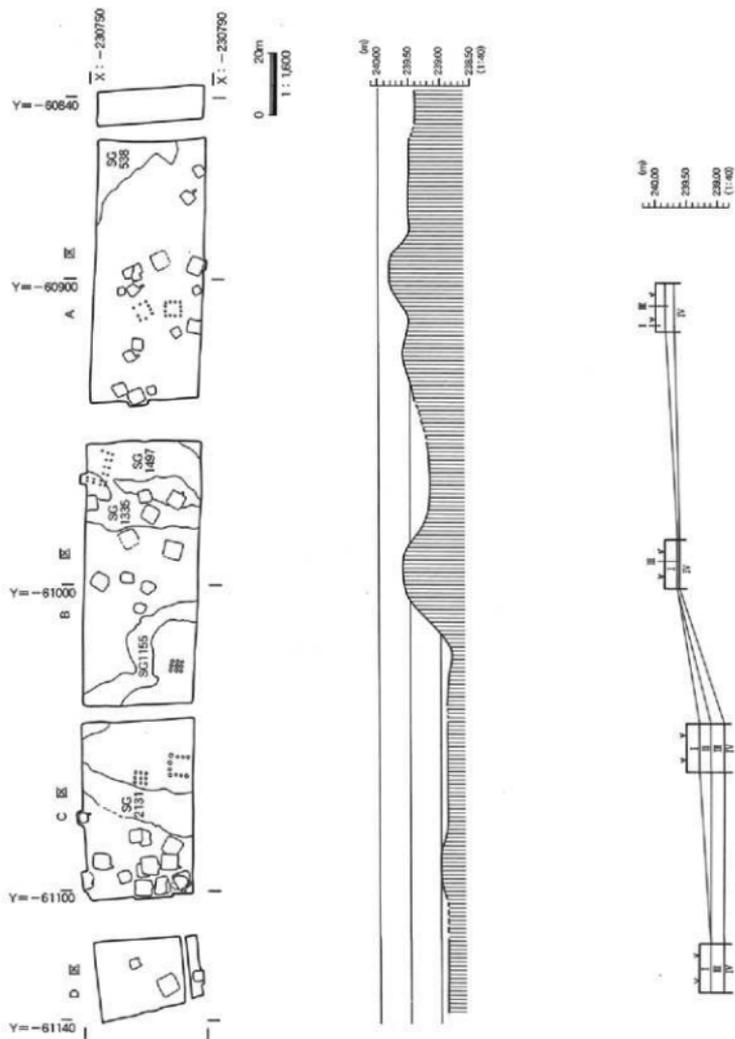
第4図には、調査区における遺構検出面標高の推移を表した。相対的に西への低下は窺えるが、所々で微高地状の起伏が存在している。標高値は距離の20倍の縮尺で示したため、実際はもっと緩やかな起伏となっている。調査区西側のD区からB区西部にかけてはほぼ平坦に推移し、C区西端部が10cm程の高まりを有する。B区中央部では検出面が一気に高くなるが、東半域でまた下がり40cm程の高低差を生じる。A区においては中央部が微高地となり、西端域でも小さい起伏が認められる。当時の地形は小規模ながら起伏に富んだ状況が窺われ、所々に堤防状を呈した微高地が存在していたと理解できる。

また同図には、遺構配置の概略として住居跡および建物跡と河川跡を示した。遺構検出面標高値との相関では、竪穴住居跡の分布が微高地と対応している状況が読み取れよう。標高値に見られる大小4ヶ所の起伏、すなわちC区西端部・B区中央部・A区西端部と中央部に、検出住居跡の大半が位置している。一方、河川跡はこれとは逆に、標高値の凹部で検出されている様相が窺い知れる。

遺跡の基本層序は各区において観察し、第4図下に示した。表土から地山までの層位と深さをC区では東端域で、他はそれぞれ中央域にて観測している。層序は地山(IV)に至るまで、基本的に次の3層に分かれる。I層は表土でA～C区は表層腐植多湿の粘質土壌、D区は畑地であることから暗褐色を基調としたシルト質土となる。II層は旧耕作土と考えられるグライ化した粘質土で、地山ブロックを混入している。地山直上のIII層は遺物包含層であり、炭化物を含む黒色粘質土を基調としている。II層の堆積が認められたのはC区のみであり、耕地整理等の際に現表土が盛土されたものと判断できる。また、B区SG1155の南西部はI層直下に約50～60cmの厚さで褐色土が堆積しており、人為的な整地層と識別された。遺物包含層(III)は場所により厚薄の別がある。特に、検出面の高いA区・B区の中央域では包含層が削平されて、表土直下が地山面という区域も認められた。したがって、これら区域の竪穴住居跡の中には、壁面が遺存せず検出面ですでに床面となる事例も存在した。



第3図 調査概要図 (S = 1 : 2,000)



## 2 遺構と遺物の分布（付図）

検出された主な遺構には、竪穴住居跡45棟や掘立柱建物跡12棟などがあり、他に土坑や溝状遺構として約1,800基を登録した。また、A～C区にかけて南北方向の流路となる河川跡5条を検出している。これら河川跡は機能していた時期がそれぞれ異なり、時代による流路の変遷を窺うことができる。遺構は調査区のほぼ全域で検出されており、特にC区で分布の密度が濃いと言える。A区では西半城と南東部において遺構の集中区域が見られ、北東部にある河川跡西側で希薄となる傾向が窺える。この部分は河川の氾濫原と考えられ、鞍部状の地形を呈して粘性の強いグライ土壌に覆われる。B区では3条の河川跡が東西に位置しており、河川間にあたる中央城および南西隅部を中心に遺構が分布し、河川跡と重複する遺構群も認められる。C区では中央部の河川跡両側全域で遺構が検出され、密集した分布状況を示している。D区は北西部に遺構の空白域が存在し、遺跡範囲西辺であることから遺構分布の西端と捉えられる。

遺構別の分布状況を概観すると、竪穴住居跡はA区北東城と鞍部を除く全域、B区中央城、C区西半からD区にかけて分布する。これら住居跡の分布は、前述したごとく微高地の在り方と一致するものであり、その構築は地形的な要因に拠る所が大きいと言える。特に、C区西半部では狭い範囲に重複して密集しており、居住域として長期間利用されたことが窺える。掘立柱建物跡はA区からC区の東半部にかけて、住居跡と同様に概ね微高地上に分布しているが、A区SB641のように河川岸の低地に配されるものも存在する。また、C区においては中央部の河川跡を境に、住居跡と建物跡の分布が別れている。概観では、B区SG1155の東岸とC区SG2131西岸の微高地に住居群が配され、河間低地状となる両河川間に建物群が分布する特徴が指摘でき興味深い。なお、B区北東角で検出した底付き大型建物跡（SB1505）は、中世の所産である。その他、A区南西隅部には交錯する畝状の溝跡群が分布し、これを住居跡群が取り囲むような在り方が窺え、土地利用区分の一端を示すものと考えられる。

一方、出土した遺物は量的に土器が156箱、主に河川跡内からの木製品が3箱相当分、カマド支脚石・砥石等の石製遺物が1箱であった。遺物の大半は土師器・須恵器等の土器であり、包含層（Ⅲ）と河川跡を含む遺構内出土の割合は18：82である。木製品は河川跡の他、土坑の底面や掘立柱建物跡の柱穴内から椀類が出土している。包含層遺物の出土量は、その遺存する厚さに相関することは当然考えられ、全体数の48%がC区から出土している。また、包含層出土遺物の分布は遺構の分布に比例すると思われるが、特にA・B区中央城の微高地では包含層の削平が顕著なため、検出された遺構数に対して出土量は少ない。D区は耕作による攪乱の痕跡が随所に見られ、包含層・遺構内とも出土遺物は希薄な状況であった。

量的にその主体となったのはSG2131、次いでSG1155の2条の河川跡であり、39箱分量が出土している。遺構内出土遺物における分布の概観は、竪穴住居跡とA区南東部検出の一部の土坑でまとまりのある分布状況が認められた。住居跡では、遺存状態が比較的良好であったC区検出の住居跡内で一括性が窺えた他、A区ST210・B区ST1440等、削平の度合いが軽微と考えられる微高地からやや外れた場所へ分布する住居跡で出土量が多いと言える。

## IV 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

検出された住居跡は重複分を含め、A区17棟・B区10棟・C区15棟・D区3棟の計45棟である。これらには出土遺物等により、古墳時代中期から平安時代の前葉までに属するものが認められる。以下では、掘り下げにより一括した遺物が出土した住居跡を中心に、調査区毎の検出順にしたがって遺構と遺物の概要を記す。

#### ST6・21 (第5・6区)

**位置・重複** A区西辺の47-32・33グリッドに主体を置く住居跡で、ST6住居跡南西角とST21北東角が重複し、前者が後者を切って構築される。

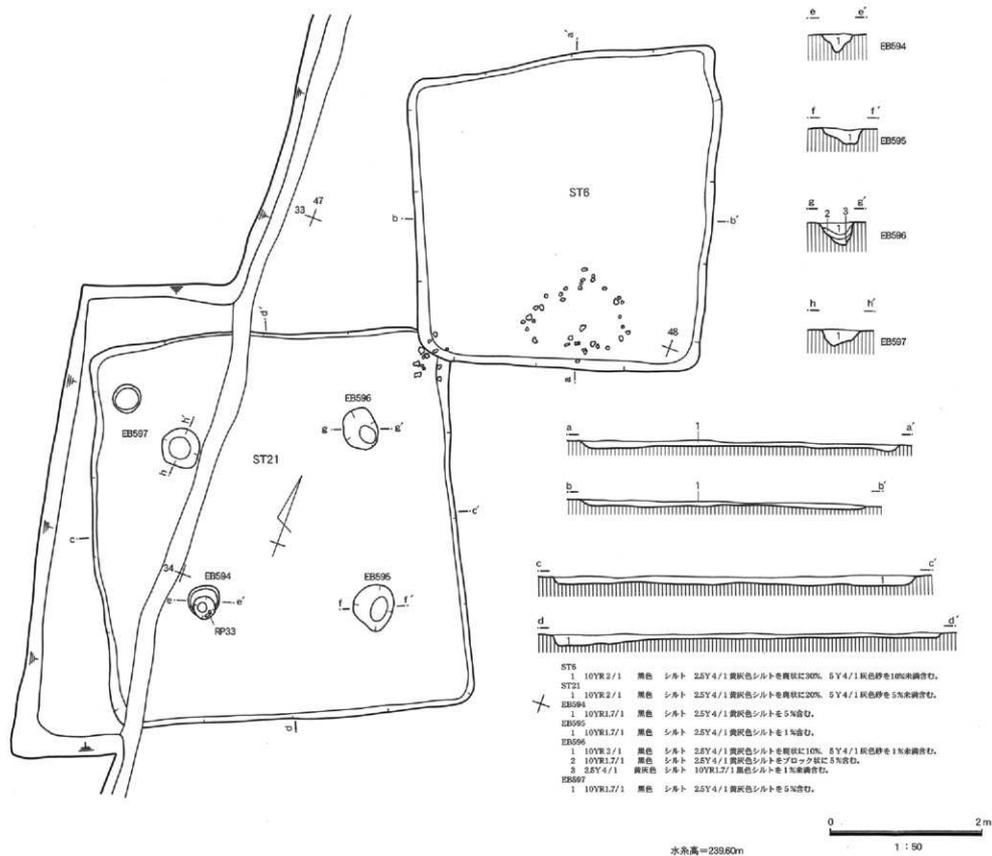
**平面形・規模** ST6の平面形は各辺の長さが不均等であることから台形様プランを呈し、東西軸3.9m・南北軸4.2mを測る。ST21は東西軸4.8m・南北軸5.1m規模を測り、南北軸でやや長い方形プランを呈する。なおST21は当初、西辺部が調査区西壁外にかけり未検出であったため、後にこの部分を拡張して精査を行った。

**壁・堆積土** 両住居跡とも検出段階で床面もしくは床直上であったことから、明瞭な壁面の確認には至っていない。地山までの堆積層は黒色土に地山ブロックが混入した一層位で、極く浅い掘り込みで完掘できた。住居跡が位置するA区北西域は、地下水の日常的な湧出が起因して地盤が軟弱であり、排水・乾燥を待っての掘り下げとなった。水分を含む土質のため全体的に粘土質であったが、2棟とも貼り床面は確認されない。

**床面** ST6・21とも地山を直接床面としていると推測される。双方とも床面は小さな起伏があったり、レベルが均一でなく平坦な状態ではない。壁周辺より中央部でやや高い様相が窺え、この部分が幾分固くしまった状況を呈する。

**柱穴** ST6からは柱穴およびピット状の掘り込み等は検出されない。一方、ST21ではその配置と規模から見て、明確に支柱穴と判断できる4基の掘り込みが存在する。掘り方プランは径40～60cmのいずれも略円形を呈し、床面からの深さが20～30cmを有する。柱間はEB594・595・596間で2.3m、EB596・597間で2.4m、EB597・594間は2.1mを測る。EB594が他の柱穴と比べて幾分小規模で、やや内側寄りに構築されるものの、柱穴間を結ぶ軸線が住居の東西・南北辺に各々平行し、さらに各コーナーからの距離がほぼ同一かつ対角線上の配置である等の規則性が認められる。また、EB594は掘り方途中で段を形成し、堆積土も3層に区分されるなど、他の柱穴とは構築法や埋積過程が明らかに異なっていると捉えられる。なお、これら支柱穴4基の他には北西隅部に円形様の落ち込み1基を認めたが、皿状の浅い掘り込みによるものであった。

**遺物出土状況** 前述したように両住居跡とも床面もしくは床直上での検出であり、堆積層が薄いこと等も原因して、遺物の出土量は少ない状況であった。ST6は南辺中央部、径約1.5mの範囲内と、ST21と重複する南西角に集中して遺物の散布が認められた。出土状況は床面直上か、床面からやや浮いた状態であった。ST21では床面上に遺存する遺物は認められず、堆積



- ST6  
 1 10YR2/1 黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを雜狀に30%、5Y4/1 灰褐色を10%を調査む。  
 ST21  
 1 10YR2/1 黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを雜狀に20%、5Y4/1 灰褐色を5%を調査む。  
 EB594  
 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを5%含む。  
 EB595  
 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを1%含む。  
 EB596  
 1 10YR2/1 黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを雜狀に10%、5Y4/1 灰褐色を1%を調査む。  
 2 10YR1.7/1 黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトをブロック状に5%含む。  
 3 2.5Y4/1 黄灰色 シルト 10YR1.7/1 黒色シルトを1%を調査む。  
 EB597  
 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを5%含む。

第5図 ST6・21 住居跡

土中から数点の土師器破片が出土するに止まる。また、EB594柱穴内からは半完形の土師器鉢(RP33)が壁面密着で出土している。これらの遺物は出土状況から、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

**出土遺物** 復元実測できたものは、第6図に示した3点の土師器である。ST6出土の1は甕の口縁部資料である。器面調整は頸部以下に外面縦方向・内面横方向のハケメが施され、形態的特徴から8世紀代以降の長胴甕と判断されよう。2・3はST21出土土器で、形態的差異から坏と鉢に分別した。内黒坏の2は身の浅い丸底形態で、口縁まで大きく外傾して開く扁平な器形を持つ。外面の調整は底部にヘラケズリが見られるが、体部にはナデ以外の調整は加えられず輪積み痕を明瞭に残す。3は小振りな形態の鉢で、内外面とも丹念な整形・調整が行われる。器形は膨らみを持つ体部が頸部で一旦しまり、そこから外傾して口縁に至る。体部はケズリによって器形を整えた後、上半にハケメを施し器面調整している。内面には幅広いミガキが観察される。相対的に遺物量が少ない中、土師器坏は時期決定資料となり得るものの、共存関係にある小型鉢が同一時期の所産と見なすことができるかどうかは検討を要すと思われる。



第6図 ST6・21 出土遺物

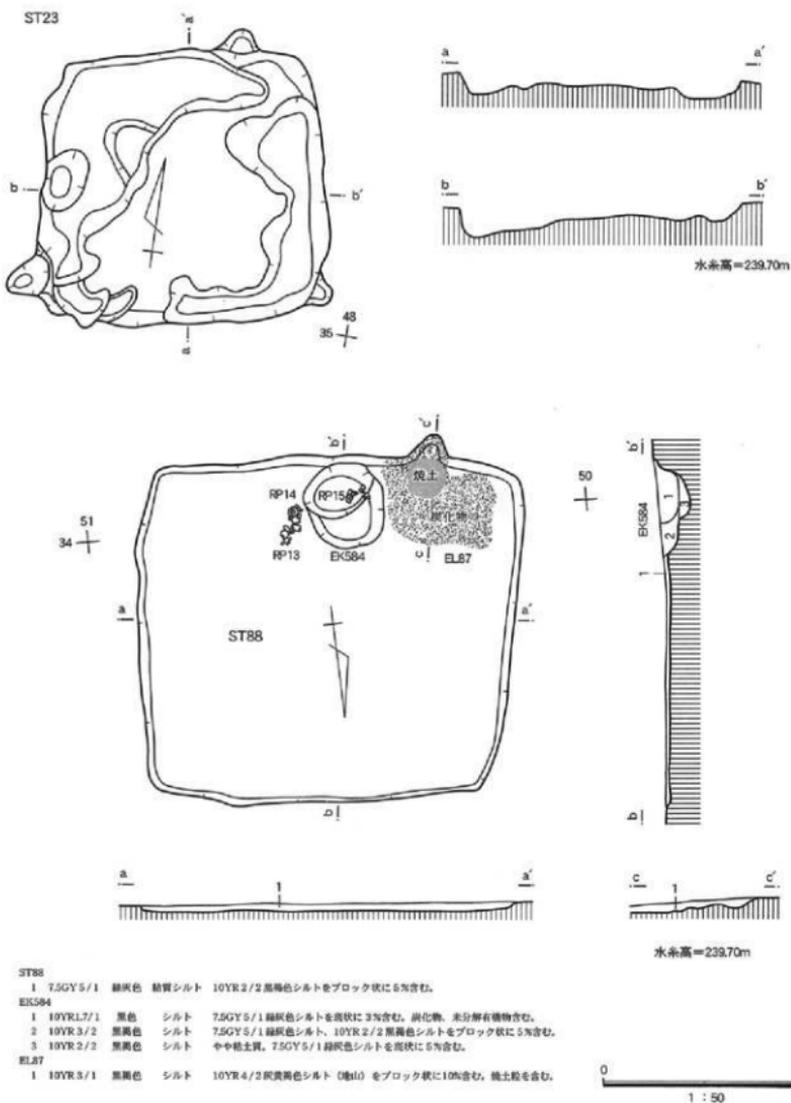
#### ST23 (第7図)

**位置** A区西辺の47・48-34・35グリッドに位置する住居跡で、ST21の南側に隣接する。住居跡同士の重複はない。

**平面形・規模** 平面プランはほぼ正方形を呈するが、北辺と南東および南西隅部に半円状の張り出しを有する。南西部のそれは、住居跡の床面よりも深く掘り込まれることから、検出時に識別できなかった他遺構の重複と考えるのが妥当であろう。東西軸2.9m・南北軸2.8mを測り、検出住居跡の中でも小規模な一群に属する。

**床面・掘り方** 前述の住居跡と同様、検出段階ですでに床面上であった可能性が高いため、壁は遺存しない。床面の状況は中央部で地山の露出を認める以外、炭化物を混入する黒色土に覆われる。ただし土質は粘土質とは言えず、貼り床ほどのしまりや固さが感じられない。床面での出土遺物はなく、柱穴跡の検出もできなかったことから、調査では地山までの掘り下げを行っている。地山面でのレベルには高低差があり、概観すれば中央域で高く周辺部で落ち込む掘り方と認識される。

**出土遺物** 遺物は地山までの覆土内より、土師器・須恵器の甕片を主に約30点出土した。いずれも細片で実測図化なし得ないが、これらの土器片は奈良時代以降の所産と判断される。



第7図 ST23・88 住居跡

## ST88 (第7・8図)

**位置** A区西部の50-33・34グリッドに位置し、後述するST106と近接した位置関係にある。他遺構との重複は認められない。

**平面形・規模** 平面形は南辺が他3辺に対して幾分長い略正方形となる。カマドの位置する南辺は、その部分がやや張り出して弧状を呈する。南辺長3.6m、東・西・北辺は約3.3m規模を測り、小規模な一群に含まれる。

**床面** RP13・14等遺物の在り方やカマド付近焼土層の堆積状況等から察して、検出時に床面に達してたと推定される。したがって、その状況は判然としないながら、貼り床等に関わる粘土層の分布は認められない。地山を直接床面にしたと考えられるが、斑状に覆土の黒色土が交り込んでいる。床面上はほぼ平坦なもの、西側に比較して東側のレベルがやや高い。

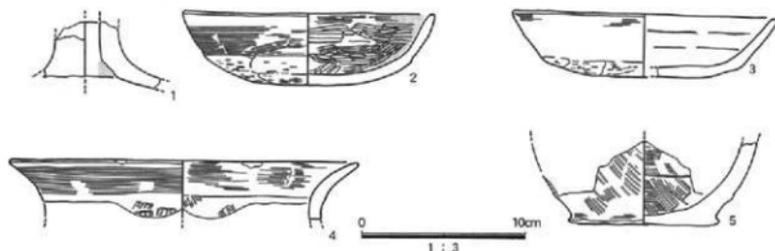
**カマド** 南壁の西寄りに付設される。遺存状況が良くないために形態等不明な部分が多いが、南辺に小規模なV字状の張り出しを有し、内側に円形様の焼土層が確認できる。また、その周辺東西約1mの範囲には、焼土ブロックおよび炭化物が散在している。床面上での検出であったことから、張り出しは煙道の一部と推測されるが燃焼部の構造等は明らかでない。

**貯蔵穴** 住居跡の南辺域中央部、カマドの東側に住居内土坑EK584が存在する。カマドに近接した位置関係から察して、貯蔵穴と考えられる。長径90cm・短径80cm規模の楕円形様を呈し、南半で一段深く掘り込まれる底面までは約30cmを測る。覆土は3層を認め、底面上に堆積する3層中からRP15他の遺物が出土している。

**遺物出土状況** 床面から上部の削平が原因して出土した遺物は極めて微量ながら、遺物の分布はカマドと貯蔵穴付近に集中する傾向が指摘できる。

**出土遺物** 復元・図化したものは、第8図に示した5点の土師器である。これらは、床面か貯蔵穴底面出土の遺物である。すなわち、一次的な位置を留めていると判断され、住居跡の時期決定資料となり得る。

1は床面上から出土した高坏の脚部破片で、脚柱が短く脚裾の大きく広がる脚部形態が窺い知れる。外面には微かにハケメ痕を認めるが、その後のナデにより消し去られて判然としない。脚柱内面は器台様の円孔状となるのが特徴的で、裾部は黒色処理される。坏は体部下半に段を形成する丸底有段形態のもので、同器形ながら内黒と非内黒の別がある。内黒の2は外面中程に段を有し、以下にヘラケズリが施される。内面には2～3mm幅の丹念なミガキ調整が観察される。3は非内黒で、段は2より明瞭なものではなくケズリによって作り出される。内面は底部にヘラナデを施す以外の調整は認められず、体部に輪積み痕を残す。なお、外面底部は二次焼成により赤褐色化している。甕は断片的資料であり全形が窺えるものはなく、4の口縁部片と5の底部資料を図化した。器形不明ながら、口縁に最大径を有する長胴甕と認識できる。4は粗砂の混入がない緻密な胎土で、かなり堅牢な焼成であることが注意される。図示した5点は1・2が床面出土、3～5が貯蔵穴出土で共伴しており、2・3の坏の形態的特徴から時期は国分寺下層式に属する一群と捉えられる。特に1の高坏の形態は、当該期の資料の中に類例が見当たらず注目されよう。



第8図 ST88 出土遺物

## ST106 (第9図)

**位置・重複** A区西部の49・50-32・33グリッドに位置し、ST6およびST21と同様の主軸方向を持つ住居跡である。北東部を近世の暗渠に切られるが、床面までは達していない。

**平面形・規模** 東西軸3.5m・南北軸3.6m規模を測る略正方形を呈す。カマドが位置する南辺西隅部は、その煙道が細長く舌状に張り出す。また、北辺と西辺は角部を含めて丸みを帯びたプランとなる。

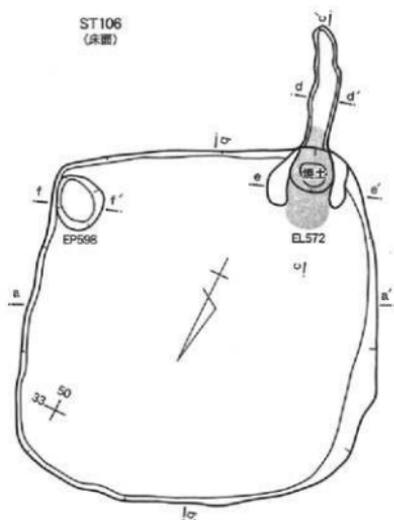
**壁・堆積土** ほぼ床面レベルでの検出であったことから、遺存した壁面は僅かながら全周において確認された。立ち上がりはほぼ垂直的であるが、西辺北半では傾斜を有して幾分緩やかとなる。壁高は西壁で約10cmを測る。覆土は床面直上に堆積する1層を認めたに止まる。

**床面** 地山を床とするもので、貼り床は施していない。床は凹凸がなく平坦な面と捉えられる。カマド周囲から西壁南半沿いにかけては、炭化物や焼土のほか黒色土が斑状に入り込んでおり、この範囲は他の地山面に比較してやや固くしまった状態と認識できる。また、南半部を中心に堆積土と同様の黒色土が混入していたが、この部分は後世の深耕による落ち込みと推定される。床面上の南東隅部から、長径58cmを測る楕円形プランの掘り込みEP598を検出した。断面形U字状、深さは中央部で約20cmを測るものである。住居に付随するものと想定されるが、その位置から柱穴とは考えられない。

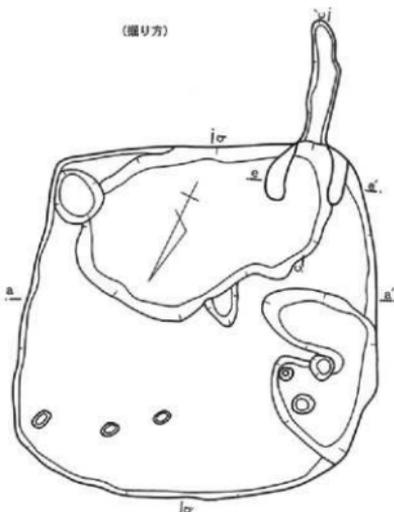
**カマド** EL572は、側壁に挟まれた燃焼部と住居外へ細長く伸び出す煙道部より構成され、南壁の西隅に築かれている。袖に当たる側壁は白色粘土の積み上げによって構築され、両袖同形ではないものの、長さ50～60cm・幅15～20cmの規模である。焚口幅で45cmを測る燃焼部は奥行き約60cmで、奥壁底部で円形様に浅く窪み、10cm程の段差を生じて煙道へ続く。煙道部は全長125cm・最大幅27cmで、底面途中に低い段を形成している。焚口から煙道基部にかけての範囲に、焼土層の堆積が認められた。

**出土遺物** 床面上に遺存する遺物はなく、カマド内および堆積土中から少量の土師器が出土している。分布状況ではカマド周辺部と西壁沿い、すなわち床面に炭化物等の拡散が見られる範囲から出土する傾向が窺えた。器種では坏・甕等が認められたが大半は甕類の細片資料であり、復元・図化し得たのは第9図に示した内面の輪積み痕を明瞭に残す甕のみである。供膳器資料に乏しいため所属時期を明確にし難いが、概ね8世紀前半の所産に比定されよう。

ST106  
(床置)



(掘り方)



水深高=239.70m

0 2m  
1 : 50

ST106

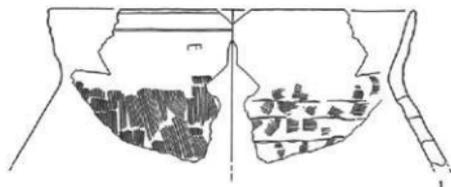
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に20%含む。
- 2 10YR 3/1 黒色 シルト 10Y 5/1 灰色砂をブロック状に10%含む。

EP596

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 5Y 6/2 灰オリブ色粘土をブロック状に5%含む。炭化物を含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10Y 5/1 灰色砂 (埴山) をブロック状に5%含む。

DL572

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に5%含む。炭土、炭化物等を含む。
- 2 10YR 3/2 黒褐色 シルト
- 3 10YR 3/3 暗褐色 シルト
- 4 10YR 3/3 暗褐色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルト (埴山) をブロック状に20%含む。
- 5 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルト (埴山) をブロック状に1%含む。



0 10cm  
1 : 3

第9図 ST106 住居跡

## ST210 (第10～12図)

**位置・重複** A区西部の50-35グリッドに主体を置く。南方約2mにはST214があり、近接した位置関係にある。住居の西辺部に半円状の張り出しがあり、検出時には住居跡の一部を含めて捉えたが、土坑等の他遺構が重複した結果と考えられる。精査が充分でないことから切り合いについては不明瞭ながら、住居を切る可能性が高い。

**平面形・規模** 北・西辺が約3m、南・東辺で約2.8mと各辺の長さが幾分異なるが、平面形はほぼ正方形を呈している。

**壁・堆積土** 壁は全周でほぼ均等に検出され、約10cmの壁高を測る。床面からの立ち上がりは急傾で垂直的となる。床面上の堆積土は黒色シルトの単層であり、遺物を包含するほか床面直上部に炭化物粒子を含む。

**床面** 床面全域を対象に貼り床を行っており、炉の存在する住居西半部においては褐色粘質土を貼り付けている。粘質土の分布は特に炉周辺を含む南西域で顕著に見られるが、一部を除き壁沿いでは希薄な状況と言える。貼り床は炉跡前面部分が、他の場所に比べ幾分固くしめる様相を呈する。床面には小さな起伏があり、必ずしも平坦ではない。また炉の周囲は当然ながら、南東コーナー付近にも焼土ブロックの部分的な分布がある。

**炉** 住居南辺際の中央部西寄りに、径40cm程の円形様の焼け面を検出した。壁沿いでありカマドの付設も考えられたが、側壁の痕跡や壁外へ張り出す煙道が見当たらないこと、また壁面に加熱を受けた跡が認められない等の理由から、地床炉と判断される。炉面は約4cm厚の焼土層からなり、周辺に炭化物が粒子状に拡散している。

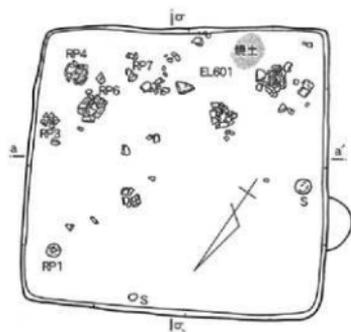
**住居内土坑等** 床面上南壁沿いから、炉跡に隣接してEP602～604の掘り込みを確認している。EP603は604と重複しこれに切られることから、EP604は住居に関わらないものと思われる。EP602・603は出土遺物や堆積土等から察して住居に付随するものと考えられ、位置や配置から見て柱穴以外、すなわち貯蔵穴などの用途・性格が考えられよう。

**遺物出土状況** 覆土内および床面上などから3箱相当分の遺物が出土しており、A区に所在する住居跡の中では最多となる。出土状況では、床面上に位置するRP1・4等の一部の遺物を除けば、大半は床面からやや浮いた状態である。したがって、遺物の多くが住居廃絶後に埋積したことを示すものと捉えられる。また、平面的分布においては、住居の北東角と南西角を結ぶラインから東半部に偏る傾向があり、特に炉や土坑がある南側に集中している。

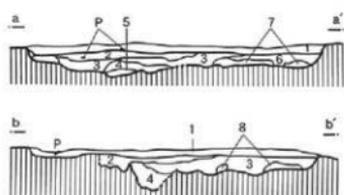
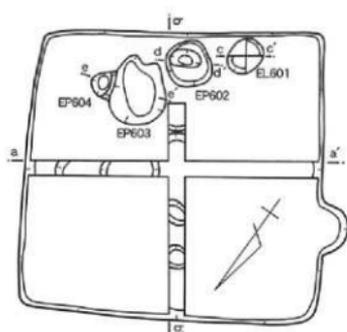
**出土遺物** 土師器の坏・甕を主体にして、共伴する須恵器の器種には貯蔵具の甕・壺類を認める。土師器坏には器形的特徴から身の浅い丸底形態のものと、平底で身の深いタイプの大別二種が存在する。第11図1は体部外面中程に段がつく有段形態を呈し、段下にヘラケズリを施して丸底を作り出す。内面と外面段下の一部にはミガキ調整が加えられる。2も丸底形態を呈すもので、体部下半から底部にヘラケズリが施されるが、内面を含めそれ以外の調整は認められない。前者のこれらは同器形と見なせるものの、2は明瞭な有段形態が崩れ、1に対して幾分後出する形態のものと理解される。後者に属す3・4の坏も底部に相異が見られる他は、器形・法量とも近似している。4は甕の底部と共通する高台風の張り出しを持つ形態が特徴的で、

ST210

(遺物出土状況)



(床面)



水深高=239.80m

ST210

1	10YR 2/1	黒色	シルト	10YR 4/2 灰黄褐色シルトを5%含む。
2	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 3/1 黒褐色シルトを黄緑に含む。粒状
3	10YR 3.7/1	黒色	シルト	7.5Y 4/1 灰色シルトをブロック状に30%含む。
4	10YR 3/1	黒褐色	シルト	10YR 1/1 灰色シルトを黄緑に10%含む。
5	10YR 3/1	黒褐色	シルト	10YR 1/1 灰色シルトを黄緑に5%。7.5Y 4/1 灰色シルトをブロック状に10%含む。
6	10YR 3/1	黒褐色	シルト	やや粘土質。7.5Y 4/1 灰色シルトをブロック状に30%含む。
7	7.5Y 4/1	灰色	シルト	10YR 2/1 黒色シルトをブロック状に1%含む。
8	2.5Y 3/1	黒褐色	砂質シルト	
EL601	1	10YR 3/1	黒褐色	シルト
	2	10YR 2/1	黒色	シルト
EP602	1	10YR 2/1	黒色	シルト
	2	10YR 3/1	黒褐色	シルト
EP603・604	1	10YR 2/1	黒色	シルト
	2	10YR 2/1	黒色	シルト
	3	10YR 2/1	黒色	シルト

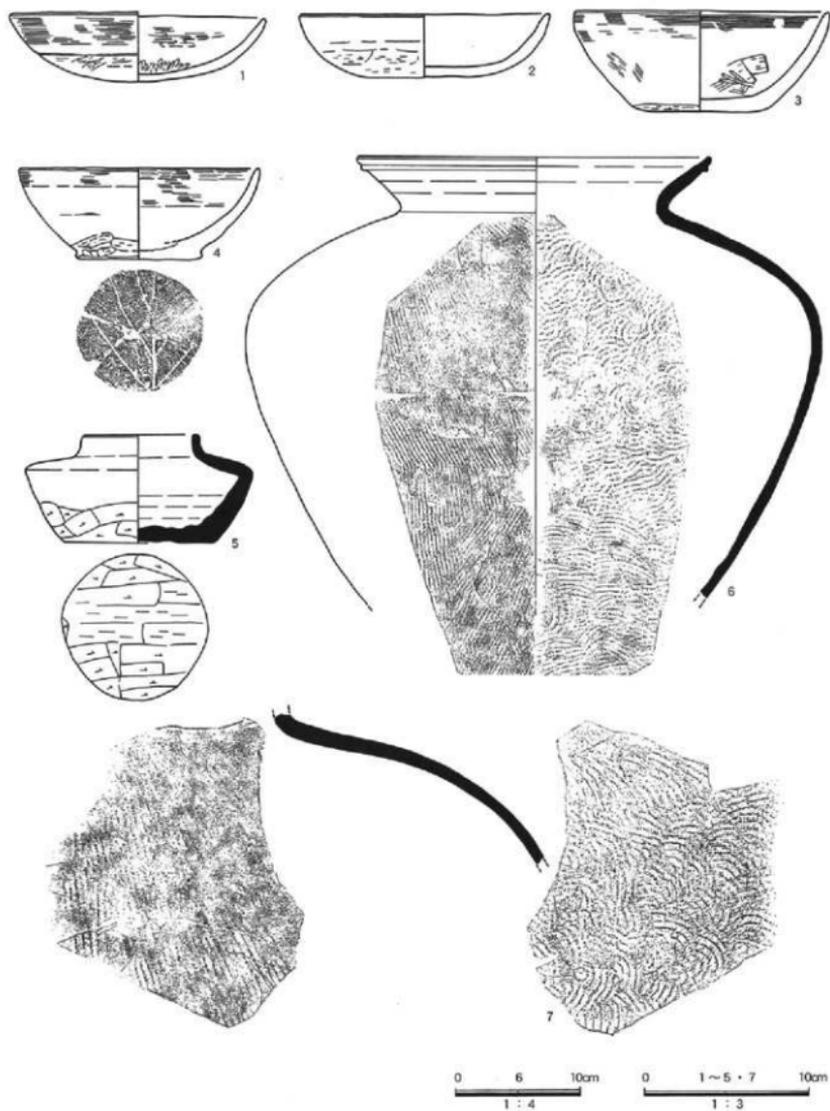
0 2m  
1 : 50

第10図 ST210 住居跡

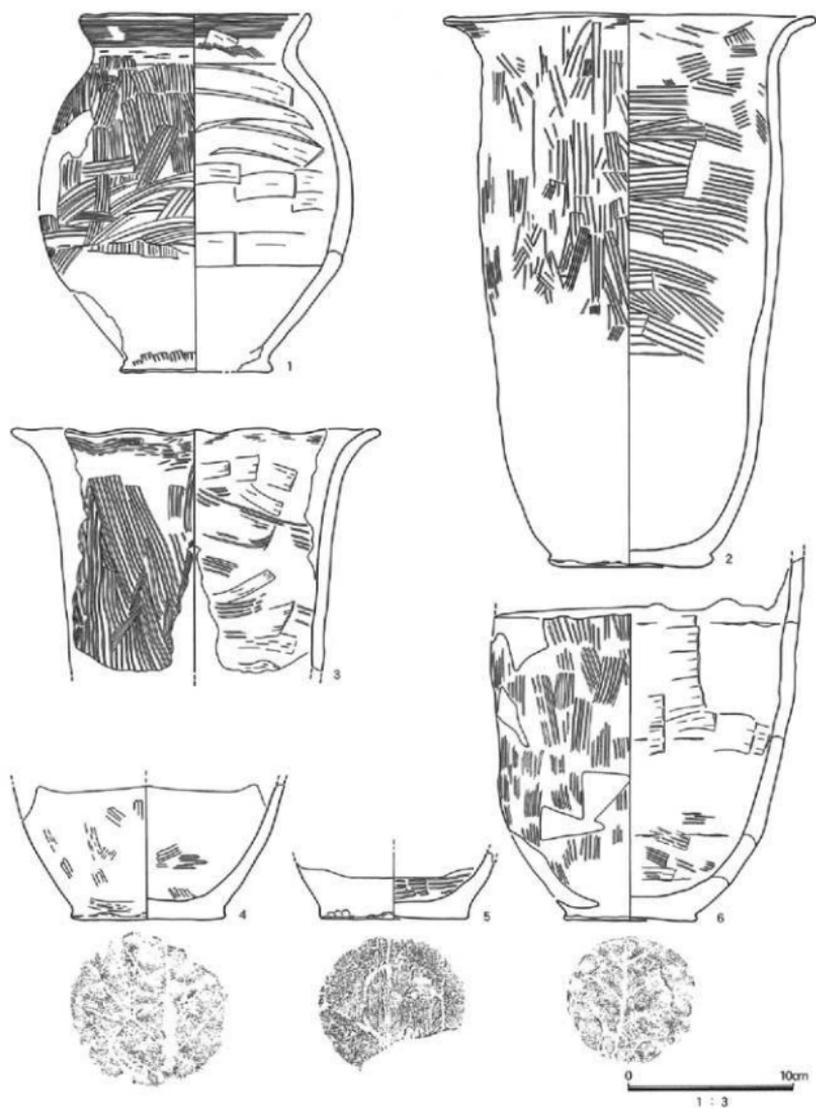
底部には木葉痕を認める。第12図に示した甕では、口縁部が大きく外反して開口口径に最大径を有する長筒形のもの、と、体部中程に最大径を持ち頸部がしまる球形となるものの二種があり、前者が主体を占める。調整技法では口縁部のナデ、体部外面のハケメ、同内面のハケメ・ヘラナデが主として観察される。他には、内外面に部分的なミガキを施すものが知られる。

須恵器は床面出土の壺(第11図5)と、覆土内から出土した大甕の破片資料等に限られる。5の短頸壺は小型で器高の低い扁平な器形が特徴的で、体部下半からのケズリが目につく。

これらの遺物は床面上や堆積土中、および土坑内や貼り床に当たる層内から出土する別があり新古関係を表すことが可能であるが、土師器の坏群から見て概ね同一時期の所産と見なすことができ、住居内の一括資料として捉えられよう。



第11図 ST210 出土遺物 (1)



第12図 ST210 出土遺物 (2)

## ST271 (第13図)

**位置・重複** A区中央部西寄りの53・54-34グリッドに主体を置き、北隣に位置するST279と近接した位置関係にある。住居西半の中央部を、西辺とほぼ平行して走る溝跡SD249によって切られる。

**平面形・規模** 平面形は東西方に幾分長い方形で、その規模は東西軸3.6m・南北軸3.4mである。また、南辺西隅部に付設されるカマド煙道の検出長は約1.8mを測る。

**壁・堆積土** 壁は溝跡に切られる南西コーナーと北辺の一部を除いて検出された。遺構検出面の傾斜等から、南壁が比較的良好に遺存している。各壁の床面からの高さは南壁で最大26cmを測る他、北壁で10～20cm、東壁と西壁では約10cmであり、ほぼ垂直的な立ち上がりとなる。調査では、本住居跡付近に湧水箇所があることが原因して地盤が常に不安定であったことから、土層観察用のベルトを残せなかった。したがって、堆積土の層位等は不明確ながらカマド部分の状況から、全体的に粘土質の黒色土に覆われる。

**床面・柱穴** 粘土質を呈する地山を床とするもので、叩きしめられた箇所がないことから、貼り床は行っていないと判断される。床面は小さな凹凸があることから平坦とは言えず、南・北壁際でやや低くなる状況を呈す。カマド付近を含め、床面上に炭化物等の混入により黒ずむような箇所は見当たらない。北東隅部において、柱穴様のビットEP652を検出している。径45cm程の略円形プランを呈すが、床面からの深さが10cm程を測る皿状の浅い掘り込みであり、他には認められないことから柱穴とは言いがたい。

**カマド** 南壁の西隅部に構築される。南壁から長く延び出す煙道部を検出したが、溝跡との重複により燃焼部を含めてその西半部が破壊される。僅かに遺存する燃焼部奥の壁面と南西角のカーブの様子から、燃焼部は弧状に張り出すものと推測される。燃焼部については側壁が確認されず、構造や規模等は不明である。煙道基部の東側には、床面からの深さ約10cmの円形椀掘り込みを伴う。また、煙道先端の煙出し部は段階的に深く掘り下げられている。煙道部の堆積土中に焼土と炭化物を含む層を認めたが、燃焼部では焼け面の痕跡等を検出していない。

**出土遺物** 床面上に遺存する遺物はなく、堆積土内から20点余の土師器破片が出土しているに過ぎない。これらは坏と甕各々一箇体の破片であり、このうち復元により全形が窺い知れた坏を第13図に示した。器形は外面体部下方向でやや強く屈曲する身の浅い丸底形態で、調整等に差異はあるがST88出土坏(第8図3)と同形態と見なせるものである。調整は外面の屈曲部以上と内面に丹念なミガキが施され、内面が黒色処理される。

## ST271

## E1461

1	10YR 2/1	黒色	シルト	団粒凝結
2	10YR 2/1	黒色	粘土	炭化物、焼土含む。
3	10YR 2/1	黒色	粘土	10YR 4/2 炭黄褐色粘土を粒状・ブロック状に10%含む。
4	10YR 2/1	黒色	粘土	10YR 2/1 黒色粘土をブロック状に5%含む。
5	10YR 4/2	炭黄褐色	粘土	10YR 2/1 黒色粘土をブロック状に5%含む。
6	10YR 4/2	炭黄褐色	シルト	10YR 2/1 黒色粘土をブロック状に20%含む。

## EP962

1	10YR 2/1	黒色	粘土	10YR 4/2 炭黄褐色粘土をブロック状に10%含む。
2	10YR 4/2	炭黄褐色	粘土	10YR 2/1 黒色粘土を1%含む。

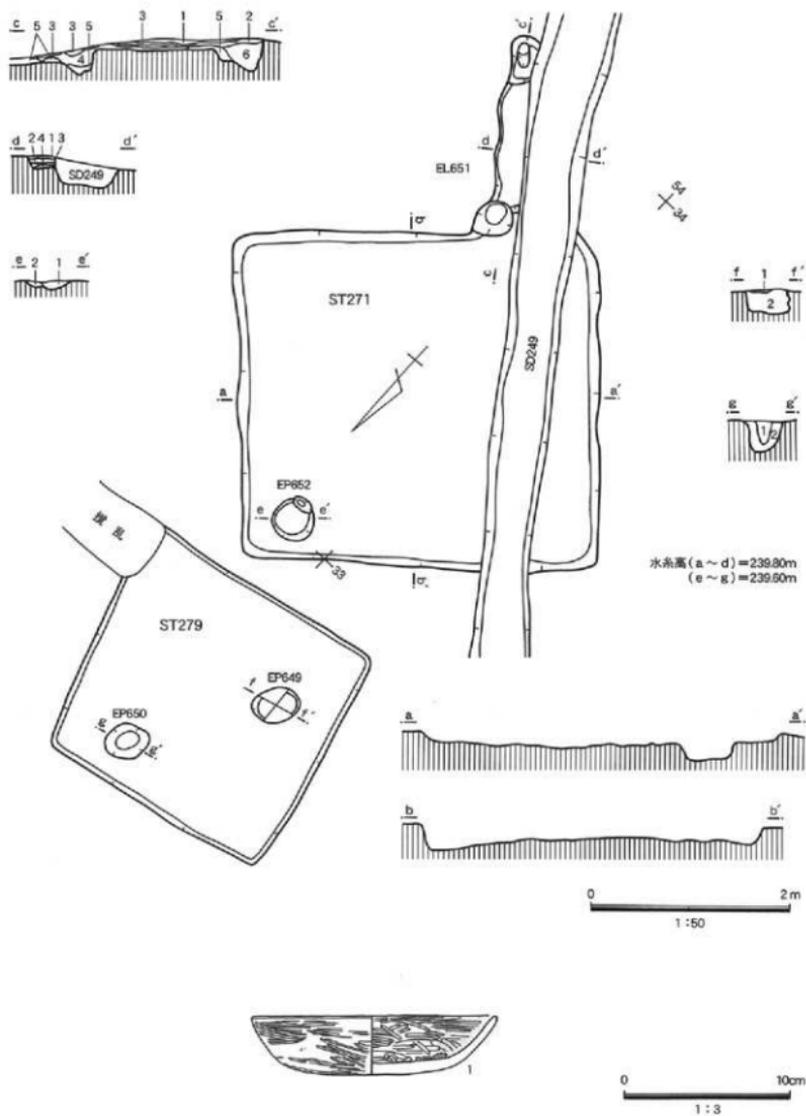
## ST279

## EP949

1	10YR 2/1	黒色	シルト	10YR 4/2 炭黄褐色シルトを炭黄褐色に30%含む。
2	10YR 2/1	黒色	粘土	10YR 4/2 炭黄褐色粘土をブロック状に15%含む。

## EP960

1	10YR 2/1	黒色	粘土	10YR 4/2 炭黄褐色粘土をブロック状に1%含む。
2	10YR 2/1	黒色	粘土	10YR 4/2 炭黄褐色粘土をブロック状(一部厚膜状)に30%含む。



第13図 ST271・279 住居跡、出土遺物

## ST337・338・583 (第14・15図)

**位置・重複** A区中央部の54・55-32・33グリッドに位置し、ST271の東側に隣接する。3棟が重複する住居跡群で、断面観察ほかで確認された新旧関係はST337→ST338→ST583の順序となる。

**平面形・規模** ST337は南辺域を他の2棟に切られる住居跡で、東西軸3m・東辺の検出長約3.7mを測り、長方形を呈すと推測される。ST338・583は各々の東・西辺において重複しており、全形不明ながら不整な方形を呈している。大きさはST338が東西・南北軸とも2.9m、ST583は東西軸3m・南北軸約2.8mを測り、同一規模と見なすことができる。

**壁・堆積土** 検出面ですでに床面直上であったことから、壁が確認できたのはST338の西壁ほかの一部に限られる。また、ST337では床面に達しているため、壁は未検出である。堆積土も同様の理由から、床面上に薄く遺存した単一層を認めるのみである。

**床面** 各住居とも地山を床面にしていると考えられるが、ST338とST583では壁際を除く大部分において黒色土の混入が顕著に認められる。断面観察から純粋な地山面ではかなりの起伏があること、および遺物出土レベルの下限から判断してST338では3層上面、ST583は2層上面が各々の床面と認識した。したがって、これらの層は地山上に盛土した整地層と見なし、貼り床に相当すると考えられる。床面は壁沿いで傾斜して幾分高まるものの、ほぼ平坦である。また、3棟の床面には高低差があり、ST338→ST337→ST583の順で低い。

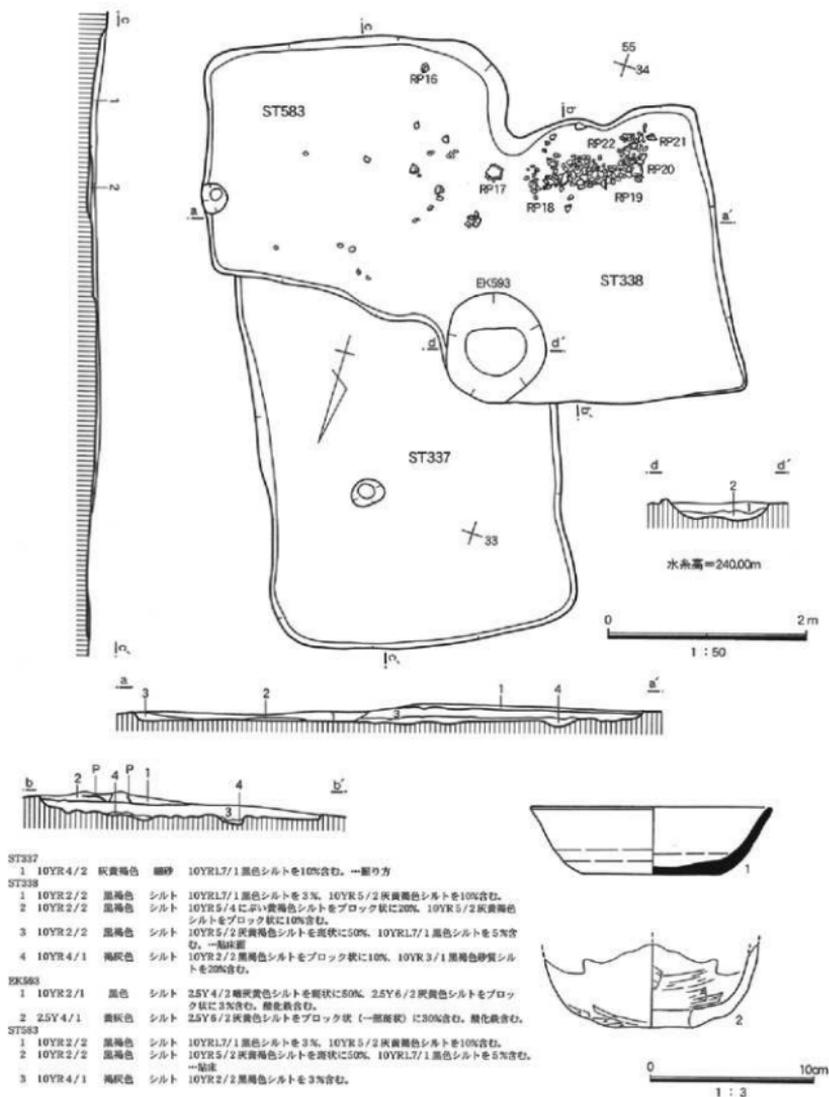
**住居内土坑** ST338の北東コーナーにおいて、略円形プランを呈する土坑EK593を検出している。規模は径110cm・床面からの深さ18cmを測り、皿形に掘り込まれる。覆土は2層からなり、灰黄色の粘質土ブロックを含んでいる。遺物は土師器細片数点を1層中に含む程度で、底面からの出土はない。本土坑は、不明確ながら貯蔵穴としての性格を想定しておく。

その他、ST337中央部とST583の東壁沿いに柱穴様ピット各1基を検出しているが、堆積土等から見て住居に付随するものではないと考えられる。

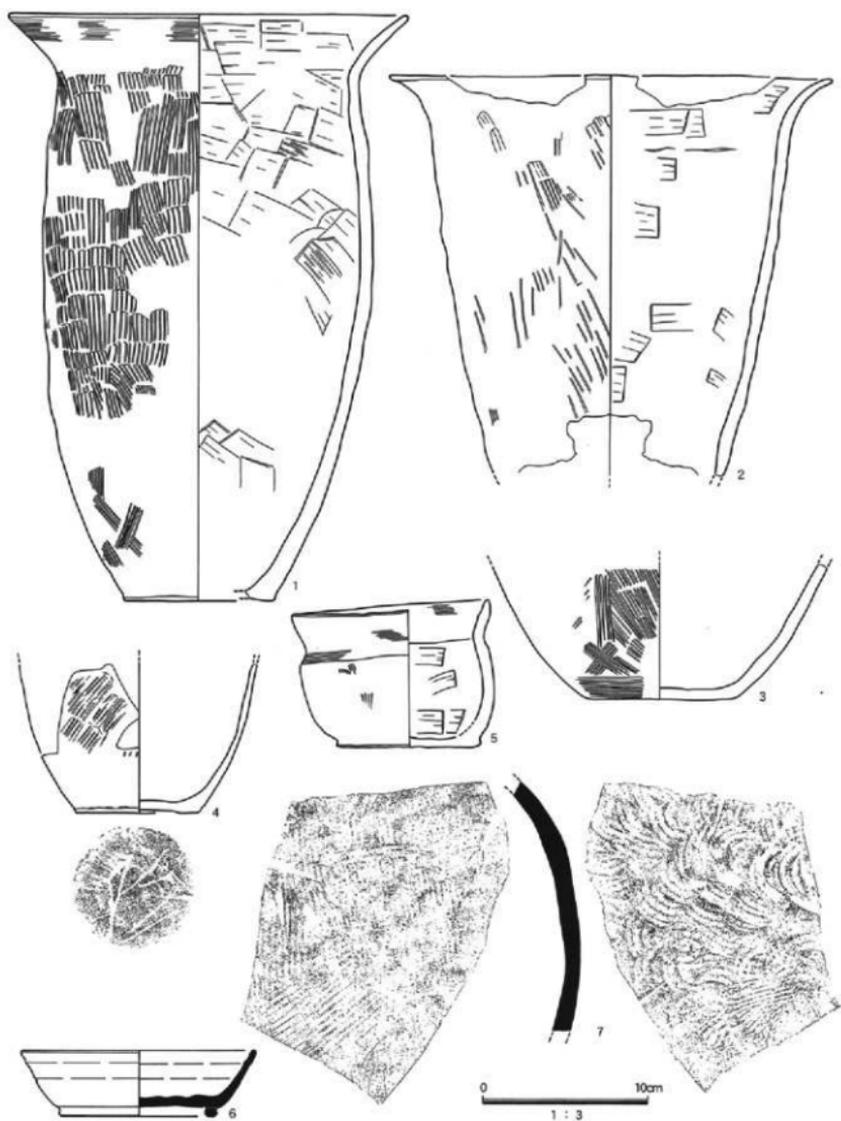
**遺物出土状況** 遺物はST338・583の堆積土内より出土している。ST338では南半域に集中して分布する傾向が指摘され、ST583では西半部を中心に散発的な分布状況である。出土状況はいずれも床面からやや浮いた状態であり、RP18・19の甕などは横位で押し潰れた状況を呈す。一次的な位置を留めていると判断される遺物はほとんどなく、ST583廃絶後の埋積過程で短期集中的に廃棄されたものと捉えられる。

**出土遺物** 第14図に示した2点はST583出土、またST338出土遺物は第15図に掲載した。土師器の器種に甕と甔、須恵器では坏と甕がある。土師器の甕には長胴形態のもの他、頸部に段を形成する法量の小さい小型品も含まれる。調整技法は、外面のハケメと内面のヘラナデに統一される。甔はU字形状を呈す小型単孔式のもので、底部をケズリによって作り出している。須恵器の坏類は口径140mm以上、底径90mm内外を測る底径比率の大きいもので、底部切離は回転ヘラ切りである。甕は破片資料で、器形が復元できるものではない。

これら共伴関係にある土器群に与えられる年代は、須恵器坏類の形態的特徴から9世紀第1四半期頃に位置付けられ、住居はそれ以前に廃絶したと推定されよう。



第14図 ST337・338・583 住居跡、出土遺物



第15図 ST338 出土遺物

## ST354 (第16図)

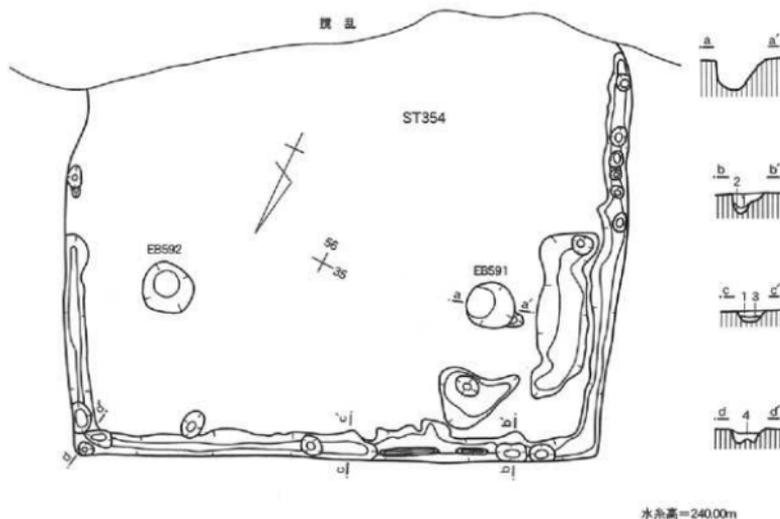
**位置・重複** A区中央部の56-35グリッドに主体を置く。住居の南半部は攪乱により破壊されるため未検出である。

**平面形・規模** 南半を切られることから明らかでないが、平面形は正方形を呈すと考えられる。規模は北辺長約5.2m、検出できた西辺の長さ4.2mを測る。

**床面** 本住居跡周辺は地山面が微高地状に高く、検出段階で床面かもしくはすでに削平された可能性もある。プラン内に貼り床等の形跡は確認できなかったが、床面と考えられる地山は固くしまつて安定した状態にある。

**柱穴** プラン内からは、柱穴と推察される2基の円形様掘り込みEB591・592を認めた。南半においては攪乱のため検出できなかったが、配置から見て4本柱構成と考えられる。ただ、2基の柱穴は径50cm程と平面規模で同一ながら、深さに差異がありEB592は皿状の浅い掘り込みとなるのが気にかかる。

**周溝** 検出された3辺に沿い約20cm幅の溝を巡らしており、住居に伴う周溝と判断される。



## ST354

- |   |          |     |       |            |  |
|---|----------|-----|-------|------------|--|
| 1 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | シルト   | 10YR 1.7/1 | 黒色シルト、10YR 5/2 灰黄褐色シルトを塊状に30%含む。         |
| 2 | 5Y 4/1   | 灰色  | 粘質シルト | 10YR 1.7/1 | 黒色シルトをブロック状に20%含む。                       |
| 3 | 10YR 4/1 | 暗灰色 | シルト   | 5Y 4/1     | 灰色粘質シルトを塊状に3%含む。炭化物を含む。                  |
| 4 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | 粘質シルト | 10YR 1.7/1 | 黒色シルトをブロック状に5%、10YR 4/2 灰黄褐色粘砂を塊状に30%含む。 |

0 2m  
1 : 50

第16図 ST354 住居跡

深さは確認面から10cm前後で、規則性はないものの底面の所々に小ビット状の掘り込みが見られる。周溝は東辺の中央部では認められず途切れる様相が窺えることから、この部分を出入り口にしていた可能性が想定される。

**出土遺物** 前述したように、床面から上部を欠いた状態での検出であったことが起因して、遺物は周溝内覆土から数点の土師器細片が出土したに過ぎない。これらは二次焼成を受けて摩滅しており、所属時期をたどるまでに至らない。

#### ST363 (第17図)

**位置・重複** A区中央部の南辺沿い、55・56-36~38グリッドに位置する。住居の中央部を後世の溝跡SD249によって南北方向に切られる。

**平面形・規模** 東西軸6m・南北軸4.7m規模を測る長方形プランを呈す。

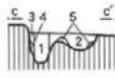
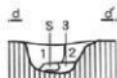
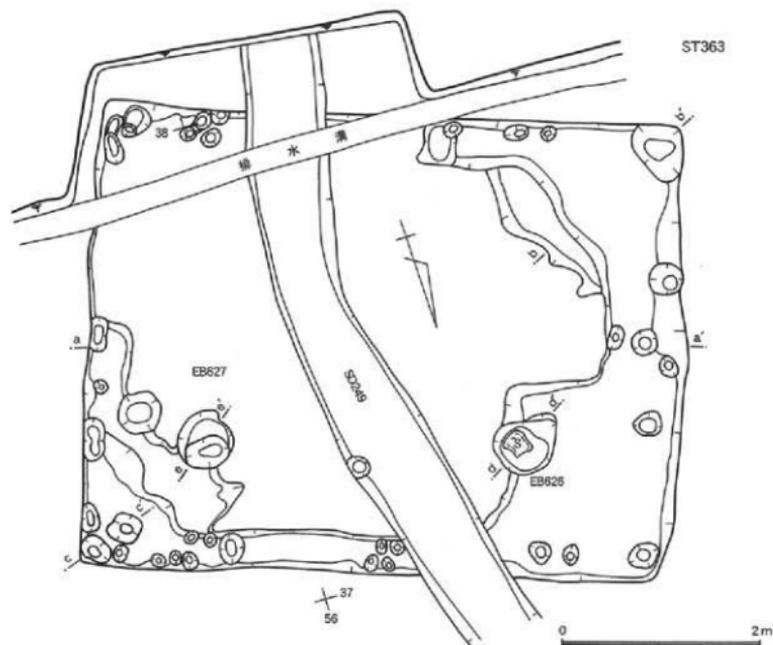
**壁** 前述したST354と同様、本住居跡も微高地状の安定した地盤の上に構築される。周辺は耕作土直下で地山面が検出されることから、ほ場整備等によりかなりの削平を受けた様相が指摘できる。したがって、住居プラン確認時には床面直上の段階であり、必然的に遺存する壁のも若干の高さを認めたに止まる。壁の立ち上がりは西壁の南半を除きほぼ垂直で廻り、確認できた最高値は南東隅部の約15cmである。

**床面** 固くしまる砂質土からなる地山を直接床面とするもので、貼り床は施していない。床面は中央部でほぼ平坦なものの、各隅部においては壁沿いを巡る周溝へ向かって段階的に床面が落ち込んでいる。

**柱穴** 柱穴は北半域において2基検出された。EB626は北西角から約1.8m内側に位置し、西側が三角形に張り出す不整な円形様プランを呈す。規模は径60cm程・深さ約25cmを測り、底面に方形の扁平礫1個を認める。北東角から約1.8mの距離にあるEB627は、径60cmの略円形を呈するが、床面からの深さは10cm前後と浅い。これらの配置から見て、南半域での検出を試みたが確認されなかった。他に壁面沿いに多くの小穴が検出されており、特に規則性は窺えないものの、西壁際のそれらはほぼ等間隔に並ぶ様相は興味深い。上屋構造が不明ながら、これらの小穴群が壁柱穴となる可能性も否定できない。

**周溝** 南東隅の区域を除いて、壁際に周溝が施される。各コーナー一部で不整な広がりを見せるが、本来的には北壁中央等で見られる約40cm幅の掘り込みが巡るものと考えられる。深さは10cm程を測るが一樣に平坦ではなく、底面の所々に小穴が認められることは前述したとおりである。南東隅の区域は小穴を伴うものの溝状の掘り込みはなされておらず、南辺と東辺の中央付近で途切れる形態と認識できた。

**出土遺物** 床面から上部が削平されており、床面上に遺存する遺物はない。破片数60余点の遺物は主に周溝覆土内から出土したものであり、完形品等は認めない。内容は土師器製片が大半を占め、黒色土器の坏片が数点含まれる。このうち、接合により唯一器形が捉えられる黒色土器坏1点を図化した。底径100mmを超える大振り厚みのある作りで、体部外面下半と底部全面に反時計方向の回転ヘラケズリが施される。内面のミガキを含め、丹念な調整が窺われる。時期的には8世紀前半代の所産と位置付けられる。



水深高=240.00m

ST363

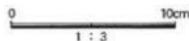
- |   |          |      |       |                                 |
|---|----------|------|-------|---------------------------------|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色   | シルト   | 5Y 4/1 灰色細砂を底状に5%含む、炭化物含む。      |
| 2 | 10YR 2/1 | 黒色   | シルト   | 2.5Y 5/2 暗灰褐色砂質シルトをブロック状に20%含む。 |
| 3 | 2.5Y 5/2 | 暗灰褐色 | 細砂    | 10YR 2/1 黒色シルトをブロック状に3%含む。      |
| 4 | 5Y 4/1   | 灰色   | 砂質シルト | 10YR 2/1 黒色シルトをブロック状に10%含む。     |
| 5 | 7.5Y 5/1 | 灰色   | 砂     | 地山                              |

EB626

- |   |          |     |       |                                 |
|---|----------|-----|-------|---------------------------------|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色  | シルト   | 10YR 5/3 に近い黄褐色シルトをブロック状に10%含む。 |
| 2 | 10YR 2/1 | 黒色  | シルト   | 2.5Y 5/2 暗灰褐色砂質シルトをブロック状に30%含む。 |
| 3 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | 粘質シルト | 10YR 2/1 黒色シルトを底状に3%含む。         |

EB627

- |   |          |    |     |                       |
|---|----------|----|-----|-----------------------|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色 | シルト | 5Y 4/1 灰色細砂を底状に40%含む。 |
|---|----------|----|-----|-----------------------|



第17図 ST363 住居跡、出土遺物

## ST426 (第18図)

**位置** A区南東部の59・60-36・37グリッドに位置する。

**平面形・規模** 平面形は東辺に対し西辺が約40cm長く、東西方向にもやや長いために台形様のプランとなる。規模は東辺3m・西辺3.4m、南北辺が4.2m程を各々測る。

**床面** 住居は、A区北東域を流路とするSG538河川跡に伴う微高地上に構築されたと認識され、検出段階ではほぼ床面上であった。地山を床面にしていると判断されるが、西辺域とカマド付近を除いては礫混じりの非常に固くしまった砂層である。周辺の状況から後世の攪乱による埋積土とも考えられたが、検出時に所々でプランが窺えた経緯がある。したがって、直接床面にしたとは認め難いが、西辺域の床面と同程度のレベルで捉えたものである。

**カマド** 南辺の中央に築かれており、外側に長く延び出す煙道部を検出した。内側の燃焼部については、東袖に当たる付近に薄い焼土層の分布を僅かに見るが、側壁その他は不明な状況である。煙道部は長さ約1.8m・幅40～50cmを測り、先端へ向かうにつて徐々に深さを増す。

**遺物出土状況** 床面における遺物の分布状況は、カマド周辺を主として住居南西域に限られる。すなわち、砂礫層でない場所で出土していると理解される。

**出土遺物** 量的にはコンテナ1箱相当の分量がある。いずれも土師器の甕と認識され、他の器種や須恵器は出土していない。復元により全形が窺い知れるものは、第18図3の1点のみである。口縁部が外傾して開く長胴形の甕で、体部下半に幾分膨らみをもつ形態が特徴的である。底部から口縁部までが、ほぼ垂直的な円筒形様の器形を呈している。量の主体を占める長胴甕の他は、頸部のしまりが弱く垂直的に立ち上がる口縁形態で、体部に最大径を有する1のようなタイプが知られる。

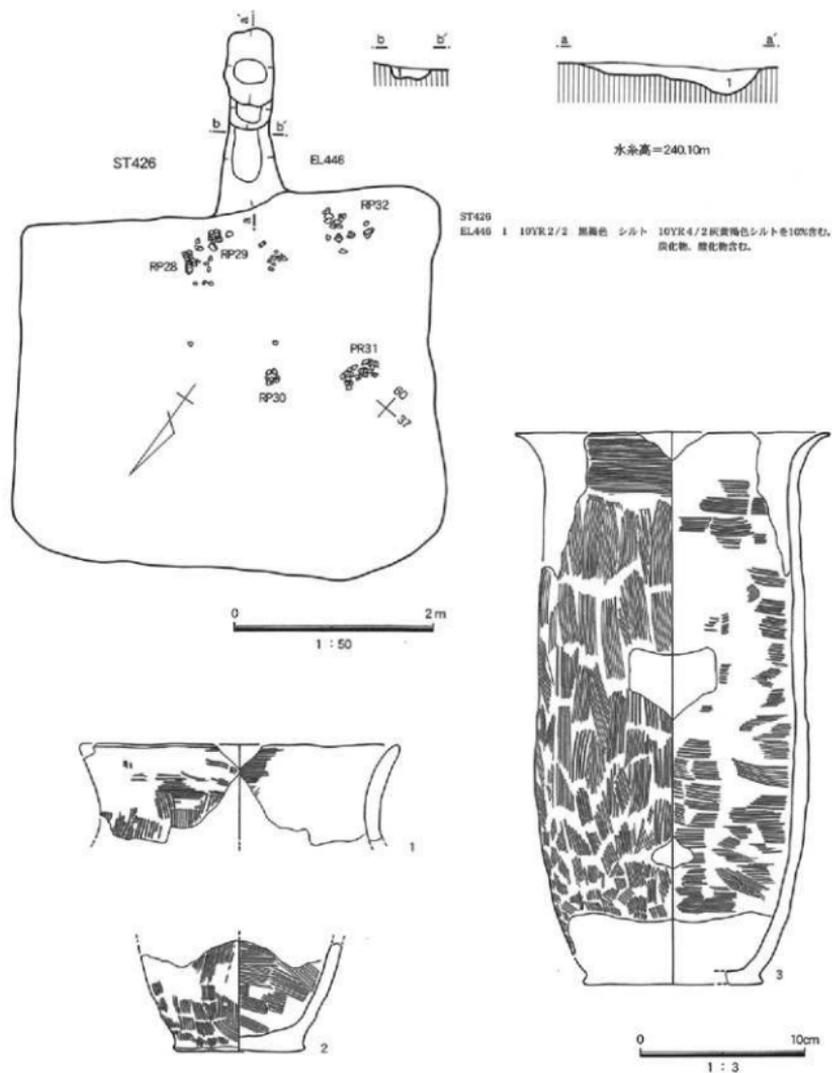
## ST458 a・458 b (第19図)

**位置・重複** A区南東部の61・62-38グリッドに位置し、南西角が調査区外にかかる。プラン内で楕円状の土坑SK588およびSB631の柱穴EB589と重複し、これらに切られる。また、検出時には1棟の住居跡と認識したが、調査段階で壁面が二重に存在するなどの要因から、2棟の住居跡が重複した結果と捉えられる。

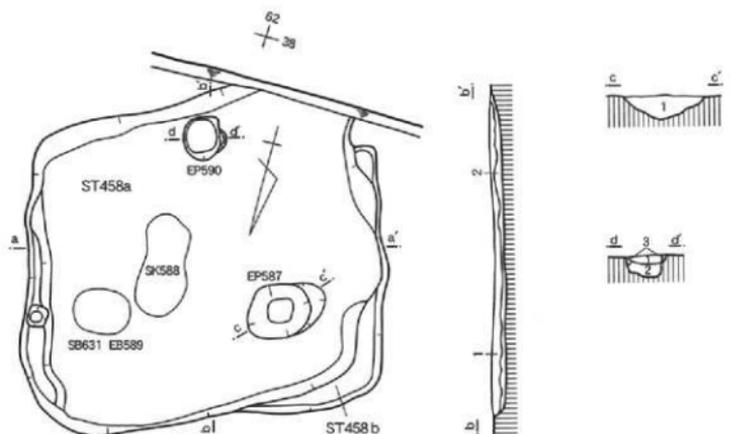
**平面形・規模** 後に構築されるST458 aは、東西・南北軸とも約3.2m規模の正方形を呈する。ST458 bは東西軸3.6mで、南辺のほとんどをST458 aに切られているが、南北軸2.7m程を測る長方形プランと推測される。

**壁・堆積土** ST458 aの壁は高さ15cm前後で巡り、床面からの立ち上がりは北・東壁で急傾、南・西壁でやや緩やかであり、北壁の東半部をST458 bと共有する。ST458 bでは検出し得た東・西壁で約10cmの壁高を測り、垂直的な立ち上がりとなる。堆積土は地山ブロックの混入度から2層に区分したが、基本的には黒色土基調の単層と認識される。

**床面・柱穴** ST458 bは、東・西壁際の一部を除く大半でST458 aと重複関係にある。床面は壁沿いで僅かに遺存しており、この部分では地山を直接の床としている。ST458 aでは、砂礫層まで掘り込んだ後に掘り上げた土を戻し、押し固めて床面にしたと考えられる。床面は褐色土と地山ブロックが混在した状況を呈し、周辺に比べ中央部でややしまりを有する。



第18図 ST426 住居跡、出土遺物



水糸高 (a, b) = 240.10m  
(c, d) = 239.90m



0 2m  
1 : 50

ST458

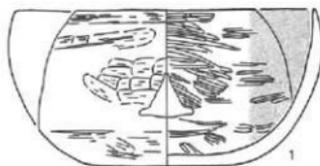
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを粒状に5%含む。炭化物含む。  
2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に30%含む。炭化物含む。

EP587

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂をブロック状に2%含む。

EP590

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂をブロック状に20%含む。炭化物含む。  
2 10YR 3/1 黒褐色 シルト 2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂をブロック状に10%含む。炭化物含む。  
3 2.5Y 5/1 暗灰黄色 細砂 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。



0 10cm  
1 : 3

第19図 ST458 住居跡、出土遺物

柱穴様のピットはEP587・590の2基が検出された。これらは規模や断面形態が異なり、位置関係等からも積極的に柱穴と断定できるまでの根拠が見い出せなかった。したがってここでは、どちらか一方が柱穴の可能性もあり得ることを指摘しておくに止めたい。

**出土遺物** 床面上に遺存する遺物はないが、ST458 a 堆積土中と柱穴様ピット内から約150点を数える土器片が出土している。土師器細片が圧倒的多数を占め、他に須恵器と黒色土器が数点認められる。図示した資料は全形を知り得る黒色土器の鉢である。ロクロ整形後、口縁を除く外面に手持ちヘラケズリが施される。土師器の器種に甕、須恵器では坏・甕類を認めたが、いずれも細片である。なお、出土した須恵器坏の底部破片は回転糸切り無調整のもので、掲載した黒色土器等とは推定年代が必ずしも整合しない。これらは出土状況から分離し得ず混在と認識され、覆土が堆積する過程においてある程度の時間を要したか、あるいは周辺からの古相遺物の紛れ込み等も原因として考えなければならぬ。

#### ST790 (第20・21図)

**位置・重複** D区南半の7～9-36・37グリッドに位置し、遺跡範囲西端部に構築された住居跡である。後世の溝跡によりその南半部を東西方向に切られるが、床面まで達していない。

**平面形・規模** 平面形はほぼ正方形を呈し、東西軸約6.2m・南北軸約6.3mを測る。検出した住居跡の中では、最大規模の一群に属するものである。

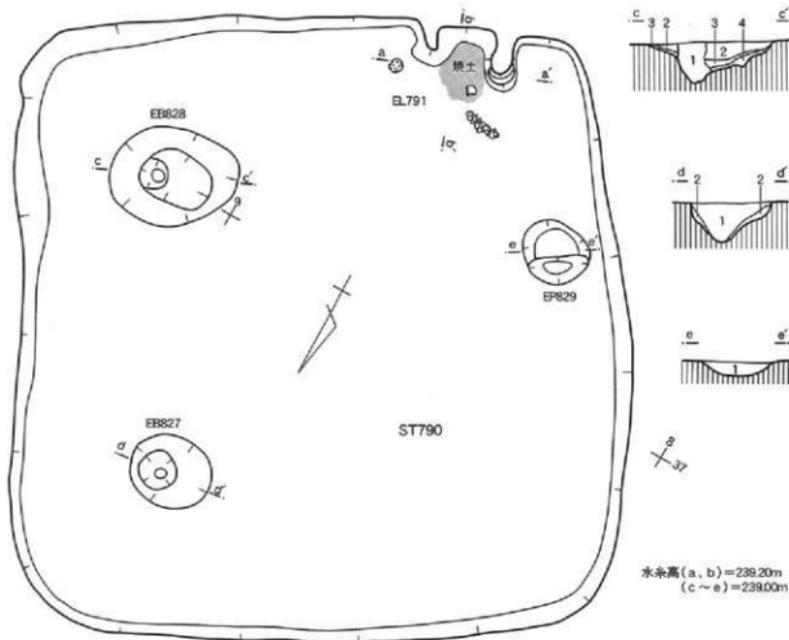
**壁・床面** 検出面で床面直上であったため、壁は南半域において床面から立ち上がる僅かな高さを確認したに過ぎない。床面はほぼ平坦に推移し、カマド前面で幾分高まりを有する。貼り床は施されず砂質の地山を直接床にしており、カマドが位置する南西部でよりしまる。

**柱穴** 床面上に円形様の掘り込み3基を認めた。このうち、東半に並ぶEB827・828の2基は、断面U字状を呈して底面中央が落ち込む掘り方となり、断面において柱痕跡も確認できたことから柱穴と判断される。掘り方の平面規模に差異はあるが、床面からの深さは約40cmと均一的である。西壁際に位置するEP829は当初柱穴かと考えられたが、皿状の浅い掘り込みによるもので他の2基とは構築法が明らかに異なっており、配置からも柱穴とは区別できると思われる。

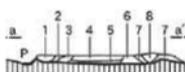
**カマド** 南壁の西寄りに築かれている。カマド側壁に挟まれた燃焼部は明確に検出されたが、南辺ライン外側への張り出しがなく煙道を伴わない。これは床面直上の検出で、上部を削平されたことによる結果とも考えられるが定かでない。側壁は地山の削り出しによって造られており、燃焼部の基底が若干窪み構造が窺える。東側壁が短く端部が不整なことから、袖石を付設していた可能性が指摘できる。燃焼部は底面・側壁とも加熱を受けて赤変しており、底面には焼土層が薄く堆積する。

**遺物出土状況** 全体的に見てカマドおよびその周辺に分布的な集積が認められる。カマド焚口部の土師器甕(第21図1)や東側壁付近の須恵器坏(第21図4)は床面から出土しており、その他の遺物もやや浮いた状況ながら概ね床面上一括と把握できるものである。

**出土遺物** 破片数にして約280点の土器片が出土している。二次焼成を受けた土師器甕類の細片を主とし、須恵器坏・甕等が若干数混在する。この中で、比較的大形の破片類から図化し



水糸高 (a, b) = 238.20m  
(c ~ e) = 239.00m



ST790

EL791

- |    |           |        |       |          |
|----|-----------|--------|-------|----------|
| 1  | 10YR 4/3  | にぶい黄褐色 | シルト   |          |
| 2  | 10YR 5/3  | にぶい黄褐色 | シルト   | 焼土含む。    |
| 3  | 10YR 4/3  | にぶい黄褐色 | シルト   | 炭化物若干含む。 |
| 4  | 10YR 4/3  | にぶい黄褐色 | シルト   | 焼土含む。    |
| 5  | 7.5YR 5/4 | にぶい褐色  | シルト   | 焼土層。     |
| 6  | 10YR 4/3  | にぶい黄褐色 | 砂質シルト |          |
| 7  | 10YR 4/3  | にぶい黄褐色 | シルト   |          |
| 8  | 10YR 3/3  | 暗褐色    | 埋シルト  |          |
| 9  | 10YR 4/4  | 褐色     | シルト   | 焼土若干含む。  |
| 10 | 10YR 2/3  | 暗褐色    | シルト   |          |
| 11 | 10YR 4/4  | 褐色     | 砂質シルト |          |
| 12 | 10YR 3/4  | 暗褐色    | シルト   | 焼土含む。    |
| 13 | 10YR 3/4  | 暗褐色    | シルト   |          |
| 14 | 10YR 4/3  | にぶい黄褐色 | シルト   |          |
| 15 | 10YR 5/3  | にぶい黄褐色 | シルト   |          |
| 16 | 7.5YR 4/3 | 褐色     | シルト   | 炭化物含む。   |

EB827

- |   |          |        |     |                             |
|---|----------|--------|-----|-----------------------------|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトを含む。         |
| 2 | 10YR 4/3 | にぶい黄褐色 | シルト | 10YR 3/3 黒褐色シルトをブロック状に7割含む。 |

EP829

- |   |          |      |     |                             |
|---|----------|------|-----|-----------------------------|
| 1 | 10YR 4/2 | 灰黄褐色 | シルト |                             |
| 2 | 10YR 3/3 | 暗褐色  | シルト | 炭化物若干含む。                    |
| 3 | 10YR 3/2 | 黒褐色  | シルト |                             |
| 4 | 10YR 3/3 | 暗褐色  | シルト | 10YR 4/4 褐色シルトをブロック状に10%含む。 |

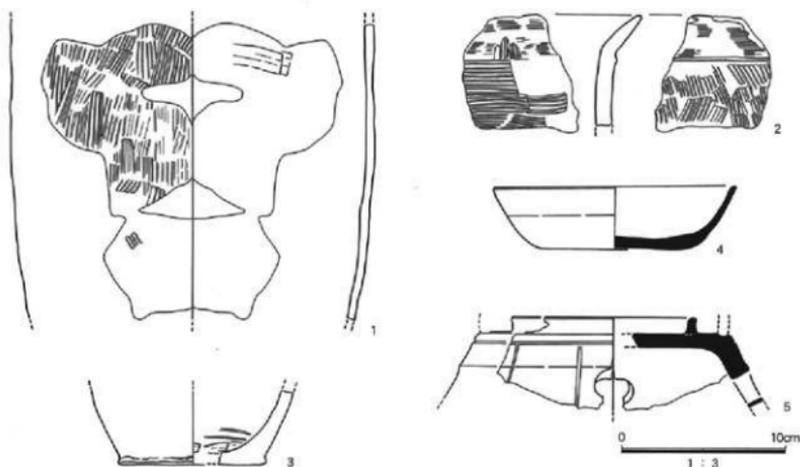
EP829

- |   |          |     |     |  |
|---|----------|-----|-----|--|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | シルト |  |
|---|----------|-----|-----|--|

0 2m

1 : 50

第20図 ST790 住居跡



第21図 ST790 出土遺物

得たものを第21図に示した。床面出土の須恵器坏は胴土に砂を多く含み、二次焼成により器面がかなり荒れた状態である。注意すべき遺物として、圈脚面硯が1点出土している。硯面形態は、内堤と外堤を有する平面型と理解される。圈脚部には単位不明ながら円形の透かし孔が穿たれ、ヘラ描きで縦横の区画沈線が引かれる。果内ではこれまで20余の遺跡から約50点の円面硯が出土しており、米沢市西町田下遺跡（高橋他1997）に類例がある。土師器甕を含めたこれら遺物の年代は、時期決定資料となる須恵器坏の形態的特徴から8世紀後葉に位置付けられ、円面硯の推定年代とも合致すると考えられる。

## ST823（第22図）

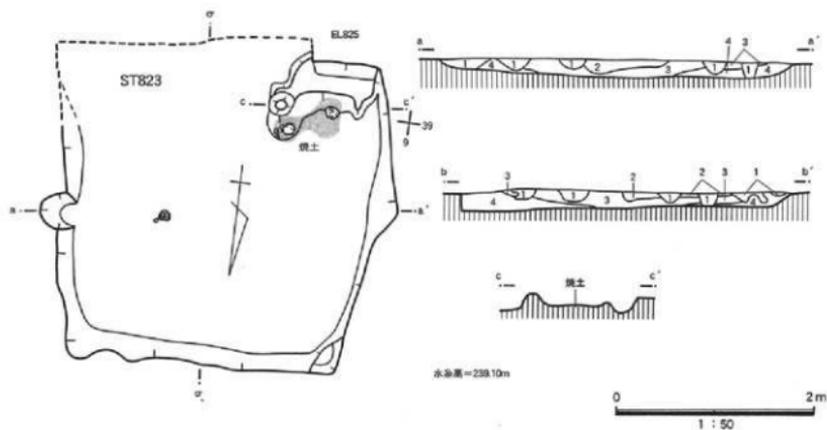
**位置** D区南端の9-38グリッドに主体を置く。重複は認められないが、住居の南辺域は深耕による攪乱が影響して一部でプランが検出できなかった。

**平面形・規模** 南辺域が一部未検出であるが、南西隅部の様相から平面形は台形様の方形を呈すと推測される。規模は北辺長2.7m・西辺長3.2mを測り、北辺が他に比べて短い。

**壁・堆積土** 壁は各辺において検出され、床面から10～15cmの高さで均質に巡る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、住居角部では段を形成する所がある。現況の地目が畑地ということもあり、堆積土には根菜類栽培のための深耕による耕作土の混入が所々で認められた。

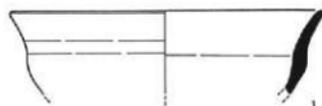
**床面** 深耕による攪乱が一部で床面の上部に達しているが、直接床面にまでおよぶ箇所は少ない。地山を床としており、貼り床は施されない。床面はほぼ平坦で、カマド前面に炭化物等による汚れを部分的に認める。

**カマド** 南壁の西端に構築される。地山削り出しによって造られた側壁を伴うが、遺存状況が良くなく原形を留めていない。側壁の遺存部分から、燃焼部は焚口幅50cm前後と推測される。



ST823

- 1 10YR 5/2 灰黄褐色 シルト 耕作土。  
 2 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト 10YR 5/3 に近い黄褐色シルトを混状に5%含む。炭化物若干含む。  
 3 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト 10YR 5/3 に近い黄褐色シルトを混状に20%含む。炭化物含む。  
 4 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト 10YR 5/3 に近い黄褐色シルトを混状に3%含む。炭化物若干含む。



0 10cm  
1 : 3

第22図 ST823 住居跡、出土遺物

東側壁の端部からは、上半を欠く土師器甕が据えられた状態で出土している。また、燃烧部奥の壁際には円柱状の自然礫が埋め置かれ、支脚として利用されたものと考えられる。

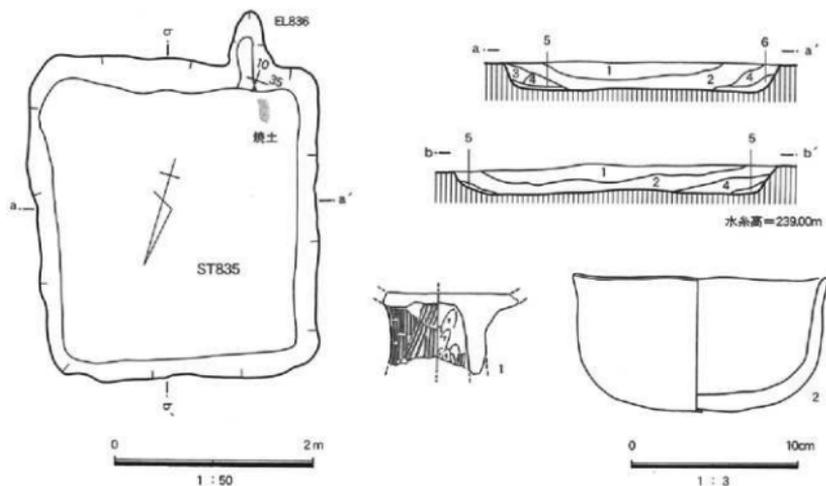
**出土遺物** 堆積土中・床面上・カマド内から、土師器・須恵器・黒色土器が出土している。完形品はなく、大半は復元不能な細片が占める。図示した資料は床面出土とカマド内出土の土師器甕、および覆土内出土ながら時期推定資料となり得る須恵器杯の3点である。須恵器杯は上半部の破片資料で、底部形態は不明だが体部中程の有段器形が目されよう。形態的には丸底を呈す土師器杯に共通するもので、8世紀中頃から顕著に認められるいわゆる稜塊と称する須恵器高台付杯に先行するものかと考えられる。全形不明のため類例を見い出せず、共存遺物にも乏しいことから推測の域を出ないが、帰属年代は8世紀初頭に比定しておく。

### ST835 (第23図)

**位置** D区中央の東寄り、9・10-34・35グリッドに位置する。

**平面形・規模** 規模は東西軸2.8m・南北軸3.2mを測るが、東辺が幾分長い。このため、平面形は台形様プランを呈す。

**壁・堆積土** 壁は全周において均質に検出された。床面からの高さ24~30cmで巡り、南壁で



#### ST835

- |   |          |        |       |  |
|---|----------|--------|-------|--|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | シルト   | 10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に10%、10YR 5/3 におい黄褐色シルトを塊状に15%含む。炭化物含む。 |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | シルト   | 10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。                                  |
| 3 | 10YR 5/3 | におい黄褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に30%含む。                                 |
| 4 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | シルト   | 10YR 2/2 黒褐色シルト、10YR 5/3 におい黄褐色シルトを層状に10%含む。                 |
| 5 | 10YR 2/2 | 黒褐色    | シルト   | 10YR 5/3 におい黄褐色シルトをブロック状に20%含む。                              |
| 6 | 10YR 5/3 | におい黄褐色 | 砂質シルト | 10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に15%含む。                                 |

第23図 ST835 住居跡、出土遺物

やや傾斜を有する他はほぼ垂直的な立ち上がりである。堆積土は大別3層を認め、土層ベルトでは周辺部の壁際から埋積した様相が観察された。

**床面** 貼り床施設は認められず、地山を床面にしている。凹凸がない平坦な床面で、全体的に黒ずんで汚れる。床面上から柱穴を含む掘り込み等は検出されなかった。

**カマド** 南壁の西寄りに築かれているが、確認できたのは外側に延び出す煙道部と床面の僅かな範囲に残る焼土層であった。側壁は遺存していないが、南壁面の状況から地山削り出しとは考えられず、不明確ながらその構築は床面上からの粘土積み上げや石組みによると想定される。煙道はその基部で燃焼部底面と繋がっており、スロープ状の傾斜で端部へ至る。煙道部全長80cm、壁際基部での幅45cmを測る。

**出土遺物** 床面に遺存する一次的な遺物はなく、堆積土中から点数にして約30点の遺物が出土したに止まる。土器破片の他に、長さ約23cmを測る五角形様の棒状礫1点を認めた。中程から半部は加熱を受けて赤色化し亀裂を生じていることから、カマド支脚や袖石であった可能性が強い。土器は二次焼成を受けて器面が剥落したり、赤変して細片となるものが多い。すべて土師器片で高坏・坏・甕の器種が認められ、ある程度の器形が窺えるものとして第23図に示した2点がある。時期決定資料となる2の坏は、身の深い形態で口縁端が短く外傾する特徴が知られる。1の高坏と合わせ「住社式」の範疇に捉えられ、6世紀中葉の年代が与えられる。

#### ST1156 (第24図)

**位置・重複** B区中央西寄りの33-34グリッドに主体を置く。南東～北西方向にかけてSD1153溝跡と重複し、これに切られる。

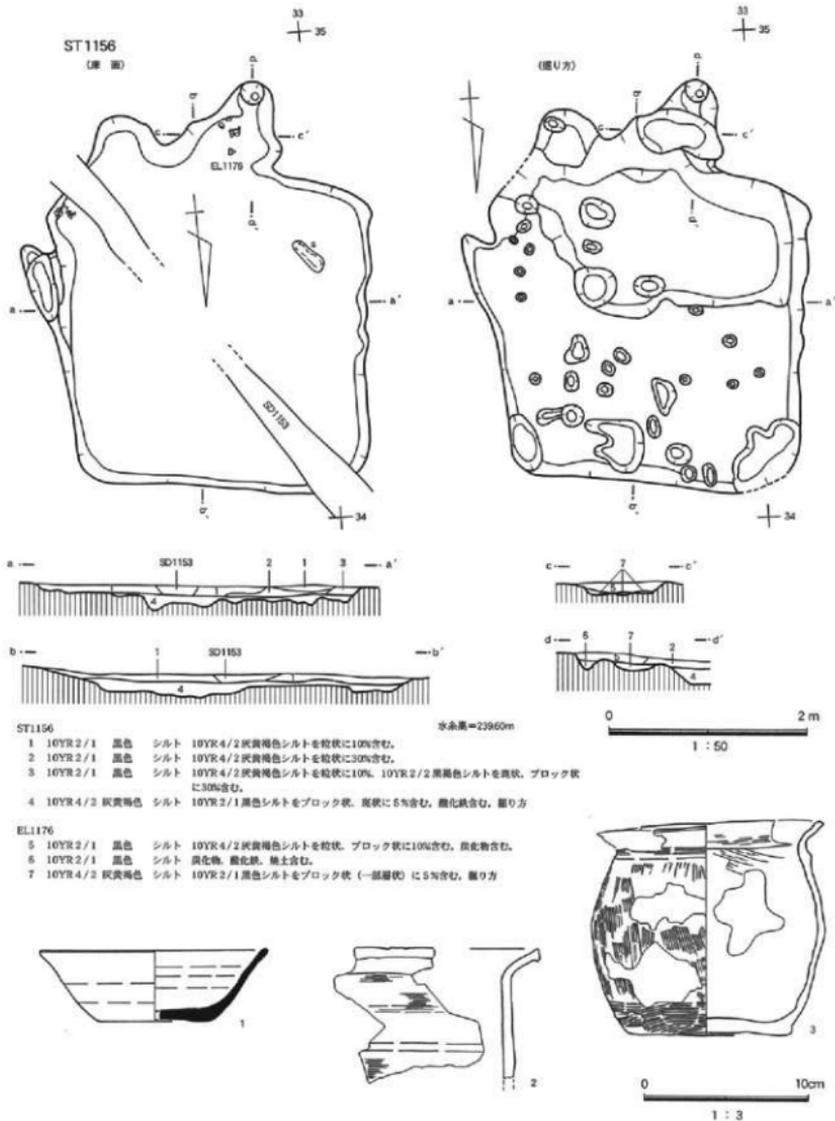
**平面形・規模** 平面形は方形基調と見られるが、南東隅部にかかる南辺と東辺に張り出しが存在し、この部分が膨らみを有する不整形を呈す。

**壁・堆積土** 検出面から床面までの深さは10cm前後であり、壁は南東隅部で不明瞭であるが全周で確認された。堆積土は基本的に単層で、床面直上を黒色シルト層が覆う。

**床面** 一旦掘り込んだ後に掘り上げた土を戻して固め、床面にしたと考えられる。床面はほぼ平坦に推移するが、カマドを含めた張り出し部でやや高い状況が見て取れる。南西隅部付近に、長さ40cm程を測る楕円柱状の花崗岩礫1個が遺存する。床面上には所々に黒色土の広がりが見られたが、付随する柱穴等は検出していない。

**カマド** 南壁の中央に築かれており、カマド自体が南壁から弧状に大きく張り出す構造と理解される。カマド先端がピット状に深く掘り込まれ、壁面の在り方からその手前が燃焼部で、先端の掘り込みが煙道部に相当すると考えられる。床面に焼土や炭化物は認められず、直上の堆積土中にその痕跡を残すのみである。なお、燃焼部の幅は約1m、南壁から先端までの長さは85cm程を測った。

**出土遺物** 南半部の堆積土内を中心に、約320点の土師器・須恵器・赤焼土器の破片が出土している。資料は断片的な細片が大半で、形態・器形等を明らかにできるものが少ない。須恵器坏類は底部回転糸切りで、口縁端が短く外傾して開く特徴が指摘できる。量的に少ないながら赤焼土器の蓋や甕が存在すること等から、所属時期は9世紀後半に求められよう。



第24図 ST1156 住居跡、出土遺物

## ST1181 (第25・26図)

**位置・重複** 検出段階では住居跡として登録しなかった遺構で、B区中央の34-34・35グリッドに位置する。調査時にプランの変更や焼土・炭化物層の検出等から、最終的に住居跡と認識したものである。プラン確認時に住居跡の一部として捉えた東辺にかかるSK1182土坑と重複し、精査不十分ながらこれを切ると見なされる。また、南西辺の在り方から方形様をなさないため、2棟の重複も考えられたが重複関係の検証はできなかった。

**平面形・規模** 平面形は方形プランの南西隅部が内側に入り込む形状を呈している。北辺と西辺は直線的でなく、特に西辺は波状に凹凸があって、そのため北西角部が不明瞭となる。規模は東西軸約4m、南北軸で4.4m程を測る。

**床面・掘り方** 検出段階で炉に伴う焼土や炭化物の広がりが確認され、床面直上と認識された。床面には地山露出の部分と、黒色土埋め戻しによる貼り床構築部分が認められる。掘り方底面までは8~30cmの深さを測り、概観的に見て中央部で高く周辺部で掘り込まれる状況が窺えた。床面上で柱穴等は検出されず、掘り方底面において幾つかのピット状の落ち込みを認めたが、柱穴と考えられるものは存在しない。

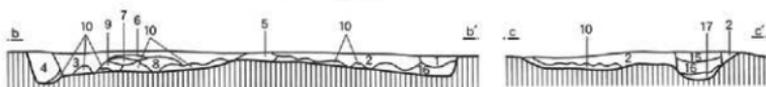
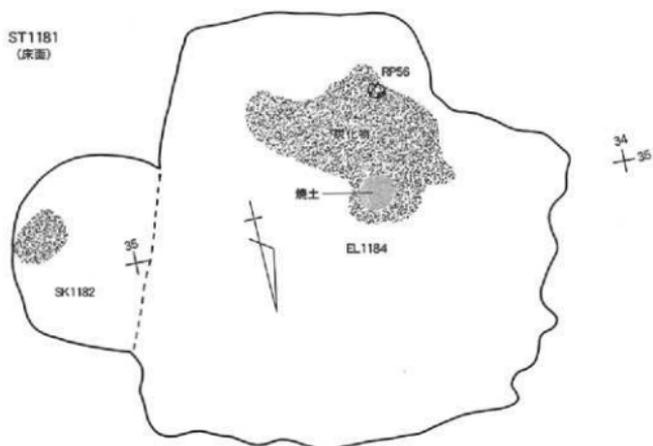
**炉** 住居の中央部やや南寄りに径35cm程の円形状の焼土層と、その周辺の広い範囲に炭化物の分布が認められ、地床炉と判断される。炭化物層の範囲は、主に焼け面から南側に広がりを見せる。またこれとは別に、南北方向の土層観察ベルトb-b'においてもレンズ状に堆積する焼土層が認められ、地床炉の痕跡と推察される。このことから住居跡は平面形の在り方と相関して、床面レベルの異なる2棟が重複している可能性が高いと考える。この場合、ベルトにかかる地床炉を伴う住居跡(ST1181b)の床面は、掘り方の底面にほぼ等しいと仮定される。

**出土遺物** 床面上および掘り方の底面や埋積土内から約180点の土器片が出土しており、調査段階ではEL1184検出面における遺物を床面出土と捉えている。前述のとおり重複関係が示唆されるところであり、ST1181b埋積後にEL1184を伴う住居へ移行したと予測されるが、出土土器群に見られる年代差はほとんどないと言えることから、近接した時期での建て替えと想定される。したがってここでは、単に層位に沿った出土レベルの高低で把握して観察表への記載を行っている。黒色土器・須恵器・赤焼土器の供膳具の他、土師器・赤焼土器の煮沸具や須恵器の貯蔵具が認められる。第26図に示した坏類には、底部切り離し後に再調整が施されるものを1点含み、他に比べやや古い様相を呈す。他は器形・形態の特徴が類似する一群と捉えられ、9世紀中葉に属す一括資料と見なされる。

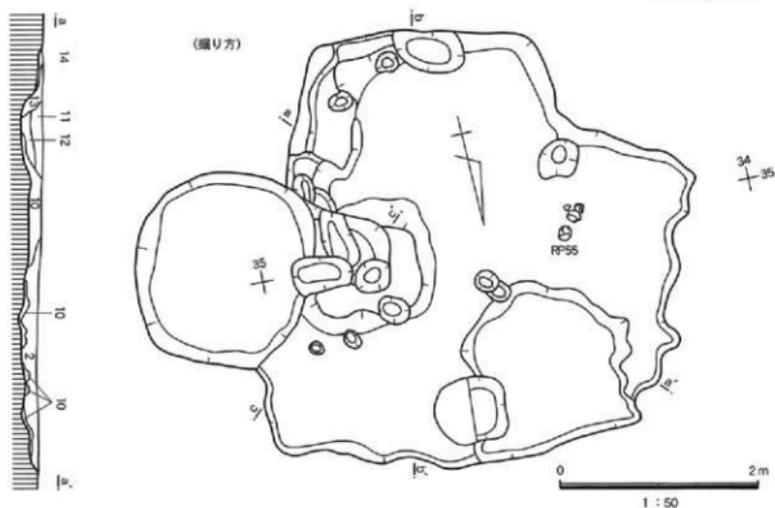
## ST1181

1	10YR 3/1	黒褐色シルト	10YR 5/2 黄褐色シルトをブロック状に10%含む。
2	10YR 2/2	黒褐色シルト	10YR 5/2 黄褐色シルトをブロック状に40%含む。
3	10YR 3/2	黒褐色シルト	10YR 5/2 黄褐色シルトをブロック状に10%含む。炭化物を含む。
4	10YR 5/2	黄褐色シルト	10YR 3/2 黒褐色シルトを塊状に30%含む。
5	10YR 5/2	黄褐色シルト	10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に20%含む。
6	2.5Y 3/2	黒褐色シルト	炭化物を5%含む。
7	10YR 4/2	黄褐色シルト	10YR 3/2 黒褐色シルトを塊状に30%含む。焼土を塊状に含む。
8	10YR 2/2	黒褐色シルト	10YR 5/2 黄褐色シルトを塊状に40%含む。炭化物を含む。
9	10YR 4/2	黄褐色シルト	
10	10YR 5/2	黄褐色シルト	
11	2.5Y 3/1	黒褐色シルト	炭化物を含む。
12	2.5Y 3/1	黒褐色シルト	10YR 5/2 黄褐色シルトをブロック状に30%含む。
13	2.5Y 2/1	黒褐色シルト	10YR 5/2 黄褐色シルトを塊状に1%含む。
14	2.5Y 6/2	黄褐色シルト	10YR 4/2 黄褐色シルトをブロック状に10%含む。
15	10YR 3/2	黒褐色シルト	炭化物、焼土を含む。
16	10YR 2/2	黒褐色シルト	焼土ブロックを少量に含む。炭化物を含む。
17	2.5Y 3/2	黒褐色粘質シルト	10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に3%含む。

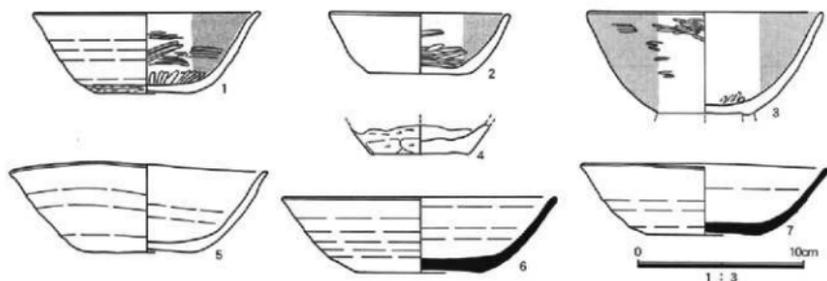
ST1181  
(床面)



水糸高=239.80m



第25図 ST1181 住居跡



第26図 ST1181 出土遺物

## ST1213 (第27図)

**位置** B区中央の35-33グリッドに主体を置く。南西隅部において楕円形状の土坑SK1214と重複し、直接の先後関係は不明ながら床面の状況等から、土坑埋積後に住居が構築されたと考えられる。

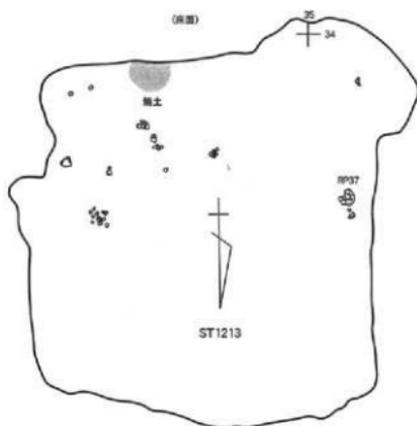
**平面形・規模** 東西軸3.4m・南北軸3.4~3.8m規模を測る長方形プランを呈すが、東辺中央部にST1156同様の張り出しを認める。

**床面・掘り方** 検出時点で南辺際に焼け面が見られ、南半城を中心に遺物が点在する状況であったことから、ほぼ床面上と判断された。床面には地山の部分と、黒色土による貼り床構築部分が認められる。掘り方は概観的に見て周辺部を掘り込んで貼り床とし、中央部は地山を直接床面にしてある。床面上に何基かの小ピットを認めたが支柱穴とはなり得ず、貯蔵穴等の住居内施設も存在しない。

**カマド** 南辺の中央やや東寄りに築かれているが、検出できたのは壁際床に残る焼け面のみである。径約40cmの円形内が赤褐色に変化しており、この周囲を含めた壁沿い70cm程の範囲が幾分高まりを有することから、燃烧部と判断される。煙道は検出されず、カマド袖に当たる側壁も遺存しないため、その構造や構築法等は不明である。

**遺物出土状況** 量的に少ないながら遺物の集中が認められる範囲は、大方住居の南半部と言える。遺物は押し潰されて細片となるものがほとんどだが、破片が散在する状況は少なく一次的な位置を留めていると思われる。したがって、出土遺物は概ね床面上の一括と捉えられるものである。

**出土遺物** 土師器甕類の体部破片を主体として、コンテナ半箱相当分の土器が出土している。この他の種別に黒色土器と赤焼土器を認めたが、須恵器は出土していない。図示した資料で全形が知り得るもの1点があるが、他は破片から復元実測を行っている。1の黒色土器は底部を欠くが体部の外傾度から深身な形態と認識され、外面中程に沈線様の凹帯を巡らす特徴を有する。内面は二次焼成を受け、一部赤色化している。2は削り出し高台を持つ黒色土器で、口縁部の器厚を薄くすることにより、外面に稜線状の屈曲部を作り出している。これら出土土器群の年代は、須恵器坏類を欠くため明確でないが9世紀前半代に比定しておく。



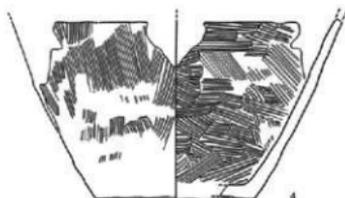
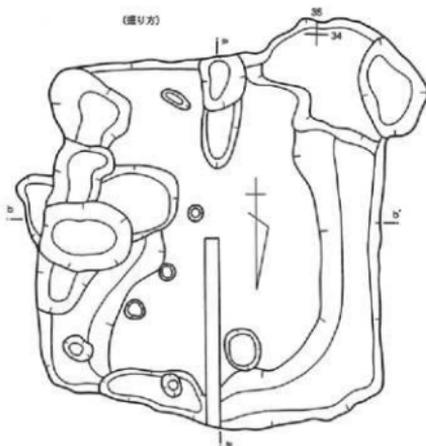
## ST1213

- |   |          |      |       |  |
|---|----------|------|-------|--|
| 1 | 10YR 4/2 | 灰黄褐色 | シルト   | 10YR 2/2 黒褐色シルトを粒状に1%未満含む。                 |
| 2 | 10YR 4/2 | 灰黄褐色 | シルト   | 10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状、塊状に5%含む。             |
| 3 | 10YR 2/2 | 黒褐色  | シルト   | 炭化物、焼土含む。                                  |
| 4 | 10YR 3/2 | 黒褐色  | シルト   | 10YR 2/1 黒色シルトを塊状に1%含む。                    |
| 5 | 10YR 4/2 | 灰黄褐色 | シルト   | 炭化物、焼土含む。                                  |
| 6 | 10YR 3/3 | 暗褐色  | シルト   | 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを塊状に15%含む。                 |
| 7 | 10YR 2/2 | 黒褐色  | シルト   | 10YR 5/3 に近い黒褐色シルトをブロック状に1%含む。             |
| 8 | 10YR 3/3 | 暗褐色  | 粘質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状(一部層状)に1%含む。炭化物、焼土含む。 |

水深高=239.80m



(掘り方)



第27図 ST1213 住居跡、出土遺物

## ST1224 (第28・29図)

**位置・重複** B区中央部北側、34・35-31・32グリッドに位置する。重複関係では西辺部で溝状の遺構SD1233を切り、北西角をSP1235に切られる。また、プラン内中央から南西部において、覆土が明らかに異なる楕円状の土坑SK1229やSB1217の柱穴EB1223等と重複し、これらに切られる。

**平面形・規模** 平面形は方形様を呈すが、南西隅部のプランが不明瞭である。また、南東角をカットしたような形状となることから、この部分に短い辺を持つ五角形様とも見なせる。規模は東西軸5m、南北軸5.3mを測る。

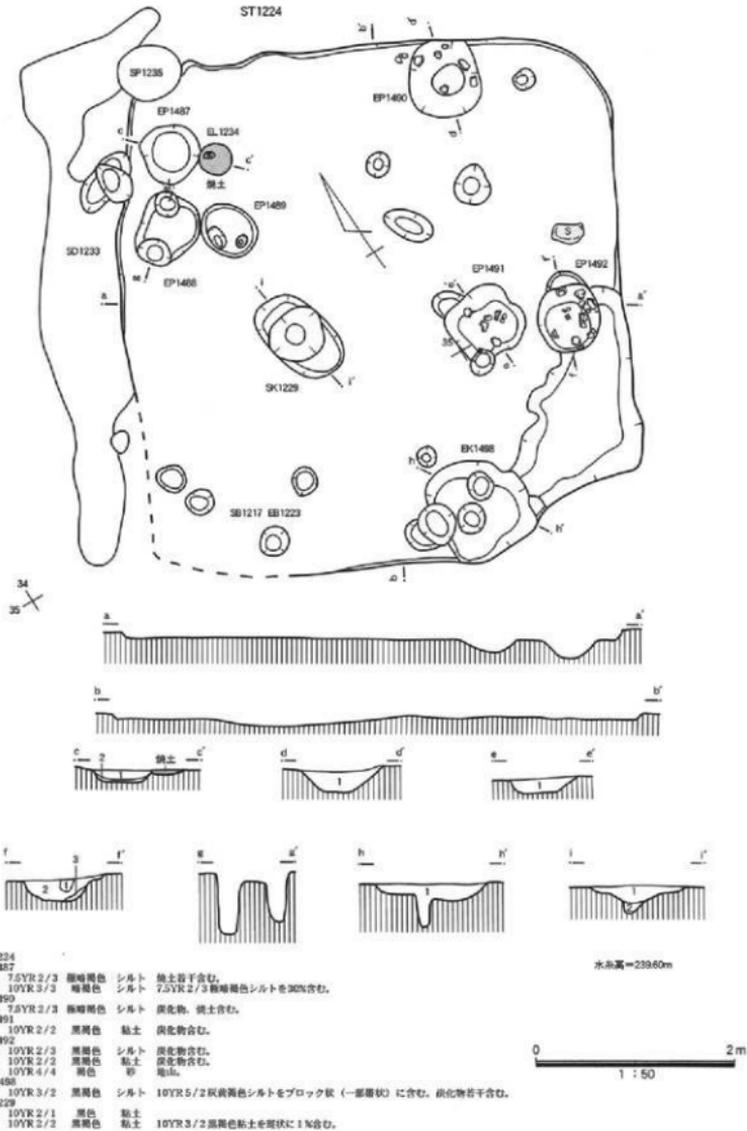
**壁・床面** 本住居跡付近の旧地形はB区内で最も安定した微高地であり、耕作土直下で地山に達する。検出時にはすでに床面直上、南西部においては床面も削平された状態と見なされ、検出ラインも定かではない。このため壁は、主に南東部と北辺で僅かな立ち上がりを確認できたに止まる。床面は南東壁沿いに貼り床施工が認められる以外は、地山を直接床面にしている。なお、東壁際中央付近の床面に扁平礫1個が遺存する。

**柱穴・貯蔵穴等** 重複するSK1229土坑をはじめ、床面上から多数の掘り込みが検出された。住居に付随するものと埋積後に掘られたものが混在するが、これらは覆土の相異から識別が可能であった。柱穴様のピットは北壁際のEP1490、西壁沿いのEP1487~1489、東半部中央と東壁沿いに並ぶEP1491・1492等を検出したが、その規模や位置から主柱穴と判断されるものはなかった。ただ、EP1488内やEP1491の南端とEK1498内には、小穴ながら床面からの深さ50~60cmを測る同様の掘り込み部を伴うのは注目される。また、EP1487・1490~1492の4基は底面や壁面に密着する遺物も認められ、掘り方の形態等からも貯蔵穴としての性格が考えられる。

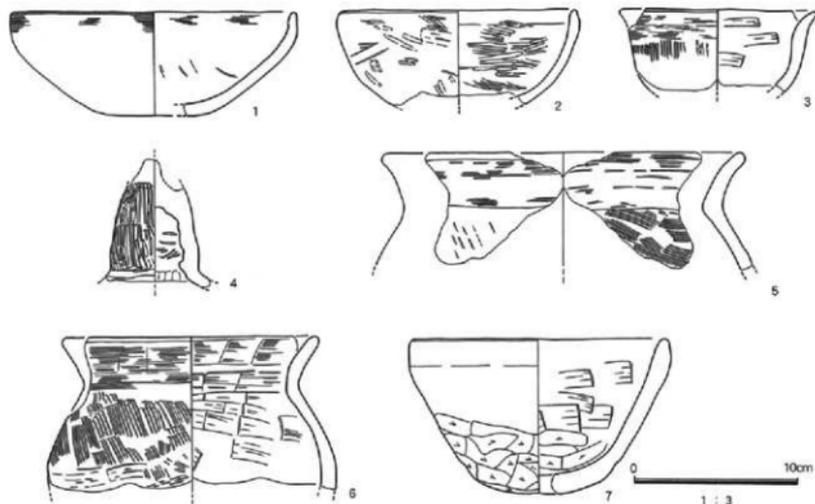
**炉** 床面上北西部でEP1487に隣接して焼け面が認められ、地床炉として登録した。焼け面は径約30cmの円形で5cm程の厚さを有し、焼け面上には土師器甕の底部片が遺存している。炉の周辺に炭化物の広がりは確認されない。

**遺物出土状況** 床面上に遺存するものはほとんどないが、貯蔵穴と南東部の掘り方内からコンテナ1箱相当量の遺物が出土している。特に、貯蔵穴出土の遺物は完形品がないものの、住居跡の一括遺物として時期決定資料になり得る。

**出土遺物** 土器はすべて土師器であり、復元実測により器形がある程度窺えるものを第29図に示した。その器種に高坏・坏・甕・甔が認められ、個体では坏と甕が多数を占める。4の高坏は脚柱部の破片資料で、坏部の形態は不明である。円柱状の中空脚で、欠損する裾部は円錐台状に広がるものと推定される。器面調整はハケメを施した後、粗いヘラミガキにより仕上げられる。坏は口縁部の特徴から、内反して直立する形態と短く外傾する形態の二種が知られる。調整は外面にミガキやハケメ、内面にミガキやヘラナデ等が観察される。甕は頸部でしまって口縁が外傾し、体部中程に最大径を有するものが主体である。これらには、頸部内面が角をなすようくの字状に強く屈曲する特徴的な5の形態も含まれる。これら土師器群は南小泉式の範疇に捉えられ、5世紀後葉に属するものと考えられる。



第28図 ST1224 住居跡



第29図 ST1224 出土遺物

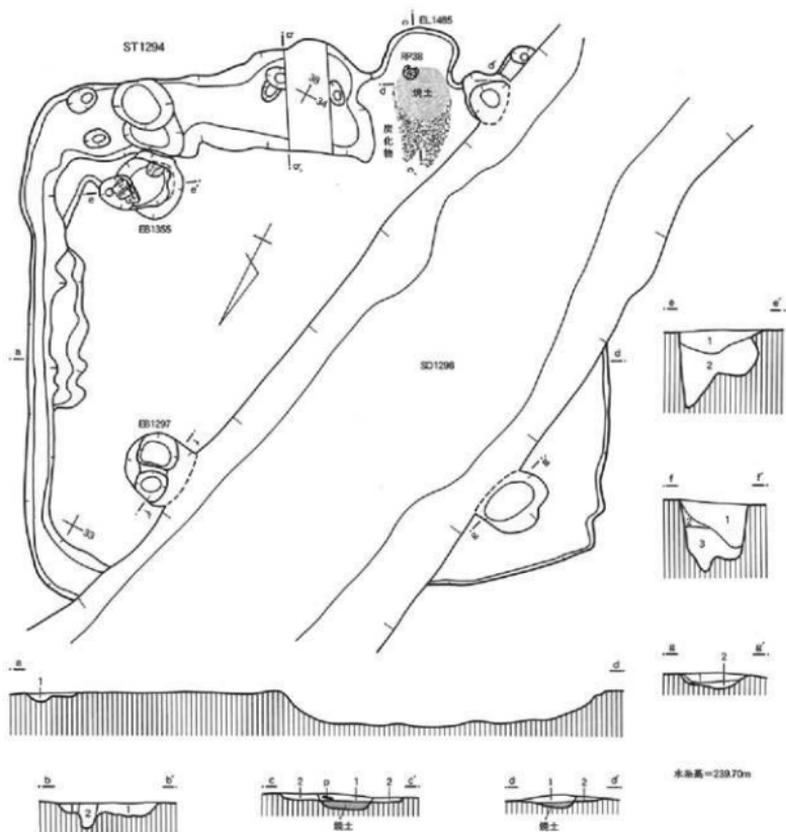
## ST1294 (第30・31図)

**位置・重複** B区中央の37・38-33グリッドに主体を置く。南北方向に走行するSD1296溝跡と重複し、これにより住居跡北東隅～南西隅部にかかる西半城の大方が切られる。なお、北西隅部は遺存するため、住居跡は溝跡により分断された形となる。

**平面形・規模** 平面形は東西方向にやや長い長方形を呈し、東西軸5.8m・南北軸5.2m規模を測る。南辺にはカマドが備わることから、張り出し部が認められる。

**床面・周溝** 検出面で床面直上であった。地山を床とし、検出範囲において貼り床を施す部分はない。床面は固くしまつて安定した状態を示す。南辺および東辺の内側壁沿いに溝状の掘り込みがあり、周溝と判断される。住居跡北東隅の状況から、周溝はSD1296に切られる北壁沿いにも巡らされると思われたが、北西隅部では確認されない。したがって、南辺においてカマド手前で途切れるように、北辺途中までの構築と推測される。周溝は遺存する西辺際にも検出されないことから、住居東半をコの形に巡らしたと考えられる。その規模は南辺と東辺でかなり異なり、幅・深さとも南辺部の掘り方が大規模である。

**柱穴** 床面北東部に位置するEB1297と南東部のEB1355の2基は、配置や規模等から見て主柱穴と判断されるものである。また、北西部にも同様の平面規模を有するEB1486を認めたが、他の2基に比べて掘り方が浅いことや位置的に隅寄りの配置となる相異点が指摘され、主柱穴とは言い難い。なお、南西部にもその存在が想定できるが、SD1296との重複により破壊されるため明らかでない。その他、EB1355と南壁間の周溝内およびカマド西側の壁際に柱穴様の掘り込みを認めている。



## ST1294

- 1 10YR 2/2 黒褐色 粘質シルト  
2 10YR 2/2 黒褐色 シルト

## EL1485

- 1 10YR 3/2 黒褐色 シルト  
2 10YR 3/2 黒褐色 シルト

## EB1297

- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト  
2 10YR 2/2 黒褐色 シルト  
3 10YR 2/2 黒褐色 シルト

## EB1355

- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト  
2 10YR 2/1 黒色 粘質シルト

## EB1486

- 1 10YR 2/1 黒色 粘質シルト  
2 10YR 2/1 黒色 粘質シルト  
3 2.5Y 4/1 黄褐色 砂質シルト

- 10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に15%含む。  
10YR 4/2 灰黄褐色シルトを粗粒に1%含む。

- 炭化物を含む。焼土ブロックを多量に含む。  
2.5Y 5/2 暗灰黄色シルトをブロック状に10%含む。炭化物含む。焼土多量に含む。

- ほぼ均質。

- 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルトを粗粒に5%含む。  
2.5Y 5/2 暗灰黄色シルトを粗粒に30%含む。

- 炭化物を含む。  
10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に10%含む。

- 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルトをブロック状に7%含む。  
2.5Y 5/2 暗灰黄色シルトを粗粒に10%含む。

- 10YR 2/1 黒色粘質シルトを粗粒に30%含む。

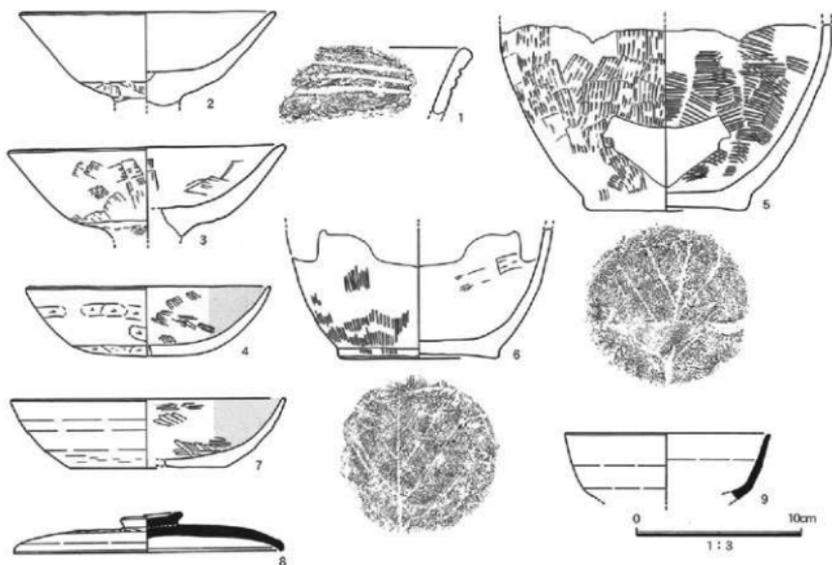
0 2m  
1:50

第30図 ST1294 住居跡

カマド 南壁の中央西寄りに築かれている。張り出し部の内側に径50cm程を測る焼け面と、その北側に続く炭化物の拡散範囲がある。約8cmの焼土堆積層からなる焼け面北側には、土師器甕の底部片 (RP38) が遺存している。上部削平によりカマド側壁は不明であるが、張り出し基部から炭化物拡散範囲に沿った両側に付設されていたと推定できる。煙道に当たる張り出し部は長さ約50cm・幅70cm程を測り、その形状は隅丸方形を呈している。

遺物出土状況 床面直上での検出、遺構重複による西半域の欠失などの要因があり、遺物の出土は堆積土が遺存する部分でのみ認められた。すなわち、周溝内と柱穴内およびカマド周辺部である。このうち、EB1355と南辺沿い周溝に集中的に分布する状況が窺われた。

出土遺物 破片数にして約340点の土器片が出土している。器形復元可能なものをはじめ主要なものを第31図に示したが、縄文土器・土師器・黒色土器・須恵器の多様な種別があり、混在と認識できる。これらのうち時期決定資料となるのは、カマド内出土の土師器甕 (6) と須恵器蓋 (8)、EB1355から出土した土師器甕 (5) と須恵器坏 (9) が揚げられる。他は主に周溝内から出土しているが、7の黒色土器坏は共伴関係にある遺物として捉えられる。7・8は各々、体部下半と天井部に再調整としての回転ヘラケズリを施す。9は底部を欠損するが、稜塊タイプの高台付坏と推察される。これらの特徴等から見て、年代は8世紀後半と考定されよう。なお、2・3の高坏は埴釜式の古式土師器の範疇に、4の丸底形態を呈す土師器坏は8世紀初頭に比定され、いずれも周辺からの紛れ込みと考えられる。



第31図 ST1294 出土遺物

## ST1315 (第32・33図)

**位置・重複** B区中央南寄り、36・37-35~37グリッドに位置する。深耕のための攪乱により、北西角から北半の一部を削平・破壊されている。

**平面形・規模** 東西・南北軸ともに約5.7m規模を測り、平面形は整った正方形を呈する。

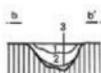
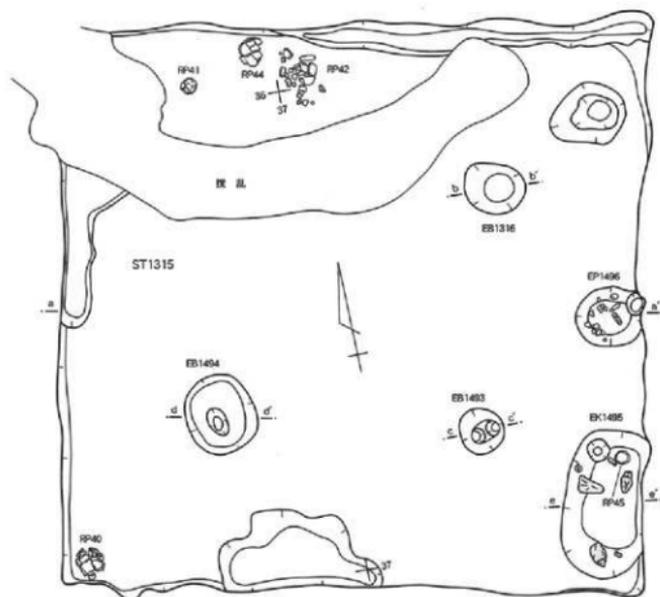
**壁・床面** 耕作土直下で地山に達する状況から、壁が検出できた箇所は南西隅部における一部の範囲に限られ、他はほぼ床面上であった。検出床面は本来平坦であったと考えられるが、削平を受けた部分が落ち込むため、起伏による若干の高低差を生じる。北辺の中央から東側には周溝状の掘り込みを検出したが、部分的なもので他の辺には認められない。なお、貼り床は施されず、地山を直接床とするものであった。

**柱穴** 床面中央域において、配置上の規格性をもつことから柱穴と判断される3基の掘り込みが検出された。北西部にもう1基の存在が考えられるが、予測位置は攪乱を受けており確認できなかった。おそらくは4本の支柱からなる住居と推察される。確認された3基の柱穴は、柱間距離や各コーナーからの距離がほぼ等しい値となる。平面規模に大小があるものの略円形プランを呈し、床面からの深さ20~28cm程を測る。掘り方も一様ではなく、底面に小規模な落ち込みを伴うものがあるなど、均一的な在り方は示していない。その他、北東隅部にも同規模の楕円状掘り込みを認めたが、覆土の相異等から住居に付随するものではないと思われた。

**貯蔵穴等土坑** 東辺に接する南東隅部に、貯蔵穴と推定されるEK1495を検出している。長軸150cm・短軸80cm規模を測る楕円形を呈し、15cm程の深さを有する。北側底面に遺存する完形の土師器杯 (RP45) をはじめ、堆積土内からも遺物が出土している。また、底面には加熱を受けたと察せられる自然礫数個が散在しており、未検出ながらカマドが存在した可能性が高く、その痕跡とも考えられる。他に、東辺中央に径約65cmを測る柱穴様の掘り込みEP1496が認められた。深さ15cm前後であるが、東辺に接する部分にピット状の深い落ち込みが見られる。堆積土内および底面密着で土師器片等の遺物が出土しており、貯蔵穴としての性格が窺える。

**遺物出土状況** まとまった状態で遺物が出土したのは、北辺際の床面と前述した2基の貯蔵穴内である。北辺際にはほぼ完形で出土した土師器杯 (RP41) や、押し潰された状況ながら復元にてほぼ完形となった同飯 (RP42) などが認められ、一次的な遺存を示すものと判断される。他に、南西角から単独に出土した土師器甕 (RP40) も床面遺存の遺物である。

**出土遺物** 床面および貯蔵穴から出土した主要なものを第33図に示した。土師器以外の遺物は、貯蔵穴等から出土した礫数点に限られている。土師器の器種には杯・壺・甕・甔がある。杯は身の深い丸底形態で内黒・非内黒の技法的相異の他、口縁の特徴から内弯気味に直立するタイプ(1)、直立する体部上半から短く外反するタイプ(3)、外傾して立ち上がる体部から外反するタイプ(2)の器形的に異なる三種を認める。甕は体部中程に最大径を持ち、球胴形態を呈すものが主体となる。口縁には端部が玉縁状となるもの(5)や、口唇に角をなすもの(6・7)等の別が見られる。甔は壺形を呈す大型無底式のもので、体部外面のハケメ・内外面のヘラナデの他、内面に施されるヘラミガキが顕著であり、甕類との技法的な違いとして認識されよう。これら土師器群は「住社式」の型式範疇に捉えられるものである。



基準高=239.60m

ST1315

EB1316

- 1 10YR1.7/1 黒色 粘質シルト 10YR 4/1 黒褐色砂質シルトを含む。炭化物、粘土若干含む。
- 2 10YR 4/1 黒褐色 砂質シルト 同此物若干含む。
- 3 SY 4/1 灰色 砂質シルト

EB1493

- 1 2.5Y 3/1 黒色 粘質シルト 2.5Y 3/2 黒褐色シルトを混状に10%含む。
- 2 10YR 4/1 黒褐色 シルト 同此物若干含む。
- 3 2.5Y 5/1 黄褐色 砂質シルト

EB1494

- 1 10YR 3/2 黒褐色 シルト
- 2 N15/0 黒色 粘質シルト
- 3 10YR1.7/1 黒色 粘質シルト 2.5Y 3/2 黒褐色シルトを混状に10%含む。
- 4 N15/0 黒色 粘質シルト 2.5Y 5/2 緑黄褐色砂質シルトを20%含む。
- 5 2.5Y 5/2 暗黄褐色 砂質シルト

EK1495

- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを混状に1%未満含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 粘土 10YR 4/2 灰黄褐色粘土を混状に1%未満含む。

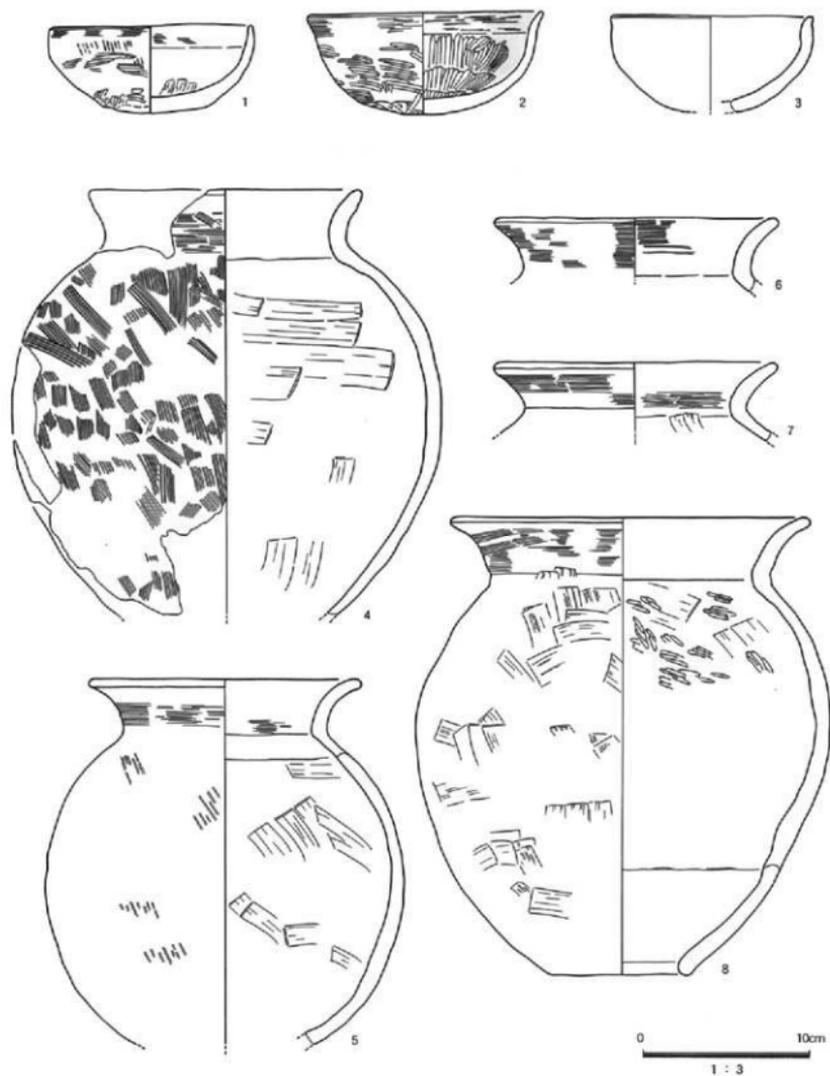
EP1496

- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを混状に3%含む。炭化物含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 粘土 10YR 2/2 黒褐色粘土を混状に1%。10YR 3/3 暗褐色細砂をブロック状に1%未満含む。粘土若干含む。



1:50

第32図 ST1315 住居跡



第33図 ST1315 出土遺物

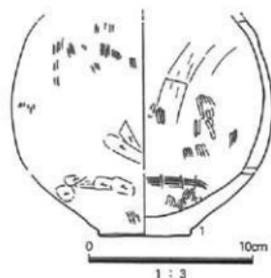
## ST1337 (第34図)

**位置・重複** B区中央域東寄り、38～40-34・35グリッドに位置する。SG1335河川跡埋積後に構築された住居跡である。

**平面形・規模** 住居跡の存在は確認できたが、その検出プランは明確でなかった。掘り下げにより床面に至る段階で、規模や主軸方位が当初プランとはやや異なることが理解された。規模は東西軸2.8m・南北軸3.2mを測るが東辺が幾分長い。平面形は台形様プランを呈す。

**床面** 平坦な床面を検出したが、その状況は河川跡堆積土と地山が混在した様相を示し、安定した状態ではなかった。床面上から柱穴を含む掘り込み等は確認されない。

**出土遺物** 床面に遺存する一次的な遺物はなく、堆積土中から点数にして約430点の土器破片が出土している。大半が二次焼成を受けた土器器細片で、復元できたものは住居跡南東隅の床面からやや浮いた状態で出土した第34図の甕である。肩部以上を欠くため全形は知り得ないが、球形を呈する。調整は内外面とも上・下半で各々異なり、内面下半における横方向のハケメと縦方向のヘラミガキが顕著である。



第34図 ST1337 出土遺物

## ST1382 (第35・36図)

**位置・重複** B区北壁際東側、39・40-30・31グリッドに位置する。東辺部を除く大方でSG1335河川跡と重複関係にある。

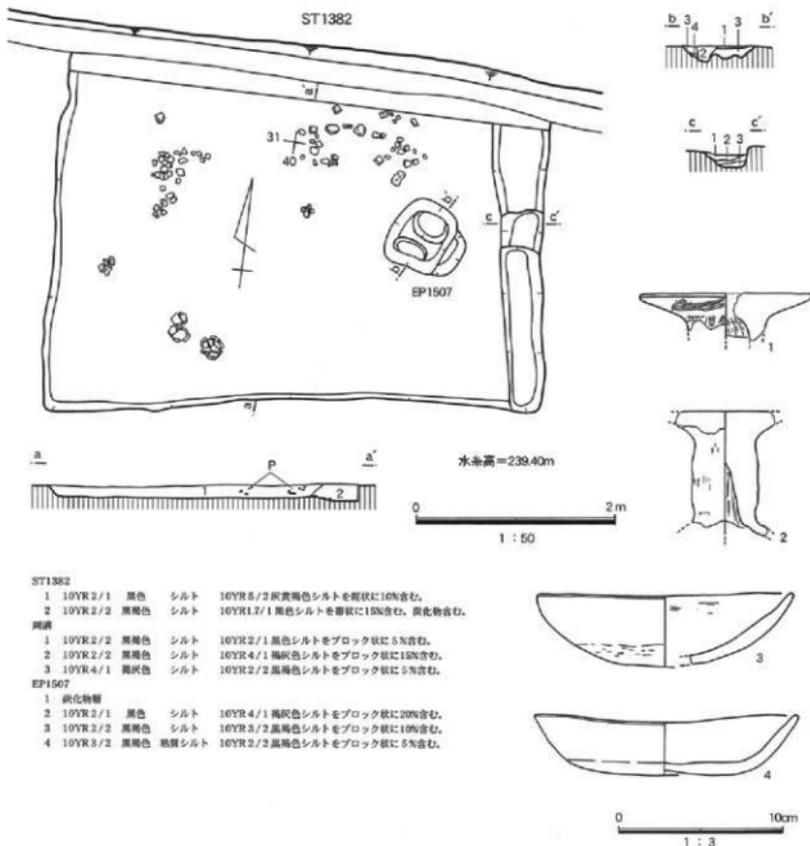
**平面形・規模** 住居跡北半部が調査区外へかかるが、平面形は方形基調と推測される。規模は東西軸4.9m、検出西辺で約3.1mを測る。ただし、検出段階で西辺の確認が困難であり、掘り下げによる断面観察でも河川跡堆積土と識別し得なかった。このため、床面上における遺物の在り方等から追及した経緯があり、南西隅から西壁ラインについては不確実である。

**壁・堆積土** 壁は南辺と東辺において検出している。壁高は南壁で12cm前後となり、床面からの立ち上がりはほぼ垂直に近い。東壁沿いには周溝状の掘り込みが認められる。上面幅30～56cmを測り、底面中程に低い段を形成して北側から南側へ深くなる。住居跡を覆う堆積土は炭化物等を含む黒色土が基調で、河川跡埋積土と近似しており区別しにくい。炭化物混入の有無等により識別される。

**床面** 東半では地山を、河川跡重複部分はその埋積土を床にしていると思われる。埋積土上には地山同色の粘質土の分布する範囲を認めたが、貼り床と考えるよりも埋積過程における部分的な堆積薄層と見る方が妥当であろう。床面東側から柱穴様の掘り込みが確認され、土層堆積状況から重複するピット2基の結合と判明した。他には検出されず、これらが柱穴であったかどうかは定かでない。

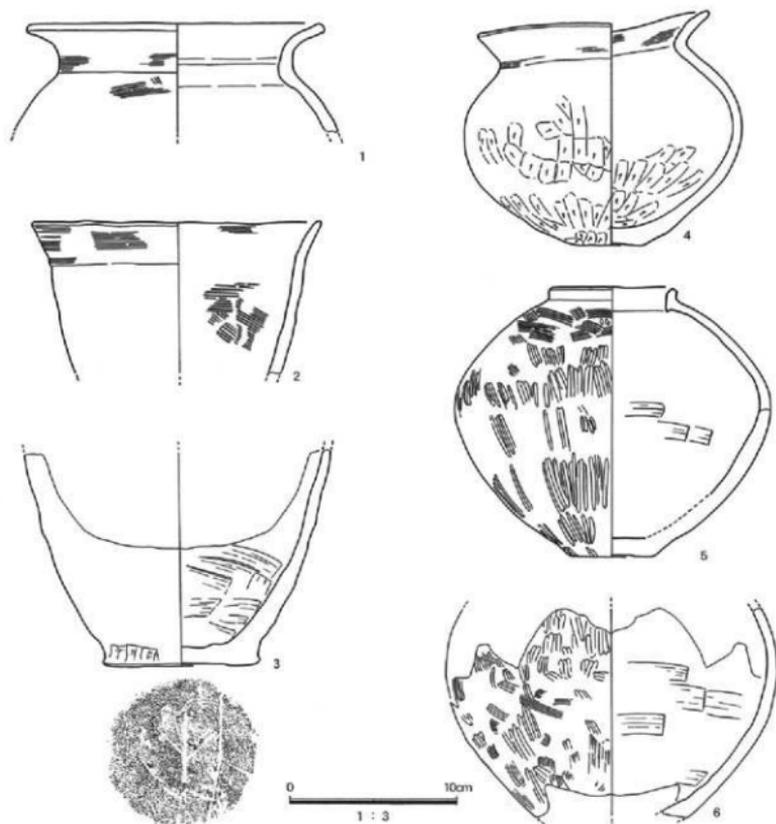
**出土遺物** 覆土内や床面上から、土師器を中心とする遺物が出土している。その分布的集中が認められる範囲は中央域および西半域であり、床面が地山となる南東部では覆土内出土を含め少ない状況と認識された。土師器の器種では高杯・杯・壺・甕の四種を認め、壺・甕類での

形態的多様性が注目される。高坏は全形を窺えるものではないが、脚部が中空筒状で裾の広がる形態と予想される。第35図1は高坏に含めて分類したが、坏部はその形態をなすものではなく、径10cm程の平らな円台状を呈している。したがって、カマド支脚や器台としての用途が考えられようが、これまで類例は知られない。坏は扁平様な形態で丸底のものと平底風を呈するものがあり、外面のヘラケズリ以外に調整は認められない。甕は頸部がしまり球体を呈すものと、最大径を口縁に有す長胴形のものに分類される。壺は体部中程に張りを持ち、ソロバン球形となる短頸壺である。外面に施される縦方向のヘラミガキが特徴的で、甕の調整技法とは趣を異にしている。これら土器の年代は、坏の形態他により7世紀末から8世紀初頭に比定される。



- ST1382
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 5/2 灰黄褐色シルトを細状に10%含む。
  - 2 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR L7/1 黒色シルトを帯状に15%含む。炭化物含む。
- 溝渠
- 1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトをブロック状に5%含む。
  - 2 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/1 褐褐色シルトをブロック状に15%含む。
  - 3 10YR 4/1 黄褐色 シルト 10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。
- EP1507
- 1 陶化物質
  - 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/1 褐褐色シルトをブロック状に20%含む。
  - 3 10YR 3/2 黒褐色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。
  - 4 10YR 3/2 黒褐色 焼質シルト 10YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。

第35図 ST1382 住居跡、出土遺物 (1)



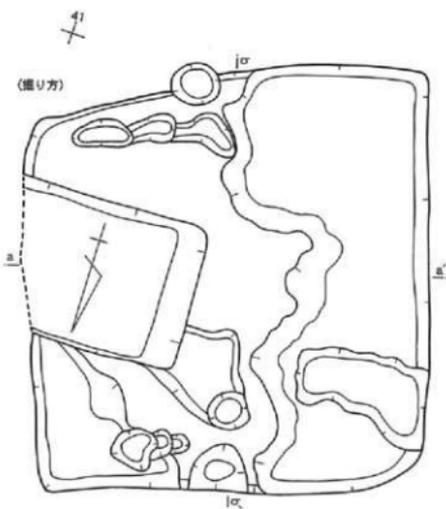
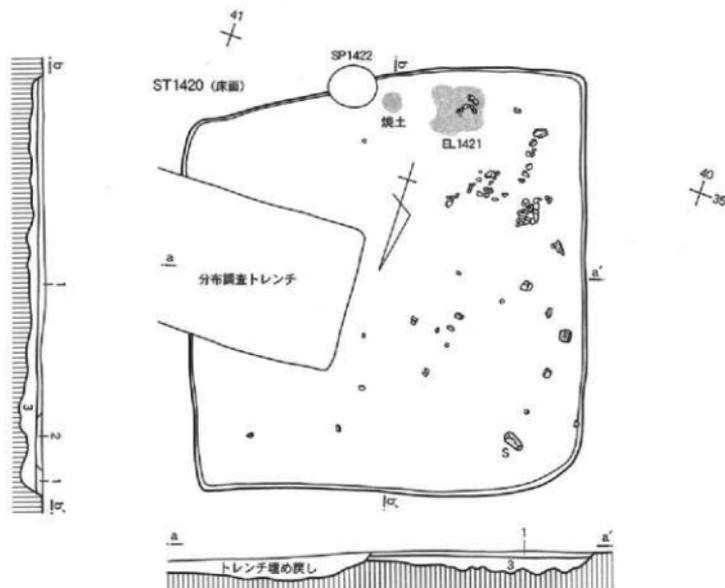
第36図 ST1382 出土遺物 (2)

ST1420 (第37・38図)

**位置・重複** B区東側中央の40-34グリッドに主体を置く。SG1335河川跡と重複する他、南辺中央においてSP1422ピットと重複しこれに切られる。

**平面形・規模** 各辺の長さが若干異なるため、平面形は台形様を呈している。東辺と北辺で約3.8m、西辺と南辺が約4m規模を測り、北西コーナーが丸みを帯びたプランとなる。

**壁・堆積土** 試掘調査時のトレンチにより破壊される東壁の一部を除き、壁は全周で検出されたが、すでに床面直上であったことから高さは5~6cm程に止まる。堆積土は炭化物を含む均質的な黒色土が床面を覆う。また、床面以下地山までは地山ブロックを混入する黒褐色土となり、河川跡埋積土と理解される。



ST1420

- |   |          |     |       |                                      |
|---|----------|-----|-------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色  | シルト   | 10YR 3/2 黒褐色シルトを粒状、塊状に5%含む。炭化物碎片を含む。 |
| 2 | 10YR 2/2 | 黒褐色 | 粘質シルト | 10YR 3/2 黒褐色粘質シルトを塊状、ブロック状に5%含む。     |
| 3 | 10YR 2/2 | 黒褐色 | シルト   | 10YR 4/1 褐色シルトを塊状に10%含む。掘り方          |

0 2m  
1 : 50

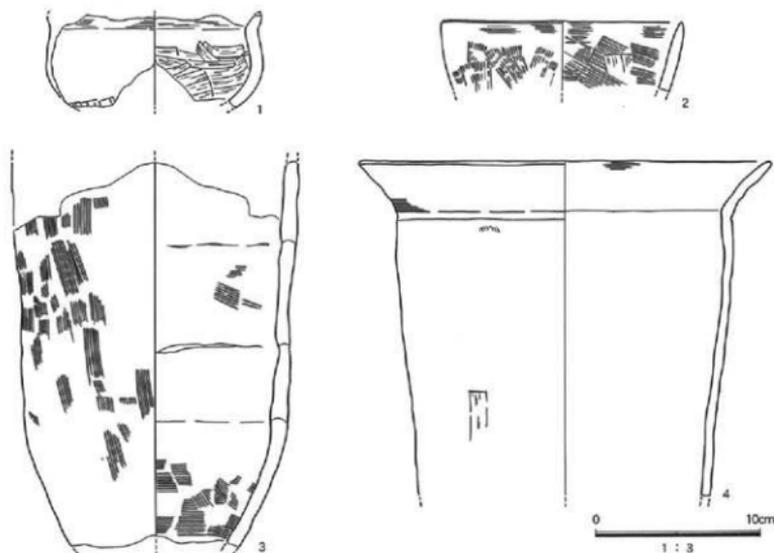
第37図 ST1420 住居跡

**床面** 住居中央から南壁沿いの東半域にかけて地山を床とする以外、大方で河川跡埋積土をそのまま床にしていると思われる。床面は平坦で幾分かしまり、地山となる南東域で炭化物による汚れを部分的に認める。床面上から柱穴等は確認されず、完掘状況において北壁際にピット状の落ち込みを幾つか認めたが、柱穴と考えられるものではない。

**カマド** 南壁の中央よりやや西側の床面上に、焼土層の広がり方が認められた。位置的にカマドが付設されていたと考えられるが、煙道や側壁が検出されない状況から地床炉との認識も可能である。焼土層の範囲は不整ながら、一辺約50cmを測る方形様に捉えられる。またその東側、南壁際の中央にも径20cm程の円形状に焼土の分布が確認された。

**遺物出土状況** 床面や堆積土内から約1箱分量の土器が出土している。遺物は相対的に南西域から多く出土しており、他住居跡同様にカマド近辺で集中的に分布する傾向が窺える。完形で出土する土器はなく、床面出土の甕等は押し潰された状態のものであった。

**出土遺物** 破片数で約590点の土器は大半が土師器であり、それ以外では須恵器甕の体部破片を数点含む程度である。器形の復元ないし推定可能なものは、第38図に示した土師器の鉢・甕等若干に限られる。鉢は小型品で、ST21出土の鉢（第6図3）と同器形と見なせるものを含んでいる。球形を呈す体部が特徴的で、内面には横方向のヘラナデが丹念に施される。共伴する甕は、口縁に最大径を有する長胴形態のものが主体を占める。これら土器群に与えられる年代は、前記ST21の共伴事例から8世紀初頭と考えられる。



第38図 ST1420 出土遺物

## ST1440 (第39・40図)

**位置・重複** A区南東側の40-36グリッドにその主体を置き、SG1335とSG1497の間に位置している。住居跡南西隅部がSG1335と重複関係にあり、これを切って構築される。

**平面形・規模** 河川跡にかかる南西角のプランがやや不明確ながら、南北方向に幾分長い方形を呈する。規模は東西軸4.8m、南北軸5.2mを測る。

**壁・堆積土** 壁は全周で明瞭に検出された。床面からの高さ15~20cmを測り、ほぼ垂直に近い立ち上がりで四辺を巡る。堆積土は黒色粘質土を基調としているが、粘土・シルト・砂など土質の相異により9層に区別できる。断面観察の結果、周辺部から段階的に埋積していった様相が窺われた。また、出土遺物の大半が床面上に遺存し完形品等も含まれる状況から、短期間で集中的に埋没したことが想定される。

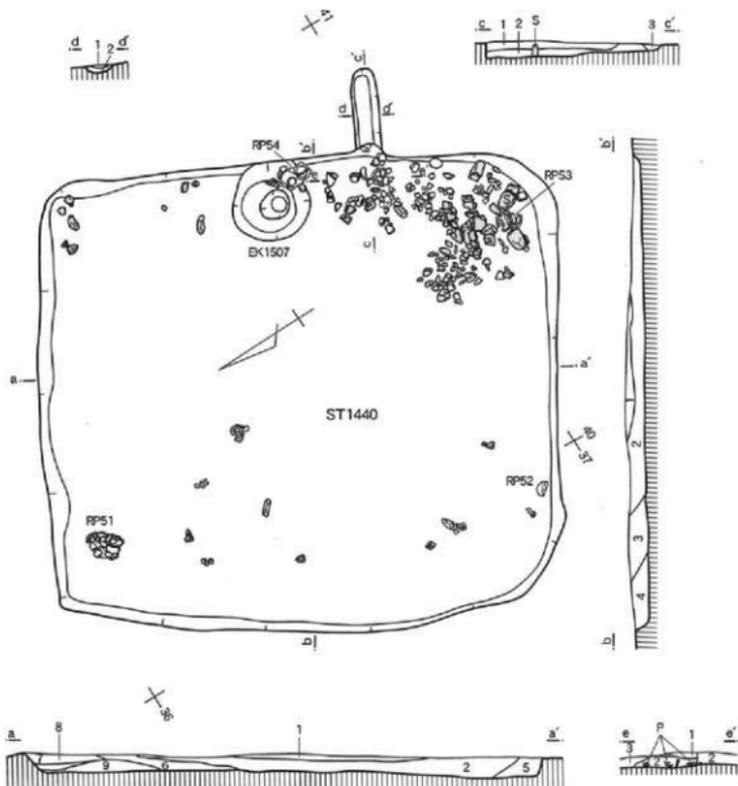
**床面** 床は地山と黒色土が斑状に混在した状態であり、全体的に掘り上げ土による貼り床を施していると考えられる。床面は中央部でややしまり、ほぼ平坦だがカマド前面に幾分高まりを有する。なお、床面上から柱穴は確認されない。

**カマド** 東壁の中央よりやや南側に付設されており、住居外へ細長く延び出す煙道部が検出された。煙道部は全長90cm・上幅約25cmを測り、断面U字状を呈する。トンネル式に構築されたものと推測されるが、上部を覆う構造は不明である。燃焼部は遺存しておらず、その南側一帯に焼け石を含む自然礫が散乱している状況から、破壊された様子が窺える。床面や壁面に焼土や炭化物の分布を見ないこともあり、規模等は明らかでない。赤変した焼け石は焚口に配された可能性が高く、石組みを伴う構造であったと考えられる。また煙道へ至る中心線上、すなわち燃焼部の中央には、径6cmを測る槽柱礎を埋め置いた支脚が認められた。

**貯蔵穴** 住居跡北壁に接して、そのほぼ中央に貯蔵穴と推定される土坑EK1507を検出している。径約80cmを測る略円形を呈し、カマドに隣接する位置関係にある。途中に段を形成する掘り方がなされ、底面中央付近が一段落ち込んでいる。断面形が逆凸状となり、床面からの深さ38cmを測る。内部から出土する遺物は少ないながら、第40図1の土師器坏等を認めた。

**遺物出土状況** 堆積土内・床面上・貯蔵穴から、土師器の各器種を中心とする約3箱分の遺物が出土している。遺物の集中が認められるのは貯蔵穴から住居南東隅部にかかる範囲であり、その他にも各隅部において単独的な分布が認められた。これらは出土状況から、概ね床面一括の遺物群として捉えられる。

**出土遺物** 土師器の器種に高坏・坏・壺・甕・鉢がある。特に坏類での量と形態的多様性が注目され、床面出土で一括性の強い良好な一群と判断できる。高坏は脚柱資料が1点あり、中実棒状短脚のものである。坏はいずれも非内黒の丸底タイプで、口縁の特徴から三種に分類される。すなわち、体部に膨らみを持ち口縁が短く外反するもの(第40図1~6)、口縁が長目に外反して開くもの(8・9)、その中間タイプで底部中央に窪みを有するもの(7)、以上の三種である。鉢は笠形を呈す大型品で、内面調整はヘラナデの他にミガキが多用される。甕は球形体部で、口縁は直線的に外傾する単純口縁のものが知られる。これら土器群は南小泉式に属するものであり、住居跡出土遺物の中では最も古い段階に位置付けられる。



水糸高=239.40m

ST1440

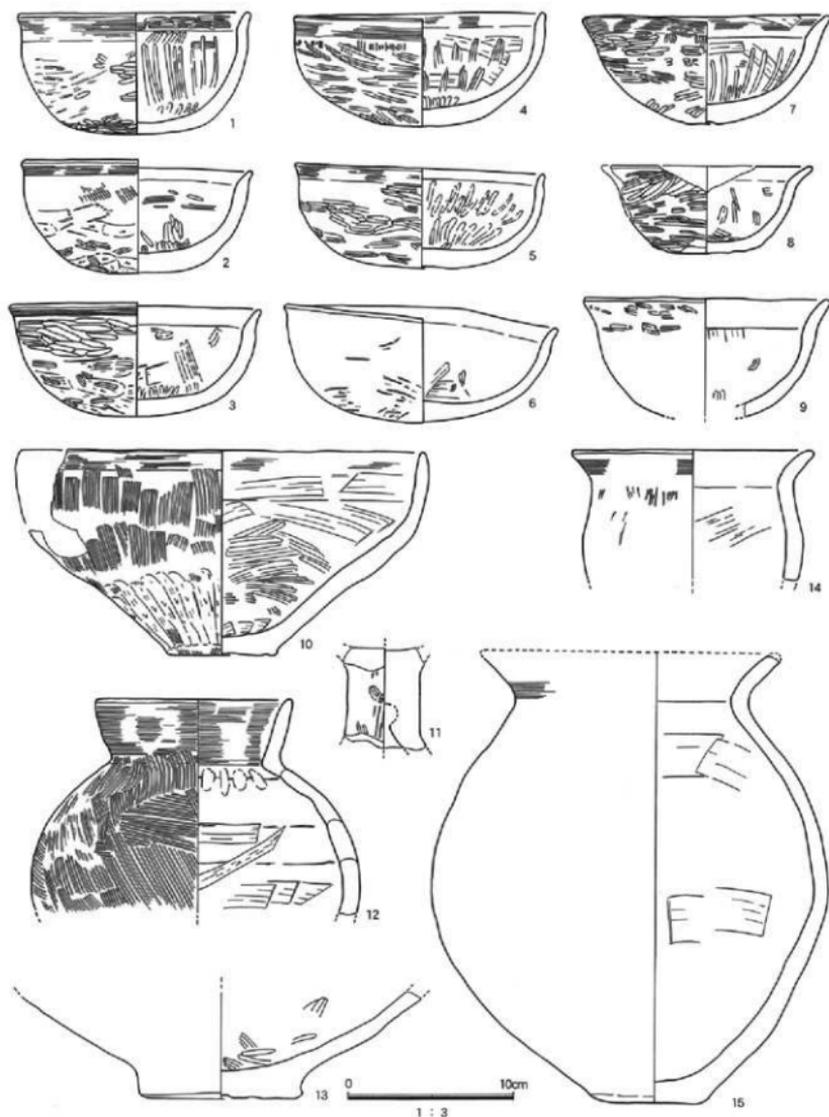
- |   |          |     |       |  |
|---|----------|-----|-------|--|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色  | 粘質シルト |  |
| 2 | 10YR 7/1 | 黒色  | 粘土    | 10YR 3/1 黒褐色粘土を塊状に15%含む。                     |
| 3 | 10YR 7/1 | 黒色  | 粘土    | 10YR 2/1 黒色粘土を5%、10YR 3/1 黒褐色粘土を10%ブロック状に含む。 |
| 4 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | 細砂    | 粘性あり。  |
| 5 | 10YR 2/1 | 黒色  | 細砂    | 砂質純粋、粘性あり。                                   |
| 6 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | 粘土    | 10YR 1/1 黒色粘土を塊状に5%含む。                       |
| 7 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | シルト   | 10YR 4/1 黒褐色シルトを塊状に10%含む。                    |
| 8 | 10YR 2/1 | 黒褐色 | 粘土    | 10YR 2/1 黒色粘土をブロック状に15%含む。                   |
| 9 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | 粘土    | 10YR 4/1 黒褐色粘土を塊状に10%含む。                     |

EL1441

- |   |          |     |       |                              |
|---|----------|-----|-------|------------------------------|
| 1 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | 粘質シルト | 10YR 3/2 黒褐色細砂をブロック状に1%未満含む。 |
| 2 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | 粘質シルト | 炭化物、粘土含む。                    |
| 3 | 10YR 2/1 | 黒色  | 粘土    |                              |

0 2m  
1 : 50

第39図 ST1440 住居跡



第40図 ST1440 出土遺物

## ST1878・2272 (第41～43図)

**位置・重複** 互いに重複する住居跡であり、B区中央部西寄りの16・17-34・35グリッドに位置する。検出時の住居プランは南北方向に長い不整長方形で捉えたが、調査の進行に伴って2棟の重複、さらに北西側はSX2015の一部であると判明した。これらの新旧関係はSX2015→ST1878→ST2272と判断される。

**平面形・規模** ST2272は方形を呈し、規模は東西軸4.3m・南北軸約4mを測る。北辺の大方をこれに切られるST1878は、東西軸約4.6m・南北軸約3.1mの規模を測り、不整な長方形プランを呈すと推測される。

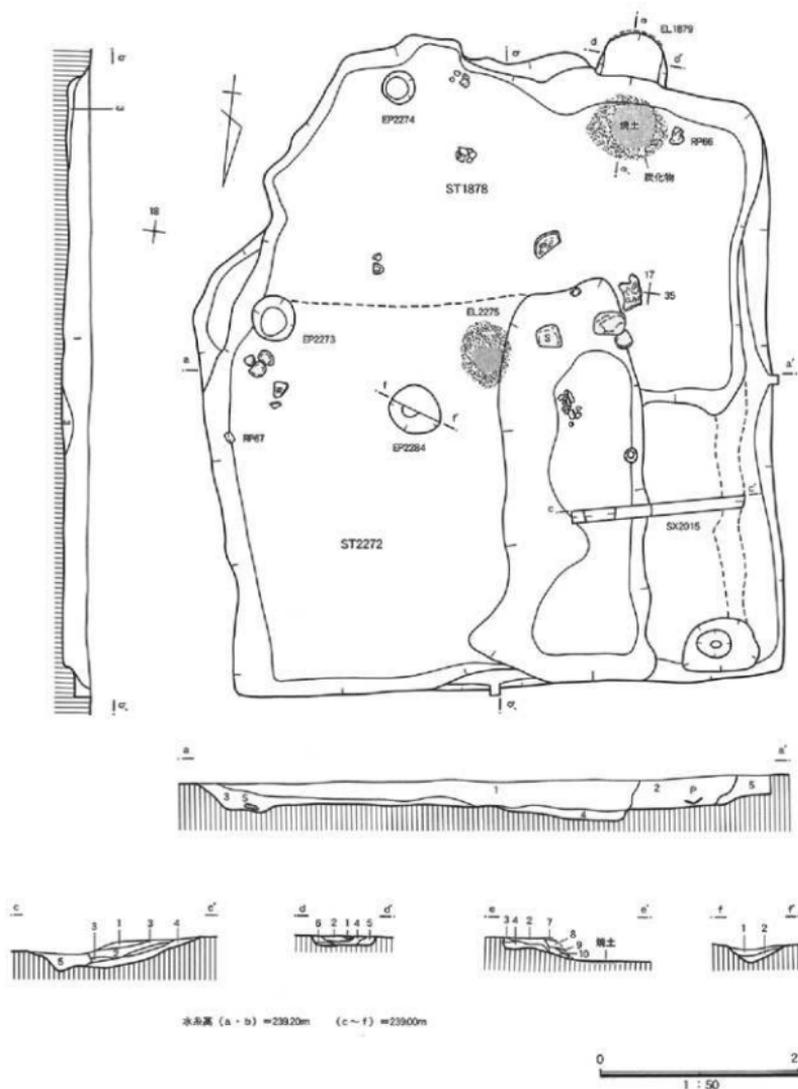
**壁** 重複し合うST1878の北壁と、ST2272の南壁が確認できなかった。ST1878ではカマドの位置する南壁の遺存が良好で、床面から20cm程の壁高を検出した。南壁の立ち上がりは比較的緩やかであり、他の壁面とは異なる掘り込みがなされている。ST2272では重複しない北壁と東壁が明瞭に検出され、床面からの高さは共に25cm前後を測る。

**床面・柱穴** 両住居跡とも地山を床としており、全域において固くしまる。また、双方に床面の高低差は認められず、同一レベルで掘り込まれている。ST1878の床面はほぼ平坦に推移し、ST2272では東西の壁際で幾分低くなる状況が見て取れる。これら床面上から主柱穴になる掘り込みは検出されないが、各々の南東隅部に柱穴様のピットを伴う。さらにST2272の中央南寄りには、炭化層が堆積する長径54cm・深さ約20cmの落ち込み（EP2284）が存在する。

**カマド** ST1878では南壁中央から西寄りの位置に築かれており、煙道部と考えられる半円状の張り出しと、燃焼部床面に広がる焼け面を認める。燃焼部から煙道部へは、高さ10cm程の緩い奥壁を経て至る。燃焼部の側壁は遺存しておらず不明ながら、カマド覆土中に灰白色粘土層の堆積が見られたことから、その構築は床面上からの粘土積み上げによると推測される。ST2272でも同様に、南辺の中央からやや西側の床面に卵形をした焼け面が検出された。重複関係もあり煙道部が不明なほか、燃焼部側壁の構造等も明らかでない。焼け面西側の住居南西隅部床面に、カマドに関連すると察せられる自然礫が点在している状況から、側壁は石組みによる構築であった可能性が指摘される。

**遺物出土状況** 双方とも床面や壁面に遺存する遺物はほとんど無く、カマドに関わる一部の礫石等を除けば大半が堆積土内からの出土である。したがって、遺物の多くは住居廃絶後に埋積したものであり、分布状況でも集中して出土する範囲などは特に認められない。

**出土遺物** 堆積各層を中心にST1878で約550点、ST2272で約60点の土器が出土している。ただしこれら遺物の点数に際しては、当初1棟の住居跡と認識した経緯もあり、検出プラン北西部で重複するSX2015の一部を含め、重複関係が明らかになるまでに出土したものはST1878で取り上げていることを断っておく。図化し得たもののうち坏類を第42図に、煮沸・貯蔵器類を第43図に掲載した。坏類は黒色土器と須恵器で組成され、底部切離の相異や再調整の有無などで細分できる。底部切離の別では黒色土器・須恵器ともヘラ切りと糸切りの割合が約半数づつを占めるほか、須恵器に静止糸切りによるもの（第42図16）がある。黒色土器はヘラ切り・糸切りの別なく底部縁辺にヘラケズリを施すものが主体を成し、体部下端を同様に調

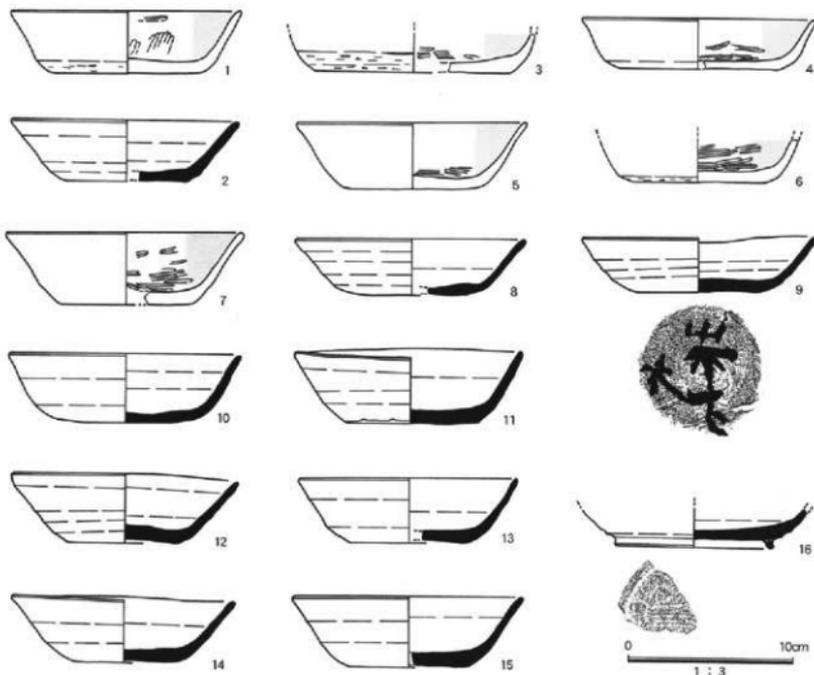


水平高 (a - b) = 239.20m (c - f) = 239.00m

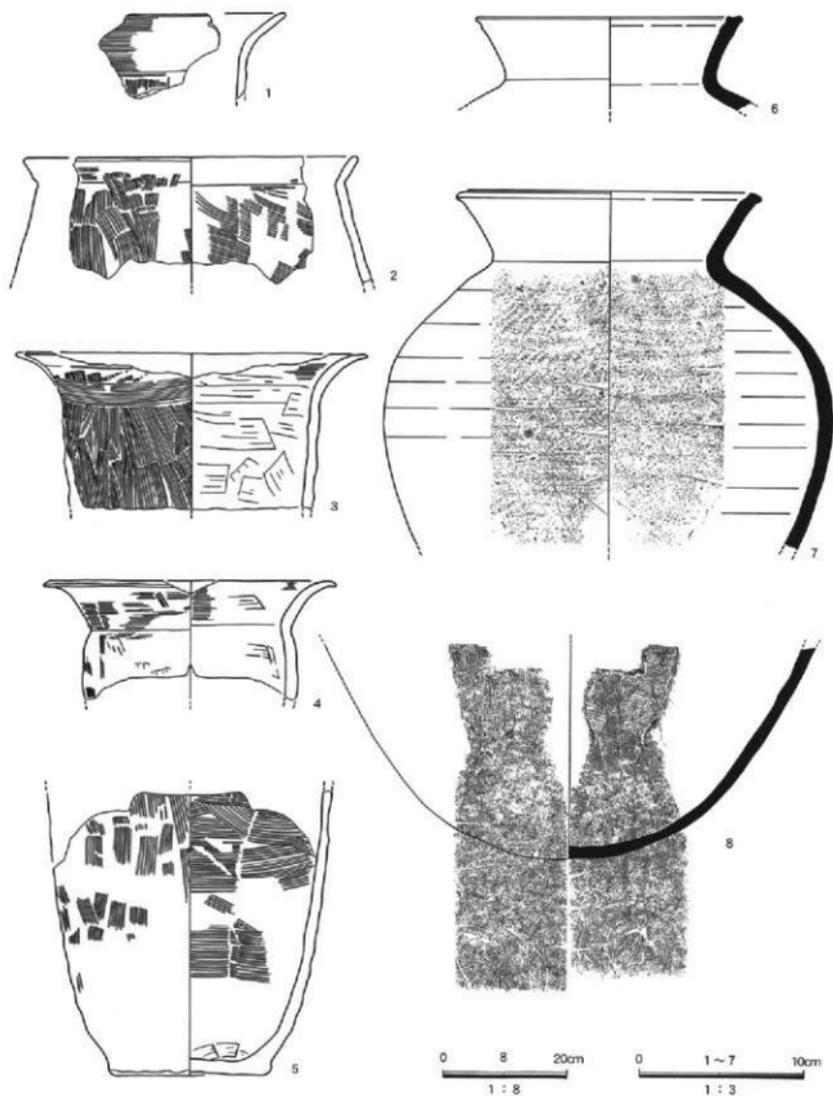
第41図 ST1878・2272 住居跡

整するものも含まれる。3は体部下端のほか底部全面が再調整されるもので、他に比べて器形・法量的にも古相を示す。煮沸器には土師器の甕、貯蔵器には須恵器の壺・甕が認められ、煮沸器では長胴甕が主体的に出土している。これら土器群は、概ね8世紀末から9世紀前半の範疇に属するものと捉えられる。

ST1878・2272				
1	10YR 4/1	黒灰色	シルト	炭化物含む。
2	10YR 4/1	黒灰色	シルト	10YR 6/4にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物含む。
3	10YR 4/2	黒灰色	シルト	炭化物含む（一部炭化）。
4	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2灰黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物含む。
5	10YR 4/2	黒灰色	シルト	10YR 5/2灰黄褐色シルトをブロック状に含む。
BL3879				
1	10YR 3/3	黒褐色	シルト	
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	
3	10YR 6/3	灰黄褐色	シルト	
4	10YR 4/1	黒灰色	粘質シルト	
5	10YR 4/2	黒灰色	粘質シルト	
6	10YR 5/2	灰黄褐色	粘質シルト	
7	10YR 5/1	黒灰色	シルト	
8	10YR 4/1	黒灰色	シルト	
9	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト	
10	10YR 4/2	黒灰色	シルト	
EP2284				
1	10YR17/1	黒色	シルト	炭化物。10YR 5/3灰黄褐色砂質シルトをブロック状に15%含む。
2	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2灰黄褐色シルト。10YR 5/3にぶい黄褐色シルトを塊状に20%含む。焼土影平含む。
SK2015				
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	10YR 3/2黒褐色シルトをブロック状に10%含む。
2	10YR 5/2	黒褐色	粘質シルト	10YR 3/2黒褐色シルトをブロック状に5%。10YR 5/3にぶい黄褐色シルトと10YR 4/2灰黄褐色砂質シルトをブロック状に10%含む。
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	10YR 4/2灰黄褐色砂質シルトをブロック状に20%含む。
4	10YR 3/2	黒褐色	粘土	10YR 4/3にぶい黄褐色シルトをブロック状に3%含む。炭化物含む。
4	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/3にぶい黄褐色シルトをブロック状に10%含む。



第42図 ST1878・2272 出土遺物



第43図 ST1878 出土遺物

## ST1914 (第44・45図)

**位置・重複** B区南西部の18-36・37グリッドに位置する。西隣するST1923と重複しており、南西隅部をこれによって切られる新旧関係を認める。

**平面形・規模** 平面形は各辺の長さがほぼ等しい正方形状を呈し、東西・南北軸とも5.8mを測る規模を有す。

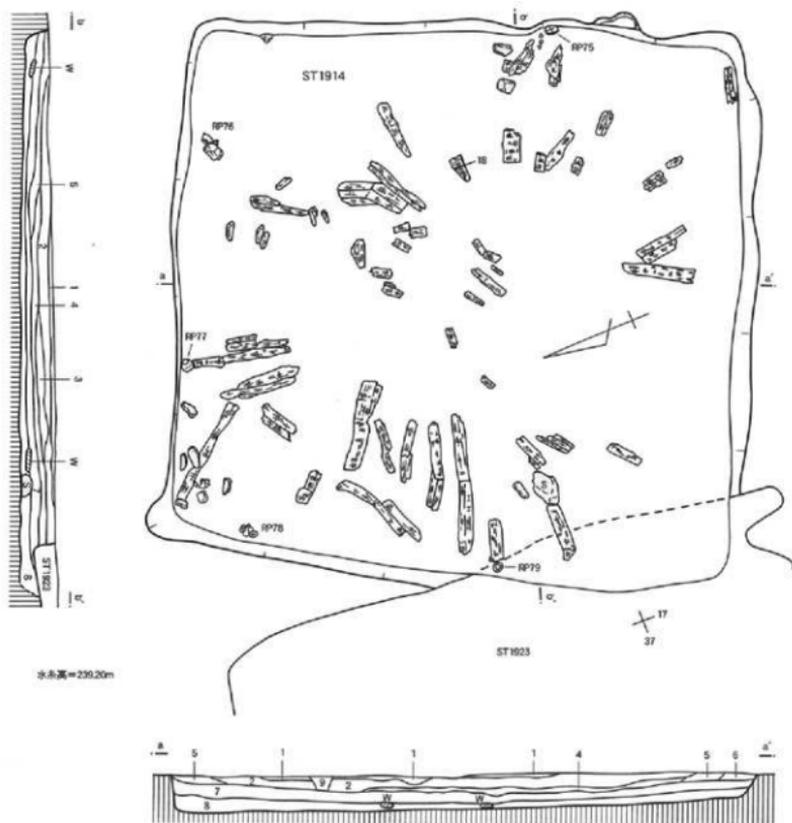
**壁・堆積土** 壁は全周で検出されたが、南西隅部では重複するST1923の床面以下に遺存した部分を検出した。床面からの高さ25～35cmを測り、床面レベルがやや下がる北壁ではほぼ垂直的な立ち上がりとなる。堆積土は基本的に5層からなり、床面上全域に認められる最下層は炭化材や炭化物を含む焼土層であることから、焼失家屋と認識される。この上に堆積するのは地山に近い灰黄色粘質土で、遺物等の混入が見られない均質な層である。この様相はカマドの検出状況に類似する例を認めることができる。すなわち、住居焼失時に壁や天井部が陥落したものと推測され、家屋の構造は土壁で覆われていた可能性が考えられる。

**床面** シルト質の地山を床としており、貼り床は行われぬ。床面はほぼ平坦で、壁周域を除いて固くしまっている。床面上に散在する炭化材等の影響もあり、全体的に黒ずんで汚れた状況を呈する。床面から柱穴等の掘り込みは確認されなかった。

**カマド** 燃焼部・煙道部とも検出されなかったが、東壁中央のやや南寄りに側壁基部の痕跡と推察される若干の張り出しが認められる。張り出し部は粘質土からなり、壁面の地山層とは幾分異なることから判別が可能であった。したがって、側壁は粘土積み上げによる構築と考えられるが、その他の内容については不明である。

**遺物出土状況** 覆土最下層(F8)および床面上から、土師器各器種とミニチュア土器、大小の礫石や炭化材等が出土している。炭化材の検出状況は概括的に見て、住居跡各辺に対して直角方向になる在り方が注意される。礫石は床面上もしくはやや浮いた状態で15点程が点在しており、熱を受けた様子がないことから住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。土器は主に北半城から出土しており、その多くは壁際に認められる傾向が指摘できる。床面に密着するRP76等一部のものを除けば大半はやや浮いた状態ながら、概ね共存関係にある床面上一括として捉えられる土器群である。

**出土遺物** 土器はすべて土師器であり、坏・甕・鉢等の器種が認められる。完形品ほか、器形の復元ないし推定可能なものは第45図に示した。坏は法量的に見て差のない形態のもので、内面に黒色処理を受けぬ非内黒である。器形的には丸底から弯曲して口縁に至る形態が知られるが、狭い平底を作り出して中央部を窪める特徴を有するものを含む。後者は口縁を僅かに外傾させる作りで、口縁外面に丁寧な横ナデが施される。甕では体部中程に最大径を有し、頸部がしまって体部球形となるものと紡錘形を呈するものが出土している。調整技法は口縁部のナデ、体部外面のハケメ、同内面のヘラナデとミガキが主として観察される。鉢は完形および復元にて全形を知り得るものであり、法量の異なる2点が出土している。第45図7(RP76)は床面密着遺物で、火災による二次焼成を受けて内外面とも器面の剥落が著しい。小型で坏に近い形態を示す同図8(RP79)は最終調整にミガキが施されるが、内面に横方向のヘラナデを



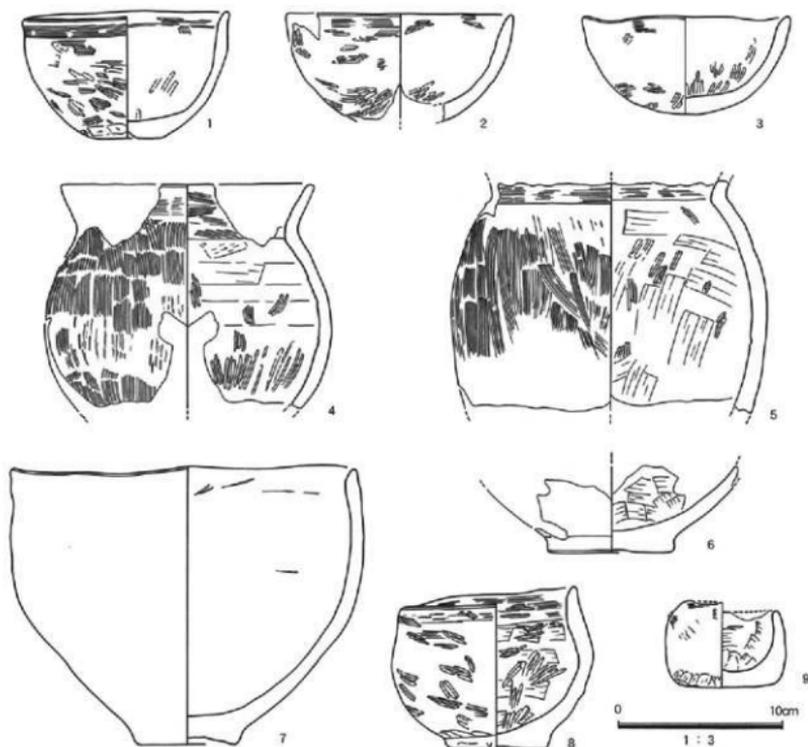
水深高=290.20m

## ST1914

- |   |         |        |       |                                   |
|---|---------|--------|-------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色    | シルト   |                                   |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色    | 砂質シルト |                                   |
| 3 | 2.5Y3/2 | 黒褐色    | 粘質シルト | 3層より粘状強い、炭化物含む。                   |
| 4 | 2.5Y3/2 | 黒褐色    | 粘質シルト |                                   |
| 5 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | シルト   |                                   |
| 6 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | シルト   |                                   |
| 7 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色   | 粘質シルト | 10YR3/2黒褐色シルトをブロック状に10%含む。        |
| 8 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色   | シルト   | 10YR3/2黒褐色シルトをブロック状に10%含む。炭化物に富む。 |
| 9 | 10YR3/2 | 黒褐色    | シルト   | 10YR5/3にぶい黄褐色シルトをブロック状、炭状に3%含む。   |

0 2m  
1 : 50

第44図 ST1914 住居跡



第45図 ST1914 出土遺物

認める点で坏と区別される。これらの土器はST1224・1440等と共通の内容を持ち、住居跡出土土器群の中では最も古い5世紀後葉に比定される。

ST1923 (第46・47図)

**位置・重複** B区南西部の16・17-36・37グリッドに位置し、前述したST1914と東辺部で重複している。主軸がほぼ磁北に沿って構築された住居跡である。

**平面形・規模** 平面形は南北方向に幾分長い長方形を呈し、規模は東西軸約4.8m・南北軸約5.5mを測る。

**壁・堆積土** 床面からの高さ20cm前後で巡る壁が全周において検出された。壁の立ち上がりは傾斜を有して比較的穏やかになる南壁の他は、垂直的である。堆積土には黒褐色土を基調とする6層の区分が認められ、北壁際では水平堆積を示さないことから、先行して埋積していっ

た様相が窺われる。

**床面** カマドが位置する南壁際で貼り床の施工が認められ、それ以外では地山を直接床面に行っていると判断される。床面は中央部とカマド前面で固くしまり、部分的に小さな窪みや起伏があるため必ずしも平坦ではない。貼り床を行っている南壁際がやや高い状況を示し、カマド前面と南東隅部に炭化物の広がりが見られる。

**柱穴** 北西部のEB2232・北東部のEB2233・南東部のEB2235の3基が、その配置から見て主柱穴と考えられる。なお、南西部にもう1基の存在が予測できたが検出されない。柱間距離はEB2232・EB2233間で1.8m、EB2233・EB2235間で2.7mを測り、住居平面形に相関して南北間で長くなる。柱穴は長径50～60cm程の楕円形プランを呈するが、掘り方が一様でないために形状や深さに違いが見られる。

**カマド** 南壁の西寄りに築かれている。遺存状態が良く、粘土積み上げによる側壁を伴う燃焼部、住居外へ長く延び出す煙道部とも明瞭に検出された。焚口が不明確ながら、燃焼部は幅約40cm・奥行約70cmを測る規模を有する。東西の側壁は灰白色の粘土によって構築されるが、その基部に扁平または楕円様の石を1個づつ据え置いて粘土で覆う構造であり、補強のため礫石を配したことが考えられる。カマド内堆積土の4層は側壁と同様の粘質土で、天井部の崩壊土と推測される。煙道部は全長約1.2m・上端幅25～46cmを測り、燃焼部から緩やかに立ち上がって先端へ至る。これより先にピット状の掘り込みが認められ、プラン検出時には煙道部を含めて捉えたが、連続する掘り方ではなかった。

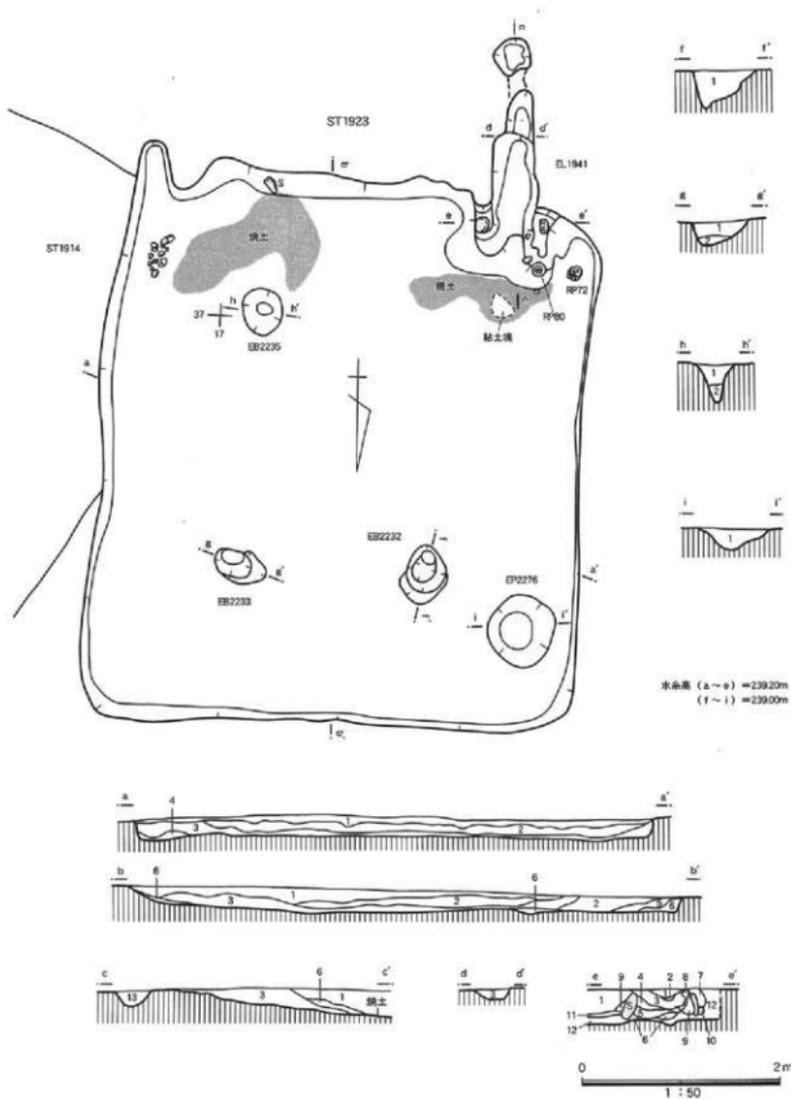
**住居内土坑** EB2232西側の住居跡北西隅部に、柱穴より一周り大きい円形様の掘り込みEK2276を検出している。径約70cmの略円形を呈し、床面からの深さ20cm程を測る。内部からは土師器甕類の小片が数点出土したに止まり、その性格を推測できるまでの特徴は見い出せないが、貯蔵穴としての用途を想定しておく。

**遺物出土状況** 床面上に遺存する遺物は少なく、大半は堆積土内から出土している。分布状況ではカマド周辺および南東域に集中する傾向が指摘され、床面に炭化物層が認められる範囲と基を一にする様相が窺われる。床面上出土遺物のうち、カマド西側壁先端に遺存するRP80や南西隅部出土のRP72等は、一次的な位置を留めていると判断できるものである。

**出土遺物** 土器の種別で土師器・須恵器・黒色土器・ミニチュア土器が出土しており、量的には土師器の甕片が多数を占める。土師器甕では口縁部が大きく外反して開く長胴甕の他、頸部でくの字状にしまって外傾するタイプのものが認められる。第47図1はカマド側壁部から出土した須恵器杯(RP80)で、時期決定資料になり得る。回転糸切りのもので、口縁端を僅かに外傾させる作りが知られる。須恵器杯の形態的特徴は9世紀中頃、第2四半期の後葉に位置付けられ、他の出土土器群も同時期の所産と捉えて大過なかならう。

#### ST1960 a・1960 b (第48・49図)

**位置・重複** B区南西角の15-37グリッドに主体を置き、調査の進行に伴って2棟の重複があると判明した住居跡である。



第46図 ST1923 住居跡

## ST1923

1	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物若干含む。
2	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 5/3 における黄褐色シルトをブロック状、塊状に5%含む。炭化物若干含む。
3	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 5/3 における黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物若干含む。
4	2.5Y 5/2	暗灰黄色	砂	
5	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 5/3 における黄褐色シルトをブロック状に3%含む。炭化物若干含む。
6	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 5/3 における黄褐色シルトを30~40%含む。

## EL1941

1	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質シルト	炭化物若干含む。
2	10YR 4/3	における黄褐色	砂	
3	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質シルト	炭化物、焼土含む。
4	10YR 3/2	黒褐色	粘質シルト	5Y 5/6 明赤褐色粘土を塊状に5%含む。
5	10YR 3/2	黒褐色	シルト	5Y 5/6 明赤褐色粘土をブロック状に10%含む。炭化物を塊状に含む。
6	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/3 における黄褐色砂質シルトをブロック状に20%、10YR 7/2 における黄褐色粘土を塊状に1%含む。
7	10YR 5/3	における黄褐色	砂質シルト	10YR 7/2 における黄褐色粘土をブロック状に20%含む。
8	10YR 5/3	における黄褐色	砂質シルト	7.5YR 6/4 における黄褐色シルト、10YR 7/2 における黄褐色粘土をブロック状に15%含む。
9	10YR 4/3	における黄褐色	シルト	10YR 7/2 における黄褐色粘土をブロック状に15%含む。
10	10YR 4/3	における黄褐色	シルト	10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。
11	10YR 4/3	における黄褐色	シルト	10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に20%含む。炭化物含む。腐植
12	10YR 4/3	における黄褐色	シルト	焼土
13	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 4/3 における黄褐色砂を塊状に1%含む。

## EB2232

1	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土	10YR 3/2 黒褐色粘土をブロック状に10%含む。炭化物若干含む。
---	----------	------	----	-------------------------------------

## EB2233

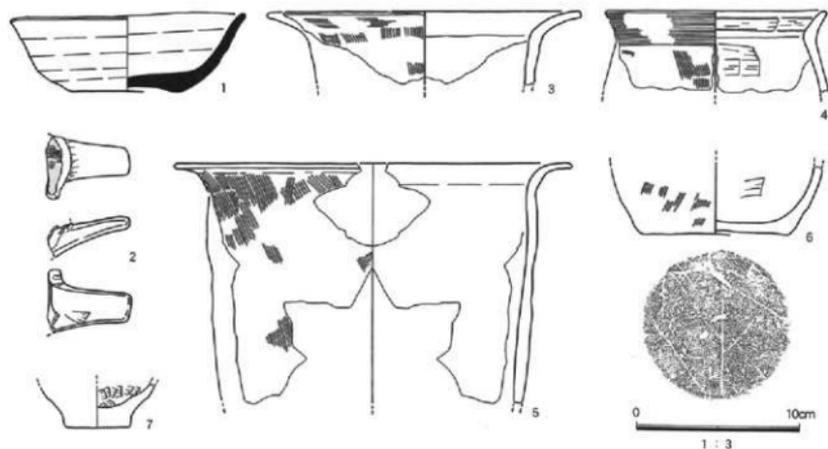
1	10YR 3/2	黒褐色	粘土	10YR 4/2 灰黄褐色粘土を塊状に10%含む。炭化物若干含む。
2	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土	炭化物含む（層下部に集中）。

## EB2235

1	10YR 3/2	黒褐色	粘土	10YR 4/3 における黄褐色粘土をブロック状に10%含む。炭化物含む。
2	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土	10YR 3/2 黒褐色粘土を塊状に5%含む。

## EK2276

1	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 5/3 における黄褐色シルトを塊状に10%、10YR 3/2 黒褐色粘質シルトをブロック状に5%含む。炭化物含む。
---	----------	------	-----	--



第47図 ST1923 出土遺物

**平面形・規模** ST1960 aは重複関係にある西壁および北壁の一部でプランが不確かである。このため平面形は北西隅部が明確でないが、東西方向に幾分長い方形を呈しており、東西軸約5m・南北軸約4.7mを測る。これによって大方を切られるST1960 bは、不整ながら東西・南北軸とも4.6m程の規模を測る正方形の住居跡と推測できる。

**壁・堆積土** 壁が検出できたのは、ST1960 aの東壁とその南北隅部である。確認し得た壁高は床面上20～25cmを測り、垂直的な立ち上がりとなる。重複があると推定された部分では、ST1960 b他の堆積土を壁としており、その識別が難しく不明確である。また、ST1960 bでは崩壊のため各辺が凹凸を持つ不整なラインとなり、遺存する壁面は少ないと考えられる。断面観察用ベルトにおける覆土の状況は、水平堆積と見られるが部分的に切り合いが生じ、ST1960 aでは柱穴等以外に何らかの掘り込みが行われたことを示している。

**床面** ST1960 aの床面は、ST1960 bとの重複にかかる大方で貼り床を行っている。周壁部を除く住居中央域において、5～8cmの厚さで地山が混在した黒褐色土（3層）を貼って叩きしめている。一方、ST1960 bでも地山を床面とする部分が認められるが、大半で土の入れ換えによる貼り床を施したと推測される。

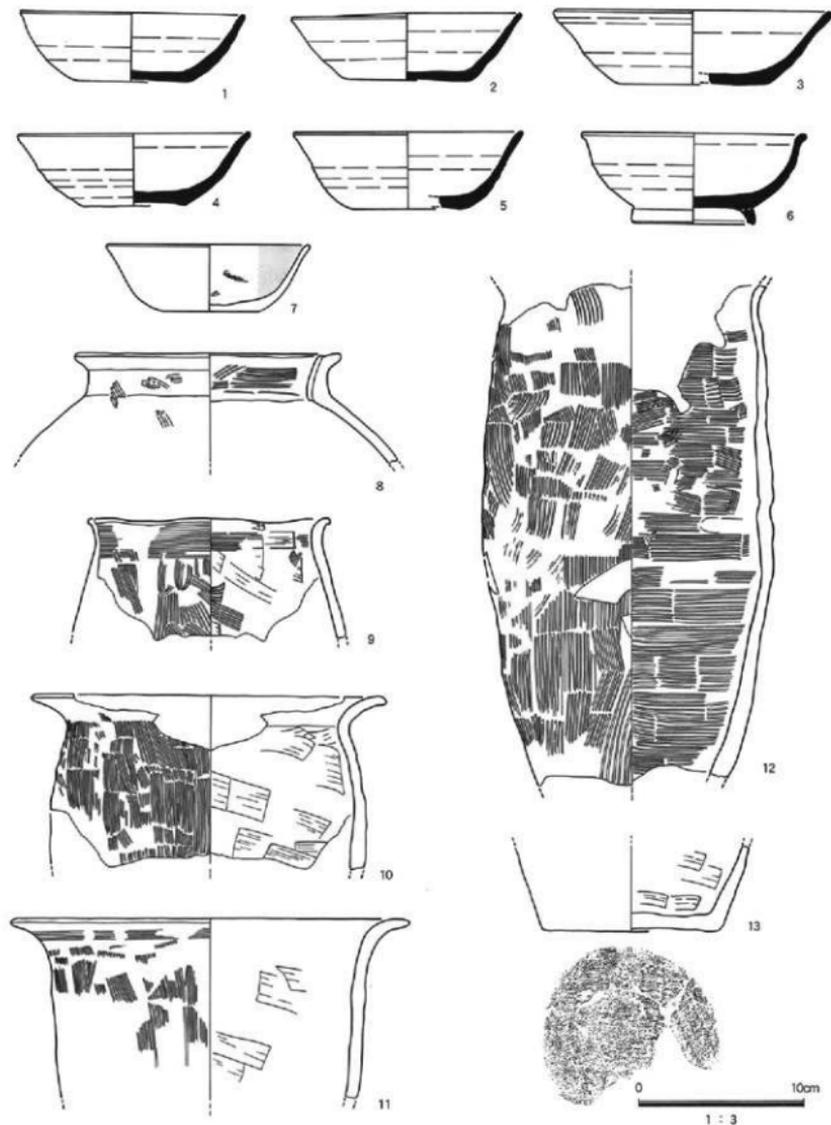
**柱穴** 柱穴と考えられる掘り込みはEB2251～2254の4基であり、配置上からST1960 aに伴う主柱穴である。その位置は全体に住居の中央部寄りであり、ほぼ対角線上での配置と見なすことができる。これらは規模や形状が多少異なり、径40～60cm前後・深さ20～45cm程を測る略円形または楕円形の掘り方を示す。その他にも柱穴様の掘り込みを示すEP2255等を含め、ST1960 bに伴うものとも想定されるが不明確である。

**カマド** ST1960 bに付随すると考えられるEL2262を検出した。南壁の中央部やや西寄りに付設されたと推測できるが、重複関係から大部分を欠くため構造等は明らかでない。検出できたのは、断面による焼土層とその上部を覆う白色粘土の堆積状況、および傾斜をもつ燃焼部の奥に遺存したと考えられる土師器壺などである。

**遺物出土状況** 出土遺物は切り合いの新旧関係からほとんどがST1960 aに付随するものであり、堆積土内および床面から土師器・須恵器等の土器を主とする約1,200点の遺物が出土している。土器の他には十数点の礫石が遺存する。これらは集中的な分布を示さず、ST1960 bの外辺に沿うような点在する状況が窺い知れ、貼り床の範囲を囲うような在り方が注目された。

**出土遺物** 復元実測できたものについて第49図に掲載した。坏類は法量的に大振りな3と小振りな7を除いて、口径135mm内外・器高45mm前後の値を示すものである。底部切離はナデにより不明なものを含め、すべて回転糸切りと判断される。6の高台付坏は、口縁を若干外反させる作りとなる。土師器壺（8）は口縁内部に張り付けを持つ複合口縁が特徴的で、体部球形を呈す形状が予測される。同壺は長胴形となるもので、EL2262出土の9を除き口径に最大径を有する。これらは頸部でしまって口縁がくの字状に外反するタイプ（10・12）と、頸部がしまらずに外反するタイプ（11）が認められ、前者では体部中程に膨らみを持つのに対し、後者は直線的に外傾する器形が想定できる。9は短い口縁を僅かに外傾させ、端部を玉縁状にする特徴が知られる。これら土器群の所属時期は、須恵器坏類の形態から9世紀中葉に考定される。





第49図 ST1960 出土遺物

## ST1968 a・1968 b (第50・51図)

**位置・重複** B区南西隅部で調査区西辺に接して検出された。ST1960同様掘り下げによって2棟の重複があると判明した住居跡である。プラン検出時において、後世の溝跡SD1961が住居跡中央部を南北方向に切って走行している。また、ST1968 bは南東角でSK1967に切られ、カマドの位置する南辺でSK2221を切って構築される重複関係が認められる。

**平面形・規模** ST1968 aは1968 bと北東隅部を共有すると考えられ、東西軸約5.5m・南北軸約3.8mを測る不整な長方形を呈す。ST1968 bは南辺部を除く大半を切られており、全体規模不明ながら一辺4.5m程の正方形、もしくは東西軸でやや長い長方形と推測される。

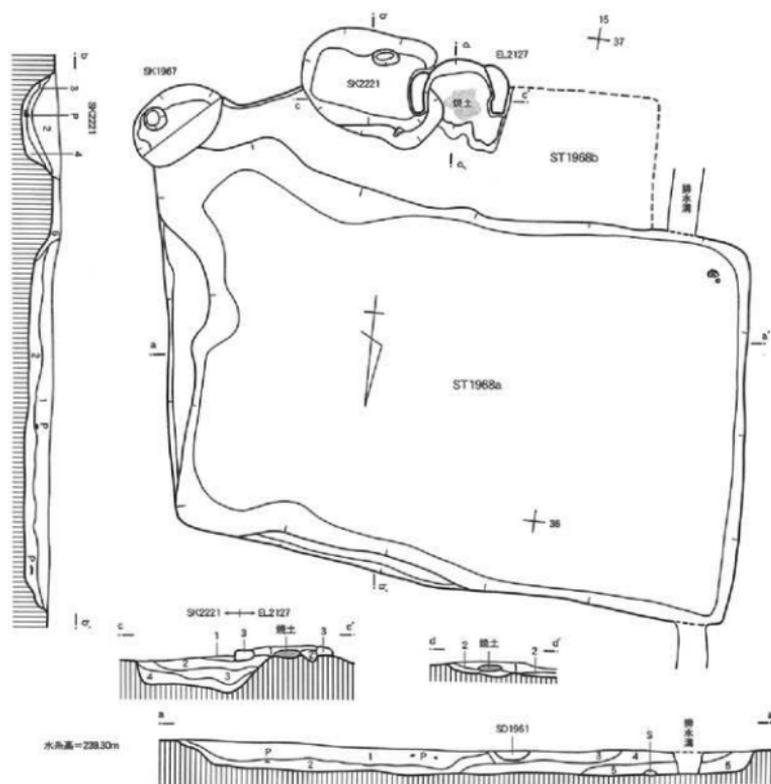
**壁・堆積土** 壁は床面レベルでより深く掘り込まれるST1968 aで検出され、重複のない北辺と西辺で約25cmの壁高を測る。南辺・東辺ではラインが不整となり、壁の立ち上がりにも緩急が生じることから、凹凸をもった不安定な壁面となる。ST1968 bのカマド以西部は壁の識別が困難であったため、掘り過ぎた可能性も考えられる。覆土はST1968 aで大別4層に分かれ、3・4層(断面図番号4・5)は住居跡の西半域にのみ堆積する状況から、西側から埋積していった様相が窺われる。なお、遺物を包含するのは主に1・2層中であつた。

**床面** 貼り床が施されるのはST1968 aの西壁際より約1.6mの範囲であり、それ以外は地山が床となっている。貼り床は灰白色粘土を用いて2cm程の厚さで行われるが、全体的に固くしまった状態とは言えない。床面には緩い起伏や凹凸があるため平坦ではなく、北側へ向かってやや低くなる状況を呈している。床面上から柱穴等の掘り込みは確認されなかった。

**カマド** ST1968 bに伴うEL2127を検出した。南壁に位置し、中央より幾分西側へ偏すると推定される。壁から内部に延びる両側壁間の燃焼部が明瞭に遺存している。壁外へ長く張り出す煙道部を伴わず、半円状を呈す幅広の燃焼部であり、構造的にはST1294やST1878例に近いものと判断できる。側壁は粘土によって構築され、床面からの高さ約10cm・幅12～18cmで遺存しており、燃焼部の幅は60cm程を測る。燃焼部中央の底面には焼け面があつて焼土層が堆積し、側壁内壁は加熱を受けて赤変している。

**遺物出土状況** 両住居跡を合わせ、総数にして約620点の土器破片が認められたが、これらの半数以上はEL2127カマドとその周辺から出土している。ただし、二次焼成を受けた細片が多く、一次的な遺存を示すものは少ないと判断される。ST1968 aでは、主として東半域のF1～2層中に土器片を含むものの、まとまりに欠け復元図示できるものはほとんどない。

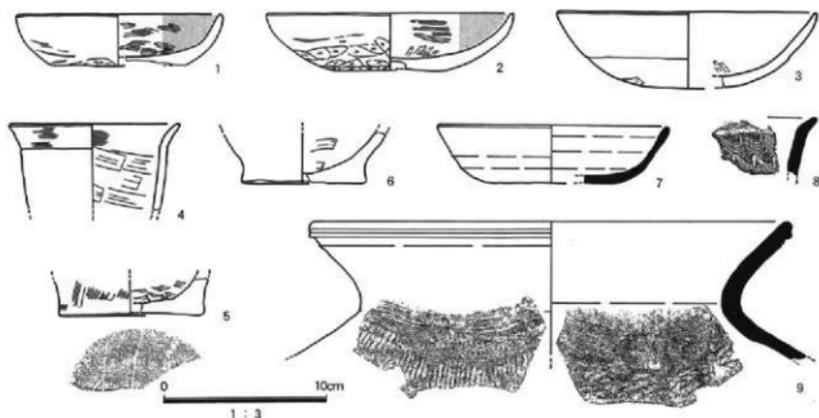
**出土遺物** 第51図に掲載した9点のうち、6・7はST1968 a出土、また9の須恵器大甕はSK2221出土のもの、他はカマド内出土等でST1968 bに付随する資料である。1～3の土師器坏には、浅身でケズリによって平底様の底部を作り出す内黒のものと、やや深身で丸底となる非内黒のものがある。後者は体部中程に弱い段を持つ有段形態を呈し、A区検出ST210出土例に共通する。これらの坏は8世紀第1四半期に属すと捉えられる。7の須恵器坏は形態的特徴から、8世紀第4四半期に比定されよう。したがって、遺構の年代観はST1968 aが8世紀末葉、ST1968 bが8世紀前葉、これに先行するSK2221は大甕(9)他の出土土器様相から7世紀末～8世紀初頭と考えられる。



- ST1968
- 1 10YR 4/4 褐色シルト
  - 2 10YR 3/3 暗褐色粘質細砂
  - 3 10YR 3/3 暗褐色粘質細砂
  - 4 10YR 4/2 灰黄褐色粘質細砂
  - 5 10YR 3/2 黄褐色粘質シルト
  - 6 10YR 4/4 褐色細砂
- EL2127
- 1 10YR 3/3 暗褐色シルト
  - 2 10YR 4/4 褐色シルト
  - 3 10YR 4/6 褐色粘土
- EK2221
- 1 10YR 3/4 暗褐色細砂
  - 2 10YR 3/3 暗褐色粘質細砂
  - 3 10YR 3/3 暗褐色細砂
  - 4 10YR 3/4 暗褐色粘質砂
- 10YR 5/2 灰黄褐色シルトを粒状に1%未満含む。炭化物若干、酸化鉄含む。
  - 10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に10%含む。炭化物、酸化鉄含む。
  - 10YR 5/2 灰黄褐色粘質細砂を粒状に1%未満含む。炭化物若干、酸化鉄含む。
  - 10YR 5/2 灰黄褐色粘質細砂を粒状に1%含む。炭化物、酸化鉄含む。
  - 10YR 5/2 灰黄褐色シルトを粒状に1%未満含む。炭化物、酸化鉄含む。
  - 10YR 3/3 暗褐色細砂をブロック状に40%含む。酸化鉄若干含む。
- 10YR 4/2 灰黄褐色粘質細砂をブロック状に2%、10YR 4/4 褐色細砂 (鹿山) を粒状に1%未満含む。炭化物、粘土含む。
  - 10YR 4/2 灰黄褐色粘質シルトをブロック状に20%含む。炭化物若干含む。表面は赤く焼けている。(カマド跡)
- 10YR 4/4 褐色細砂を粒状に1%含む。炭化物、粘土含む。
  - 10YR 4/2 灰黄褐色粘質細砂をブロック状に7%、10YR 4/4 褐色細砂を粒状に5%、10YR 4/6 褐色粘土を1ブロック含む。炭化物含む。
  - 10YR 4/3 に近い黄褐色粘土をブロック状に10%、10YR 3/2 黄褐色粘質細砂をブロック状に10%含む。炭化物、粘土含む(層下部に層状に集中)。
  - 10YR 4/3 に近い黄褐色粘土と10YR 3/2 黄褐色粘質細砂をブロック状に5%含む。炭化物、酸化鉄含む。



第50図 ST1968 住居跡



第51図 ST1968 出土遺物

ST1976 (第52・53図)

**位置・重複** B区西辺部の14・15-34・35グリッドに位置し、ST1968のすぐ北側に並んで検出された。重複はSD1961によりプラン中央部を南北に切られる他、カマド煙道先端がST1968 aの北壁に切られている。

**平面形・規模** 東西軸5.5m・南北軸5.6m規模の正方形を呈する。

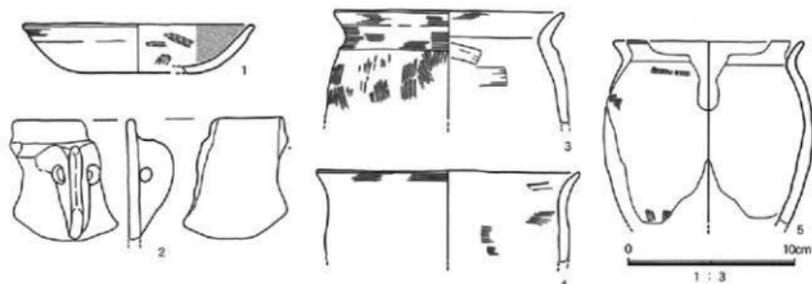
**壁・堆積土** 各辺において他遺構との重複がほとんどないことから、壁はほぼ均質に検出された。床面からの高さ20cm前後で廻り、立ち上がりは全体に急傾となる。堆積土は3層からなり、2層の黒褐色土が全体を覆う。また3層の有無により、住居跡南西側から埋没していった堆積過程を窺うことができる。

**床面** 床面全体を対象に貼り床を行っているが、東壁沿いでやや掘り過ぎた観がある。したがって、この部分は壁際に向かって落ち込む結果となるが、貼り床面は全体的に壁沿いで低くなり、中央部が幾分高まりを有す状況を呈している。床面の状態は、中央域とカマド前面から西側にかけての範囲で特にしまっている。

**柱穴** 円形もしくは楕円状で、径40～50cmを測る柱穴5基が検出された。南西部においてはEB2230・2282の2基が約50cm離れて存在しており、同一プラン内での建て替えが想定されたが、どちらをとっても他3本の柱穴との位置関係が不揃いである。EB2228とEB2230は住居の南北軸線、EB2231とEB2282がその東西軸線にほぼ平行しているものの、南西部の2基は本来4本柱の構成位置から外れて配置される。また、この2柱穴の底面には柱痕跡を示すと思われる小円形の落ち込みがあり、他より細い柱が用いられたことも指摘できる。したがって、この2基の柱穴は同時に機能したと考えられ、5本柱からなる住居であった可能性が高い。なお、EB2230・2231の底面には根固め石と推測される自然礫が遺存している。



ER2228				
1	10YR 3/2	黒褐色	粘土	炭化物若干含む。
2	10YR 3/2	黒褐色	粘土	10YR 5/3 におい黄褐色粘土を混状に10%含む。
ER2229				
1	10YR 3/2	黒褐色	粘土	炭化物若干含む。
2	10YR 5/3	におい黄褐色	粘土	10YR 4/2 灰黄褐色粘土を混状に10%含む。
ER2230				
1	10YR 3/1	黒褐色	粘土	10YR 4/2 灰黄褐色粘土をブロック状に15%含む。炭化物若干含む。
2	10YR 5/3	におい黄褐色	粘土	10YR 4/2 灰黄褐色粘土を混状に10%含む。炭化物若干含む。
ER2231				
1	10YR 3/2	黒褐色	粘土	10YR 5/3 におい黄褐色粘土を混状に20%含む。炭化物若干含む。
ER2282				
1	10YR 4/2	灰黄褐色	焼製シルト	10YR 4/3 におい黄褐色シルトをブロック状に5%含む。
2	10YR 3/2	黒褐色	焼製シルト	10YR 5/2 灰黄褐色粘土をブロック状に10%含む。炭化物を混状に含む。



第53図 ST1976 出土遺物

**カマド** 南壁中央よりやや東側に築かれており、住居内側の燃焼部と外へ細長く伸び出す煙道部に区分できる。側壁は遺存しておらず不明であるが、東側壁の基部に当たると予想される住居南壁に、長さ15cm程の棒状礫が倒立の状態で埋め込まれている。燃焼部底面には壁際に焼土、その前面に炭化物の広がりが幅約70cmの範囲に認められる。また、燃焼部両側に数点の礫石が点在している状況からは石組みによる構造が窺えるが、熱を帯びた様子が無いことから判断して、ST1923のカマドEL1941に類似するものと推定される。

**出土遺物** 礫石を除いて床面に遺存するものは第53図3の壺1点のみであり、他にはカマド周辺の堆積土2層内から約半箱分の遺物が出土したに止まる。土器は大半が土師器の壺片で二次焼成を受けた小片が多く、口径15cm内外の中型壺が主体を占める。須恵器は坏・壺の小破片を6点認めたが、復元図化できるまでのものはない。2は口縁部に鈎を巡らす鉢と認識され、特徴的な耳状の把手が付く形状のものである。これら土器の所属時期は内黒土師器坏(1)の形態から、ST1968b出土例に後続する8世紀中葉の所産と考えられる。

#### ST1979・1980 (第54～57図)

**位置・重複** B区西側中央域、16-35グリッドに主体を置いて位置する。重複する住居跡で、ST1979は南半の大方をST1980に壊されている。また、ST1980は南接するST1923によりカマド煙道部を切られる重複関係が認められることから、ST1979→ST1980→ST1923の構築順序となる。以下では、遺存状態が良好なST1980を主体に記述する。

**平面形・規模** ST1980は東西軸5.8m・南北軸5.4mを測り、東西に幾分か長い方形を呈する。ST1979は一辺約4.2m規模の正方形と推測される。

**壁・堆積土** ST1980では床面からプラン確認面までの壁の高さ35cm前後を測り、ST1979と重複する北西側を除いてほぼ均一的に検出された。北・西辺の重複部分では、検出ラインより内側に壁が存在したためST1979床面以下での確認となり、15cm程の壁高を測った。床面からの立ち上がりは傾斜を有し、カマド近辺以外では比較的緩やかである。覆土はカマド煙道部で3層の堆積を認めた他は概ね褐灰色土の単一層であり、短期間で一気に埋没したものと推察される。ST1979の堆積土は、北半域において3層の別が認められる。

**床面** ST1980の床は中央部で地山の露出箇所がある以外、ほぼ全体に貼り床を行っている。床面の検出状況は部分的にやや削り過ぎた結果からか、凹凸があるため平坦とは言えない。住居掘り方(第55図)の状況では、東西の壁際を主として壁周部を掘り込んでいることから、貼り床は壁沿いで厚く施される。

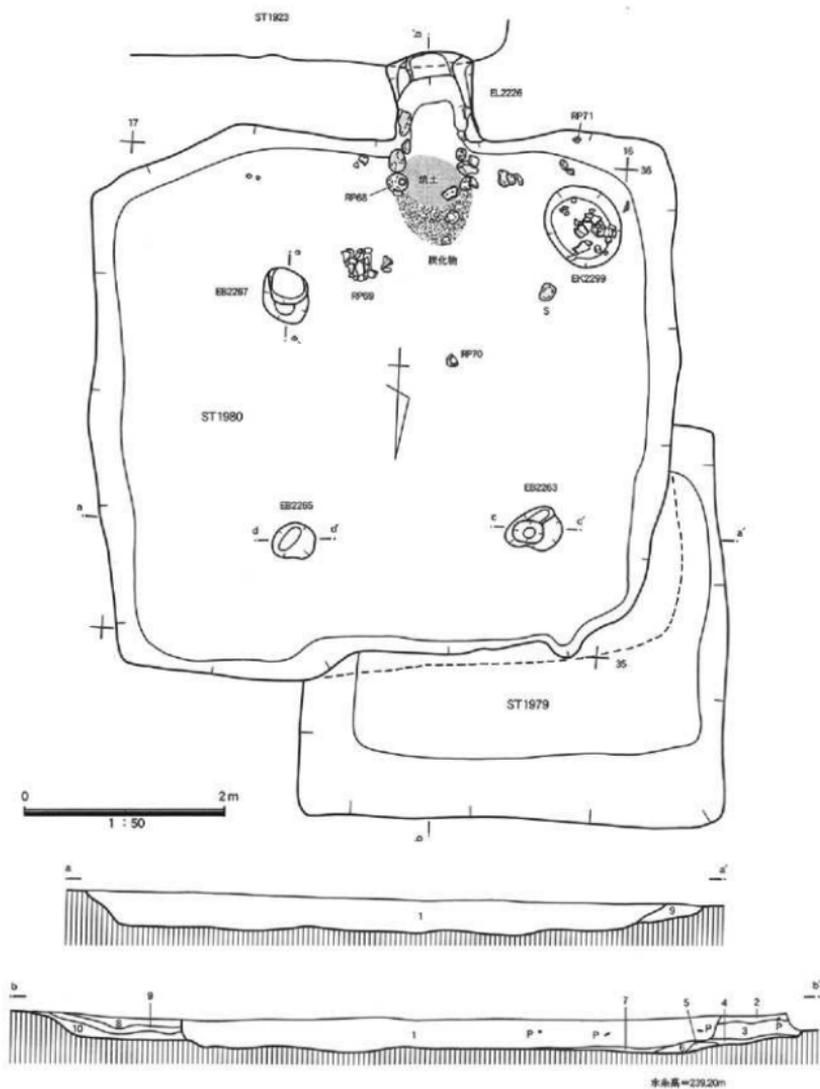
**柱穴** EB2263・2265・2267の3基が、床面上で検出された柱穴である。南西部では検出できなかったが、床をはずした掘り方の完掘状況においてその存在が確認された。これは貼り床と柱穴覆土が近似しており、遺憾ながら識別し得なかったことが考えられる。これらの4基はほぼ正方形様に配置されるが、住居中央よりも幾分西寄りに構築されている。その配置の仕方にはカマドとの位置関係を考慮したことが窺われ、構造上の留意点として注意されよう。

**カマド** ST1980のカマドEL2226は、南壁の中央よりやや西側に付設される。煙道部は南壁際の基部で幅70cmを測り、本遺跡の中では最大の規模となる。検出長約90cmで、中程から先端はST1923により切られるため不明である。土層断面(b-b')の堆積過程から判断すれば、煙道部崩壊後に住居跡が埋没したものと推定される。燃焼部はその両袖が煙道基部から続く石組みによって構築され、焚口に当たる東袖端には底部を欠いた器高27cm程の土師器甕を倒立の状態に据え置いている。東袖の石組みは長さ40cm規模の楕円柱礫がほぼ垂直に埋置されるが、西袖のそれには幾分小型の礫石を用い、やや内側に傾けて設置される等の相異が認められる。

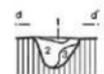
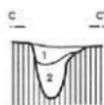
**貯蔵穴** 住居跡南西隅に貯蔵穴と考えられるEK2299が検出された。長径86cmを測る楕円形を呈し、床面からの深さ約25cmで皿形の形状を有する。覆土は炭化物を多く含んでおり、内部から5個体の土師器甕片等まとまった量の土器が出土している。

**遺物出土状況** 土器を主にに6箱相当量の遺物が出土しているが、床面に遺存するのはRP69等一部のものに限られ、大半は堆積土内からの出土である。分布傾向ではカマド周辺と貯蔵穴内外に密集する様相が見られ、南西域に集中する状況が窺われた。

**出土遺物** 土師器杯・甕、須恵器杯・甕、手捏土器杯、土玉等の土製品がある。土師器の杯には内黒と非内黒のものを認め、やや深身で口縁部が内弯気味に立ち上がるもの(第56図4)を含む。内面調整は内黒杯でもミガキよりヘラナデが顕著である。甕は法量的な大小の他、最大径を口縁に有する長胴甕と体部中程に有する球胴形のものに大別され、前者が多数を占める。長胴甕は頸部下に膨らみを持つものと直線的なものに分類され、口縁部形態の相異からさらに細分できる。これらと共伴する須恵器の杯(第56図1)は静止糸切りによるもので、底部外輪および体部下端に回転ヘラケズリが施される。以上の内容から8世紀中葉の土器様相と認識され、前述したST1976出土土器とほぼ同時期の所産と捉えられる。



第54図 ST1979・1980 住居跡



本画素=238.80m

ST1980

1	10YR 4/1	黒灰色	シルト	炭化物含む。
柱2228				
3	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物若干含む。
3	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト	2層土を20~30%含む。炭化物若干含む。
4	10YR 4/3	にがい黄褐色	シルト	
5	10YR 3/3	黒褐色	シルト	4、6層土を混入。炭化物層状に含む。
6	10YR 5/2	灰黄褐色	粘土	炭化物を率状に含む。
7	10YR 2/1	黒色	シルト	炭化物層。10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に含む。

ST1979

8	10YR 3/2	黒褐色	シルト	炭化物若干含む。
9	10YR 3/1	黒褐色	シルト	
10	2.5Y 4/1	黄灰色	シルト	炭化物若干含む。

EB2263

1	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。炭化物含む。
2	10YR 3/2	黒褐色物質	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。炭化物含む。

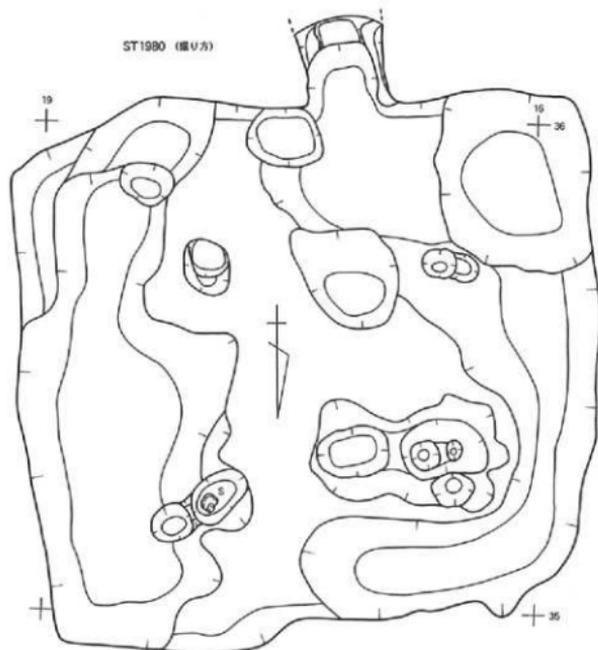
EB2265

1	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルトをブロック状に10%含む。炭化物含む。
2	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルトをブロック状に20%含む。炭化物含む。
3	10YR 5/3	にがい黄褐色	粘土	10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。

EB2267

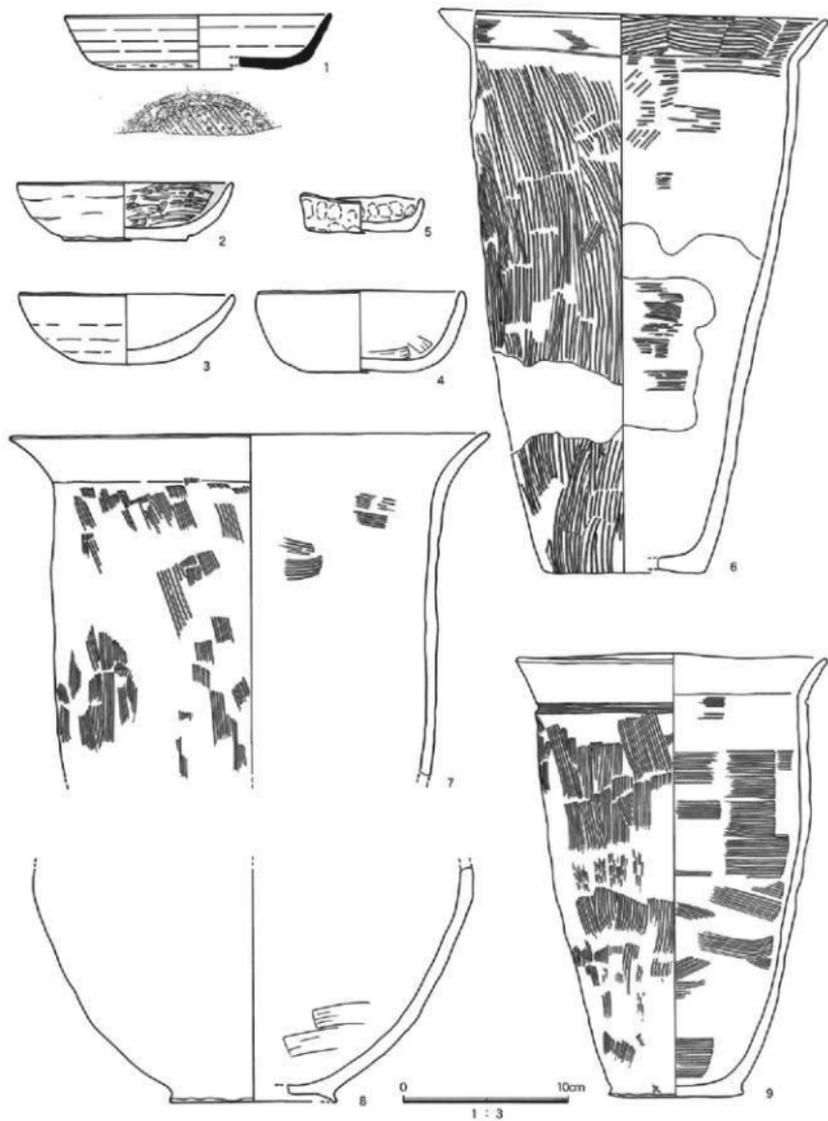
1	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルトをブロック状に15%含む。
2	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色粘土をブロック状に50%含む。
3	10YR 5/2	灰黄褐色物質	シルト	10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。

ST1980 (掘り方)

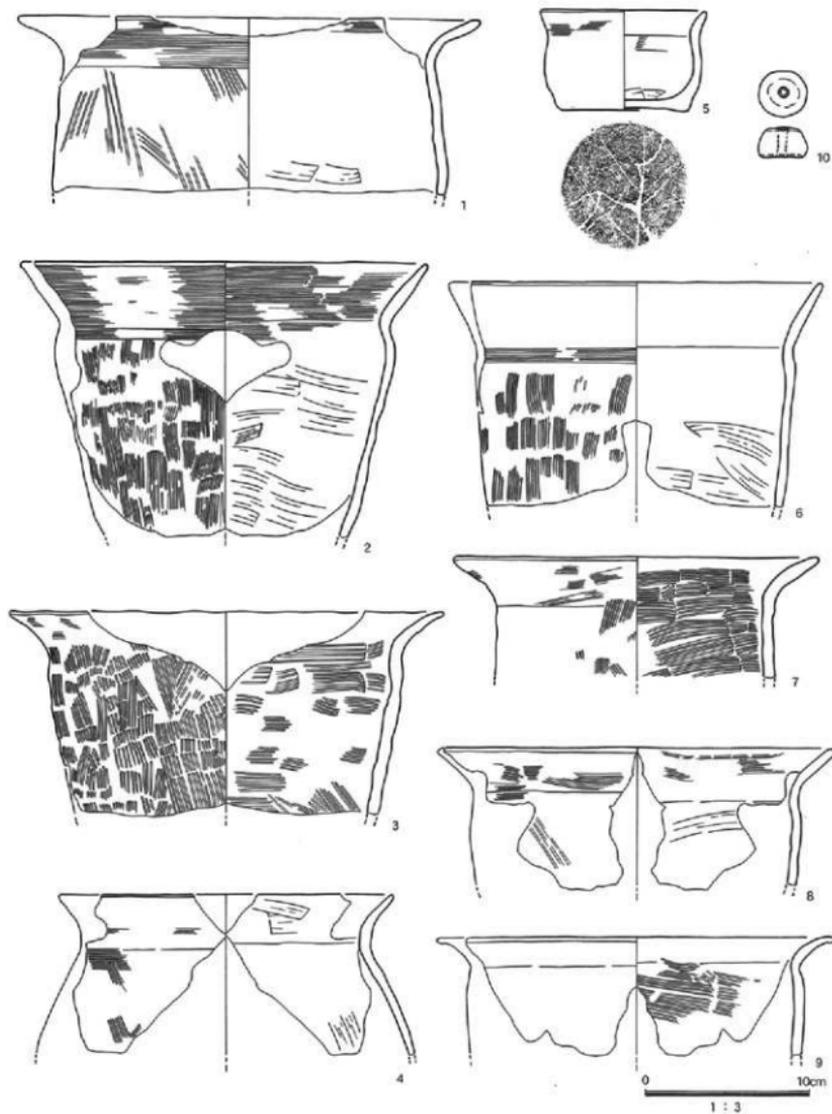


0 2m  
1 : 50

第55図 ST1980 住居跡



第56図 ST1980 出土遺物 (1)



第57図 ST1980 出土遺物 (2)

## ST1993 (第58図)

**位置・重複** B区西側の15・16-34・35グリッドに位置し、住居跡間の重複はない。

**平面形・規模** 平面形は不整な略方形で、東西・南北軸とも約4.1m規模となる。

**壁・床面** 南東角と北西隅部の壁面は、途中に段を形成して掘られる。西壁を除いては床面から急傾に立ち上がり、高さ30cm前後で四辺を巡る。床面は全域で貼り床が施され、カマド全面部でやや盛り上がりが見られる他、東壁沿いのレベルが幾分低く下がっている。

**柱穴** 柱穴様の掘り込みは床面上から4基検出された。配置から見て北西部のEB2290は適当と思われる。他の3基は床面中央に一行で並んでいるが、規則的な配置とは考えられない。この内、EB2292およびEB2294の底面からは拳大の礫石が各数個出土しており、人為的な集石と推測される。柱穴とすれば根固め石と考えられるが、住居跡に伴うものかどうかは疑問である。なお、南東隅においても床面からやや浮いた状態ながら、4個の集石を確認している。

**カマド** 南壁のほぼ中央に構築されており、燃烧部と煙道部からなる構造を認める。側壁は壁際の基部を残しているが、上部の大方は遺存してしない。燃烧部は焼け面の範囲等から、長さ・幅とも70cm内外の規模と推定される。煙道は燃烧部底面から徐々に立ち上がっており、南壁より40cm程が住居外へ張り出す。

**出土遺物** 堆積土1・2層より、総数にして約50点の土器破片が出土したに止まる。いずれも細片のため、実測図化できたものは第58図中に示した坏2点に限られた。これらの個体にはある程度の時期差が認められ、埋積過程が原因するものか混在によるものかは出土点数からして判別し難い。一応、住居跡の時期決定資料とはなるのは、床面直上を覆うF2層から出土した土師器坏(1)により8世紀中頃の年代が想定されるため、それ以前の構築と捉えておく。

## ST2069 (第59~62図)

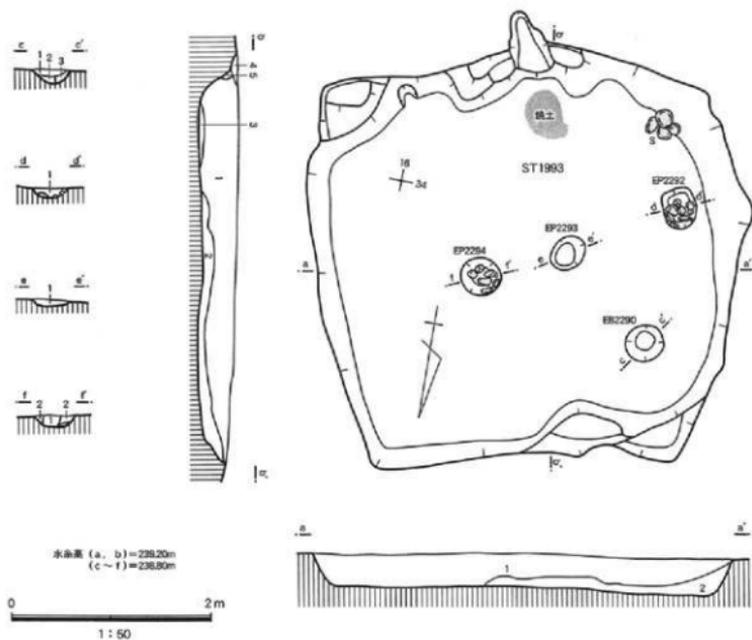
**位置・重複** B区北西部、調査区北辺にかかる15-31グリッドに主体を置く。住居跡南東角部分のプランが明確でなく、他の遺構により切られていると推察されるが、重複する遺構プランを明らかにし得ていない。

**平面形・規模** 住居跡北半部が調査区外へかかるため未検出であるが、カマドを含む南半の在り方から方形基調と考えられる。規模は東西軸約5.5mと推定される以外不詳である。

**壁・堆積土** 南辺のカマド西側をやや掘り過ぎているが東側では良好に残り、床面からの高さ30cm程を測る。調査区北壁の断面では、住居西壁の立ち上がりを確認することができた他、覆土の堆積状況も知り得た。堆積土は大別3層が認められるが、大方の埋積土となる黒褐色土を主としており、水平堆積を示している。

**床面** 検出された南半部では、住居中央域に地山の箇所が存在する以外は壁周りを主に貼り床を行っている。床面は凹凸や起伏も無くほぼ平坦な状態と言え、カマド前庭部には炭化物が集中して分布する範囲が認められる。

**柱穴** 柱穴様のビットを含め4基が検出された。位置関係から察してEB2295・2298の2基が柱穴と考えられるが、中央部にやや偏った配置となる。柱間距離は約2.8mを測り、掘り方は



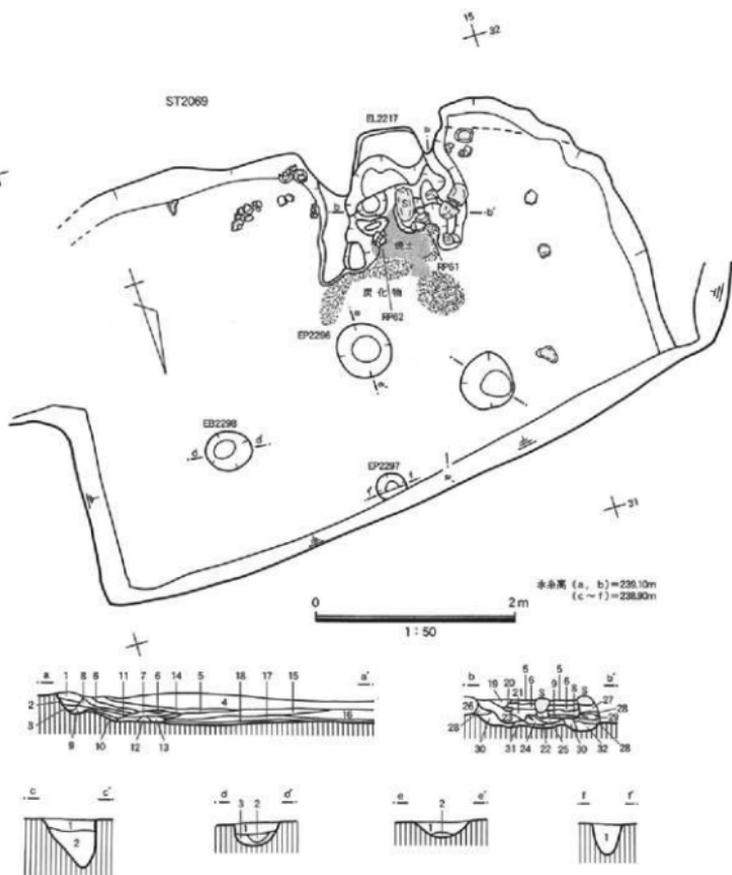
ST1993			
1	10YR 3/2	黒褐色	シルト
2	10YR 5/2	にぶい黄褐色	シルト
3	10YR 8/2	灰黄褐色	粘土
4	10YR 3/2	黒褐色砂質	シルト
5	10YR 4/2	灰黄褐色	細砂
EP2292			
1	10YR 4/1	褐灰色	シルト
2	10YR 4/1	褐灰色	シルト
3	10YR 6/2	灰黄褐色	シルト
EP2294			
1	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト
EP2290			
1	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト
2	10YR 4/1	褐灰色	シルト

10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質細砂と10YR 2/2 黒褐色粘土をブロック状・塊状に520%含む。炭化物若干含む。  
 10YR 2/1 灰色粘土をブロック状・塊状に50%含む。炭化物若干含む。  
 炭化物、粘土多量に含む。  
 炭化物若干含む。  
 10YR 3/2 黒褐色粘質細砂を塊状に15%含む。  
 10YR 6/2 灰黄褐色シルトを塊状に3%含む。  
 10YR 6/2 灰黄褐色シルトをブロック状・塊状に40%含む。  
 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状・塊状に10%含む。  
 10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に7%含む。  
 10YR 4/1 褐灰色シルトをブロック状・塊状に20%含む。  
 10YR 5/1 褐灰色シルトをブロック状・塊状に20%含む。



0 10cm  
1:3

第58図 ST1993 住居跡、出土遺物



第59図 ST2069 住居跡

径・深さの規模において幾分異なりが見られる。住居中央部で南北方向に並ぶEP2296・2297は、本住居跡に伴ったものかどうか不明である。

**カマド** 住居の南壁に位置し、中央より西側に偏すると推定される。遺存状態が良く、本遺跡検出例では最大規模を有している。側壁に挟まれた燃焼部を主体とし、煙道部は浅い掘り込みで壁外へは張り出さず住居南辺ラインに並行する。側壁基部の構築は地山の削り出しによっており、南壁面の高さで検出される。側壁は粘土によって築かれ、西側壁には補強に使われたと考えられる礫石を認めた。両袖に挟まれた燃焼部は下端幅60cm・奥行約80cmを測り、底面・

## ST2069 - E1217

1	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土をブロック状に含む。
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土と10YR 6/4 にぶい黄褐色粘土を塊状に含む。
3	10YR 4/2	灰黄褐色	粘質シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土を塊状に含む。
4	2.5Y 3/2	黒褐色	シルト	
5	10YR 4/1	黒褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土をブロック状に含む。
6	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土を帯状に含む。
7	10YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	粘土層
8	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土を塊状に含む。
9	10YR 4/2	灰黄褐色	粘質シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土をブロック状に含む。
10	10YR 5/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	10YR 4/1 褐色シルトと粘土のブロックを若干含む。
11	10YR 6/4	にぶい黄褐色	凝砂	
12	10YR 3/2	黒褐色	シルト	
13	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	炭化物・粘土を塊状に含む。
14	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物・粘土を塊状に含む。
15	2.5Y 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に30%含む。炭化物を含む。
16	10YR 4/1	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色シルトを塊状に5%含む。
17	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト	炭化物を塊状に含む。
18	10YR 4/3	にぶい黄褐色	砂	
19	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	
20	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト	
21	10YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土を塊状に含む。
22	7.5YR 6/6	褐色粘土		
23	10YR 3/2	黒褐色	粘質シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土を塊状に含む。
24	10YR 6/4	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土を塊状に含む。
25	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土をブロック状に含む。
26	10YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	10YR 4/2 灰黄褐色シルトを塊状に30%含む。
27	10YR 3/2	黒褐色	シルト	7.5YR 6/6 褐色粘土を塊状に多量に含む。
28	2.5Y 5/2	暗黄褐色	シルト	
29	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色シルトを塊状に30%含む。
30	2.5Y 4/2	暗黄褐色	砂質シルト	炭化物・粘土を塊状に含む。
31	10YR 4/4	褐色	砂	
32	10YR 4/4	褐色	砂質シルト	炭化物・粘土を塊状に含む。

## E12265

1	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト	10YR 4/1 褐色粘質シルトをブロック状に10%含む。
2	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト	10YR 4/1 褐色粘質シルトをブロック状に1%未満含む。

## E12266

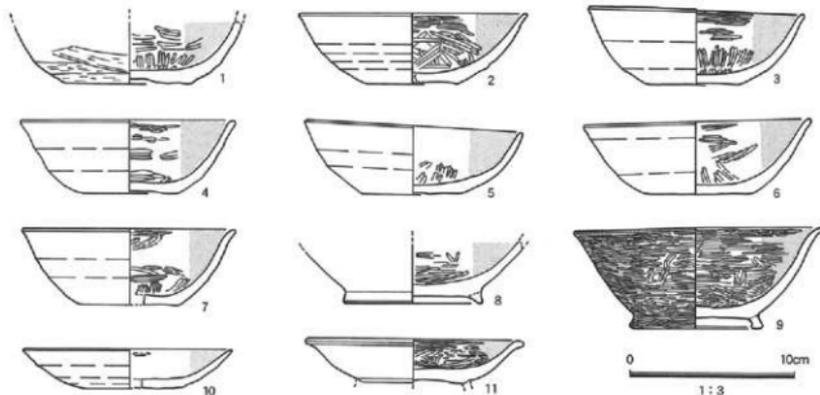
1	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質シルト	10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に20%含む。
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色	砂	10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に5%含む。
3	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質シルト	

## E12296

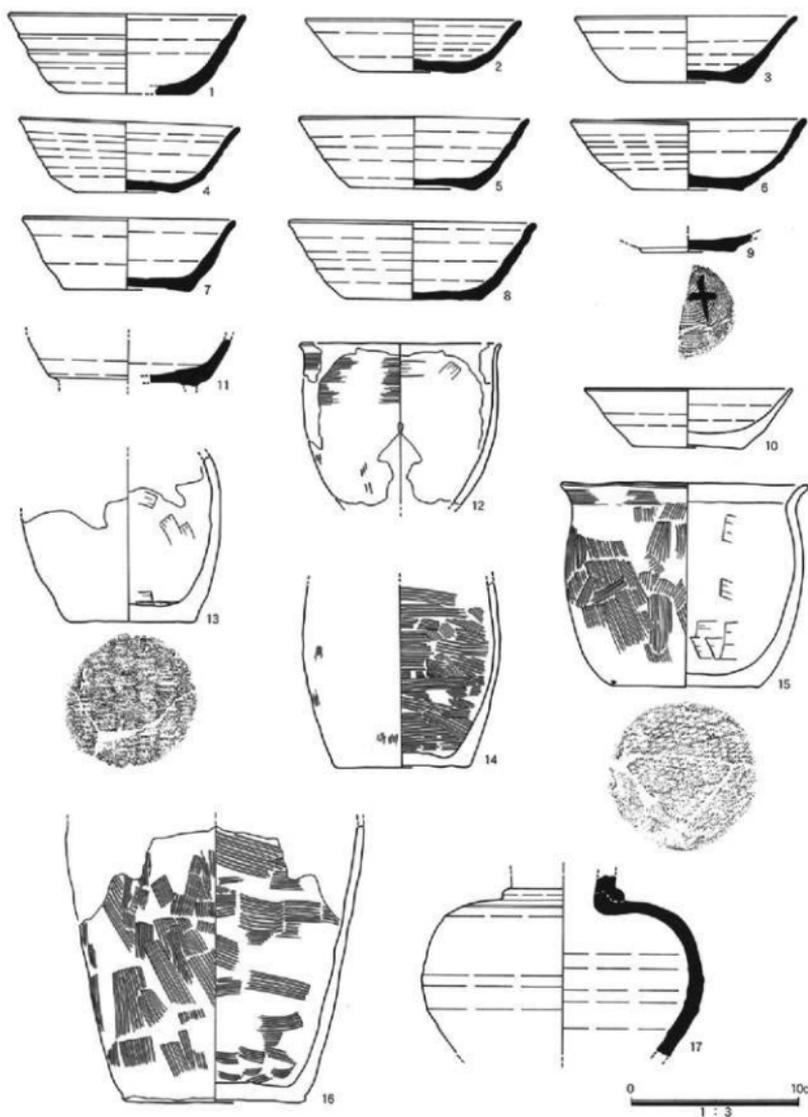
1	10YR 3/2	黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色シルトと塊状に混在。粘土含む。
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	粘土含む。

## E12297

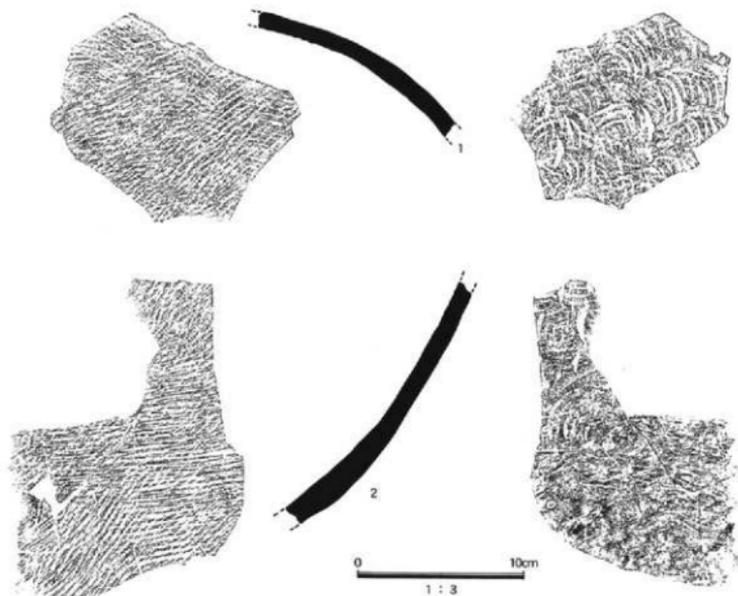
1	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に10%含む。炭化物多量に含む。
---	----------	------	-----	--



第60図 ST2069 出土遺物 (1)



第61図 ST2069 出土遺物 (2)



第62図 ST2069 出土遺物 (3)

側壁とも加熱を受けて朱色の焼け面ないし焼土壁となる。燃焼部奥の両端には底面より深く穿たれる掘り込みが認められ、内部を中央で仕切るような様相を呈する。奥壁は急傾で約20cmの段差を経て煙道部へと続く。

**出土遺物** 黒色土器・須恵器の坏類を主体として3箱分量の土器が出土しているが、カマド内を含めて床面上に遺存する遺物は少ない。全体における遺物の分布状況は不明ながら、他の住居跡同様にカマド周辺から集中して出土する傾向が見られる。実測図化可能なものは第60～62図に示した。このうち床面出土の遺物は、第60図8の黒色土器高台付坏と第61図16の土師器甕であり、一次的な位置を留めていると判断されるが時期を特定できるまでには至らない。供膳器の坏類には黒色土器・須恵器・赤焼土器の種別があり、法量的に口径130～140mm・器高45mm前後のものが主体を占める。底部切離法は回転糸切りによるものが大半で、ナゲ等により切離痕を残さない黒色土器についても、形態や法量がこれらに近似することから糸切りによると推測される。調整技法では体部下半に回転ヘラケズリを施す例（第60図1）、底部に同調整を施すもの（同図3・4・10・11）、底部に手持ちヘラケズリを施す例（第61図1）等が知られる。これらの資料にはある程度の時間幅があると考えられるが、層位の別またはカマド内外等の出土地点により区分されるものではない。すなわち、二次的な混在を示す残存方法が窺われる。年代は9世紀初頭から中葉までの前半代の所産と捉えて大過なからう。

## ST2074 (第63～65図)

**位置・重複** B区北西部の16-32グリッドに主体を置く。住居跡おしの重複はなく単独で配置されるが、周辺の状況から土坑等の他遺構とはかなり切り合っている。

**平面形・規模** 平面形は南北方向に多少長い方形を呈するが、南辺が弧状を描くよう幾分張り出すために不整形となる。規模は東西軸約5.1m・南北軸約5.8mを測る。

**壁・堆積土** 南・東辺は地山を壁としておりラインの検出は容易であったが、北・西辺では重複する遺構の覆土が壁となることから検出が難しかった。したがって、北・西部は検出ラインが実際の壁面より外側に当たる結果となり、床面からの追及で本来のプランを明らかにし得た。確認できた南・東壁は床面から25cm程の高さで均等に巡り、南東隅部ではやや傾斜を有して立ち上がる。2層からなる堆積土は炭化物を含む褐色土を基調としており、水平的に自然堆積した状況が観察された。

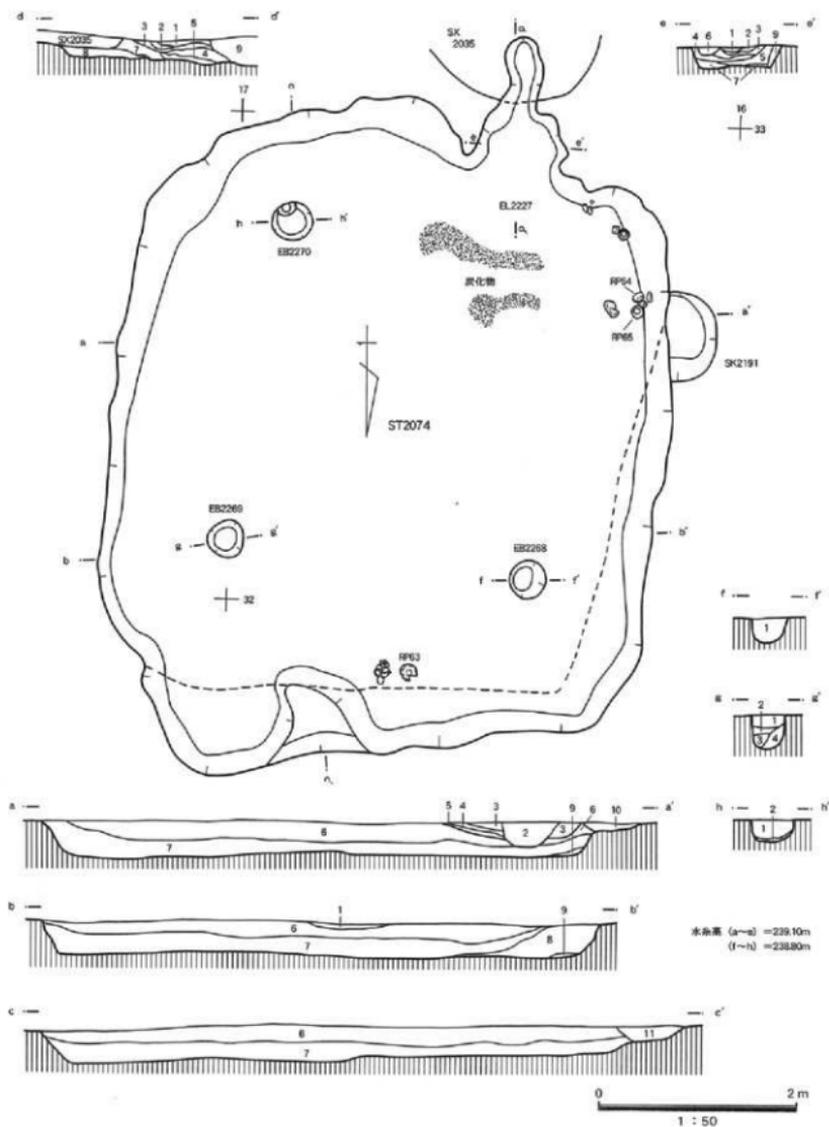
**床面** ほぼ全域を対象に貼り床を行っているが、中央部で一部に地山の露出箇所がある。中央部は周辺に比較すると幾らか高まりを有しており、全体的には北半部のレベルが南半よりも多少高くなっている。床面の状態は、特にカマド前面で固くしまっている。

**柱穴** 北西部のEB2268・北東部のEB2269・南東部のEB2270が床面上から検出され、配置から見て柱穴と考えられるが、カマド前面に当たる南西部からは検出できなかった。3基はいずれも径約40cmの円形様プランを呈し、床面からの深さ22～35cm程の掘り込みである。柱間はEB2268・2269間で3m、EB2269・2270間で3.3mの距離を測る。

**カマド** 南壁の中央よりやや西側に構築される。燃焼部と煙道部からなる構造を認め、燃焼部の主体も南壁の外へ張り出す形態となる。燃焼部は幅・奥行とも約90cmで、緩やかに立ち上がって煙道部へ続いている。側壁の基底は地山削り出しによって作出され、石組みを伴った形跡はない。奥壁や堆積土内に焼け面または焼土が認められるが、底面にその分布は検出されない。なお、前底部には炭化物の集中範囲が存在する。煙道部はSX2035と重複しており、上方をこれによって切られる。長さ約80cmを測り、燃焼部から舌状に細長く延び出ている。

**遺物出土状況** 遺物は主に堆積土中より出土しており、床面に密着した状態のものはほとんどないが、RP63～65等は床面直上のレベルで出土している。遺物の分布は住居西半域を中心に認められ、カマド周辺よりも壁沿いから多く出土することが特徴と言える。

**出土遺物** 供膳具の須恵器、煮沸具の土師器を主体とする3.5箱分量の遺物がある。須恵器の供膳具(第64図)には蓋・坏・皿の器種を認める。蓋は法量的な差により、口径170mmを超える大類と145mm前後の小類が存在する。坏は底部へラ切り手法のもので、その法量に大差はないものの、器形の細部に異なりが見受けられる。すなわち、口縁部が直線的に立ち上がる器形の他、内反または外反する例、体部中程に強い張り力を有して段を形成する特徴的な器形のもの等である。また、成形成階で口縁の一端を注ぎ口風に引き出す形態のものも認められる。64図の1は内面の黒色処理を省略した坏で、再調整として体部下半と底部全面に回転へラケズリが施される。共伴する土師器の煮沸具(第65図)は、長胴形態の甕が主体を占める。これら土師の年代は、須恵器坏の様相から9世紀第1四半期に属す一群と察せられる。



第63図 ST2074 住居跡

ST2074

1	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	炭化物を層状に含む。
2	10YR 4/1 黒灰色	シルト	2.5Y 6/2 灰黄色シルトをブロック状・層状に含む。炭化物含む。
3	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	2.5Y 6/2 灰黄色シルトをブロック状・層状に含む。炭化物含む。
4	10YR 3/1 黒褐色	シルト	炭化物含む。
5	10YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物含む。
6	10YR 4/1 黒灰色	シルト	炭化物若干含む。
7	10YR 3/1 黒褐色	シルト	10YR 6/1 黒灰色シルトをブロック状に20%含む。
8	10YR 5/1 黒灰色	シルト	
9	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	7.5YR 4/1 黒灰色粘質シルトをブロック状に10%含む。
10	10YR 4/1 黒灰色	シルト	炭化物を層状で多量に含む。粘土含む。
11	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	10YR 6/2 灰黄褐色シルトをブロック状に20%含む。炭化物含む。

EL2227

1	10YR 3/3 暗褐色	粘土	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質細砂をブロック状に5%含む。
2	10YR 3/2 黒褐色	粘土	
3	10YR 3/3 暗褐色	粘質細砂	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質細砂をブロック状に40%含む。炭化物含む。
4	10YR 3/4 暗褐色	粘質細砂	10YR 3/2 黒褐色粘土をブロック状に20%含む。炭化物若干・粘土含む。
5	10YR 3/2 黒褐色	粘土	炭化物・粘土含む。
6	10YR 3/2 黒褐色	粘土	10YR 4/3 に近い黄褐色粘土をブロック状（一部層状）に20%含む。
7	10YR 3/4 暗褐色	粘土	10YR 4/3 に近い黄褐色粘土をブロック状に15%。10YR 3/2 黒褐色粘土をブロック状に5%含む。炭化物若干含む。
8	10YR 3/4 暗褐色	粘質細砂	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質細砂をブロック状に5%含む。
9	10YR 3/1 黒褐色	シルト	10YR 6/1 黒灰色シルトをブロック状に20%含む。

EB2268

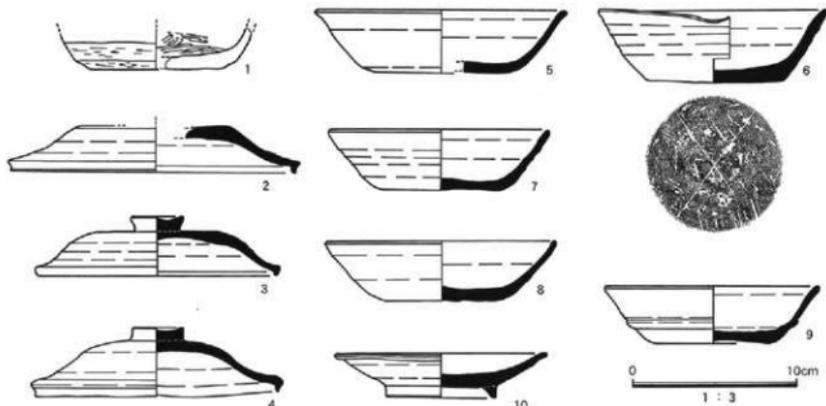
1	10YR 4/2 灰黄褐色	砂質シルト	10YR 6/2 灰黄褐色粘土をブロック状に5%。10YR 4/1 黒灰色粘土をブロック状に3%含む。炭化物含む。
---	---------------	-------	---

EB2269

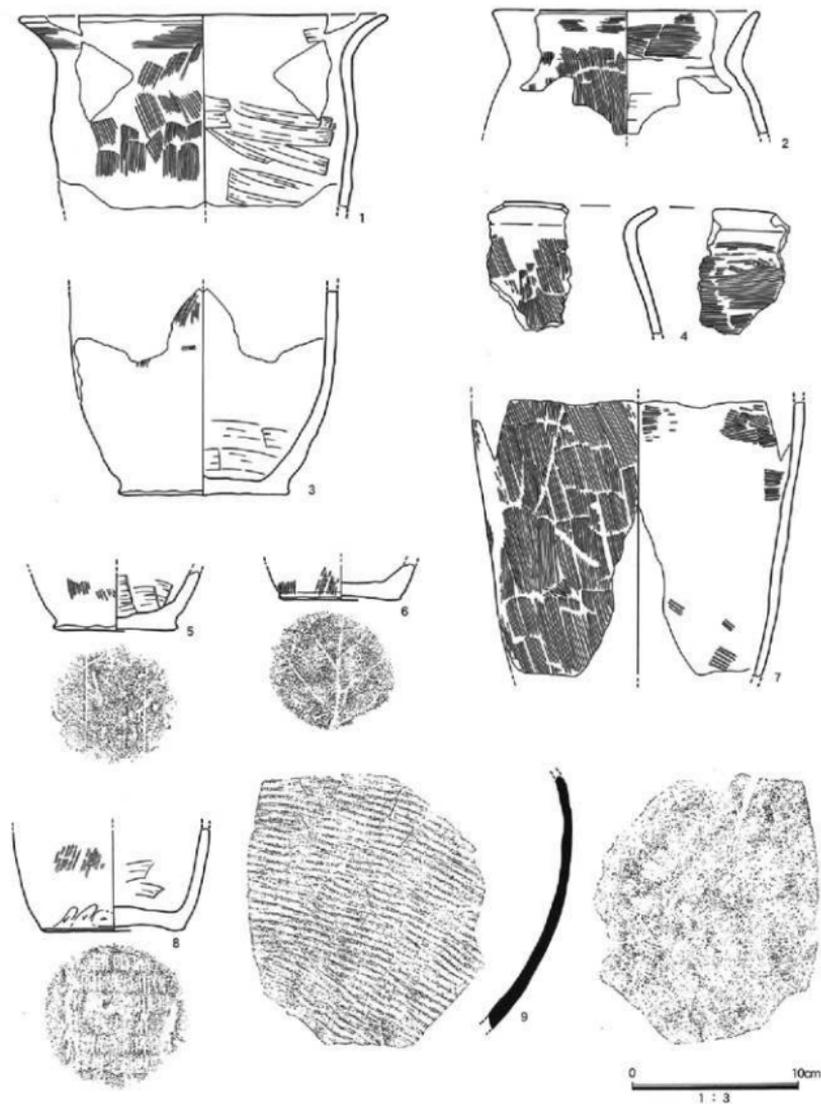
1	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	10YR 6/2 灰黄褐色粘土をブロック状に30%含む。
2	10YR 5/2 灰黄褐色	粘質シルト	10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に20%含む。
3	10YR 4/1 黒灰色	粘土	10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に10%含む。
4	10YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に10%含む。

EB2270

1	10YR 4/2 灰黄褐色	粘質シルト	10YR 5/3 灰黄褐色細砂をブロック状に30%含む。炭化物含む。
2	10YR 5/3 に近い黄褐色	細砂	10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に10%含む。



第64図 ST2074 出土遺物 (1)



第65図 ST2074 出土遺物 (2)

## ST2128 (第66・67図)

**位置** B区中央で北壁にかかる19-30・31グリッドに位置する。

**平面形・規模** 南東角の張り出しが不明確な上、各辺が直線的でないことから、平面プランは不整な隅丸方形となる。各辺の長さが不揃いながら東西・南北軸とも約3.5mを測り、小規模な一群に属す住居跡である。

**壁・堆積土** 地山を壁としており、床面から20～25cmの高さで検出された。北壁ではテラス状の段を形成する掘り方が見られ、同一住居内で建て替えが行われた可能性も考えられる。堆積土は北半で2層、カマド前底部を除く南半では単層と認識された。

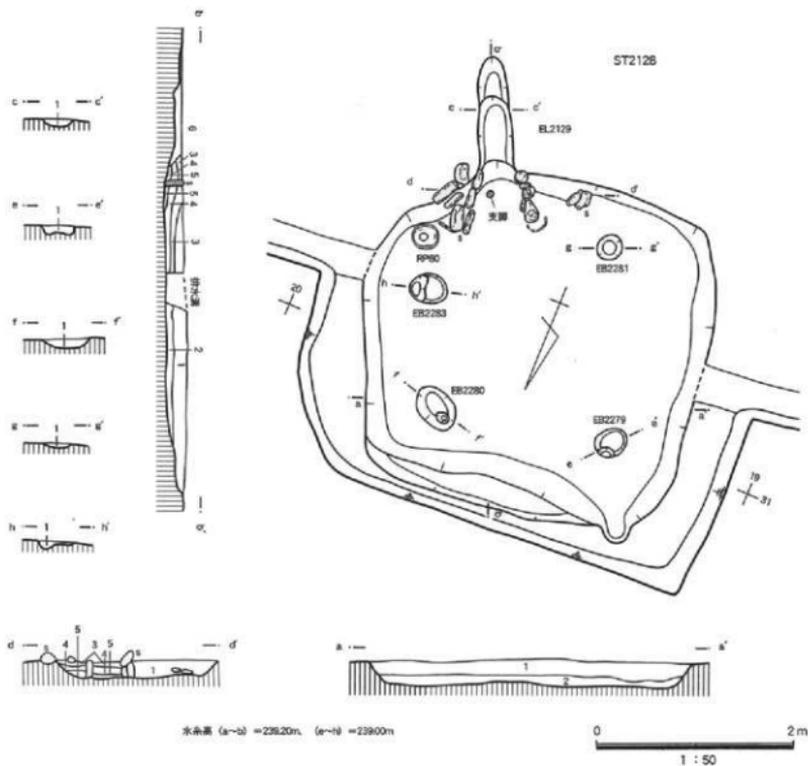
**床面** 床は中央部で地山の露出を認めるが、それ以外の周辺域では貼り床が施される。床面には多少の凹凸があり、カマド前面と中央域が周辺に比べて幾分高い。壁際から中央へ向かう程よくしまった状態を呈している。

**柱穴** 柱穴と考えられる掘り込みは、床面上から4基検出された。ただし、いずれも床面からの深さが10cm以下と浅く、掘り方の規模等も一様でないことから疑問であるが、四隅に配される位置関係等を考慮して一応柱穴として捉えておく。4基は台形様の配置となり、柱間距離はEB2279・2280間で1.8m、EB2280・2283間が1.2m、EB2283・2281間で1.9m、EB2281・2279間は2mを各々測る。南東部のEB2283は、カマドとの位置関係から北寄りに配されたものと考えられる。

**カマド** 南壁の中央からやや東寄りに付設される。両袖に石組みを伴う燃焼部、住居外へ長く伸び出す煙道部とに区分できる。燃焼部は幅約50cm・奥行約70cmの規模で、卵形を呈している。両袖は石組みにより構築されており、西側の遺存が良く焚口に当たる端には土師器甕の口辺部が据え置かれる状況から、使用時の位置をそのまま留めていると判断できる。また、西袖の焚口付近の礫石のみが加熱を受けて破損していること、東袖では棒状礫が横位に置かれるものや壁外へはみ出す状況が認められる等から、改修が行われたと推測できなくもない。現状から焚口幅65cm・高さ約20cmと考えられ、燃焼部ほぼ中央には槽円柱の棒状礫を埋め置いた支脚が遺存している。煙道部は全長約1m・幅30～35cmを測り、途中に段を設けて先端へ至る。

**遺物出土状況** 遺物はカマドとその周辺より出土した土器と礫石であり、土器破片数にしても約50点と少ない。特異な存在として住居跡南東隅、カマド東袖横から出土した須恵器壺の口頸部資料 (RP60) がある。完形の口頸部を二次利用し、意図して床面に置いたような状況が窺われる。その他の土器についても、カマド付近から集中して出土している。

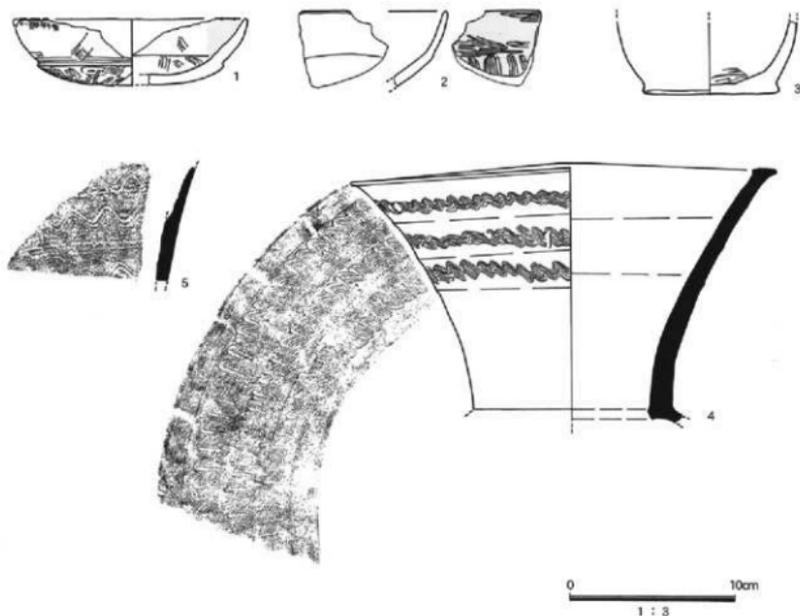
**出土遺物** 破片資料が大半で全形を窺い知れるものは限られるが、土師器の坏・甕と須恵器壺の器種が認められた (第67図)。土師器坏は体部中程に明瞭な段を形成する有段内黒坏で、形態的特徴から7世紀末頃の所産に比定される。RP60は平坦な面を有する口唇の作りが特徴的で、8世紀中葉の米沢市大神窯跡出土壺に類例が見られる。口辺部には流麗な櫛描波状文を3段階に巡らしており、その丹念な施文は6世紀代の古式須恵器にも通じる観がある。搬入品と推測でき、東海系の要素が指摘される点もあり、時期的に遡るものの愛知県東山50号窯式 (7世紀前半) との関連が考えられる。



ST2128・EL2129

- |        |         |          |  |
|--------|---------|----------|--|
| 1      | 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 10m/m次の小礫を含む。炭化物若干含む。                          |
| 2      | 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 10YR5/3に多い黄褐色細砂一粉をブロック状に10%含む。小礫含む。            |
| 3      | 10YR3/2 | 黒褐色粘質細砂  | 10YR4/2黄褐色細砂をブロック状に1%未満含む。炭化物、生土若干含む。          |
| 4      | 10YR3/2 | 黒褐色粘質細砂  | 10YR4/2黄褐色細砂をブロック状に30%含む。炭化鉄管を含む。              |
| 5      | 10YR2/3 | 黒褐色粘質シルト | 10YR4/3に多い黄褐色砂をブロック状に30%含む。                    |
| 5      | 10YR2/3 | 黒褐色粘質シルト | 10YR4/3に多い黄褐色砂をブロック状に5%含む。炭化物若干含む。             |
| ER2279 |         |          |  |
| 1      | 10YR3/2 | 黒褐色シルト   | 10YR2/1黒色シルトを雜状に5%。10YR4/3に多い黄褐色砂をブロック状に30%含む。 |
| ER2280 |         |          |  |
| 1      | 10YR3/1 | 黒褐色粘質シルト | 10YR4/3に多い黄褐色砂をブロック状に20%含む。                    |
| ER2281 |         |          |  |
| 1      | 10YR3/2 | 黒褐色シルト   | 10YR5/3に多い黄褐色細砂をブロック状に10%含む。炭化物含む。             |
| ER2283 |         |          |  |
| 1      | 10YR3/2 | 黒褐色シルト   | 10YR4/3に多い黄褐色砂をブロック状に30%含む。                    |

第66図 ST2128 住居跡



第67図 ST2128 出土遺物

表2 遺物観察表(1)

遺構番号	伴同番号	種別	器種	計測値(mm)	断面形状	技法	底厚・底面・調整等	出土層位・層位	登録番号	備考		
ST6	第6図1	土師器	甕	(222)	(108)	6	ハケメ	ハケメ	Y			
ST21	第6図2	土師器	坪	160	40	5	ケズリ	ミガキ	F1	内面黒色処理		
	第6図3	土師器	鉢	120	65	6	ハケメ・ケズリ	ミガキ	EB594	RP3		
	第8図1	土師器	高坪		(41)	12			Y	RP11		
ST88	第8図2	土師器	坪	150	43	7	ケズリ・ヘラナデ	ミガキ	Y	RP13	内面黒色処理	
	第8図3	土師器	坪	160	38	6	ケズリ		ER584	RP16		
	第8図4	土師器	甕	(208)	(35)	7	ハケメ	ハケメ	ER584			
	第8図5	土師器	甕	92	(51)	10	ハケメ	ハケメ	ER584			
	第11図1	土師器	坪	153	42	5	ケズリ	ミガキ	RP9	RP9		
ST210	第11図2	土師器	坪	150	39	6	ケズリ		F1			
	第11図3	土師器	坪	(152)	82	61	7	ハケメ・ケズリ	ミガキ・ヘラナデ	Y	RP3	
	第11図4	土師器	坪	(144)	75	55	7	ケズリ	木炭	E1403		
	第11図5	赤土器	甕	71	90	66	9	ケズリ	子持ヘラケズリ	Y	RP1	
	第11図6	赤土器	甕	(284)		360	7	平行タタキ	青磁土	F1	RP6, 7	
	第11図7	赤土器	甕		(85)	7	平行タタキ	青磁土	F1	RP5		
	第12図1	土師器	甕	136	90	219	8	ハケメ	ヘラナデ	Y	RP4	
	第12図2	土師器	甕	222	(98)	336	8	ハケメ	ハケメ	F1	RP10	
	第12図3	土師器	甕	(222)	(147)	8	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ		F1	RP12	
	第12図4	土師器	甕	95	(81)	8	ケズリ・ミガキ	ミガキ	木炭	F1	RP2	
	第12図5	土師器	甕	90	(65)	8	ハケメ	ハケメ	調代	F1	RP11	
ST271	第12図6	土師器	甕	90	(221)	8	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ	木炭	F1	RP8	
	第13図1	土師器	坪	148	36	5	ミガキ・ケズリ	ミガキ	F		内面黒色処理	
ST583	第14図1	赤土器	甕	(144)	(84)	41	5		回転ヘラ切リ	F1	RP16	
	第14図2	土師器	甕		(50)	5	ケズリ	ヘラナデ	F1	RP1		
	第15図1	土師器	甕	338	(90)	357	7	ハケメ	ヘラナデ	F1	RP19	
	第15図2	土師器	甕	266		248	7	ハケメ	ヘラナデ	F1	RP18	
	第15図3	土師器	甕	86	(85)	7	ハケメ		F1			
ST338	第15図4	土師器	甕	76	(90)	4	ハケメ		木炭	F1		
	第15図5	土師器	甕	119	87	90	7	ハケメ	ヘラナデ	F1	RP21	
	第15図6	赤土器	高合付坪	(140)	92	40	3		回転ヘラ切リ	F1	RP20	
	第15図7	赤土器	甕		(150)	10	平行タタキ	同心門アテ	F1	RP17		
	ST363	第17図1	赤土器	坪	(148)	104	39	5	回転ヘラケズリ	ミガキ	F	内面黒色処理

表3 遺物観察表(2)

遺構番号	詳細番号	種別	器種	寸法(mm)				器型		器底/器口・取手等	出土地点・層位	登録番号	備考
				口徑	底径	器高	器径	外 径	内 径				
ST426	第18段1	土師器	甕	(190)		(58)	9	ハケム		木蓋	Y	RP20	
	第18段2	土師器	甕		80	(57)	8	ハケム	ハケム	木蓋	Y	RP20	
	第18段3	土師器	甕	(190)	(106)	336	8	ハケム	ハケム		Y	RP21	
ST458	第19段1	土師器	鉢	(180)	100	85	8	ケズリ	ミガキ	手持ヘラケズリ	F2		内面黒色処理
	第21段1	土師器	甕			(200)	5	ハケム	ヘラナデ		EL761		
ST790	第21段2	土師器	甕			(98)	10	ハケム	ハケム		F		
	第21段3	土師器	甕		(96)	(45)	7		ヘラナデ	木蓋	F		
	第21段4	土師器	甕	147	90	39	4			網転ヘラ切り	F		
	第21段5	土師器	内蓋			(51)	13		ヘラ掻き拭器		Y		片内周りに付いた隙、平研
ST823	第22段1	土師器	甕	(190)							F		
	第22段2	土師器	甕		86	(96)	9			木蓋	Y		
ST835	第22段3	土師器	甕		94	(71)	5			ハケム	木蓋	EL825	
	第23段1	土師器	高杯			(48)	9	ハケム	ケズリ		F1		断面内面黒色処理
ST1156	第23段2	土師器	鉢	(154)		82	7				F1		
	第24段1	土師器	甕	(137)	74	43	4			網転高切り	F		
ST1181	第24段2	土師器	甕			(79)	5				F		
	第24段3	土師器	甕	137	100	130	4	ハケム	ヘラナデ		F		
	第26段1	黒色土師	甕	(136)	58	49	4	網転ヘラケズリ	ミガキ	網転(90°ヘラケズリ)	F1		内面黒色処理
	第26段2	黒色土師	甕	(108)	58	37	5		ミガキ	網転高切り	F1		内面黒色処理
	第26段3	黒色土師	高台付鉢	(142)		(63)	5	ミガキ	不明(ナデ)	不明(ナデ)	F1		内・外面黒色処理
	第26段4	赤褐色土師	甕		58	(88)	6	ケズリ		網転高切り	F1		
ST1213	第26段5	赤褐色土師	甕	154	68	53	5			網転高切り	Y	RP55	
	第26段6	赤褐色土師	甕	150	68	42	4			網転高切り	Y	RP56	
	第26段7	赤褐色土師	甕	(166)	66	46	4			網転高切り	Y		
	第27段1	黒色土師	高台付鉢	150		(51)	5		ミガキ		Y	RP27	内面黒色処理
ST1213	第27段2	黒色土師	高台付鉢	146	75	57	6		ミガキ	不明(ナデ)	Y	RP27	内面黒色処理、断面黒色
	第27段3	赤褐色土師	甕		70	(40)	5				Y		
ST1294	第27段4	土師器	甕	(96)	(109)	6		ハケム	ハケム		Y		
	第29段1	土師器	甕	(172)		(83)	7				EP1492	RP39	
ST1294	第29段2	土師器	甕	(140)		(58)	6	ケズリ・ミガキ	ミガキ		EP1491		
	第29段3	土師器	甕	(120)		(56)	6	ハケム	ヘラナデ		EP1492		
	第29段4	土師器	高杯			(75)	10	ハケム・ミガキ			EP1491		
	第29段5	土師器	甕	(230)		(72)	8	ハケム	ハケム		EP1491		
ST1294	第29段6	土師器	甕	(152)		(94)	7	ハケム・ケズリ	ヘラナデ		EP1492		
	第29段7	土師器	甕	(132)		91	9	ケズリ	ケズリ・ヘラナデ		EP1492		
	第30段1	縄文土師	鉢			(46)	8	横並び直線文			F		
	第30段2	土師器	高杯	(154)		(57)	9	ケズリ			F		
	第30段3	土師器	高杯	(166)		(54)	10	ハケム	ヘラナデ		F		
	第30段4	土師器	甕	(148)		46	6	ケズリ	ミガキ		F		内面黒色処理
	第30段5	土師器	甕		100	(113)	7	ハケム	ハケム	木蓋	EL1355		
	第30段6	土師器	甕		96	(79)	6	ハケム	ヘラナデ	木蓋	EL1485	RP28	
	第30段7	黒色土師	甕	(168)	(94)	42	4	網転ヘラケズリ	ミガキ	網転ヘラ切り	F1		内面黒色処理
	第30段8	土師器	蓋	162	24	7					EL1485		天井部：網転ヘラケズリ
ST1315	第30段9	土師器	甕	(124)		(46)	4				ER1355		
	第33段1	土師器	甕	122		55	7	ハケム・ミガキ・ケズリ	ヘラナデ		EK1496	RP45	
	第33段2	土師器	甕	142		63	6	ケズリ・ミガキ	ミガキ		Y	RP41	内面黒色処理
	第33段3	土師器	甕	(120)		(58)	6				F		
	第33段4	土師器	甕	(158)		(253)	9	ハケム	ヘラナデ		Y	RP44	
	第33段5	土師器	甕	(164)		(221)	7	ハケム	ヘラナデ		Y	RP40	
	第33段6	土師器	甕	(170)		(44)	10				F		
	第33段7	土師器	甕	(170)		(48)	8		ヘラナデ		EK1496		
	第33段8	土師器	甕	(215)		278	9	ハケム・ヘラナデ	ヘラナデ・ミガキ		Y	RP42	
	第34段1	土師器	甕	56	(131)	7		ハケム・ケズリ	ハケム・ミガキ・ヘラナデ		F1		
ST1382	第35段1	土師器	高杯	104		(29)	10	ミガキ			F1		
	第35段2	土師器	高杯			(76)	14				F1		
	第35段3	土師器	甕	156		45	8	ケズリ			F1		
	第35段4	土師器	甕	160	80	38	6			ヘラケズリ	F1		
ST1420	第36段1	土師器	甕	(180)		(96)	7	ハケム			F1		
	第36段2	土師器	甕	(174)		(93)	6		ハケム		F1		
	第36段3	土師器	甕		93	(120)	7		ヘラナデ	木蓋	F1		
	第36段4	土師器	甕	139	38	143	5	ケズリ	ケズリ		F1		
	第36段5	土師器	甕	76	54	164	7	ハケム・ミガキ	ヘラナデ		F1		
	第36段6	土師器	甕	最大径 300	(127)	7		ハケム・ミガキ	ヘラナデ		F1		
ST1440	第38段1	土師器	甕		(56)	7		ハケム	ヘラナデ		Y		
	第38段2	土師器	甕	(140)		(43)	7	ハケム	ハケム		EL1421		
	第38段3	土師器	甕		(234)	8		ハケム	ハケム		Y		
	第38段4	土師器	甕	(248)		(204)	5	ハケム			F1		
ST1440	第40段1	土師器	甕	140	74	8		ケズリ・ミガキ	ミガキ		EK1507		
	第40段2	土師器	甕	138		69	9	ハケム・ケズリ・ミガキ	ミガキ		Y		
	第40段3	土師器	甕	182		66	8	ケズリ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ		Y		
	第40段4	土師器	甕	151		70	7	ハケム・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ		F2	RP52	
	第40段5	土師器	甕	150		62	7	ケズリ・ミガキ	ミガキ		Y		
	第40段6	土師器	甕	164		72	7	ケズリ	ヘラナデ・ミガキ		Y		
ST1440	第40段7	土師器	甕	150		67	8	ミガキ	ヘラナデ・ミガキ		Y		
	第40段8	土師器	甕	126		53	6	ケズリ・ミガキ	ミガキ		Y		

表4 遺物観察表(3)

遺構番号	詳細番号	類別	器種	計量値(mm)				調査技法		底部切取・調査等	出土地点・層位	登録番号	備考	
				口径	底径	器高	器厚	外面	内面					
ST1440	第40000	土師器	坪	145		(72)	7	ミガキ	ヘラナデ、ミガキ		Y			
	第400010	土師器	鉢	(242)	68	125	10	ハケム、ケズリ	ヘラナデ、ミガキ		Y	RP54		
	第400011	土師器	高坪			(61)	10	ハケム、ミガキ			F2			
	第400012	土師器	蓋	120		(131)	10	ハケム	ケズリ、ヘラナデ		Y	RP53		
	第400013	土師器	鉢		100	(66)	10		ミガキ		Y			
	第400014	土師器	壺	140		(79)	10	ハケム	ヘラナデ		Y			
ST2272	第42001	黒色土師	坪	(140)	85	28	5	回転ヘラケズリ	ミガキ	回転ヘラ切取・ヘラケズリ	F1	RP7	内面黒色処理	
	第42002	黒色土師	坪	(130)	(74)	37	4		不明(ナデ)		F1			
ST1878	第42003	黒色土師	坪	(116)	(24)	4		回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F1		内面黒色処理	
	第42004	黒色土師	坪	141	95	31	5		ミガキ	回転ヘラ切取・ヘラケズリ	F1		内面黒色処理	
	第42005	黒色土師	坪	(130)	84	41	5		ミガキ	回転ヘラ切取・ヘラケズリ	F1		内面黒色処理	
	第42006	黒色土師	坪	(80)	(27)	5		回転ヘラケズリ	ミガキ	回転油取り・ヘラケズリ	F1		内面黒色処理	
	第42007	黒色土師	坪	(144)	(50)	44	4		ミガキ	不明(ナデ)	F1		内面黒色処理	
	第42008	黒色土師	坪	138	(65)	44	3			回転ヘラ切取	F1			
	第42009	黒色土師	坪	142	75	34	4			回転ヘラ切取	F1		底部：黒色削り	
	第42010	黒色土師	坪	(140)	84	42	5			回転ヘラ切取	F1			
	第42011	黒色土師	坪	138	82	46	5			回転ヘラ切取	F1		RP6	
	第42012	黒色土師	坪	138	68	42	4			回転ヘラ切取	F1			
	第42013	黒色土師	坪	(132)	(70)	39	3			回転ヘラ切取	F1			
	第42014	黒色土師	坪	136	60	41	5			回転ヘラ切取	F1			
	第42015	黒色土師	坪	(138)	(70)	43	4			不明(ナデ)	F1			
	第42016	黒色土師	高合付坪		(96)	(24)	4				静止水取り	F1		
	ST1914	第43001	土師器	壺	(200)		(77)	6	ハケム	ハケム		F1		
第43002		土師器	壺	(216)		(64)	6	ハケム	ヘラナデ		F1			
第43003		土師器	壺	175		(72)	7	ハケム	ヘラナデ		F1			
第43004		土師器	壺			(51)	5	ハケム			F1			
第43005		土師器	壺		98	(173)	6	ハケム	ハケム	木炭焼	F2			
第43006		黒色土師	壺	(195)		(217)	8	平行タタキ			F1			
第43007		黒色土師	壺	(160)		(57)	7				F1			
第43008		黒色土師	壺		(345)	10		平行タタキ	同心円アテハケム		F1			
第43009		土師器	坪	124	40	78	6	ケズリ、ミガキ	ミガキ		F8	RP75		
第43010		土師器	坪	136		(65)	8	ミガキ	ミガキ		F8			
ST1914	第43011	土師器	坪	126		60	8	ミガキ	ミガキ		F8			
	第43012	土師器	蓋	152		(137)	7	ハケム	ケズリハケム・ミガキ		F8	RP76		
	第43013	土師器	壺	高穴径190		(141)	10	ハケム	ヘラナデ、ミガキ		F8		6と同一器体	
	第43014	土師器	壺		77	(53)	7				F8		6と同一器体	
	第43015	土師器	鉢	207	(64)	170	10				Y	RP76	二次焼成	
	第43016	土師器	鉢	196	(62)	98	9	ミガキ	ヘラナデ、ミガキ		F8	RP77		
	第43017	小笠土師	坪	58	60	41	10		ヘラナデ		F8	RP79		
ST1923	第47001	黒色土師	瓦	143	70	48	6			回転油切取	EL1841	RP90		
	第47002	黒色土師	瓦						ミガキ		F2		内面黒色処理	
	第47003	土師器	壺	(190)		(45)	6	ハケム			F2			
	第47004	土師器	壺	(134)		(50)	5	ハケム	ヘラナデ		F2			
	第47005	土師器	壺	(240)		(146)	8	ハケム			F2			
	第47006	土師器	壺		90	(42)	6	ハケム	ヘラナデ		F2	RP72		
ST1960	第49001	黒色土師	坪	(134)	70	42	5			回転油切取	(a) Y	RP73		
	第49002	黒色土師	坪	138	75	43	4			回転油切取	(a) Y	RP74		
	第49003	黒色土師	坪	(165)	(90)	45	4			回転油切取	(a) F1			
	第49004	黒色土師	坪	(140)	62	44	5			不明(ナデ)	(a) F1			
	第49005	黒色土師	坪	(137)	(70)	47	3			不明(ナデ)	(a) F1			
	第49006	黒色土師	高合付坪		(135)	(74)	55	4			回転油切取	(a) Y	RP58	
	第49007	黒色土師	坪	(122)	60	31	4		ミガキ	不明(ナデ)	(a) F1		内面黒色処理	
	第49008	土師器	壺	(160)		(66)	6	ミガキ	ハケム		(a) F1		複合口縁	
	第49009	土師器	壺	(145)		(73)	6	ハケム	ハケム・ヘラナデ		EL2182			
	第49010	土師器	壺	(214)		(105)	8	ハケム	ヘラナデ		(a) F1			
ST1968	第49011	土師器	壺	(240)		(109)	7	ハケム	ヘラナデ		(a) F2			
	第49012	土師器	壺			(305)	7	ハケム	ハケム		(a) Y	RP59		
	第49013	土師器	壺		106	(52)	8		ヘラナデ		(a) F1			
	第51001	土師器	坪	(124)	(52)	31	6	ケズリ	ミガキ		(a) F1		内面黒色処理	
	第51002	土師器	坪	(150)	(62)	35	7	ケズリ、ミガキ	ミガキ		EL2127		内面黒色処理	
	第51003	土師器	坪	(158)		46	6		ミガキ		(a) F1			
	第51004	土師器	壺	(102)		(53)	4		ヘラナデ		(a) F1			
	第51005	土師器	壺		(87)	(52)	9	ハケム	ヘラナデ	木炭焼	(a) F1			
	第51006	土師器	壺		(76)	(51)	6		ヘラナデ	木炭焼	(a) Y			
	第51007	黒色土師	坪	(140)	(80)	35	3			回転ヘラ切取	(a) F1			
SKJ221	第51008	黒色土師	壺		(35)	6		磨損成状文			EL2127			
	第51009	黒色土師	壺	(220)		(60)	9	平行タタキ	青海胆アテ		F3・4			
ST1976	第53001	土師器	坪	(140)	(80)	30	5		ミガキ		F2		内面黒色処理	
	第53002	土師器	手付巻鉢			(73)	7				F2		磨付口縁	
	第53003	土師器	壺	(138)		(67)	7	ハケム	ヘラナデ		Y			
	第53004	土師器	壺	(160)		(56)	6		ハケム		F2			
	第53005	土師器	壺	(114)		(113)	6	ハケム			F2			

表5 遺物観察表(4)

遺構番号	発掘番号	種別	図類	計測値 (mm)			調査技法		底部切跡・調査等	出土地点・層位	記録番号	備考
				口徑	底径	高さ	外周	内周				
ST1960	第5684 1	土師器	坪	(160)	(102)	33	4	回転ヘラナズリ		RK2299		
	第5684 2	土師器	坪	(130)	76	35	8		ヘラナズリ・ミガキ	F 1	RP70	内面黒色処理
	第5684 3	土師器	坪	(130)		44	8			F 1		
	第5684 4	土師器	坪	(122)	70	49	8		ヘラナズリ	F 1		
	第5684 5	土師器	坪	76	62	23	5	指痕		F 1		
	第5684 6	土師器	甕	234	(95)	333	7	ハケム	ハケム	木炭	EK2299	
	第5684 7	土師器	甕	(387)		(208)	6	ハケム	ハケム		Y	RP60
	第5684 8	土師器	甕	(99)	(146)	8			ヘラナズリ	F 1		
	第5704 9	土師器	甕	184	(90)	270	7	ハケム	ヘラナズリ	EL2226	RP68	
	第5704 2	土師器	甕	(274)		(107)	6	ハケム	ヘラナズリ	F 1		
第5704 3	土師器	甕	(243)		(166)	5	ハケム	ヘラナズリ	EK2299			
第5704 3	土師器	甕	(260)		(123)	8	ハケム	ヘラナズリ	ハケム	RK2299		
第5704 4	土師器	甕	(300)		(98)	6	ハケム	ヘラナズリ	F 1			
第5704 5	土師器	甕	(100)	78	61	5		ハケム・ヘラナズリ	木炭	F 1	RP71	
第5704 6	土師器	甕	(222)		(134)	5	ハケム	ヘラナズリ	EK2299			
第5704 7	土師器	甕	(220)		(72)	6	ハケム	ハケム	F 1			
第5704 8	土師器	甕	(240)		(83)	5	ハケム	ヘラナズリ	EL2226			
第5704 9	土師器	甕	(240)		(62)	5	ハケム	ヘラナズリ	EK2299			
第5704 10	土製品	土玉	直径	39	18					F 1		
ST1963	第584 1	土師器	坪	(138)	(90)	40	6	ナズリ			F 2	
	第584 2	須恵器	高台付坪		70	(28)	5			回転糸切り	F 1	
	第600 1	黒色土器	坪		78	(37)	7	回転ヘラナズリ	ミガキ	不明(ナズリ)	F 1	内面黒色処理
	第600 2	黒色土器	坪	(130)	(56)	43	5		ミガキ	不明(ナズリ)	F 1	内面黒色処理
	第600 3	黒色土器	坪	131	58	48	4		ミガキ	不明回転(ヘラナズリ)	EL2217	内面黒色処理
	第600 4	黒色土器	坪	(130)	(56)	44	4		ミガキ	不明回転(ヘラナズリ)	F 1	内面黒色処理
	第600 5	黒色土器	坪	(132)	62	45	4		ミガキ	不明(ナズリ)	EL2217	内面黒色処理
	第600 6	黒色土器	坪	138	86	47	5		ミガキ	不明(ナズリ)	F 1	内面黒色処理
	第600 7	黒色土器	坪	(130)	(63)	46	5		ミガキ	不明(ナズリ)	F 1	内面黒色処理
	第600 8	黒色土器	高台付坪		85	(37)	5		ミガキ	不明(ナズリ)	Y	内面黒色処理
第600 9	黒色土器	高台付坪	152	79	61	5	ミガキ	ミガキ	不明(ナズリ)	F 2	内・外縁黒色処理	
第600 10	黒色土器	甕	(126)	(56)	24	5		ミガキ	不明回転(ヘラナズリ)	F 1	内面黒色処理	
第600 11	黒色土器	甕	(132)	(63)	(27)	6		ミガキ	不明回転(ヘラナズリ)	F 1	内面黒色処理	
ST2059	第610 1	須恵器	坪	(142)	(90)	49	7			不明(平削ヘラナズリ)	EL2217	
	第610 2	須恵器	坪	(130)	66	32	4			回転ヘラナズリ	F 1	
	第610 3	須恵器	坪	134	74	41	4			回転糸切り	EL2217	
	第610 4	須恵器	坪	132	60	45	3			回転糸切り	F 1	
	第610 5	須恵器	坪	138	76	43	4			回転糸切り	F 1	
	第610 6	須恵器	坪	142	66	44	3			回転糸切り	F 1	
	第610 7	須恵器	坪	(128)	76	44	5			回転糸切り	F 1	
	第610 8	須恵器	坪	(148)	(90)	48	6			回転糸切り	F 1	
	第610 9	須恵器	甕	(86)	(16)	5				回転糸切り	F 1	底面・縁部「十」
	第610 10	赤灰土器	坪	126	64	37	7			回転糸切り	EL2217	
第610 11	須恵器	高台付坪		(28)	7				回転糸切り	F 1		
第610 12	土師器	甕	(120)		(96)	3	ハケム	ヘラナズリ	EL2217	RP62		
第610 13	土師器	甕		77	(106)	6		ヘラナズリ	調代	F 1		
第610 14	土師器	甕	(78)	(113)	4	ハケム	ハケム	調代	F 1			
第610 15	土師器	甕	146	60	122	5	ハケム	ヘラナズリ	調代	EL2217	RP61	
第610 16	土師器	甕	110	(168)	6	ハケム	ハケム	木炭	Y			
第610 17	須恵器	甕	最大径 (170)	(109)						F 2		
第620 1	須恵器	甕			10		平行タタキ	青黒灰アテ		F 1		
第620 2	須恵器	甕			11		平行タタキ	青黒灰アテ		F 1		
ST2074	第640 1	土師器	坪	(78)	25	6	回転ヘラナズリ	ミガキ	不明回転(ヘラナズリ)	F 2		
	第640 2	須恵器	甕	(172)	(26)	5				F 1		口ロ口使用、内面黒色処理
	第640 3	須恵器	甕	(144)	36	5				F 1		
	第640 4	須恵器	甕	146	42	6				F 2	RP63	
	第640 5	須恵器	坪	(152)	(89)	38	4		回転ヘラナズリ	F 1		
	第640 6	須恵器	坪	139	84	45	6		回転ヘラナズリ	F 2	RP65	底面・縁部「十」
第640 7	須恵器	坪	134	72	37	4		回転ヘラナズリ	F 2	RP64		
第640 8	須恵器	坪	(140)	(70)	36	4		回転ヘラナズリ	F 1			
第640 9	須恵器	坪	(130)	70	35	4		回転ヘラナズリ	F 1			
第640 10	須恵器	甕	128	67	27	4		回転糸切り	F 1			
第650 1	土師器	甕	(220)		(118)	6	ハケム	ヘラナズリ		F 1		
第650 2	土師器	甕	(160)		(75)	5	ハケム	ハケム・ヘラナズリ		F 1		
第650 3	土師器	甕	(102)	(124)	6	ハケム	ヘラナズリ	木炭	F 1			
第650 4	土師器	甕		(81)	6	ハケム	ハケム		F 1			
第650 5	土師器	甕	74	(36)	7	ハケム	ヘラナズリ	ヘラナズリ	F 2			
第650 6	土師器	甕	72	(22)	9	ハケム		木炭	F 2			
第650 7	土師器	甕		(167)	6	ハケム	ハケム		F 2			
第650 8	土師器	甕	86	63	7	ハケム・ナズリ	ヘラナズリ	調代	F 1			
第650 9	須恵器	甕			5		平行タタキ	黒灰アテ		F 1		
ST2128	第670 1	土師器	坪	(140)	40	7	ナズリ・ハケム・ミガキ	ミガキ		F 1		内面黒色処理
	第670 2	土師器	坪		(46)	5		ミガキ		F 1		内面黒色処理
	第670 3	土師器	甕	82	(43)	7		ヘラナズリ	木炭	Y		
	第670 4	須恵器	甕	348	(155)	9		磨損痕状文		F 1	RP60	
	第670 5	須恵器	甕			8		磨損痕状文		F 1		

## 2 掘立柱建物跡

柱穴の配列等から確認された建物跡は、A区6棟・B区4棟・C区2棟の計12棟を数える。柱穴内から出土する遺物が少なく、復元・実測不可能な破片資料のため時期の推定が難しいが、B区検出のSB1505が中世以降の構築と判断される以外は、概ね8世紀から9世紀頃に属する遺構と考えられる。12棟のうち母屋と想定される建物跡はSB574・1505・2224の3棟であり、他は倉庫や小屋としての性格が推察されるものである。これら建物跡の概要は観察表としてまとめ、後に付したので参照されたい。以下では、代表的な3例について記述する。

### SB574 (第69図)

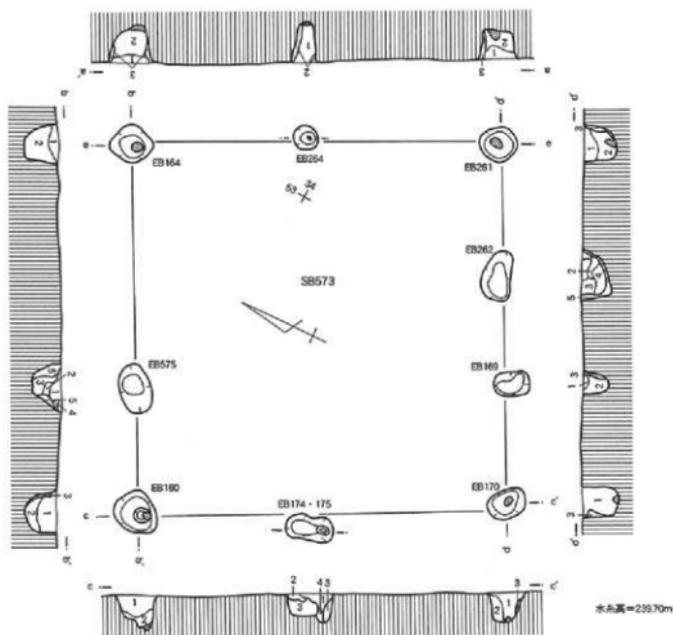
A区中央部の西側に位置している。桁行・梁行とも3間づつで、ほぼ磁北に沿った南北棟の建物跡である。柱穴の平面形は径60cm内外の不整形円形や楕円形を呈すが、南辺中央のEB203・576の2基は規模的に小さく不揃いである。掘り方は途中で段を形成するものや、横にオーバーハングするもの等が見られ一様ではない。底面ないし側面に柱根が遺存している例は、東・西辺を主に8基の柱穴で確認できた。建物跡の外側1～1.5mには溝状の掘り込みが検出され、各辺に平行する状況から建物に付随した雨落ち溝と考えられる。

### SB1088 (第74図)

B区南西部、SG1155河川跡左岸で検出された総柱の建物跡である。平面プランは東西・南北辺とも約4m規模の正方形様となる。不整形円形もしくは隅丸方形を呈す柱穴掘り方は、径1m前後を測る大型のものである。EB1091を除く各柱穴に柱根が遺存しており、EB1091でも断面観察において柱痕跡を示す土層が確認できた。柱根は径25cm程の太さを有する円柱で、掘り方の中央部に据えられている。掘り方の埋土は何層にも分かれる状況から、版築を行って建てられたことが窺われる。柱根の材は8本中6本がクリ、2本がコナラを使用したものであった(付編参照)。柱穴や柱根の規模から推定して、かなり高床で重量物に耐えられる頑丈な倉庫であったと思われる。C区SG2131東岸に検出されたSB2222(第76図)も同様の建物跡であり、河川を利用した船運による物資保管庫であった可能性が考えられる。

### SB1505 (第75図)

B区北東隅に位置しており、建物跡北辺と東辺は調査区外へかかるため未検出である。SG1497と重複し、河川が埋没した後に構築されている。東西棟の建物で検出規模は南辺4間、西辺2間以上となる。各柱穴に対応して外側に一回り小さな柱穴が配されており、東辺に付随したかどうか不明であるが、三面ないし二面底を持つ母屋と考えられる。南辺から庇までの距離は約1.5m、西辺では約1.2mであり、南辺で1尺程長間を取っている。柱穴掘り方は径50～60cmの円形や楕円形状を呈し、柱根の遺存するものはないが、アタリ部分が一段深くなっている例が認められる。南辺配列の5基の柱穴からは、柱を据える際の根固め用と推測される大小の礫石が出土している。EB1392・1471では扁平な1個の礫が底面に置かれる状況から、この上に柱を据えたものと考えられる。なお、西辺と庇の柱穴に根石は認められない。本建物跡は構築法とSG1497河川跡出土土器から中世以降の所産と考察され、検出遺構の中では最も新しい時期に当てはめられる。



SB573

EB261

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを1%含む。  
 2 10YR 1/1 黒色 シルト 1よりやや粘り有り。  
 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

EB264

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを1%未満含む。  
 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

EB164

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを1%含む。  
 2 10YR 1/1 黒色 シルト 1よりやや粘り有り。  
 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

EB575

- 1 10YR 1/1 黒色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを10%含む。  
 2 10YR 3/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを30%含む。  
 3 2.5Y 3/2 黒褐色 凝砂  
 4 10YR 4/1 灰褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを5%含む。  
 5 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

EB160

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを1%含む。  
 2 10YR 1/1 黒色 シルト 1よりやや粘り有り。  
 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

EB174・175

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを1%含む。  
 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを10%含む。  
 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを10%含む。  
 4 10YR 3/1 黒褐色 凝砂

EB170

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/1 褐褐色シルトをブロック状に3%含む。1よりやや粘り有り。  
 2 10YR 1/1 黒色 シルト  
 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

EB169

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを3%含む。  
 2 10YR 3/1 黒褐色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを10%含む。  
 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

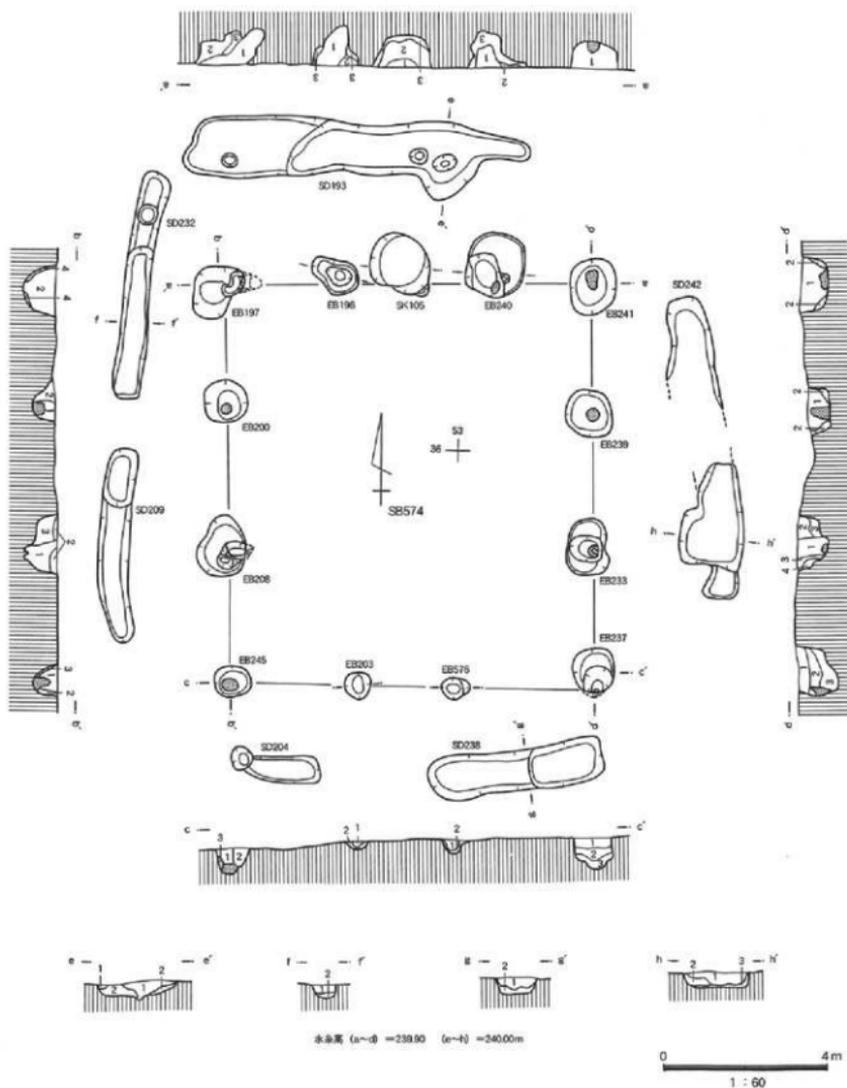
EB262

- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/2 灰黄褐色シルトを30%含む。  
 2 10YR 4/1 褐褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを10%含む。  
 3 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 5/2 灰黄褐色シルトを粒状に1%含む。  
 4 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/1 褐褐色シルトを粒状に3%含む。3よりやや粘り有り。  
 5 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

水床高=235.70m

0 4m  
 1 : 60

第68図 SB573 建物跡



第69図 SB574 建物跡

SBS74

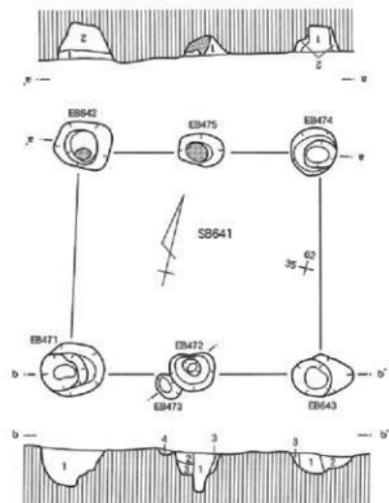
- EB241
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを10%、2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂を1%、2.5Y 5/3 黄褐色細砂を1%未満含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを1%含む。
- EB240
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを1%含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 5/2 灰黄褐色砂質シルトを30%含む。
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを10%含む。
- EB196
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/1 褐色細砂シルトを3%含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを50%含む。
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。
- EB197
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを10%含む。
- 2 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを3%、10YR 5/2 灰黄褐色シルトを1%未満含む。
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 2.5Y 4/2 暗灰褐色シルトを30%、10YR 2/1 黒色シルトを1%含む。
- 4 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを1%含む。
- EB200
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを1%含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 シルト 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂質シルトを10%、2.5Y 5/3 黄褐色細砂を1%含む。
- EB208
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを1%未満含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを30%含む。
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 2.5Y 4/2 暗灰褐色シルトを30%、10YR 2/1 黒色シルトを1%含む。
- EB245
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを1%含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 5/2 灰黄褐色シルトを30%含む。
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを1%含む。
- EB203/1
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを30%含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。
- EB276
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを1%含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。

EB237

- 1 10YR 3/1 黒褐色 シルト 10YR 4/1 褐色シルトを30%、10YR 4/1 灰黄褐色シルトを3%、10YR 5/8 黄褐色砂質シルトを5%含む。
- 3 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/1 褐色砂質シルトを3%含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを10%、10YR 5/8 黄褐色砂質シルトを1%含む。
- EB233
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを1%未満含む。
- 2 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを10%、10YR 5/8 黄褐色細砂シルトを1%含む。
- 3 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを30%、2.5Y 5/3 黄褐色細砂を1%未満含む。
- 4 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルトを1%含む。
- EB239
- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを30%含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。
- SK195/1
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを10%、10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルトを1%含む。
- 2 10YR1.7/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを10%、10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。
- SD193
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを10%含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。
- SD209
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 3/1 黒褐色シルト、2.5Y 3/2 黒褐色シルトを各10%含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト
- SD238
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/1 褐色シルトを灰状に30%含む。
- 2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。
- SD232/1
- 1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/1 褐色シルトを灰状に10%含む。
- 2 10YR 4/1 褐色 シルト 10YR 2/1 黒褐色シルトを1%含む。
- 3 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

SB641

- EB474
- 1 10YR 2/1 黒色 粘土 ほぼ純粋。
- 2 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 2.5Y 4/2 暗灰黄色細砂をブロック状に40%含む。
- EB475
- 1 10YR 2/1 黒色 粘土 ほぼ純粋。礫を多く含む。
- EB642
- 1 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 10~50m/m大の礫を多く含む。
- 2 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 10YR 4/1 褐色粘土をブロック状に20%、礫を含む。
- EB471
- 1 10YR 2/1 黒色 粘土 2.5Y 4/1 灰黄色細砂をブロック状に10%含む。
- EB472 - EP473
- 1 10YR 2/1 黒色 粘土 ほぼ純粋。
- 2 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 7.5Y 4/1 灰黄色細砂をブロック状に10%含む。
- 3 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 7.5Y 4/1 灰黄色細砂をブロック状に30%含む。
- 4 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 7.5Y 4/1 灰黄色細砂をブロック状に5%含む。
- EB643
- 1 10YR 2/1 黒色 粘土 ほぼ純粋。
- 2 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 7.5Y 4/1 灰黄色細砂をブロック状に30%、10~30m/m大の礫を含む。

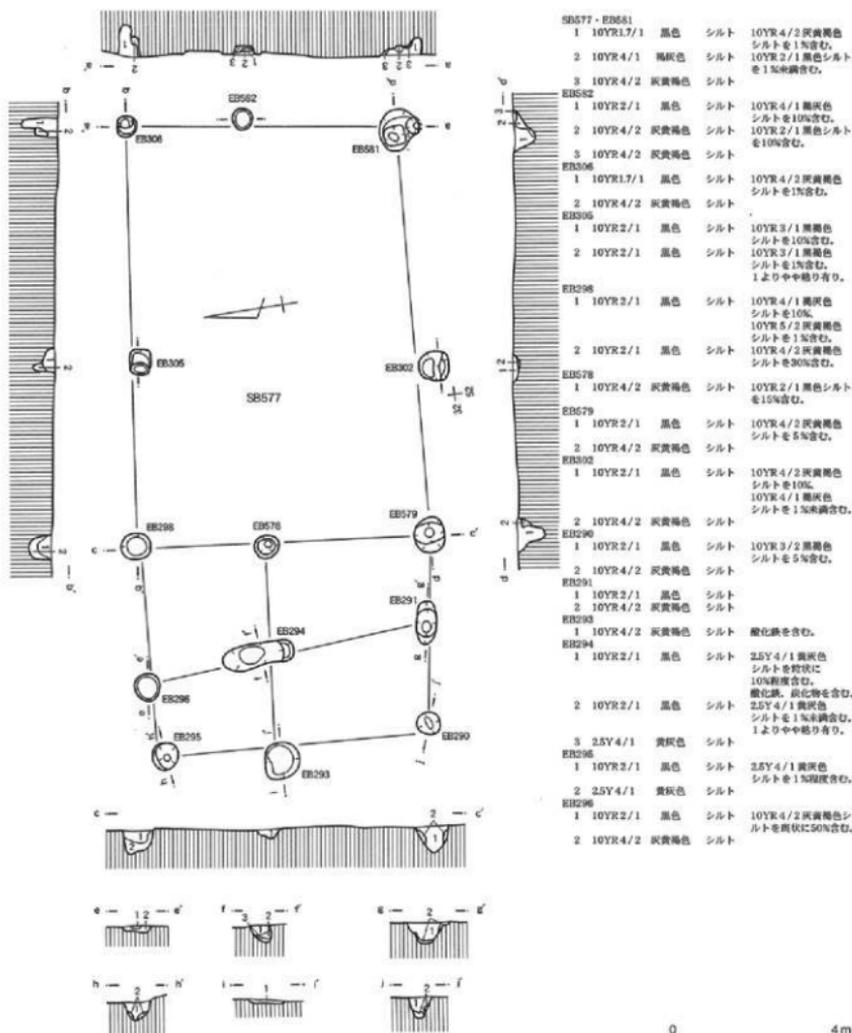


水糸溝=23590m

0 4m

1 : 60

第70図 SB641 建物跡

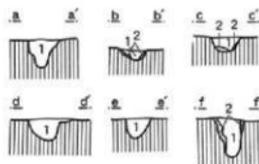
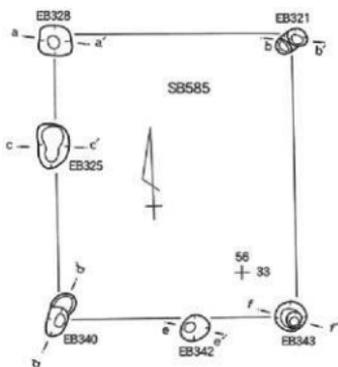


SB577・EB581		
1	10YR1.7/1	黒色 シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトを1%含む。
2	10YR4/1 黄灰色	シルト 10YR2/1 黒色シルトを1%未満含む。
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
EB582		
1	10YR2/1	黒色 シルト 10YR4/1 黄灰色シルトを10%含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト 10YR2/1 黒色シルトを10%含む。
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
EB306		
1	10YR1.7/1	黒色 シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトを1%含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
EB305		
1	10YR2/1	黒色 シルト 10YR3/1 黄褐色シルトを10%含む。
2	10YR2/1	黒色 シルト 10YR3/1 黄褐色シルトを1%含む。
EB298		
1	10YR3/1	黒色 シルト 10YR4/1 黄灰色シルトを10%、10YR5/2 灰黄褐色シルトを1%含む。
2	10YR2/1	黒色 シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトを30%含む。
EB278		
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト 10YR2/1 黒色シルトを15%含む。
EB279		
1	10YR2/1	黒色 シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトを5%含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
EB302		
1	10YR2/1	黒色 シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトを10%、10YR4/1 黄灰色シルトを1%未満含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
3	10YR2/1	黒色 シルト 10YR3/2 黄褐色シルトを5%含む。
EB291		
1	10YR2/1	黒色 シルト
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
EB293		
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト 酸化鉄を含む。
EB294		
1	10YR2/1	黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを数%に10%程度含む。
2	10YR2/1	黒色 シルト 酸化鉄、炭化物を含む。
3	2.5Y4/1	黄灰色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを1%未満含む。
EB296		
1	10YR2/1	黒色 シルト 2.5Y4/1 黄灰色シルトを数%に50%含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト

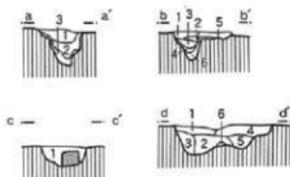
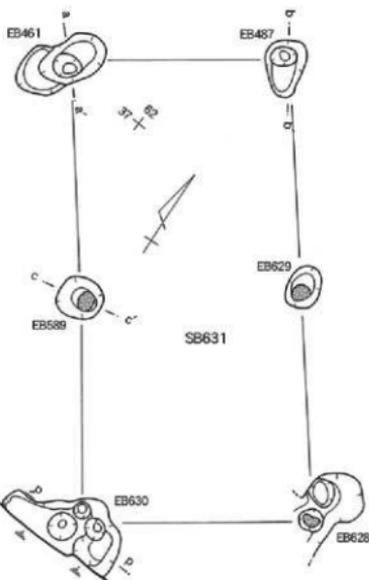
床高 (a-c) = 229.70m (e-f) = 229.60m

1 : 60

第71図 SB577 建物跡



- SB585
- EB328  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルトを1%未満含む。
- EB321  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 2.5Y 3/2 黄褐色シルトを5%含む (底部に集中)。  
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト
- EB325  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを1%未満含む。  
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト
- EB340  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを1%含む。
- EB342  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを5%含む。
- EB343  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを1%未満含む。  
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト

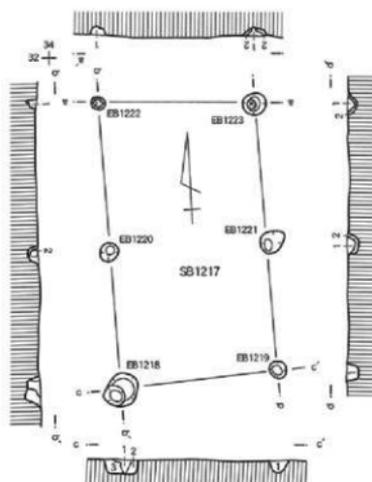


- SB631・EB461  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に1%未満含む。  
2 10YR 2/1 黒色 シルト 2.5Y 4/1 黄灰色粘土を10%含む (底面に集中)。  
3 10YR 1/1 黒色 粘土 2より粘り有り。
- EB467  
1 10YR 2/1 黒色 微砂質シルト 10YR 4/2 灰黄褐色微砂質シルトを底状に5%含む。  
2 10YR 3/2 黒褐色 微砂質シルト 10YR 4/2 灰黄褐色微砂質シルトを底状に10%含む。  
3 10YR 2/1 黒色 粘土 10YR 4/2 灰黄褐色粘土を底状に10%含む。  
4 2.5Y 4/1 黄灰色 粘土 3より粘り有り。
- EB589  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 2.5Y 5/2 灰黄褐色微砂を5%含む。小礫を多く含む。
- EB630  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 2.5Y 4/1 黄灰色粘質シルトをブロック状に30%含む。100m<sup>2</sup>次の礫を含む。  
2 10YR 2/1 黒色 粘土  
3 10YR 2/1 黒色 粘質シルト 2.5Y 4/1 黄灰色粘質シルトを40%含む。100m<sup>2</sup>次の礫を含む。  
4 10YR 2/2 黒褐色 シルト 2.5Y 4/1 黄灰色粘質シルトを5%含む。  
5 10YR 2/2 黒褐色 シルト 2.5Y 4/1 黄灰色粘質シルトを20%含む。  
6 2.5Y 5/2 灰黄褐色 微砂

水深高=240.00m

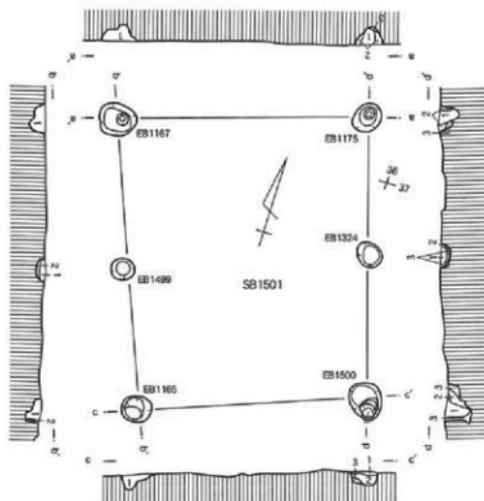


第72図 SB585・631 建物跡



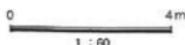
水点高=239.60m

- SB1217  
EB1223  
1 10YR 2/3 黒褐色 シルト 10YR 4/3 に近い黄褐色砂を  
底状に1%未満含む。  
2 10YR 4/3 に近い黄褐色 砂  
EB1222  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/3 に近い黄褐色砂を底状に  
1%未満含む。  
EB1220  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/3 に近い黄褐色砂質シルトを  
底状に1%含む。  
2 10YR 4/3 に近い黄褐色 砂質シルト  
EB1218  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを底状に  
3%含む。  
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/2 黒褐色シルトを底状・底状に  
10%含む。  
3 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト  
EB1219  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/3 に近い黄褐色砂質シルトを  
底状に1%未満含む。  
EB1221  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/3 に近い黄褐色砂質シルトを  
底状に1%未満含む。  
2 10YR 4/3 に近い黄褐色 砂質シルト



水点高=239.60m

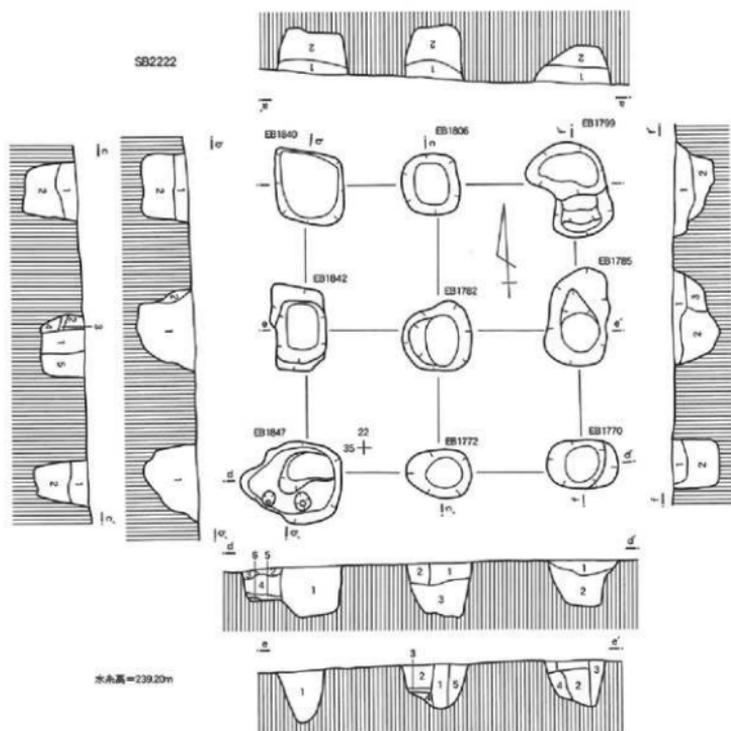
- SB1501  
EB1175  
1 10YR 3/2 黒褐色 シルト 10YR 4/3 に近い黄褐色シルトを  
底状に1%含む。  
2 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを  
底状に5%含む。  
3 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト  
EB1167  
1 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 3/2 黒褐色シルトを底状に  
5%含む。  
EB1499  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを  
底状に1%含む。  
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを底状に  
1%含む。  
EB1165  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを  
底状に1%未満含む。  
2 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト  
EB1500  
1 10YR 2/1 黒色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを  
底状に3%含む。  
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを  
底状に10%含む。  
3 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト 10YR 2/1 黒色シルトを  
底状に10%含む。  
EB1324  
1 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 4/2 灰黄褐色シルトを  
底状、ブロック状に3%含む。  
2 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 10YR 2/3 黒褐色シルトを  
底状に3%含む。  
3 10YR 4/3 に近い黄褐色 シルト



第73図 SB1217・1501 建物跡







水糸高=239.20m

SB2222

EB1847

- |   |          |        |       |  |
|---|----------|--------|-------|--|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。炭化物含む。 |
| 2 | 10YR 4/2 | 灰黄褐色   | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に30%含む。      |
| 3 | 10YR 5/2 | 黒褐色    | シルト   | 炭化物。                                   |
| 4 | 10YR 5/3 | に近い黄褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/2 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。           |
| 5 | 10YR 3/1 | 黒褐色    | シルト   | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に3%含む。       |
| 6 | 10YR 4/2 | に近い黄褐色 | 砂     |  |

EB1842

- |   |          |        |       |                                  |
|---|----------|--------|-------|----------------------------------|
| 1 | 10YR 5/3 | 黒褐色    | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。 |
| 2 | 10YR 4/3 | に近い黄褐色 | 細砂    | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。      |

EB1840

- |   |          |     |       |                                  |
|---|----------|-----|-------|----------------------------------|
| 1 | 10YR 3/3 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。 |
| 2 | 10YR 3/3 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。      |

EB1772

- |   |          |     |       |  |
|---|----------|-----|-------|--|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。炭化物含む。 |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に3%含む。       |
| 3 | 10YR 3/3 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。            |

EB1782

- |   |          |     |       |                                   |
|---|----------|-----|-------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | シルト   | 炭化物含む。ほば純粋。                       |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に5%含む。       |
| 3 | 10YR 3/1 | 黒褐色 | シルト   |                                   |
| 4 | 10YR 3/3 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に3%含む。       |
| 5 | 10YR 3/3 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に10%含む。 |

EB1806

- |   |          |     |       |                                  |
|---|----------|-----|-------|----------------------------------|
| 1 | 10YR 3/3 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。 |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。     |

EB1770

- |   |          |     |       |                              |
|---|----------|-----|-------|------------------------------|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 砂質シルト | 炭化物含む。ほば純粋。                  |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。 |

EB1785

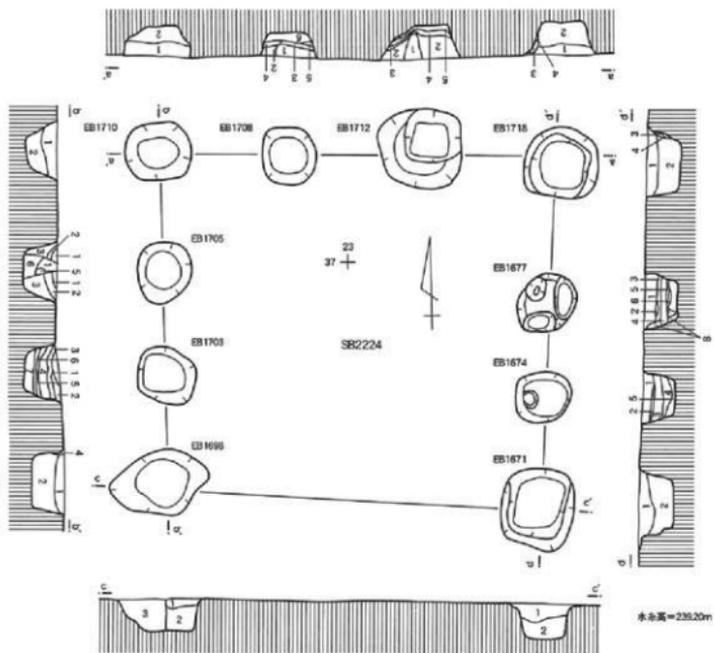
- |   |          |        |       |                                       |
|---|----------|--------|-------|---------------------------------------|
| 1 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色シルトをブロック状に10%含む。炭化物含む。 |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に15%含む。          |
| 3 | 10YR 3/2 | 黒褐色    | シルト   | 炭化物含む。                                |
| 4 | 10YR 4/3 | に近い黄褐色 | 砂     | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。          |

EB1799

- |   |          |     |       |                                  |
|---|----------|-----|-------|----------------------------------|
| 1 | 10YR 3/3 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質シルトをブロック状に5%含む。 |
| 2 | 10YR 3/2 | 黒褐色 | 砂質シルト | 10YR 3/1 黒褐色シルトをブロック状に10%含む。     |

0 4m

1 : 60



SB2224

EB1718		
1	10YR 4/2 灰青褐色	シルト
2	10YR 4/2 灰青褐色	軽質シルト
EB1712		
3	10YR 4/3 に近い黄褐色	軽質シルト
4	10YR 4/2 灰青褐色	軽質シルト
EB1710		
1	10YR 4/1 黒褐色	シルト
2	10YR 4/1 黒褐色	シルト
3	10YR 5/1 黄褐色	砂質シルト
4	2.5Y 5/1 黄褐色	砂質シルト
5	10YR 5/2 灰黄褐色	砂
EB1705		
1	2.5Y 4/1 黄褐色	シルト
2	10YR 4/1 黒褐色	シルト
3	10YR 4/2 灰青褐色	軽質シルト
4	2.5Y 4/1 黄褐色	砂質シルト
5	10YR 4/3 に近い黄褐色	砂
EB1703		
1	10YR 4/2 灰青褐色	砂質シルト
EB1690		
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト
EB1708		
1	10YR 4/1 黒褐色	シルト
2	2.5Y 4/1 黄褐色	砂質シルト
3	10YR 5/1 黄褐色	砂質シルト
4	10YR 4/2 灰青褐色	シルト
EB1671		
1	10YR 5/2 灰黄褐色	砂
EB1677		
1	2.5Y 4/1 黄褐色	シルト
2	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト
3	7.5YR 4/1 黒褐色	砂質シルト
4	10YR 4/2 灰青褐色	シルト
5	2.5Y 5/2 黄褐色	砂
EB1674		
1	7.5YR 4/1 黒褐色	シルト
2	10YR 5/2 灰黄褐色	砂質シルト
3	10YR 4/1 黒褐色	砂質シルト
4	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト
5	2.5Y 4/1 黄褐色	砂
EB1671		
1	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト
2	10YR 4/2 灰青褐色	軽質シルト

EB1703

1	10YR 4/1 黒褐色	シルト	2.5Y 5/2 黄褐色砂質シルトをブロック状に含む。
2	2.5Y 4/1 黄褐色	軽質シルト	2.5Y 5/2 黄褐色砂質シルトを層状に10%含む。
3	10YR 5/1 黄褐色	軽質シルト	2.5Y 5/2 黄褐色砂質シルトを含む。
4	10YR 4/2 灰青褐色	砂質シルト	10YR 4/1 黒褐色シルトをブロック状に35%含む。
5	7.5YR 4/1 黒褐色	軽質シルト	7.5YR 4/1 黒褐色シルトをブロック状に含む。
6	10YR 5/2 灰黄褐色	砂質シルト	10YR 5/2 灰黄褐色シルトをブロック状に含む。
EB1690			
1	10YR 4/2 灰青褐色	シルト	10YR 3/1 黒褐色シルトを層状に10%含む。
2	10YR 4/2 灰青褐色	シルト	10YR 5/3 に近い黄褐色細砂を含む。
3	10YR 4/2 灰青褐色	シルト	10YR 5/3 に近い黄褐色細砂をブロック状に20%含む。
4	10YR 4/3 に近い黄褐色	砂	10YR 5/3 に近い黄褐色細砂をブロック状に10%含む。
EB1671			
1	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR 5/3 に近い黄褐色細砂をブロック状に10%含む。
2	10YR 4/2 灰青褐色	軽質シルト	10YR 3/1 黒褐色粘土をブロック状に5%、10YR 3/2 黄褐色シルトをブロック状に15%含む。
EB1674			
1	7.5YR 4/1 黒褐色	シルト	炭化物跡を含む。
2	10YR 5/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物跡を含む。
3	10YR 4/1 黒褐色	砂質シルト	10YR 4/2 灰青褐色砂を25%含む。
4	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR 4/2 灰青褐色シルトをブロック状に30%含む。
EB1677			
1	2.5Y 4/1 黄褐色	シルト	炭化物跡を含む。
2	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト	小礫を含む。
3	7.5YR 4/1 黒褐色	軽質シルト	小礫を含む。
4	10YR 4/2 灰青褐色	シルト	小礫を含む。
5	2.5Y 5/2 黄褐色	砂	小礫を含む。
EB1671			
1	2.5Y 4/1 黄褐色	シルト	炭化物跡を含む。
2	10YR 5/2 灰黄褐色	シルト	炭化物跡を含む。
3	7.5YR 4/1 黒褐色	軽質シルト	炭化物跡を含む。
4	10YR 4/2 灰青褐色	シルト	炭化物跡を含む。
5	2.5Y 5/2 黄褐色	砂	炭化物跡を含む。
6	10YR 3/1 黒褐色	軽質シルト	炭化物跡を含む。
7	10YR 4/2 灰青褐色	シルト	炭化物跡を含む。
8	8Y 5/1 灰色	砂	炭化物跡を含む。

水深高=230.20m



第77図 SB2224 建物跡

表3 掘立柱建物跡観察表

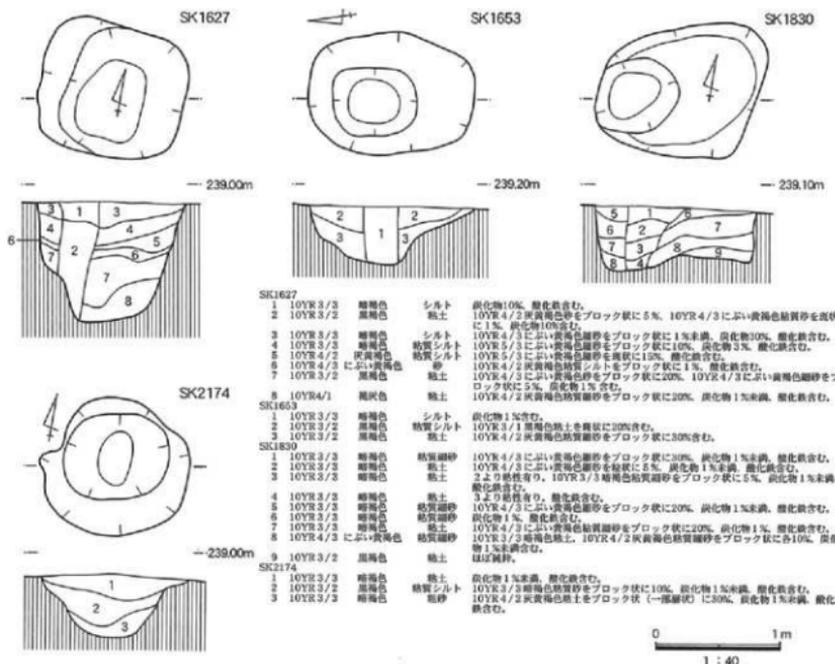
	構成図	方向	規模	柱間寸法	掘り方・掘土	出土遺物：点		備	考
						遺構番号	土師器		
SB 573		長軸 N-64°-E 4.9-5.0m 短軸 4.8-5.0m	縦行 EB160・174・170間 1.5, 1.9m EB164・264・261間 1.7, 2.0m 横行 EB160・573間 1.0m EB170・169間 1.2m EB169・262間 0.9m EB243・261間 1.1m	径20~40cm, 不整 円形。掘土は1~ 2層でシルト・凝灰 土層からの深さは 20~46cm.	EB169 EB170 EB174	1 1 1			
		南北 5.9m 東西 4.9-5.1m	南北 EB197・200・208・245間 0.8, 1.1, 1.1m EB241・239・233・237間 0.9, 1.0, 1.0m 東西 EB197・196・240・241間 1.1, 1.3, 0.6m EB245・203・576・237間 1.2, 0.9, 1.3m	径20~74cm, 不整 円形。掘土は1~ 3層でシルト・凝灰 土層からの深さは 8~43cm.	EB197 EB200 EB208 EB233 EB241 EB245 SK195	21 4 14 2 4 4 5	掘土も溝(SD193・201・209・242) が通る。EB576はSD201を通る。		
SB 574		長軸 N-80°-W 3.5-3.9m 短軸 7.7-8.0m	縦行 EB296・293・290間 1.1, 1.5m EB306・582・581間 1.2, 1.5m EB296・294・291間 0.8, 1.5m EB298・578・589間 1.3, 1.6m 横行 EB296・296・298・305・306間 0.6, 1.4, 1.9, 2.6m EB290・291・579・302・581間 0.8, 0.6, 1.7, 2.4m EB293・294・578間 1.0m	径24~54cm, 不整 円形。掘土は1~ 3層でシルト・凝灰 土層からの深さは 5~40cm.	EB296 EB293 EB290 EB291 EB293 EB294 EB578	1 1 1 1 1 1 1	EB582はSD304に、EB292は SD301を通る。		
	SB 577								

	構 成 図	方 向	規 模	柱 間 寸 法	廻り方・掘土	掘 土 量 物 : 点		備 考
						遺構番号	土物層	
SB 585		南北 N-1°-E 3.7~3.8m 東西 3.2m	南北 ED328・325・340間 0.8, 1.0m 東西 EB340・342・343間 1.3m	柱北 EB328・628間 2.2m EB461・487間 2.0m 柱南 EB630・589・461間 2.2, 2.4m EB628・629・487間 2.0, 2.1m	柱北 掘土は1層で シルト、確認層から の深さは12~45cm。	EB325	3	
						EB328	1	
						EB461	1	
SB 631		長軸 N-35°-W 3.4~4.0m 短軸 6.1~6.5m	縦行 EB630・628間 2.2m EB461・487間 2.0m 横行 EB630・589・461間 2.2, 2.4m EB628・629・487間 2.0, 2.1m	柱北 掘土は120cm、不整 円形、本層は1層で 掘土は3~5層で シルト、粘土・腐植 質シルト、粘質シル ト、確認層からの深 さは27~45cm。	EB461	1		
					EB471	2		
					EB472	1		
SB 641		長軸 N-78°-E 3.3~3.4m 短軸 3.4~3.8m	縦行 EB642・471間 2.2m EB474・643間 2.2m 横行 EB472・643間 0.9m 他 0.8m (約3F)	柱北 掘土は76cm、不整 円形、不整楕円形、 掘土は1~3層で 粘土・粘質シルト、 確認層からの深さ は23~47cm。	EB471	2		
					EB472	1		
					EB642	1		
SB 1088		南北 N-6°-E 4.0~4.1m 東西 3.9m	柱北 EB1089・1091・1093間 0.8, 0.4m 東西 EB1504・1503間 0.5m EB1089・1090・1504間 0.7, 0.3m EB1093・1094・1502間 0.7, 0.5m EB1091・1092間 0.3m 他 0.6m (約2F)	柱北 掘土は110cm、不整 円形、腐植質シルト、 掘土は14~28層で粘 質シルト・粘質シル ト・粘土・腐植質、 確認層からの深さ は35~65cm。	EB1503	3	EB1091のみ柱北が深らずタリ 検出。	
					EB1093	5		
					EB1089	2		
SB 1217		長軸 N-2°-W 2.1~2.2m 短軸 3.5~3.6m	縦行 EB1218・1219間 2.2m EB1222・1223間 2.1m 横行 EB1218・1220・1222間 1.4, 1.6m EB1219・1221・1223間 1.3, 1.5m	柱北 掘土は40cm、不整 円形、掘土は1~ 2層でシルト、確認 層からの深さは 9~20cm。	EB1219	1	EB1223はST1224を切る。	

測 号	構 成 図	方 向	規 模	柱 間 寸 法	測り方・施土	出土遺物：点		備 考
						遺構番号	土師器 須位置	
SB 1501		長軸 N-19°-W 3.1~3.4m  短軸 3.9m	東行 EB1165・1500間 2.4m EB1167・1175間 2.6m 南行 EB1165・1499・1167間 1.4, 1.5m EB1500・1324・1175間 1.4m	径30~40cm, 不整 円形。遺土は、 3層でシルト・砂 層からの深さは 10~32cm.	EB1167	1		
SB 1505		東西軸 N-73°-W 5.1m  東西軸出部 11.1m	南北 EB1840・1842間 0.8m EB1799・1785間 0.4m EB1806・1782・1772間 1.2, 1.0m 東西 EB1840・1806間 0.7m EB1847・1772間 0.8m EB1782・1785間 0.7m 他 0.9m (約3尺)	径80~122cm, 不整 円形。内方の前遺 土は、2~8層でシ ルト・砂質シルト・ 層砂・砂。埋設部か らの深さは45~ 66cm.	EB1799 EB1840 EB1847 EB1770 EB1782 EB1772 EB1806	9 4 3 2 5 2		
SB 2222		南北軸 N-2°-E 4.2~4.6m  東西 4.0~4.6m	南北 1710 1712 1718 1706 1712 1706 1677 1703 1674 1698 1617	南北軸 N-3°-E 6.4~6.9m  東西 7.5~7.6m	EB1710 EB1712 EB1718 EB1706 EB1703 EB1698	8 8 4 4 4 4		

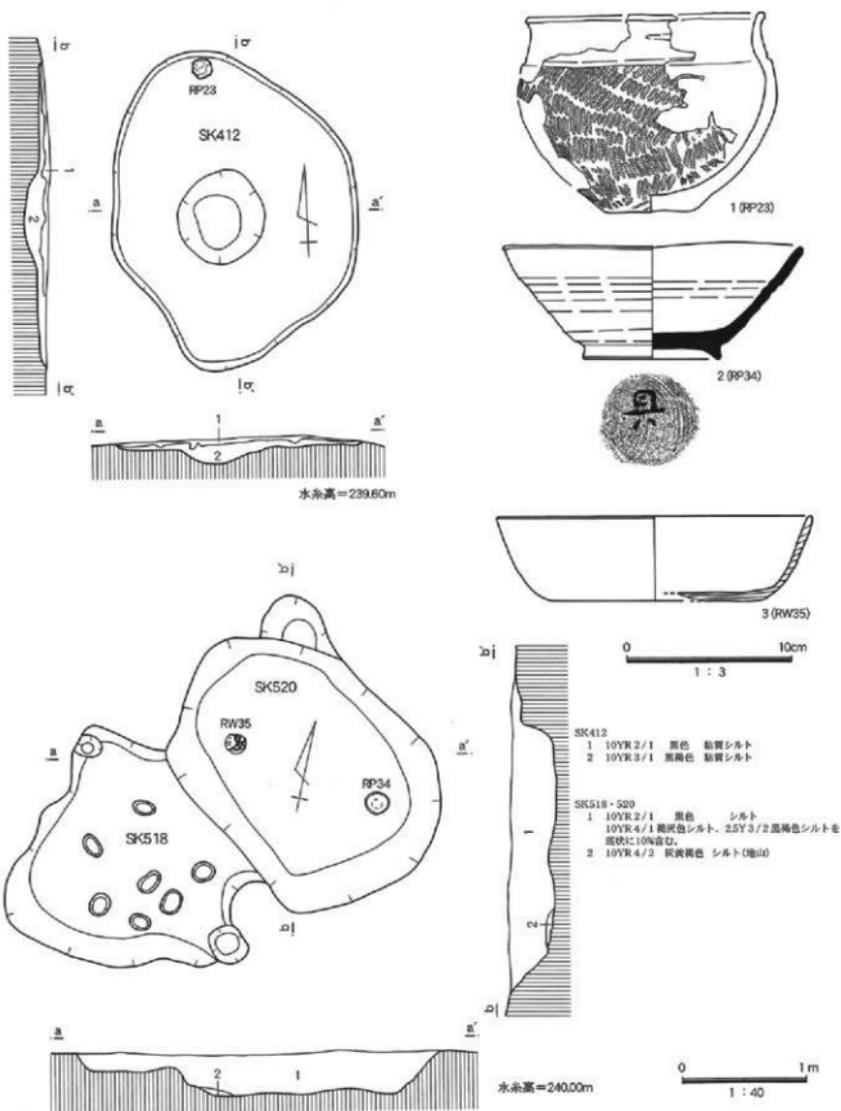
3 土 坑 (第78~80図)

調査区全域から検出された約250基の掘り込みを土坑として登録した。形状や規模・深さは様々であり、切り合い関係などから長い期間にわたる変遷が窺われるが、出土遺物等により構築時期を明確にできるものは極く少ない。第78図掲載の4基はC区東半域から検出されており、平面規模等がある程度類似した一群として捉えられるものである。SK1627・1653・1830の3基は半截断面に柱痕跡を示すと考えられる縦の土層ラインが認められ、柱穴の可能性が指摘される。しかし、建物跡を構成する配列は示さないことから、土坑として扱った。なお、底面や堆積土内から構築時期を推定できるまでの遺物は出土していない。SK412 (第79図) はA区中央東側の鞍部に孤立して検出された落ち込みで、北端部から縄文時代晩期に比定される鉢形土器 (RP23) が出土している。ただし当該時期の遺構とは断定できず、周囲の遺物分布状況や地形的要因から察して、周辺地域からの紛れ込みの可能性が高い。A区南東部の遺構密集域に位置するSK520 (第79図) は、長軸約4.2mを測る楕円状の土坑である。底面からやや浮いた状態ながら、大型で完形の赤焼土器高台付杯 (RP34) や木椀 (RW35) が出土しており、これら遺物の特徴から9世紀中頃の構築年代が推察される。

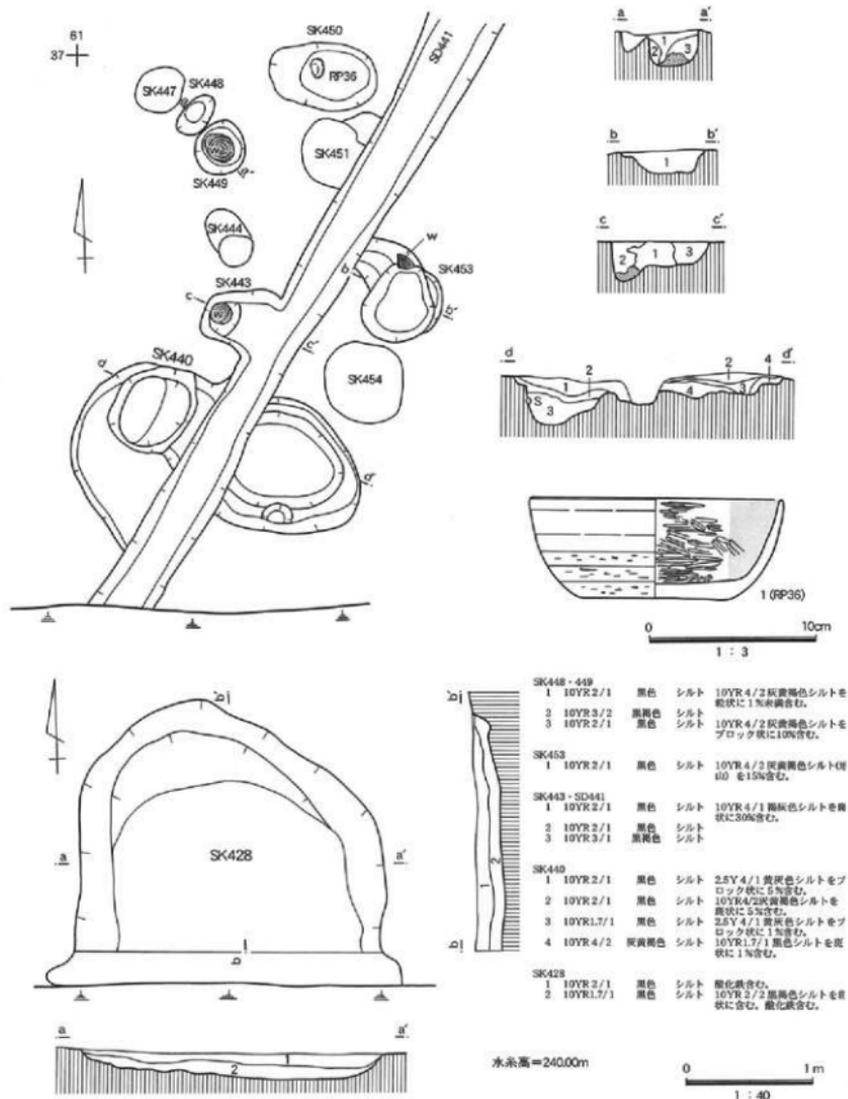


SK1627	1 10YR 3/3	暗褐色	シルト	炭化物10%、腐植体を含む。
	2 10YR 5/2	黒褐色	粘土	10YR 4/2 灰黄褐色砂をブロック状に5%、10YR 4/3 に近い黄褐色粘質砂を混ぜ1%、炭化物10%を含む。
	3 10YR 1/3	暗褐色	シルト	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質砂をブロック状に1%未満、炭化物10%、腐植体を含む。
	4 10YR 3/3	暗褐色	粘質シルト	10YR 5/3 に近い黄褐色砂をブロック状に10%、炭化物3%、炭化鉄を含む。
	5 10YR 4/2	灰黄褐色	粘質シルト	10YR 5/3 に近い黄褐色砂を底層に10%、炭化鉄を含む。
	6 10YR 4/3	にぶ~黄褐色	砂	10YR 4/2 黄褐色粘質シルトをブロック状に1%、腐植体を含む。
	7 10YR 3/2	黒褐色	粘土	10YR 4/3 に近い黄褐色砂をブロック状に20%、10YR 4/3 に近い黄褐色粘質砂をブロック状に5%、炭化物1%を含む。
	8 10YR 4/1	黒灰色	粘土	10YR 4/2 黄褐色粘質粘砂をブロック状に30%、炭化物1%未満、腐植体を含む。
SK1653	1 10YR 3/3	暗褐色	シルト	炭化物1%を含む。
	2 10YR 2/2	暗褐色	粘質シルト	10YR 3/1 黄褐色粘土を底層に20%を含む。
	3 10YR 2/2	黒褐色	粘土	10YR 4/2 灰黄褐色砂をブロック状に30%を含む。
SK1830	1 10YR 3/3	暗褐色	粘質粘砂	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質砂をブロック状に30%、炭化物1%未満、腐植体を含む。
	2 10YR 2/3	暗褐色	粘土	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質砂を底層に5%、炭化物1%未満、炭化鉄を含む。
	3 10YR 2/2	暗褐色	粘土	2より粘性有り、10YR 3/3 暗褐色粘質粘砂をブロック状に5%、炭化物1%未満、炭化鉄を含む。
	4 10YR 2/2	暗褐色	粘土	3より粘性有り、炭化鉄を含む。
	5 10YR 2/2	暗褐色	粘質粘砂	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質砂をブロック状に20%、炭化物1%未満、腐植体を含む。
	6 10YR 2/3	暗褐色	粘質粘砂	炭化物1%、炭化鉄を含む。
	7 10YR 2/3	暗褐色	粘土	10YR 4/3 に近い黄褐色粘質粘砂をブロック状に20%、炭化物1%、炭化鉄を含む。
	8 10YR 4/2	にぶ~黄褐色	粘質粘砂	10YR 3/3 暗褐色粘土、10YR 4/2 灰黄褐色粘質粘砂をブロック状に各10%、炭化物1%未満、腐植体を含む。
	9 10YR 3/2	黒褐色	粘土	ほぼ純粋。
SK2174	1 10YR 2/3	暗褐色	粘土	炭化物1%未満、腐植体を含む。
	2 10YR 2/2	黒褐色	粘質シルト	10YR 3/3 暗褐色粘質砂をブロック状に10%、炭化物1%未満、腐植体を含む。
	3 10YR 3/3	暗褐色	粘砂	10YR 4/2 灰黄褐色粘土をブロック状に20%、炭化物1%未満、炭化鉄を含む。

第78図 SK1627・1653・1830・2174 土坑



第79図 SK412・518・520 土坑、出土遺物



第80図 SK428・440等 土坑、出土遺物

#### 4 溝跡・河川跡

約60基の遺構を溝跡として登録している。B区中央部東寄りを南北方向に縦断するSD1296(第81図)は、緩やかに弧状を描いて走行する溝跡である。落ち込みを伴う底面の状況等から必ずしも人工的に掘られたものとは言えないと思われたが、検出された他の河川跡と比較して小幅となることや、河川跡とは逆に底面の高低が北から南へ下がる状況から見て溝跡として扱った。幅約1.6~2.6m・深さ約35~50cmの規模で、検出長37m程を測る。重複関係でST1294住居跡を切ることから8世紀末以降の構築は明らかであるが、出土遺物は土器の細片数十点に限られ所属時期を明確にできるまでには至らず、溝の性格も不明と言わざるを得ない。他に、C区南東域のSB2224建物跡を囲むようその桁・梁行に平行して巡るSD1639や、A区南東部でL字形に検出されたSD441等は区画溝と考えられる。建物跡に付随する雨落ち溝と想定されるものは、前述したSB574例の他にSB1505の南西隅でも認められた。A区中央域では北西-南東方向に、またB区中央の南辺でも東西方向に平行する2条の溝跡が走行しており、道路跡の側溝との見方もできなくはないが、部分的なためその真相は不詳である。その他、A区西半やC区西端部において検出された幾重にも平行または直行する溝跡群は、畑地耕作の際の畝跡と推測される。

5条確認された河川跡は南から北へ流れていたと判断されるものであり、その機能時期は各々異なったことが出土遺物等から予想される。以下では、各河川跡の概要を出土遺物を中心として検出順に記述していく。

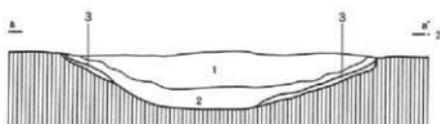
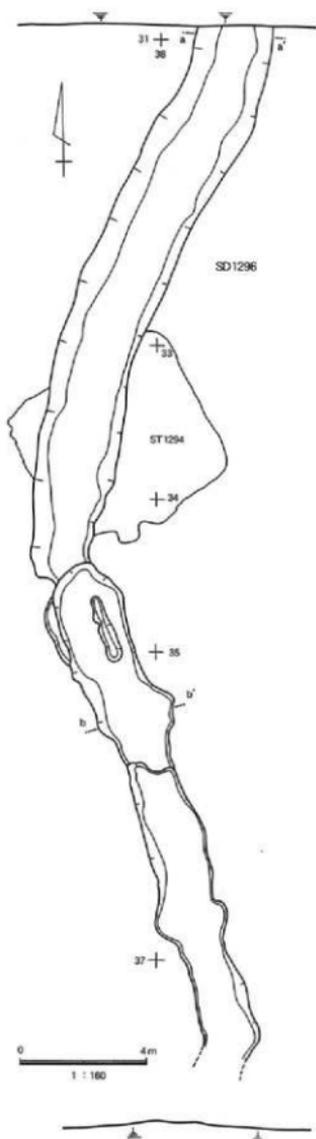
##### SG538 (第82・83図)

A区北東部を南東から北西方向へ流れたと推察される河川跡である。河川左岸のラインは検出できたが、現用水路によって分断されるA区東端域はほぼ全面が泥炭層に覆われ、掘り下げによっても右岸の立ち上がりが確認できなかった。したがって、河道幅等の平面的な規模は定かでない。左岸の検出南端には、幅6.5m程を測る不整半円形状の張り出し部が存在している。人工的に掘り込んだものとの判断は困難であるが、米沢市古志田東遺跡(手塚2001)の事例に照らせば、船着き場と認識しても良いと考えられる。この張り出し部に隣接して、西側約3mと南側約5mの場所に建物跡(SB631・641)が配置されている。河川と同時期に存在したかの確証はできないが、船着き場に付随した建物跡であった可能性は充分に考えられる。

遺物は主に調査区北東隅、河川跡中央部のF3・4層より出土している。土器器・須恵器等の土器を主体に、大足・箸等の木製品や土錘などの土製品が認められた。量的には4箱分に相当したが、復元から凶化できたものは僅かである。土器器(第83図1)の形態は体部下半にケズリを施す有段タイプのもので、底部内面にはヘラナデが観察される。同図2の須恵器器も体部下端および底部外辺にケズリが施され、底径比の大きな形態が特徴である。これらの所属年代は8世紀前半と推測されることから、河川が機能していた時期はそれ以前と捉えられる。

##### SG1155 (第84~87図)

B区西半域およびC区北東隅で検出された南東から北西へ向かう流路を示す河川跡で、河道は緩やかなS字状を呈している。検出上端5~8m程の幅を測り、蛇行する屈曲部の幅が狭ま



SD1296 (a-a')

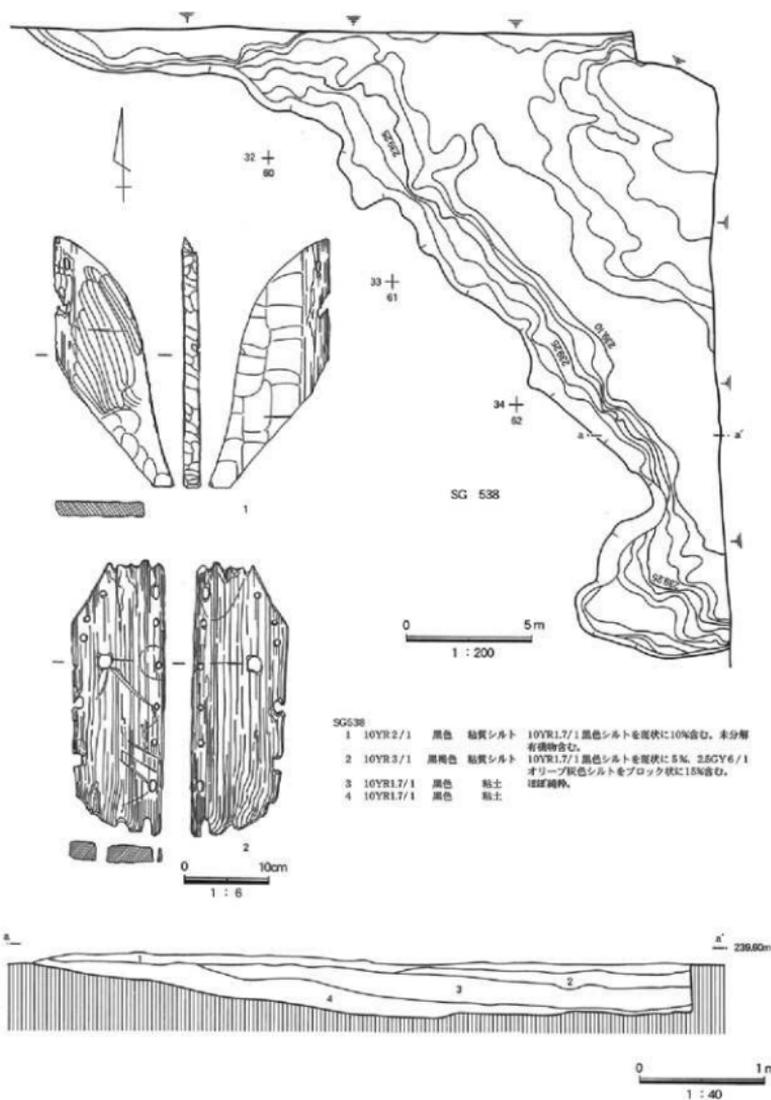
- 1 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト 10YR 3/1 黒褐色粘質シルトを塊状に40%含む。
- 2 7.5YR 3/1 黒褐色 粘質シルト 2.5Y 5/1 黄褐色砂質シルトをブロック状に若干含む。
- 3 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト 埋山



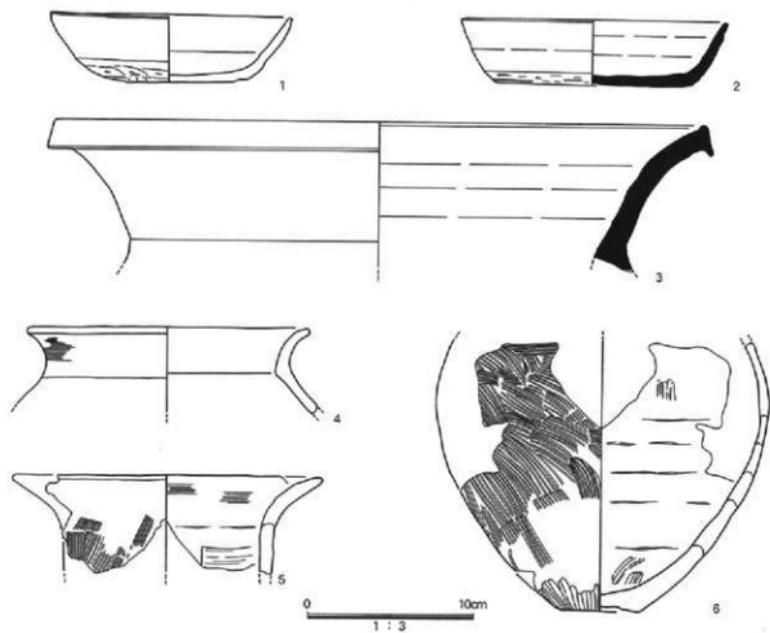
(b-b')

- 1 10YR 4/2 灰黄褐色 シルト 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルトを塊状に50%含む。
- 2 10YR 2/2 黒褐色 粘質シルト 5Y 5/1 黄褐色粘質シルトをブロック状に3%含む。
- 3 5Y 4/1 灰色 砂
- 4 5Y 5/1 灰色 粘質細砂

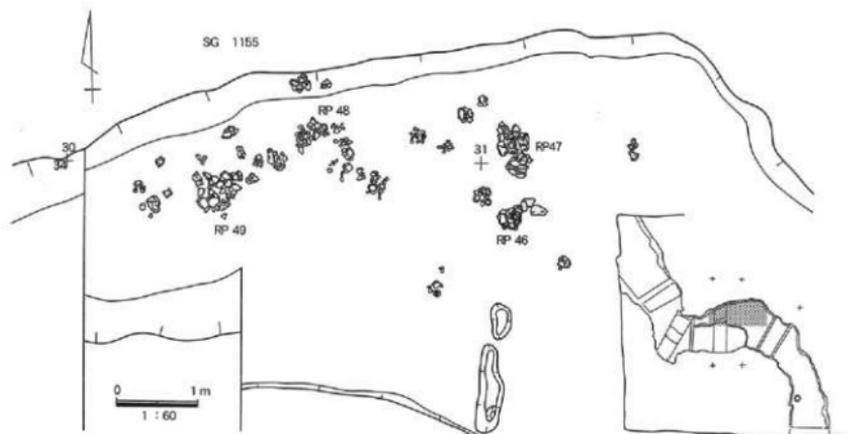
第81図 SD1296 溝跡



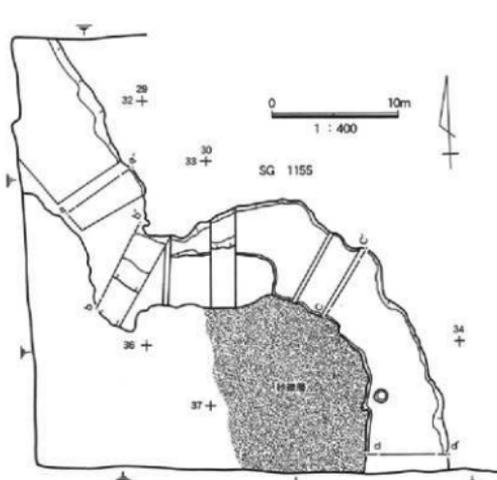
第82図 SG583 河川跡、出土遺物(1)



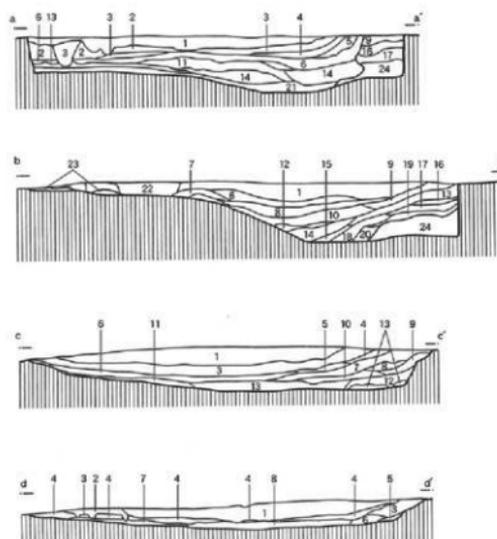
第83図 SG583 出土遺物 (2)



第84図 SG1155 遺物出土状況

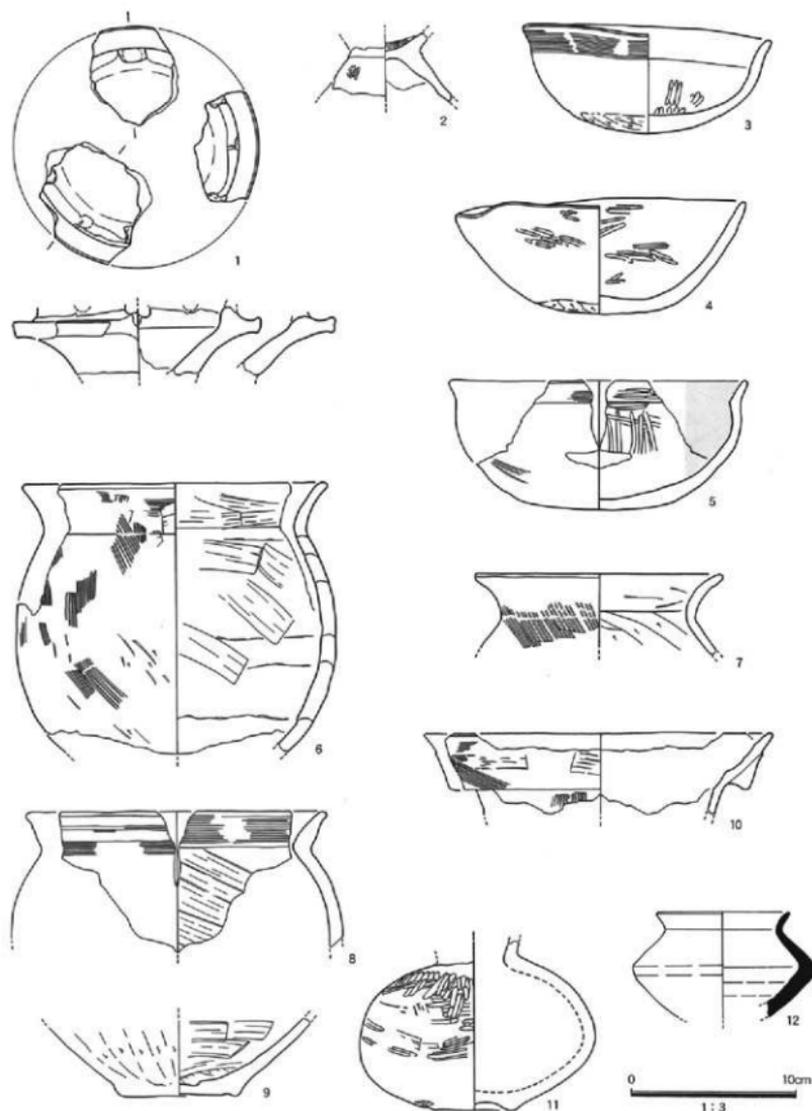


SG1155 (a, b)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
10YR3/2	黒褐色	10YR4/2	灰黄褐色	10YR4/2	灰黄褐色	10YR2/1	黒色粘質	10YR2/2	黒色粘質	10YR3/1	黒褐色	5Y5/1	灰色	10YR3/1	黒褐色	2.5Y5/2	暗灰青色	10YR4/1	10YR3/1	10YR3/1	10YR3/2	10YR3/1	10YR2/1	10YR2/1	10YR2/1
シルト	シルト	砂	砂	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	細砂	粘土	粘土	細砂	砂質シルト	砂質シルト	シルト	粘質シルト						
をブロック状に10%含む。礫を含む。	をブロック状に10%含む。	をブロック状に10%含む。	をブロック状に10%含む。	をブロック状に5%含む。礫を含む。	をブロック状に10%含む。																				



断面図 (a - b) = 239.00m (c - d) = 239.60m

第85図 SG1155 河川跡



第86図 SG1155 出土遺物 (1)



第387図 SG1155 出土遺物 (2)

る。深さは北西部で確認面から約1mを測るが、左岸には浅瀬となる部分が存在する。南流する河道が西へ蛇行することにより、左岸外側では広い範囲が砂礫層となっている。この部分は氾濫原と考えられ、下流に当たる北西城区には河道内に砂の堆積層が認められる。

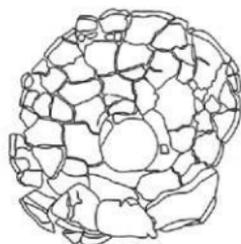
遺物は主に検出中央部から南半域にかけて多く出土しており、特に第84図に示す蛇行城右岸ではまとまって出土する状況が見られた。遺物は土器に限られるが、全体で4世紀から8世紀初頭頃までの多様な内容を含んでいる。掲載した資料は、第86図12の須恵器を除いてこの蛇行城から出土した土器群である。第86図1は受部に突起状の装飾を施したと思われる土師器の特殊器台であり、内外面とも赤彩の痕が残っている。県内では鶴岡市畑田遺跡（眞壁他1995）等に類例が知られ、共伴土器群から4世紀前半に位置付けられている。その他、2の高坏や10の有段口縁の壺、11の埴も4世紀代の塩釜式の所産であろう。3～5の坏は5世紀末から6世紀前葉の形態的特徴を有するものである。第87図の大型甕は塩釜式もしくは南小泉式の範疇で捉えられよう。

## SG1335 (第88～92図)

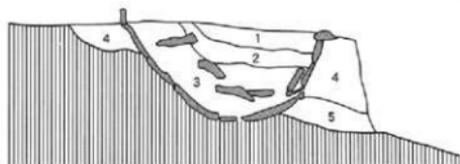
B区東半中央を南から北へ流れていたと予測できる河川跡である。ST1337・1382・1420・1440の各住居跡と重複関係にあり、これ



が埋め置いたように正位の状態で出土しており、埋設土器の様相も窺われた。全面に施文された燃糸文の特徴等から縄文時代中期末葉に比定され、第90図の他の土器も同一時期に属するものと理解される。第91図および第92図1～3の土師器群も、ST1337西側の河川左岸域から一括出土したものである。坏・甕・甔の器種が認められ、年代的には概ね6世紀の住社式の範疇で捉えられる。坏は丸底タイプで、口縁が屈曲せず外反する形態を呈する。甕には法量的な大小の他、球胴および丸味を持つ長胴形のものが見られ、後者が主体を占める。第91図8の甔は球胴甕形で無底式のものであり、内外面のケズリと外面上半のヘラナデが特徴的と言える。第92図4以下は奈良時代に属す土器群である。体部下端と底部全面に回



239.50m



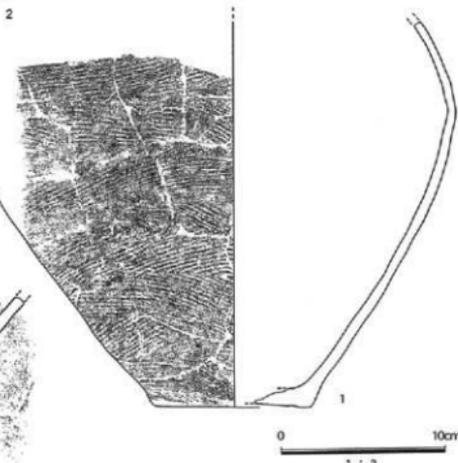
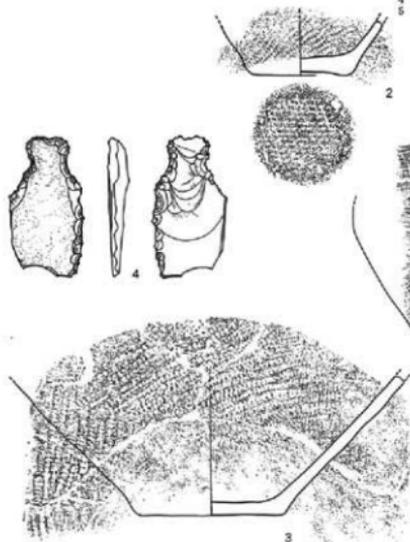
EU1399

- |   |          |      |       |                            |
|---|----------|------|-------|----------------------------|
| 1 | 10YR 2/1 | 黒色   | シルト   | 10YR 5/2 灰黄褐色シルトを底状に20%含む。 |
| 2 | 10YR 5/2 | 灰黄褐色 | シルト   | 10YR 2/1 黒色シルトをトップ状に5%含む。  |
| 3 | 10YR 2/2 | 黒褐色  | シルト   | 10YR 5/2 灰黄褐色シルトを粒状に3%含む。  |
| 4 | 10YR 3/2 | 黄褐色  | シルト   | SD1335埋土                   |
| 5 | 10YR 3/1 | 黒褐色  | 粘質シルト | SG1335埋土                   |

0 20cm

1 : 10

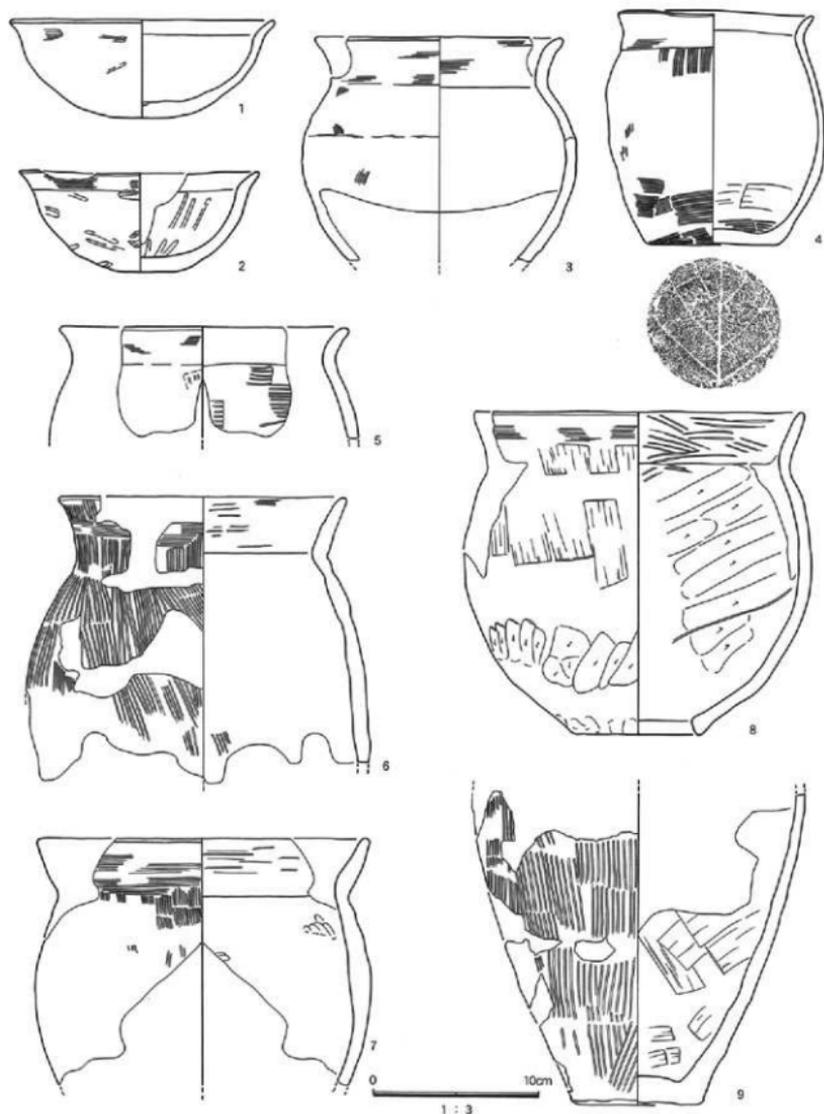
第89図 RP50出土状況



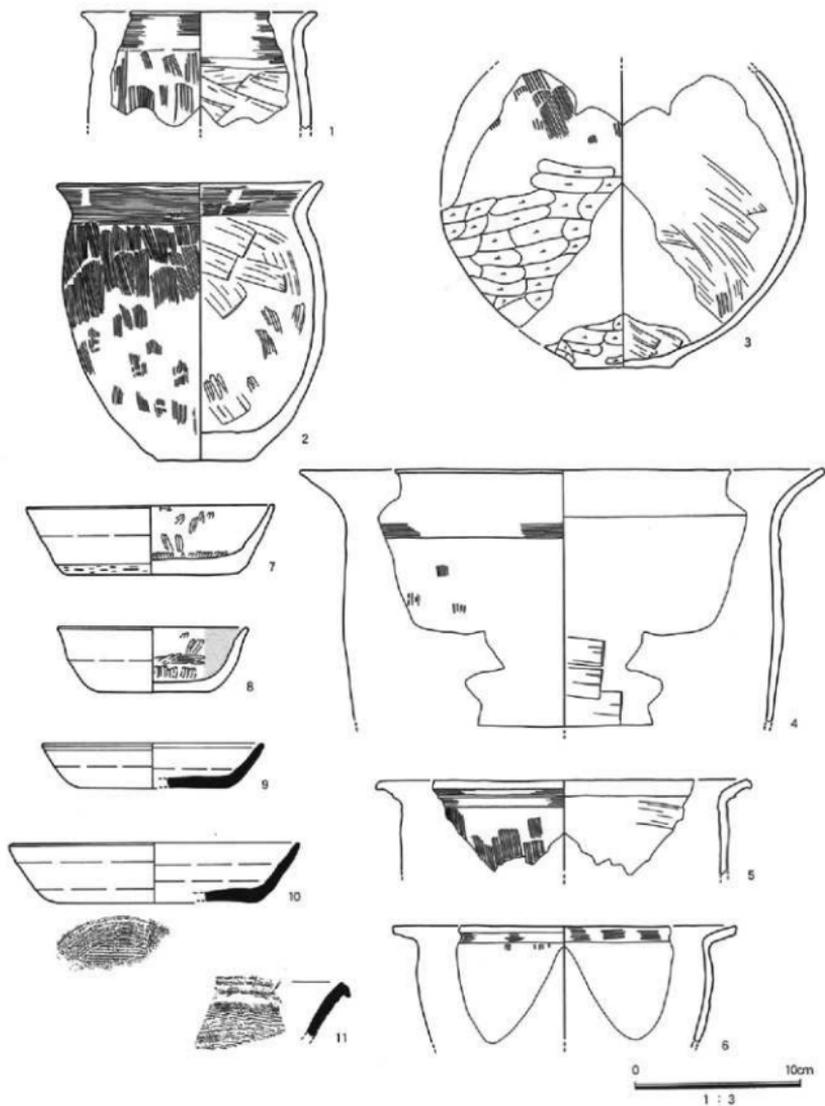
0 10cm

1 : 3

第90図 SG1335 出土遺物 (1)



第91図 SG1335 出土遺物 (2)



第92図 SG1335 出土遺物 (3)

転ヘラケズリを施す土師器杯(7)は、内面の黒色処理が省略されており、本来的には黒色土器として作成されたものであろう。9・10の須恵器杯は器高が低く、底径の大きな扁平様の形態が知られる。図上復元にて口径が170mmを超える大型の10は、静止糸切り後に底部外周にヘラケズリ調整を受ける。これらの杯類は8世紀後半に所属するものであろう。

#### SG1497 (第93・94図)

B区東端部で検出された河川跡で南から北への流路を示すが、底面の状況から河道は北東方へ向かっている。落ち込みは検出右岸で急傾になるのに対し、左岸ではきわめて緩やかな傾斜をなす状況から見て、検出西側は氾濫原となっていたことが考えられる。前述したとおり調査区北東隅において、中世の建物跡SB1505が河川跡を切って存在している。

出土遺物は極く少量で、明確な時期を窺えるまでの資料は得られなかったが、土器片から察して奈良・平安時代のもものと推定される。注目される点は第93図に示した木簡の出土である。積文と解説については三上善孝氏(山形県立米沢女子短期大学)に依頼し、巻末に付したので参照願いたい。それによると、雨乞いもしくは止雨を願って水の神である龍(竜)王に祈念した「呪符木簡」と判明した。河川跡から出土した点において内容に符合すると理解できるが、投棄場所が上流であった可能性もあるため、必ずしも本遺跡に関わるものではないと考えねばなるまい。

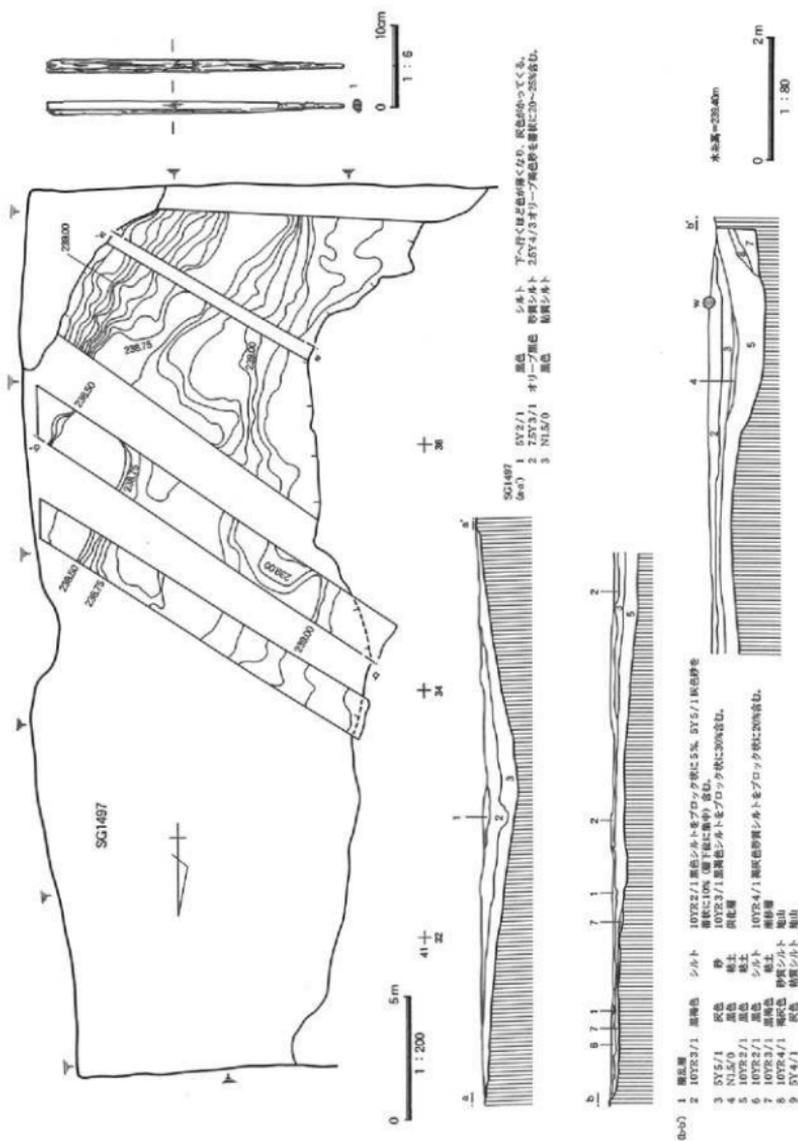


第93図 木簡

#### SG2131 (第95～100図)

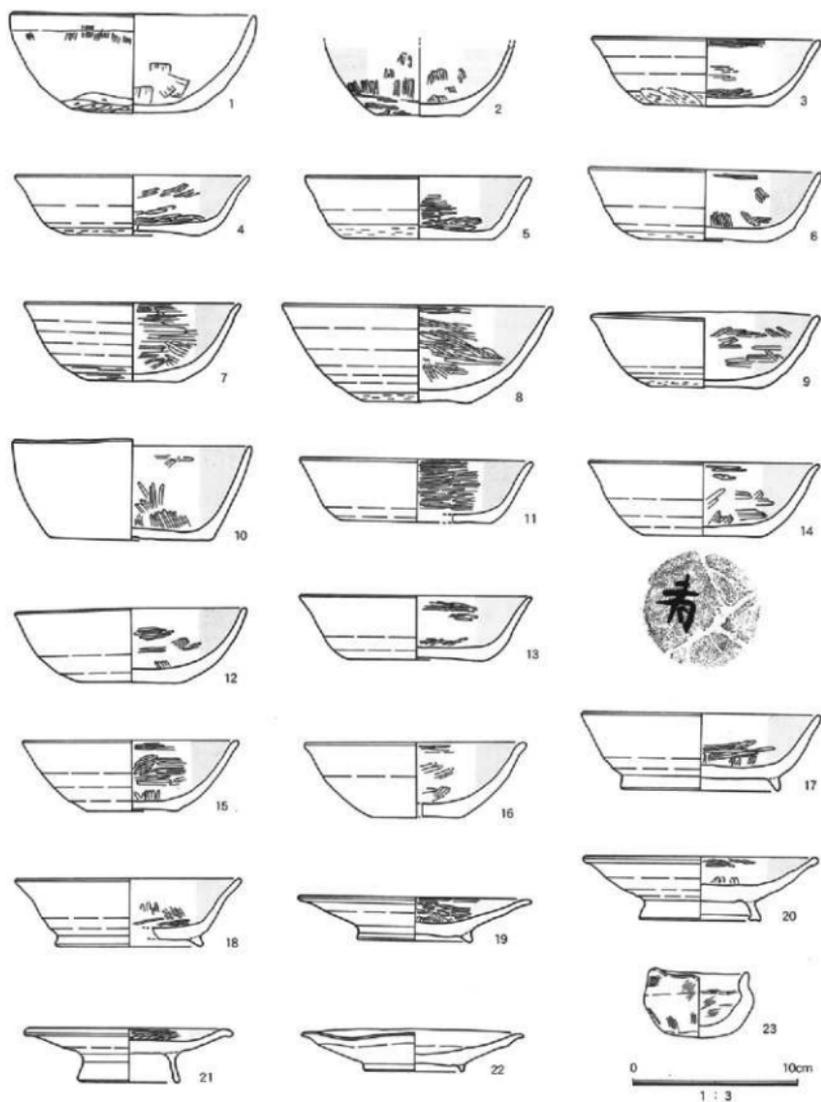
C区中央部で検出され、南北方向の流路を取る河川跡である。検出上端幅で約8～15m、最深部までは1m程を測る。C区では本河川跡を境に、その東西で遺構配置の在り方が大きく異なる。すなわち、東側の掘立柱建物跡・土坑群と西側の竪穴住居跡群に概括される。構築時期の相異は認められるものの、企画的な土地区分が行われていた様相が指摘できたことは前章第2節でも触れてきた。検出中央の右岸に近接して総柱の倉庫跡SB2222が存在しており、河川の機能時期と基を一にしていたと予見される。

土器を主体とする遺物はほぼ全域から出土しており、整理箱にして35箱に相当する分量がある。層位別では堆積土上層のF1～3層からの出土数が多くを占める。また、器種別では供膳器の卓越が指摘される。供膳器には土師器・須恵器・黒色土器・赤焼土器の各種別があり、蓋・杯・高台付杯・皿の器種を認める。底部切離における区分では、ヘラ切り・糸切りのものがほぼ半数づつで拮抗している。黒色土器の杯類では底径の比率が大きく、ヘラケズリ再調整を施す一群が古相を示すものと受け取られる。底径に加え器高の比も大きい杯(第96図10)は、底部調整を手持ちヘラケズリで行っており、より古い時期に当てはめられよう。対して、高足の高台が付く皿(同図21)は最も新相を呈す類に属す。一方、須恵器においては糸切り杯の割合が高く、ヘラ切り杯でも無調整のものが目に付く。これらは層位的に区別できるものではなく、ある程度の混在が予測され、9世紀中葉から末葉に至る概ね半世紀の間に属す土器群と考える。

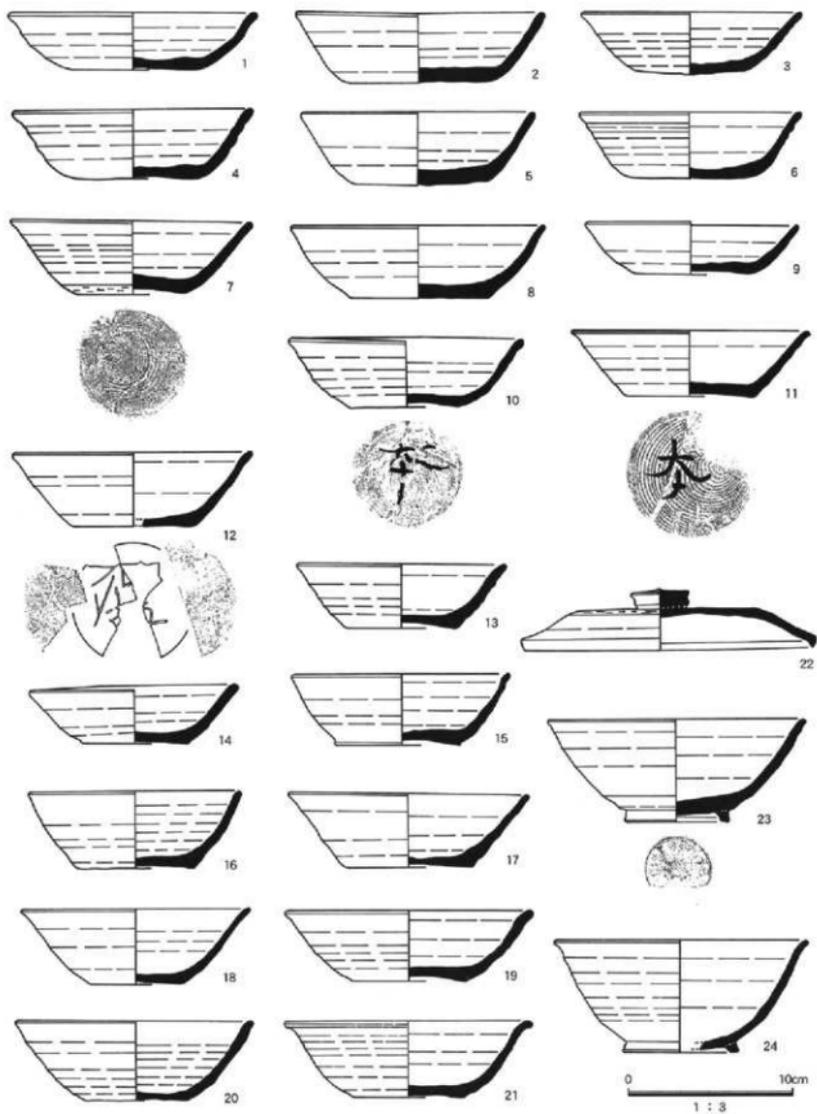


第94図 SG1497 河川跡

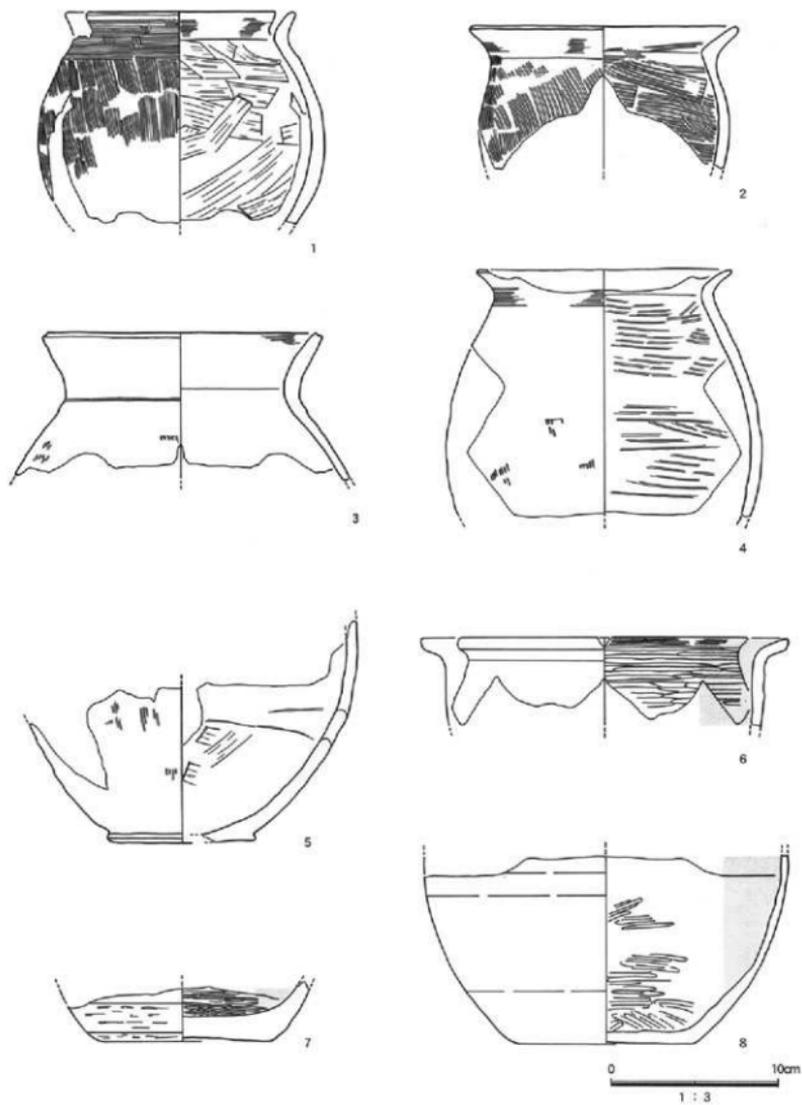




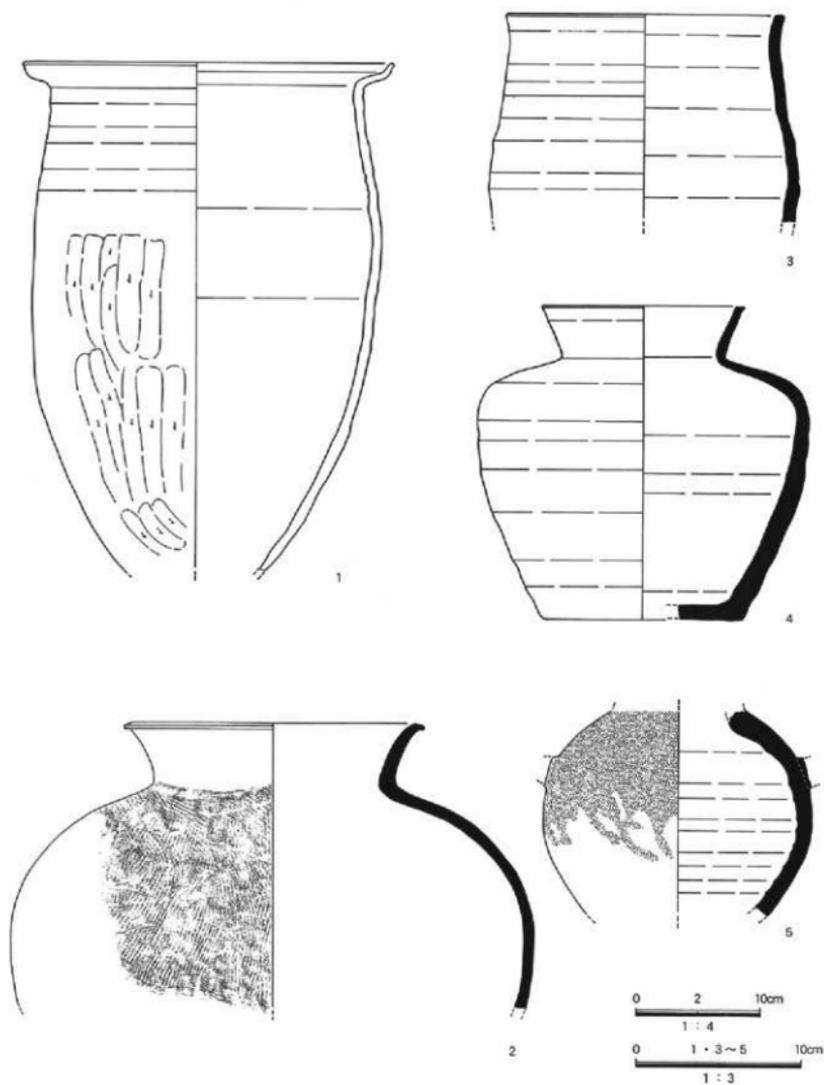
第96図 SG2131 出土遺物 (1)



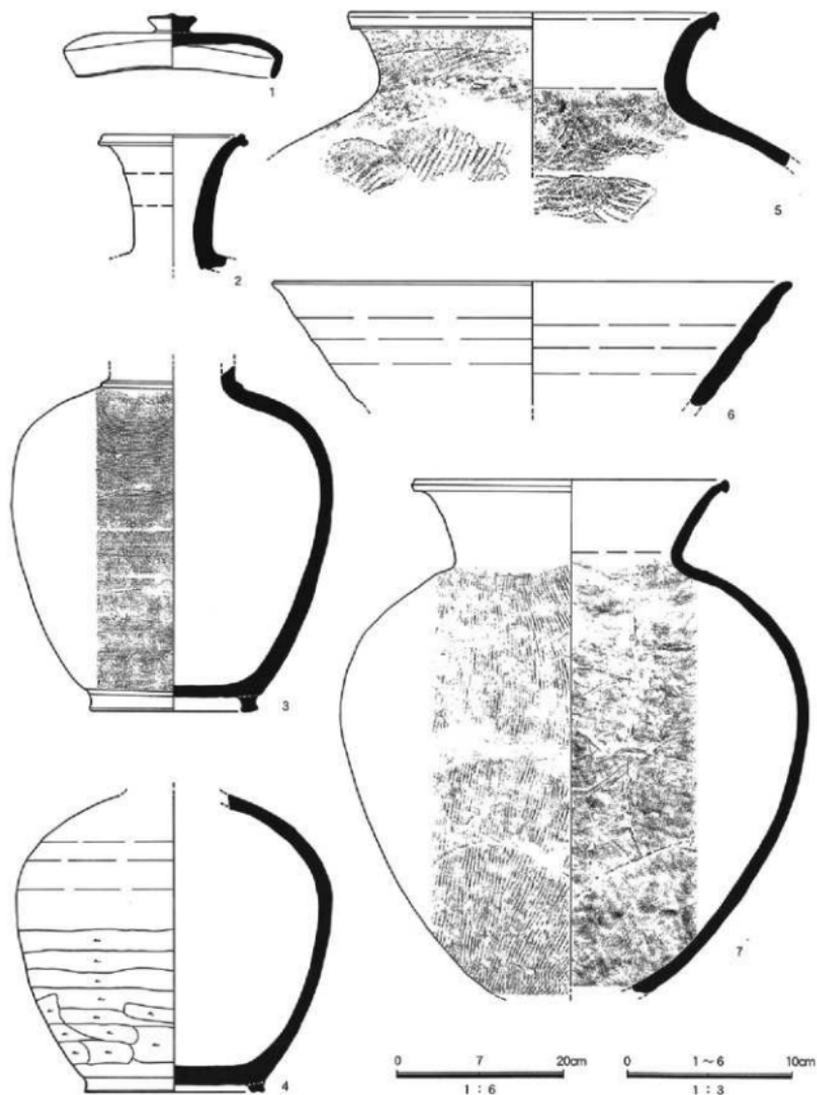
第97図 SG2131 出土遺物 (2)



第98図 SG2131 出土遺物 (3)



第99図 SG2131 出土遺物 (4)



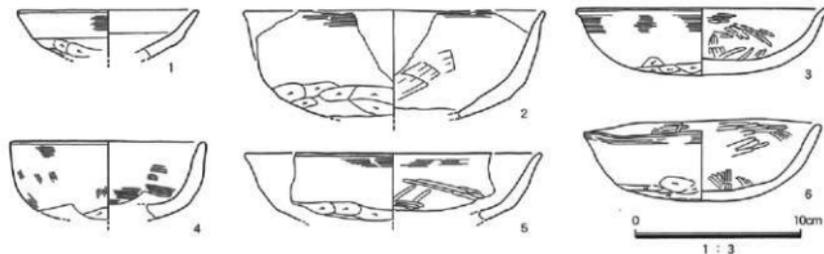
第100図 SG2131 出土遺物 (5)

## 5 その他の遺構内・包含層出土遺物

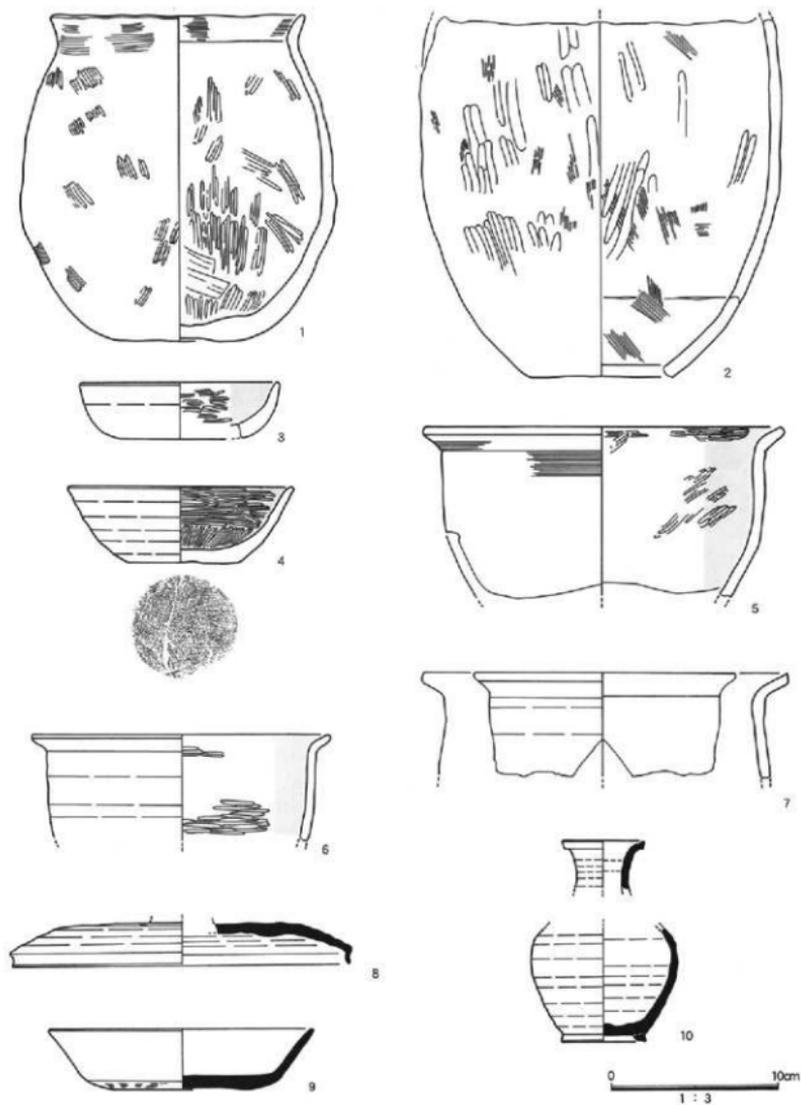
これまでに取り上げた住居跡等の遺構や河川跡以外からも、散発的もしくは一括性に乏しいながら多種の遺物が出土している。以下には、その他の遺構内から出土した遺物について、各種別・器種毎に特徴的なものを、また包含層出土のものについては主要な遺物を、それぞれ選択して掲載した。

第101図は、C区西半に分布するプランが不確かな性格不明遺構などから出土した土師器坏である。竪穴住居跡等はこれを切って構築しているため、旧河川の可能性が考えられるが定かでない。非内黒の坏で、形態的特徴から古墳時代5世紀後半の年代が当てはめられ、ST1440・1914出土土器群等と対応するものと推察される。器面調整における外面下半のケズリが顕著で、内面はミガキの他にヘラナデやハケメを施すものが見られる。第102図1の土師器甕は体部下半に最大径を有すもので、最終調整として内外面ともにヘラミガキを施している。同図2は甕形を呈す無底式的大型甕で、内外面を縦方向の幅広いミガキで仕上げている。これらは住居跡出土例により、6世紀代の所産と考定される。3～6は内黒の黒色土器で、坏・鉢・甕の器種が知られる。4の坏は成形・調整とも丹念な作りで、底部は手持ちヘラケズリにて再調整を受ける。器高と底径の度合いから切離法は回転糸切り手法と想定され、平安時代初め9世紀前半に属す一例と思われる。8～10は須恵器の各器種である。8の蓋は口径が200mmを越す扁平な大型品で、天井部は回転ヘラケズリで調整される。盤とセットになるものと理解され、奈良時代8世紀初め頃の産物に比定される。

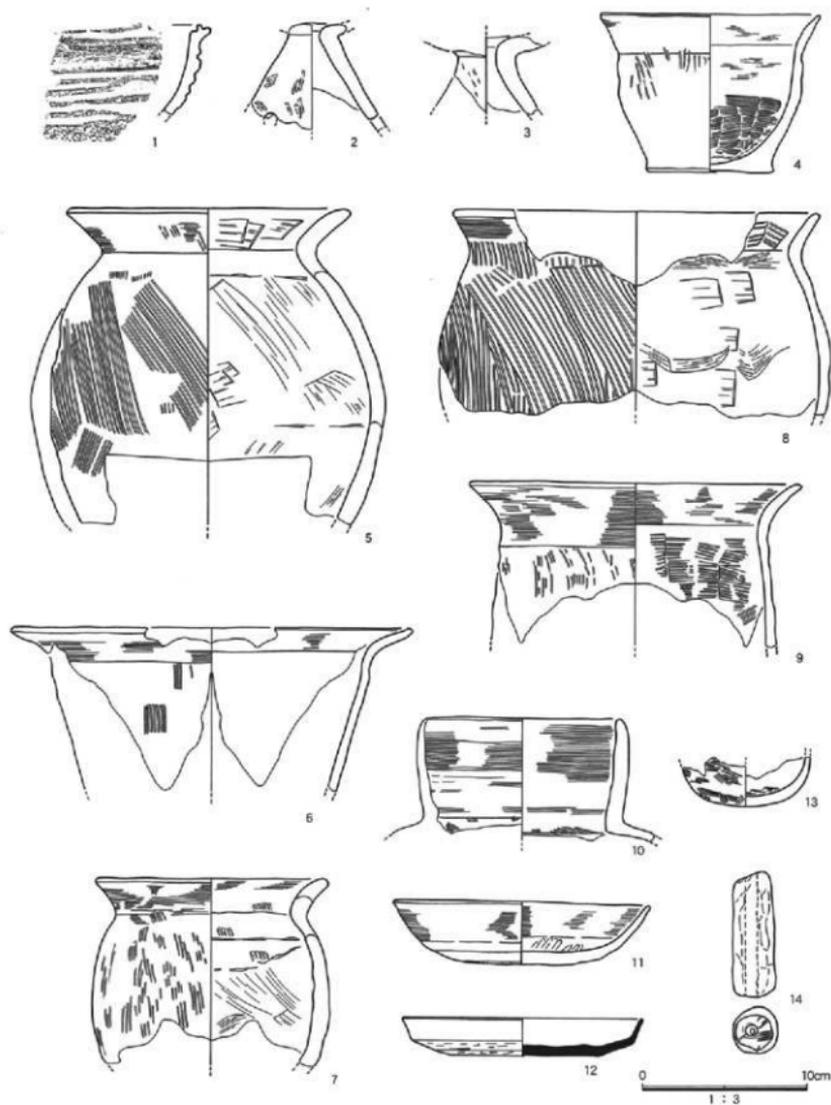
包含層出土遺物のうち主要なものは第103図にまとめて掲載した。2・3は土師器器台の脚部資料で、3の外面には部分的に朱彩が認められる。4世紀代の「壺釜式」に属するものであろう。4～9の甕はある程度の器形が窺い知れるもので、法量的な相異を加味して掲載した。所属時期は古墳時代中期から平安時代に及ぶと考察され、形態別でも球胴・長胴・紡錘形などの多様性が見て取れよう。10は壺の口頸部資料で、肩から内湾気味に直立する器形を示す。体部形態は不明ながら球形もしくは楕円球形を呈すと予想され、「南小泉式」に帰属するものと思われる。11は底辺部をケズリによって作出する丸底形態の土師器坏である。12は体部下半と底部に回転ヘラケズリを受ける須恵器坏で、浅身な形態と明瞭な稜線が特徴的である。これらは共に8世紀中葉の所産と推測される。



第101図 遺構内出土遺物 (1)



第102図 遺構内出土遺物 (2)



第103図 包含層出土遺物

表7 遺物観察表(5)

遺構番号	探検番号	種別	器種	計測 (mm)				断面		取付位置・数量等	出土地点・層位	登録番号	備考
				口径	底径	断面	器厚	外面	内面				
SK412	第7901	織文土器	鉢	(144)	52	120	7	織文 (LR)			Y	RP23	
	第7902	赤土土器	高台付杯	101	52	71	6			回転糸切り	F-2	RP24	織土・織物・貝
SK520	第7903	木製品	輪	190	120	51	4				F-2	RP25	
	第8001	黒色土器	年	(152)	90	61	3	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-2	RP26	内面黒色処理, 内面編織模様
SG158	第8201	木製品 (楕圓)	長 334 幅 110	厚 18							F-2		長巻・楕圓・ジョウケズリ
	第8202	木製品	大足 長 134 幅 110	厚 21							F-2		
	第8301	土師器	鉢	144	76	43	5	ケズリ	ヘラナデ (縦溝)		F-4	RP25	
	第8302	赤土土器	鉢	160	118	40	5	回転ヘラケズリ		回転ヘラケズリ	F-4		
	第8303	赤土土器	甕	(290)	(89)	12					F-4		
	第8304	土師器	甕	(170)	(52)	6					F-4		
SG1155	第8305	土師器	甕	(180)	(57)	8		ハケス	ヘラナデ		F-4		
	第8306	土師器	甕	48	(164)	7		ハケス・ミガキ	ハケス・ミガキ		F-4		
	第8601	土師器	特殊器付		(41)	10					F-13		赤胎
	第8602	土師器	高坪		(41)	8		ミガキ	ハケス		F-13		
	第8603	土師器	杯	150		6		ケズリ	ミガキ		F-13		
	第8604	土師器	杯	176		7		ケズリ・ミガキ	ミガキ		F-13		
	第8605	土師器	杯	(180)	(79)	5			ミガキ		F-13		内面黒色処理
	第8606	土師器	甕	184	(165)	9		ハケス・ケズリ	ヘラナデ		F-13	RP46	
	第8607	土師器	甕	(150)	(49)	5		ハケス	ケズリ		F-13		
	第8608	土師器	甕	(180)	(83)	8			ヘラナデ		F-13		
	第8609	土師器	甕	74	(46)	7		ケズリ	ヘラナデ		F-13		
	第8610	土師器	甕	(210)	(49)	6		ハケス	ヘラナデ		F-13		
SG1335	第8611	土師器	甕	68	(104)	7		ケズリ・ミガキ			F-13	RP48	
	第8612	赤土土器	甕	80	(63)	9					F-13		
	第8701	土師器	甕	148	64	29	12	ハケス	ハケス・ヘラナデ		F-13	RP47	
	第8702	土師器	甕	178	80	34	12	ハケス・ミガキ	ハケス・ケズリ		F-13	RP49	
	第9001	織文土器	高坪	126	(31)	8		逆巻機軸文 (L)			F-1, 2	RP50	
	第9002	赤土土器	鉢	62	(33)	5		織文 (LR)			F-1, 2		
	第9003	赤土土器	鉢	90	(83)	7		織文 (LR)			F-1, 2		
	第9004	打製石器	石籠	長 (54) 幅 30	厚 8						F-1, 2		
	第9101	土師器	杯	(160)	60	6		ミガキ			F-1, 2		
	第9102	土師器	杯	148	62	7		ミガキ	ミガキ		F-1, 2		
	第9103	土師器	甕	(148)	(137)	7		ハケス			F-1, 2		
	第9104	土師器	甕	117	78	143	5	ハケス	ハケス・ヘラナデ	水染		F-1, 2	
第9105	土師器	甕	(174)	(60)	7		ハケス	ハケス		F-1, 2			
第9106	土師器	甕	178	(174)	9		ハケス	ハケス		F-1, 2			
第9107	土師器	甕	(200)	(150)	9		ハケス	ミガキ		F-1, 2			
第9108	土師器	甕	(180)	77	156	7	ケズリ・ヘラナデ	ハケス・ケズリ		F-1, 2			
第9109	土師器	甕	80	(190)	7		ハケス	ヘラナデ		F-1, 2			
第9201	土師器	甕	(142)	(71)	6		ハケス	ヘラナデ		F-1, 2			
第9202	土師器	甕	181	86	179	7	ハケス	ヘラナデ・ミガキ		F-1, 2	RP46		
第9203	土師器	甕	(28)	(180)	5		ハケス・ケズリ	ヘラナデ		F-1, 2			
第9204	土師器	甕	(16)	(153)	5		ハケス	ヘラナデ		F-1, 2			
第9205	土師器	甕	(24)	(57)	5		ハケス	ヘラナデ		F-1, 2			
第9206	土師器	甕	(206)	(71)	5					F-1, 2			
第9207	土師器	杯	(148)	104	42	6	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1, 2			
第9208	黒色土器	杯	114	66	29	6		ミガキ	不明(ケナ)	F-1, 2		内面黒色処理	
第9209	赤土土器	杯	(134)	(90)	27	8			不明(回転ヘラケズリ)	F-1, 2			
第9210	赤土土器	杯	(176)	(124)	26	5			磨石(回転ヘラケズリ)	F-1, 2			
第9211	赤土土器	甕	(32)	(32)	6		磨石(縦文)			F-1, 2			
SG1497	第9212	木製品	木籠	長 (129+68) 幅 20	厚 3						F-1	KW43	中折部欠損
	第9401	木製品 (楕圓)	長 (355) 幅 15								F-1		先端部加工
	第9601	黒色土器	杯	(147)	69	6		ハケス・ケズリ	ヘラナデ		F-1~3		
	第9602	黒色土器	杯	84	(42)	3		ミガキ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9603	黒色土器	杯	138	76	42	4	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9604	黒色土器	杯	(142)	(80)	26	4	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9605	黒色土器	杯	(138)	90	38	5	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-4~8		内面黒色処理
	第9606	黒色土器	杯	(140)	74	43	5	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9607	黒色土器	杯	130	56	48	5	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9608	黒色土器	杯	(162)	64	59	6	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9609	黒色土器	杯	138	64	47	5	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9610	黒色土器	杯	144	95	61	5		ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理, 内面編織模様
SG2121	第9611	黒色土器	杯	(140)	(85)	28	4		ミガキ	回転ヘラケズリ	F-1~3		内面黒色処理
	第9612	黒色土器	杯	129	62	45	5		ミガキ	回転糸切り	F-1~3		内面黒色処理
	第9613	黒色土器	杯	(140)	(84)	39	4		ミガキ	回転糸切り	F-1~3		内面黒色処理
	第9614	黒色土器	杯	(140)	70	45	5		ミガキ	不明(ケナ)	F-4~8		内面黒色処理, 内面編織模様
	第9615	黒色土器	杯	(130)	84	42	4		ミガキ	回転糸切り	F-1~3		内面黒色処理
	第9616	黒色土器	杯	(134)	84	45	6		ミガキ	回転糸切り	F-1~3		内面黒色処理
	第9617	黒色土器	高台付杯	(144)	96	46	5		ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9618	黒色土器	高台付杯	(136)	(85)	41	4		ミガキ	不明(ケナ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9619	黒色土器	甕	(140)	70	29	5		ミガキ	回転糸切り	F-4~8		内面黒色処理
	第9620	黒色土器	甕	142	74	39	6		ミガキ	回転糸切り	F-1~3		内面黒色処理
	第9621	黒色土器	甕	(125)	(60)	32	4		ミガキ	不明(ケナ)	F-1~3		内面黒色処理
	第9622	赤土土器	甕	133	60	25	5			不明(ケナ)	F-4~8		
第9623	赤土土器	杯	58		42	8				F-1~3			

表8 遺物観察表(6)

遺構番号	詳細番号	種別	層種	計測値 (mm)				調査技法		底面埋堀・調査等	出土地点・層位	登録番号	備考	
				口径	底径	部高	型厚	外面	内面					
SG2131	第97層1	溝底層	坪	(150)	78	35	4			回転ヘラ切り	F4~8			
	第97層2	溝底層	坪	150	90	44	5			回転ヘラ切り	F4~8			
	第97層3	溝底層	坪	(134)	68	38	4			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層4	溝底層	坪	145	74	43	4			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層5	溝底層	坪	141	82	46	5			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層6	溝底層	坪	(134)	78	40	5			回転ヘラ切り	F4~8			
	第97層7	溝底層	坪	145	66	45	5	回転ヘラケズリ		回転ヘラ切り	F1~3		底層:ヘラ記号「角」	
	第97層8	溝底層	坪	152	83	44	5			回転ヘラ切り	F4~8			
	第97層9	溝底層	坪	130	70	32	4			回転ヘラ切り	F4~8			
	第97層10	溝底層	坪	141	66	43	4			回転ヘラ切り	F1~3		底層:遺書「大十」	
	第97層11	溝底層	坪	(144)	78	35	4			回転ヘラ切り	F1~3		底層:遺書「大十」	
	第97層12	溝底層	坪	(144)	(74)	45	4			回転ヘラ切り	F1~3		底層:ヘラ徳文字	
	第97層13	溝底層	坪	(126)	68	39	5			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層14	溝底層	坪	127	65	36	5			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層15	溝底層	坪	130	76	43	4			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層16	溝底層	坪	(128)	70	46	4			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層17	溝底層	坪	145	78	46	4			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層18	溝底層	坪	(138)	55	46	3			回転ヘラ切り	F4~8			
	第97層19	溝底層	坪	(108)	70	43	5			回転ヘラ切り	F4~8			
	第97層20	溝底層	坪	143	61	48	5			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層21	溝底層	坪	(150)	66	46	4			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層22	溝底層	皿	175	37	4	回転ヘラケズリ			回転ヘラ切り	F1~3			
	第97層23	溝底層	高台付坪	(156)	83	62	5			本明(遺書欠)	F1~3			
	第97層24	溝底層	高台付坪	(156)	70	68	4			本明(ナ字)	F1~3			
	第98層1	土師器	甕	(138)	(129)	6	ハケメ	ヘラナデ				F1~3		
第98層2	土師器	甕	(160)	(67)	6	ハケメ	ハケメ				F4~8			
第98層3	土師器	甕	(168)	(69)	6	ハケメ					F4~8			
第98層4	土師器	甕	(152)	(150)	7	ハケメ	ハケメ				F1~3			
第98層5	土師器	甕		88	(134)	7	ハケメ	ヘラナデ	本重値		F4~8			
第98層6	黒色土師	甕	(226)		(53)	7	ミガキ				F1~3		内面黒色処理	
第98層7	黒色土師	甕		163	(36)	9	回転ヘラケズリ	ミガキ	不明(回転ヘラケズリ)		F4~8		内面黒色処理	
第98層8	黒色土師	甕	(168)	(143)	4			ミガキ	不明(ナ字)		F4~8		内面黒色処理	
第99層1	赤黒土師	甕	221		(265)	5	ケズリ				F4~8			
第99層2	赤黒土師	甕	238		(229)	8					F1~3			
第99層3	赤黒土師	甕	(168)	(126)	6	平行タタキ	無文アタ				F1~3			
第99層4	赤黒土師	甕	(120)	(120)	(91)	8					F4~8			
第99層5	赤黒土師	甕	最大径(141)	(124)	8						F1~3		外面上半に白粉塗	
第100層1	赤黒土師	甕	120		39	5					F9~11			
第100層2	赤黒土師	甕	85		(81)	10					F4~8			
第100層3	赤黒土師	甕		102	(210)	7	ハケメ	ハケメ			F9~11			
第100層4	赤黒土師	甕		(108)	(80)	6	回転ヘラケズリ	ハケメ	本明(ナ字)		F9~11		底層:ヘラ記号「ㄨ」	
第100層5	赤黒土師	甕	222		(94)	11					F1~3			
第100層6	赤黒土師	鉢	(312)		(75)	10					F1~3			
第100層7	赤黒土師	甕	376		(626)	7	平行タタキ	無文アタ			F4~8			
SD1961	第101層1	土師器	坪	(110)		(29)	6	ケズリ			F1			
SX1636	第101層2	土師器	坪	(182)		(65)	8	ケズリ	ヘラナデ		F1			
	第101層3	土師器	坪	(182)		46	7	ケズリ	ミガキ		F1			
	第101層4	土師器	坪	(128)		(47)	7	ハケメ・ケズリ	ハケメ		F1			
SX1946	第101層5	土師器	坪	(180)		(41)	6	ケズリ	ミガキ		F1			
	第101層6	土師器	坪	144		56	6	ケズリ	ミガキ		F1			
SX2018	第102層1	土師器	甕	(152)	76	(199)	6	ミガキ	ヘラナデ・ミガキ		F1			
SD1233	第102層2	土師器	甕	86	(217)	6	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ			F2			
SX1636	第102層3	黒色土師	坪	120		34	6		ミガキ		F1		内面黒色処理	
SP1602	第102層4	黒色土師	坪	(130)	64	46	6		ミガキ	本明(回転ヘラケズリ)	F1		内面黒色処理	
SX1636	第102層5	黒色土師	鉢	215		(103)	7		ミガキ		F1		内面黒色処理	
SK1675	第102層6	黒色土師	甕	(180)		(65)	6		ミガキ		F1		内面黒色処理	
SX1636	第102層7	赤黒土師	甕	(220)		63	8				F1			
SX2015	第102層8	赤黒土師	甕	204		(25)	5				F1		大形器:回転ヘラケズリ	
	第102層9	赤黒土師	鉢	(160)	84	37	4	回転ヘラケズリ		不明(回転ヘラケズリ)	F1			
SD1639	第102層10	赤黒土師	甕	50	51	(120)	4			不明(回転ヘラケズリ)	F1		扉蓋:縦0.1以内白粉塗	
弥生群	第103層1	縄文土師	鉢		(55)	7	口唇沈没, 区画沈没文(多動), 縄文(LR)				36~31層			
	第103層2	土師器	部付		(65)	9	ミガキ				A区			
	第103層3	土師器	部付		(48)	11					A区			
	第103層4	土師器	甕	(132)	76	36	6	ハケメ	ヘラナデ	本重値		5~37層		赤器
	第103層5	土師器	甕	(170)		(92)	9	ハケメ	ヘラナデ			17~35層		
	第103層6	土師器	甕	(200)		(99)	8	ハケメ	ハケメ			17~35層		
	第103層7	土師器	甕	(140)		(113)	8	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ			17~35層		
	第103層8	土師器	甕	(220)		(123)	7	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ			11~32層		
	第103層9	土師器	甕	(240)		(99)	6	ハケメ				17~35層		
	第103層10	土師器	甕	(110)		(74)	9	ハケメ	ハケメ			A区		
	第103層11	土師器	坪	154		38	5	ケズリ	ミガキ			17~35層		
	第103層12	赤黒土師	坪	144		89	23	4	回転ヘラケズリ		不明(回転ヘラケズリ)	19~31層		
	第103層13	小型土師	坪		(30)	5			ハケメ	ヘラナデ		58~35層		
	第103層14	土師器	土師	高75		径26						65~34層		

## V まとめと考察

### 1 調査のまとめ

今回の調査は、主要地方道米沢高畠線道路改良工事にかかる緊急発掘調査である。調査で得られた成果についての要約すると、以下のようになる。

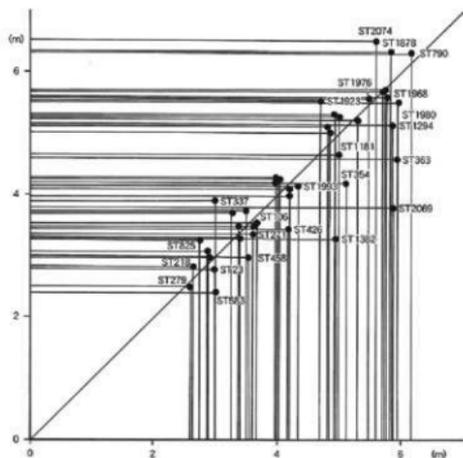
- 1) 跡上遺跡は山形県米沢市大字川井字元立に所在し、北流する羽黒川によって形成された自然堤防の後背湿地に立地する。遺跡の面積は約11万㎡で、今回の調査は遺跡にかかる事業計画部分の約12,000㎡を対象として実施した。その結果、遺跡は古墳時代中期から中世にわたり、断続的に営まれた集落跡であることが明らかとなった。
- 2) 検出された遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡のほか土坑や溝跡など、約1800基を数えた。また、南北方向に流路をとる5本の河川跡が認められた。遺構の分布状況は、概略的に見て河川間に挟まれた微高地を利用して構築された様相が指摘できた。
- 3) 竪穴住居跡は重複する事例を含め45棟検出された。特にC区西半域で密集した分布を示し、集落は河川跡に沿ってさらに南北方向に広がる状況が窺われた。これら住居跡の年代は出土土器により、古墳時代中期（5世紀後半）から平安時代前葉（9世紀）までに属することが判明した。7世紀が欠落するものの、時期区分では概括的に4期の変遷過程を把握することができた。
- 4) 掘立柱建物跡は12棟が検出された。規模的に母屋と考えられるものは3棟であり、他は倉庫または小屋としての性格が窺われた。構築時期は1棟を除き奈良・平安時代と推測され、根固め石を用いた庇付きの建物跡は中世以降の所産と位置付けした。総柱構成で倉庫と考えられる建物跡は河川跡脇に配されており、河川による物資運搬が行われていたことが予見された。
- 5) 5条確認された河川跡は、住居跡等との重複関係や堆積層内出土遺物から判断して、概ね4世紀から9世紀後半に及ぶ年代観が当てはめられた。河川は機能していた時期が各々異なるものと理解され、時代による流路の変遷が窺われた。加えて、機能時期毎に住居や建物配置の変遷が推察され、集落構成規模の一端を知ることができた。
- 6) 出土した遺物は、土師器・須恵器等の土器が多数を占め、他には主に河川跡内からの木製品や、砥石などの石製遺物があり、整理用コンテナにして160箱分量を数えた。遺物は河川跡から多くの量が出土しており、遺構内では住居跡とA区南東部の土坑でまとまりのある分布状況が見られた。
- 7) 遺物は河川跡からの出土が多く、全体数の約3割を占めた。住居跡ではC区検出住居の遺存状態が良好で、一括性の高い土器群の出土を見た。遺物の年代は周辺からの流れ込みと判断される縄文土器等を除けば、古墳時代と奈良・平安時代のものが所見され、後者が数量的に卓越していた。注意される遺物には、住居跡から出土した東海系の要素を持つ7世紀代の壺や、8世紀中葉の所産に考定される円面硯、河川跡から検出された祭祀・祈願に関わる呪符木簡などが認められた。

## 2 遺構・遺物の変遷

検出遺構の中で多数を占めた竪穴住居跡および出土遺物について、時期区分による分類を行いその変遷における特徴等の把握を試みたい。

45棟のうち削平等による破壊が著しかった一部の住居跡を除き、その出土遺物とともに図化掲載してきた。形状・規模・主軸方向等の違いから、幾つかに類別することはできそうである。第104図は住居跡の規模をグラフにしたものであるが、攪乱や調査区外にかかり全体を検出できなかった例は別として、ほぼ方形基調と見なすことができる。また、カマドを付設する主軸方向で若干長くなる傾向が指摘される。規模的には長軸が5mを超えるST1976等大型の一群、4m前後を測るST1993等中型の一群、3m以下となるST23等小型の一群の3区分が可能である。単純な比較は無意味ながら、中型のものが主体を占めていると言える。カマドの構築法では、側壁の構築を地山の削り出しによって行ったと判断できるものと、床面上から粘土積み上げまたは石組みによって構築されたものの二者がある。前者はプラン検出時に住居の輪郭とともに、比較的明確に識別できる点が特徴であろう。また、後者ではほぼ例外なく住居外へ延び出す煙道を伴っていると認識された。こうした形態の相異は単純に時期差による変化から生じるものとは言えないが、本遺跡例中では地山削り出しによる方が後出であると捉えられる。住居跡の主軸方位については、ほぼ磁北に沿うST1980他の一群、南々東に向くST2128等の一群、これに対応して南々西に主軸を取るST2074例、それに東南の向きとなるST1440他が認められ、構築時期における規則性が強いと把握される。

次に、出土遺物から推定される住居跡の時期区分について検討を加える。住居跡すべてから構築年代を追及できるまでの遺物は出土しておらず、また床面遺存のものが少なため、堆積土内出土の遺物を比較対象にせざるを得ない例もある点で、一律でないことをあらかじめ断っておく。なお、区分に当たっては供膳器の坏類を基に判断しており、これらが出土していないか実測図化なし得なかった住居跡については、他の土器や住居形態を参考に区分している。第105～107図には器種別の分類による出土土器の変遷過程を提示した。基準となった坏類での区分からはⅠ期（5世紀）・Ⅱ期（6世紀）・Ⅲ期（7世紀末～8世紀）・Ⅳ期（9世紀）に4大別し、さらにⅢ・Ⅳ期を前半（a）・後半（b）に細分した。したがって、6期の区分を行って変遷を示したものである。



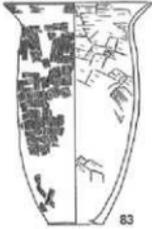
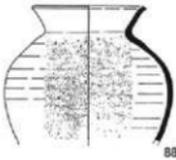
第104図 竪穴住居跡の規模

	住居跡	供 膳 器				
I 期	ST1224 ST1440 ST1914	 1	 4	 7	 10	 13
	 2	 5	 8	 11	 14	
		 3	 6	 9	 12	
		1~9 (ST1440), 10~12 (ST1224), 13・14 (ST1914)				
II 期	ST1315	 15	 16	 17		
		15~17 (ST1315)				
III a 期	ST21 ST210 ST1420 ST1968b ST2128	 18	 20	 22	 24	 27
	 19	 21	 23	 25	 26	 28
		18・19 (ST2128), 20~23 (ST210), 24・25 (ST1968), 26・27 (ST21), 28 (ST1420)				
III b 期	ST363 ST1976 ST1980 ST1993	 29	 31		 34	 35
	 30	 32	 33			
		29 (ST1993), 30~32・35 (ST1980), 34 (ST363), 33 (ST1976)				
IV a 期	ST338 ST1213 ST1294 ST1878	 36	 37	 39	 40	 41
	 38	 42	 43	 44		
		36・37, 40~43 (ST1878), 38 (ST1294), 39 (ST1213), 44 (ST338)				
IV b 期	ST1156 ST1181 ST1960a ST2069	 45	 46	 49	 51	 52
	 47	 48	 50	 53	 54	
		 55	 56			
		45・46・50~52 (ST1181), 47~49 (ST2069), 53・54・56 (ST1960a), 55 (ST1156)				

第105図 住居跡出土土器の変遷 (1)

住居跡		煮沸器・貯蔵器			
I 期	ST1224 ST1440 ST1914				
		57・59・61 (ST1440). 58・60 (ST1224). 62-64 (ST1914)			
II 期	ST835 ST1315				
		65-67 (ST1315). 68 (ST835)			
III a 期	ST210 ST1382 ST1968b ST2128				
		69・70・74・76 (ST210). 71・72 (ST1382). 73 (ST1968b). 75 (ST2128)			
III b 期	ST1976 ST1980				
		77-79 (ST1980). 80-82 (ST1976)			

第106図 住居跡出土土器の変遷(2)

住居跡		煮沸器・貯蔵器			
IV a 期	ST338 ST1878				
					
		83・84・87 (ST338), 85・86・88 (ST1878)			
IV b 期	ST1156 ST1960a ST2069				
					
		89・92 (ST1960a), 90 (ST1156), 91・93 (ST2069)			

※ S = 1 : 8、ただし74のみ 1 : 10で採録

第107図 住居跡出土土器の変遷 (3)

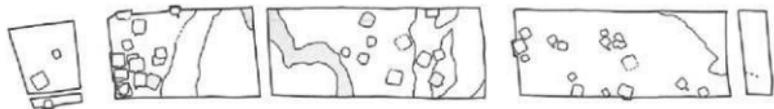
I期では、その主体となったST1440の一括資料他がある。非内黒で丸底形態を示し、口縁が外反するものと直立気味に立ち上がるタイプの大別二者が認められる。坏以外では甕・壺・甔・鉢の器種が散見され、量的にも豊富な内容が窺える。これらの土器型式上の位置付けは、「南小泉式」の範疇で捉えられるものである。

II期は坏がST1315出土の3点に限られるため、いま一つ明確でない。形態的にはI期と同様の内容と受けとめられるが、法量的に小型となり内黒のものが含まれている。相伴する煮沸・貯蔵器は、球形形態を示す大型の甕・壺・甔が知られる。土器型式的にはI期に後続する「住社式」に属すると判断される。

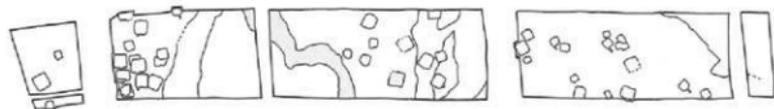
III a期ではST210出土の一括遺物の他、ST88・2128等出土例に見られる有段形態の坏が代表的な存在として揚げられる。他には深身な器形のものや、本文中で小型鉢として扱った丸味の強い体部形態のものが認められる。煮沸器では長胴タイプの甕が主体となる他、球体で小型のものやソロバン球形を呈す短頸壺が含まれる。また、相伴する須恵器の大甕は肩の張りの強い形態が特徴である。当期の土師器群は大略「国分寺下層式」の範疇で捉えられる。

III b期はST1980出土土器が一括的な好資料であり、土師器坏の有段形態が衰退して、丸底から平底のものへと推移していく。同時に、体部下半と底部全面にヘラケズリ再調整を施した黒色土器と須恵器坏が加わる。甕類では長胴甕の他に、小型品も比較的認められる。なお、この時期に当たる須恵器の貯蔵具に器形の解るものが出土していない。

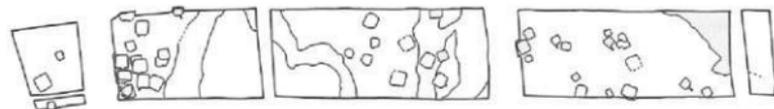
I 期 (5C後半)



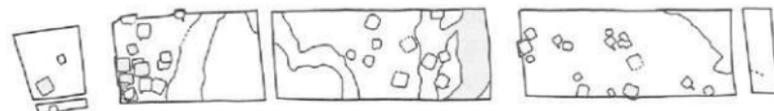
II 期 (6C)



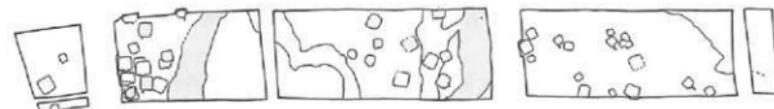
III a 期 (7C末～8C初葉)



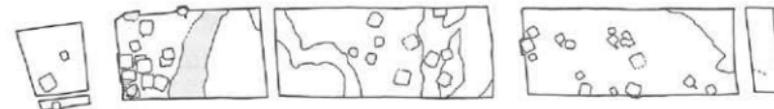
III b 期 (8C中葉～末)



IV a 期 (9C前半)



IV b 期 (9C後半)



第108図 住居跡、河川跡の時期区分

IV a 期では土師器坏が見られなくなり、須恵器および黒色土器が主体となって、双方とも有台坏が認められる。底部の切離法はヘラ切りが大半を占め、ST1878住居跡でまとめて出土している。甕類においては前期との差を見るものではない。

IV b 期では、ST1181やST1960 aからの出土土器が代表例となろう。前期に比べて器高が増し、代わって底径の縮小化が著しい。底部切離は糸切り坏が半数を越え、ケズリ等の再調整を受けるものがほとんどなくなる。また、煮沸具における土師器長胴甕の数が減り、小型のものが多くを占めるようになる。

以上、住居跡を対象にした出土遺物からの時期区分を試みた。その結果として、各住居跡を所属時期毎の配置図に示したのが第108図である。時期毎に機能していたと考えられる河川跡も区分の対象に加えているが、集落構成と河川との関わりはいま一つ把握しきれていないのが実状と言わざるを得ない。SG538河川跡には、前述したごとく張り出し部分があり、付近に倉庫と推測される掘立柱建物跡が存在している事実から、河川が機能していた時期（奈良・平安時代）には張り出し部が人工的な船着き場としての施設であった可能性が考えられる。したがって、遺跡内は船運による物資運搬の集積地とも推定され、区画溝が巡るSB2224等の建物跡が船運に関係する何らかの拠点であったと見なせなくもない。先にも揚げた搬入品と目される東海系の要素を持つ壺や円面硯の存在、祭祀・祈願に関わる呪符木簡などからは、本遺跡が単なる農耕集落とは異なる側面を有すると推測できるが、現段階での結論は見い出せない。資料の分析が極く一部分に限られ充分なものとはなっていないことと、他との比較検討を通じて遺跡の性格を位置付けするまでに及ばなかったこと等が原因と思われ、今後の課題としていかなばならないと考える。

#### 【参考文献】

- |          |                                       |          |
|----------|---------------------------------------|----------|
| 山形県      | 1985:『土地分類基本調査 米沢・関』                  |          |
| 愛知県教育委員会 | 1981:『築投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅱ)』            |          |
| 長橋 至     | 1986:『不動木遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第100集 |          |
|          | 山形県教育委員会                              |          |
| 阿部 明彦    | 1987:『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書』                |          |
|          | 山形県埋蔵文化財調査報告書第107集                    | 山形県教育委員会 |
| 伊藤 邦弘 他  | 1994:『南原遺跡・堂ノ下遺跡・飯塚館跡発掘調査報告書』         |          |
|          | 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第2集                  |          |
| 眞壁 達 他   | 1995:『畑田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書』               |          |
|          | 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第22集                 |          |
| 尾形 典典 他  | 1996:『下柳A遺跡発掘調査報告書』                   |          |
|          | 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第38集                 |          |
| 須賀井新人 他  | 1997:『荒川2遺跡発掘調査報告書』                   |          |
|          | 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集                 |          |
| 高橋 敏 他   | 1997:『西町田下遺跡発掘調査報告書』                  |          |
|          | 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第44集                 |          |
| 手塚 孝     | 1998:『大神窯跡発掘調査報告書』                    |          |
|          | 米沢市埋蔵文化財調査報告書第57集                     | 米沢市教育委員会 |
| 菊地 政信    | 2000:『大浦B遺跡発掘調査報告書』                   |          |
|          | 米沢市埋蔵文化財調査報告書第67集                     | 米沢市教育委員会 |
| 手塚 孝     | 2001:『古志田東遺跡』                         |          |
|          | 米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集                     | 米沢市教育委員会 |

## 報告書抄録

ふりがな	はせがみいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	馳上遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第101集							
編著者名	須賀井新人 黒沼 幹男 佐藤明日香							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL023-672-5301							
発行年月日	2002年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はせがみいせき 馳上遺跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 おねあざかわい 大字川井字 もとだて 元立	6202	353・354 (米沢市遺 跡番号)	37度 55分 05秒	140度 08分 20秒	20000510 ～ 20001020	12,000	主要地方道 米沢高畠線 道路改良工 事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	古墳時代 (5・6世 紀)	竪穴住居 河川 土坑	5 2	土師器 (高坏・坏・器台・甕・壺)			遺跡は時期の異なる 5条の河川に挟まれ た自然堤防状の微高 地に営まれた集落跡 である。河川跡から出 土した呪符木簡は雨 乞いにかかわる「龍 王」の文字が読みとれ た。  (総出土箱数：160)	
	奈良・平 安時代 (8・9世 紀)	竪穴住居 掘立柱建物 河川 土坑	40 11 3	土師器 (甕) 須恵器 (坏・高台付坏・蓋・甕・ 壺) 赤焼土器 (坏・甕) 墨書土器 木簡1 木製品 (椀・田下駄) 土製品 (土鏝) 石製品 (砥石)				
	中世	掘立柱建物	1	漆器椀1				

版 圖



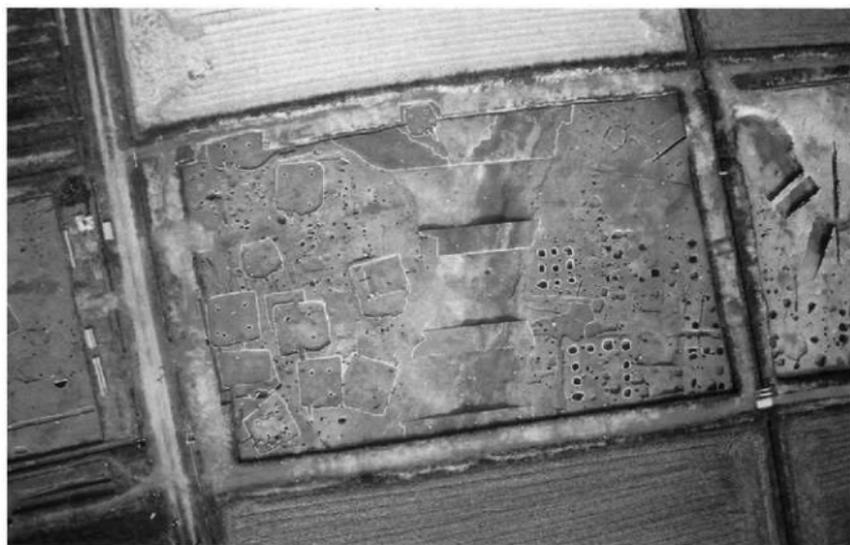
B・C調査区 (西上空から)



A調査区全景 (南から)



B調査区全景（南から）



C調査区全景（南から）



重機械表土除去・グリッド設定



面整理・検出遺構マーキング



記録（平板実測）



遺構精査



遺構精査



記録（断面実測）

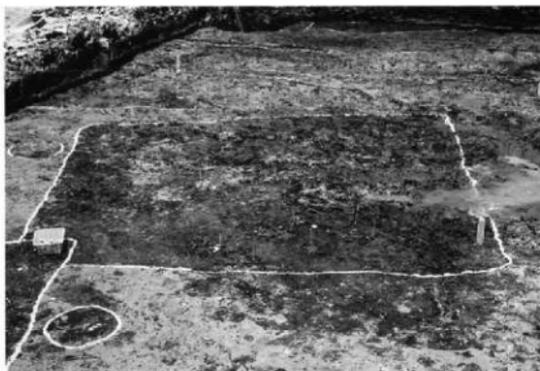


調査説明会



調査説明会

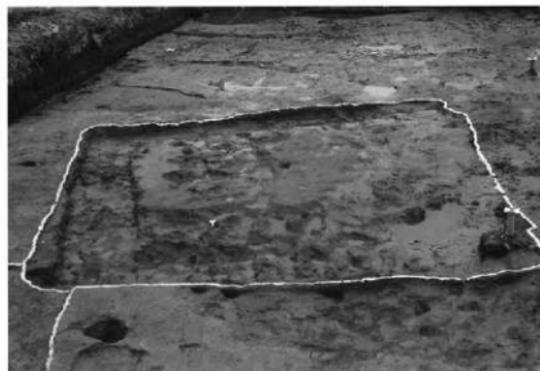
検出状況（南から）

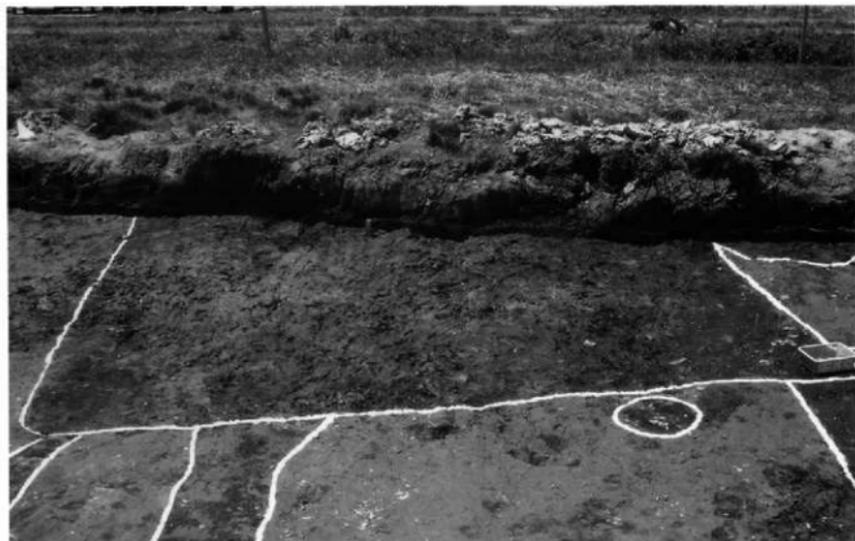


床面検出状況（南から）



完掘状況（南から）



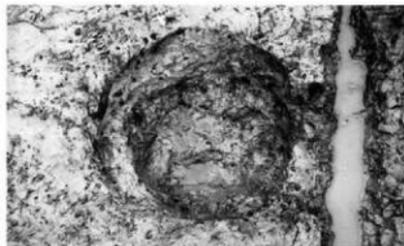


検出状況（東から）

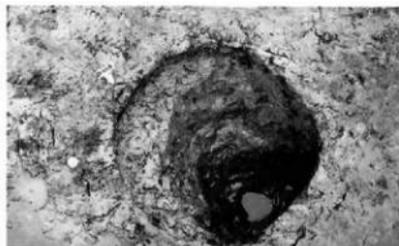


床面検出状況（南から）  
ST21

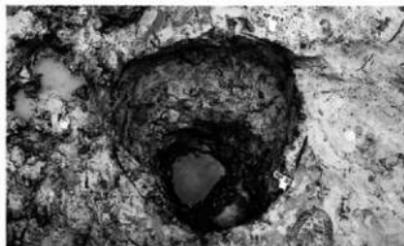
図版 6



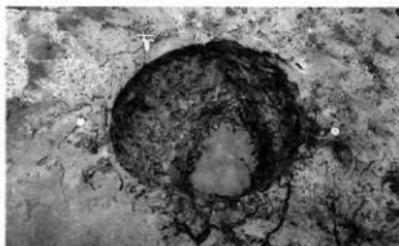
EB597 完掘状況 (南から)



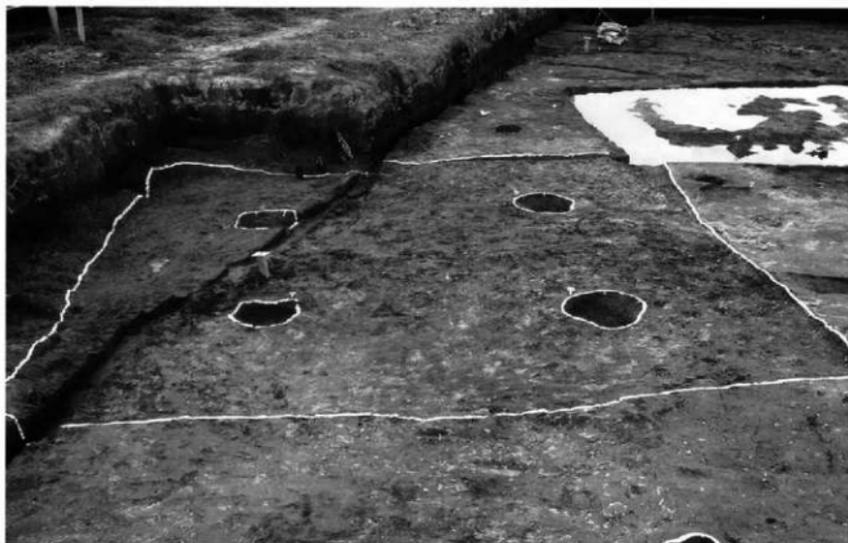
EB596 完掘状況 (南から)



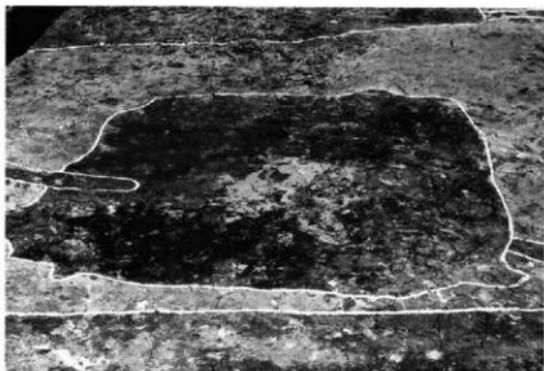
EB594 完掘状況 (南から)



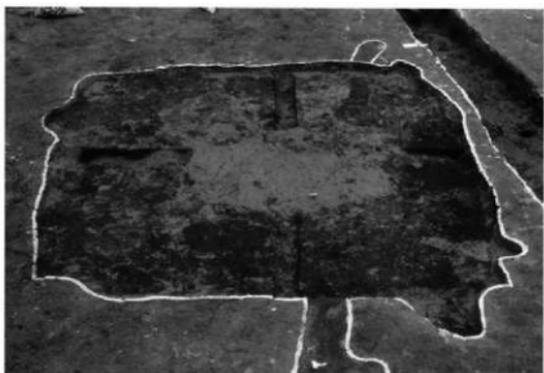
EB595 完掘状況 (南から)



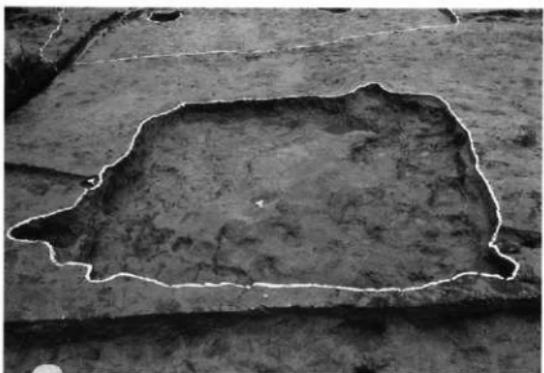
完掘状況 (南から)  
ST21



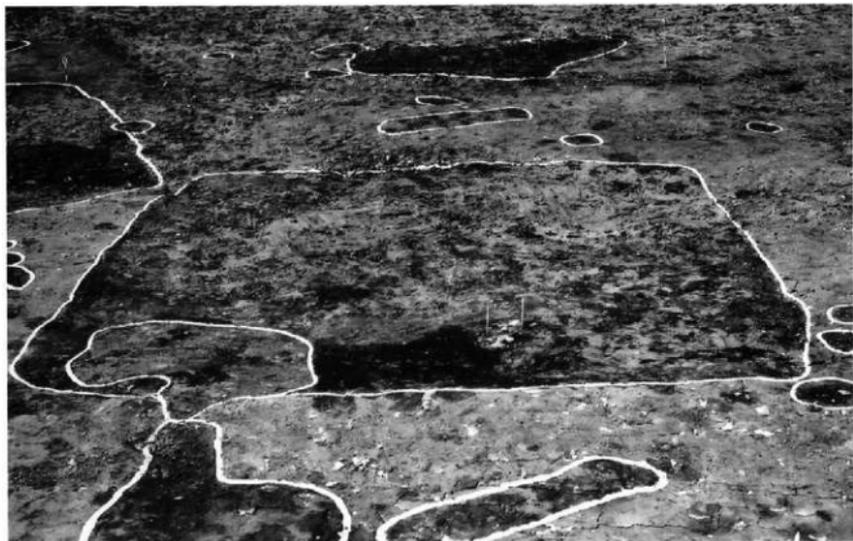
検出状況（南から）



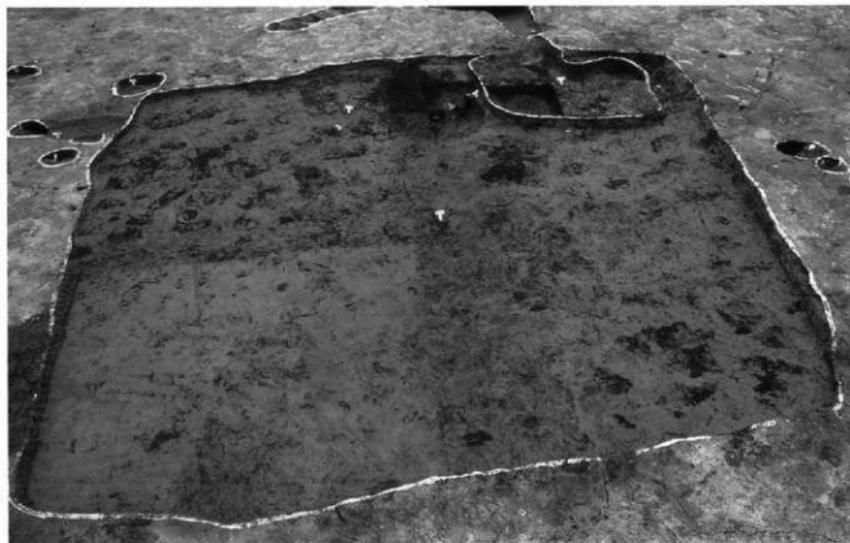
床面検出状況（西から）



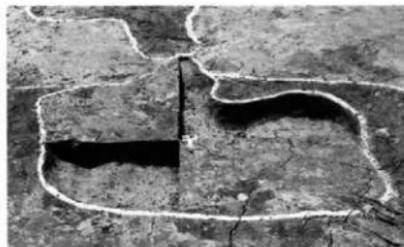
完掘状況（南から）



検出状況 (南から)



掘り下げ状況 (北から)  
ST88



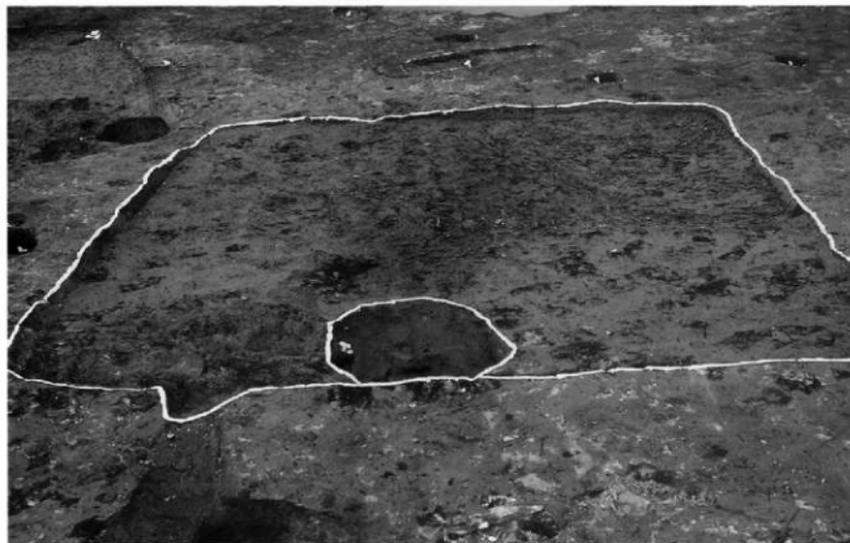
EL87 検出状況 (北から)



RP15 出土状況 (北から)



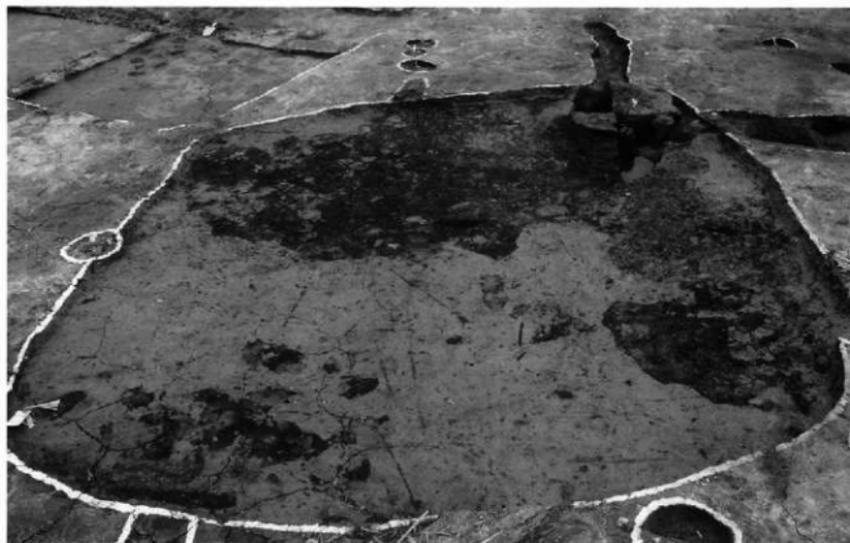
RP13・14 出土状況 (南から)



完掘状況 (南から)  
ST88



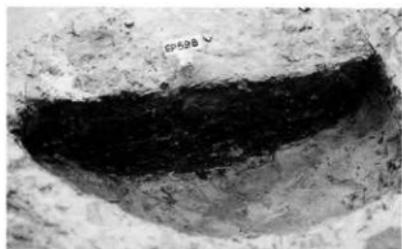
検出状況（南から）



床面検出状況（北から）  
ST106



EL572 土層断面 (北西から)



EP598 土層断面 (南から)



EL572 検出状況 (北から)



完掘状況 (北から)  
ST106



検出状況（西から）



床面検出状況（南から）



完掘状況（南から）



EP602~604 完掘状況 (南から)



北東区画 (南から)



南西区画 (南から)



南東区画 (南から)



RP1 出土状況 (南西から)



RP2 出土状況 (南西から)



RP3 出土状況 (南西から)



RP4 出土状況 (南西から)  
ST210

検出状況（東から）

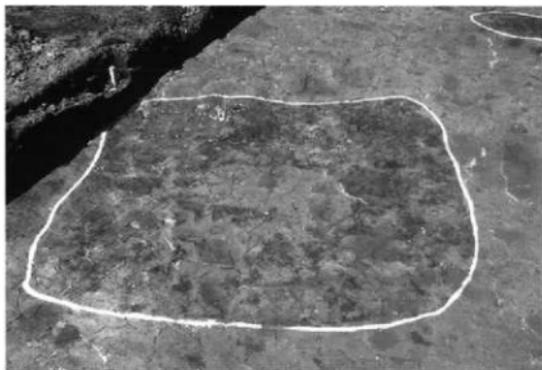


床面検出状況（東から）



完掘状況（北から）





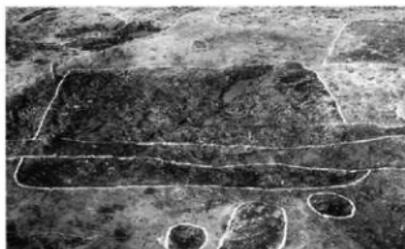
検出状況（東から）



床面検出状況（東から）



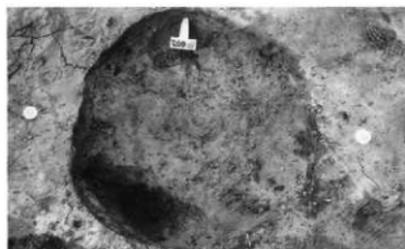
完掘状況（北から）



検出状況（西から）



EL651 土層断面（北東から）



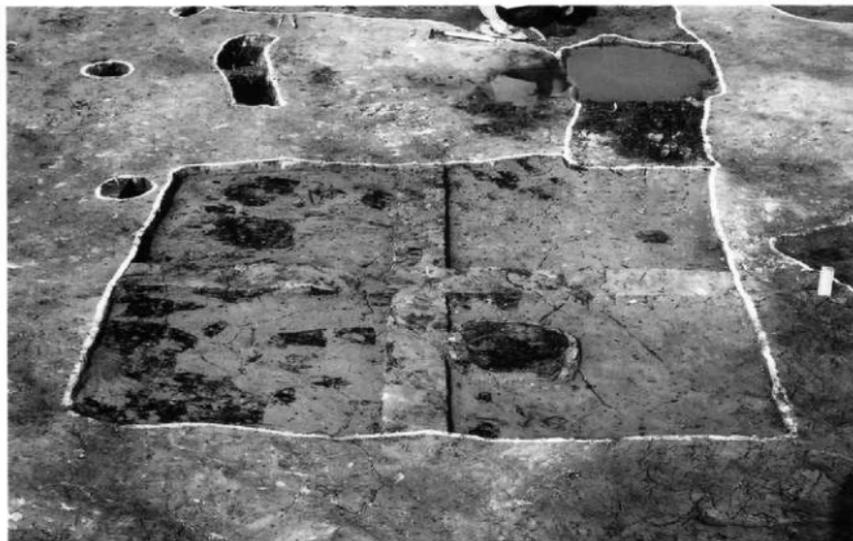
EP652 完掘状況（南から）



EL651 完掘状況（北から）



完掘状況（北から）  
ST271



床面検出状況（西から）



発掘状況（北から）  
ST279



床面検出状況（南から）



ST338 遺物出土状況（南から）



完掘状況（南から）



検出状況 (北から)



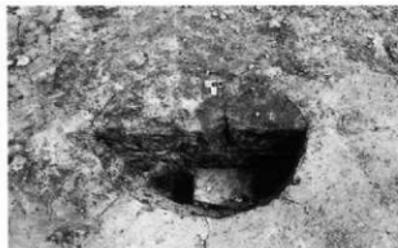
完掘状況 (北から)  
ST354



検出状況（北から）



床面検出状況（北から）  
ST363



EB626 土層断面 (南東から)



周溝土層断面 (南東から)



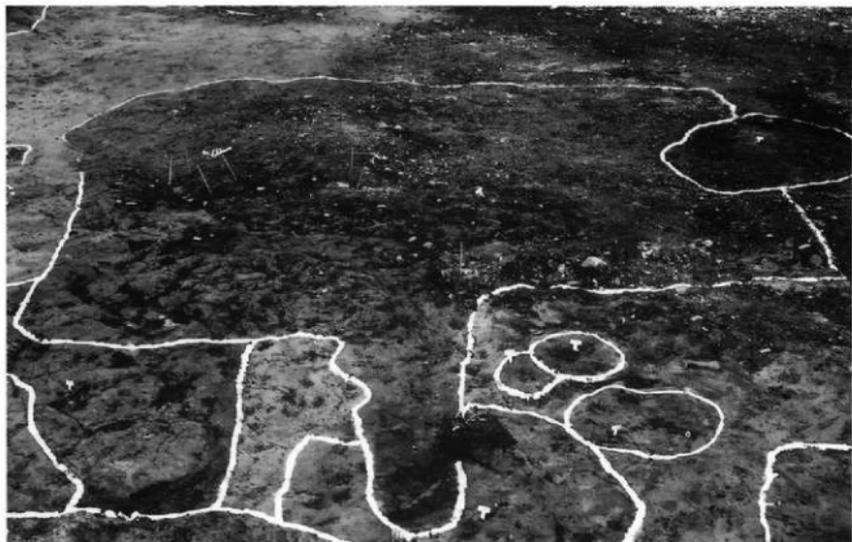
EB626 完掘状況 (南東から)



EB627 完掘状況 (南東から)



完掘状況 (北から)  
ST363



検出状況（南から）



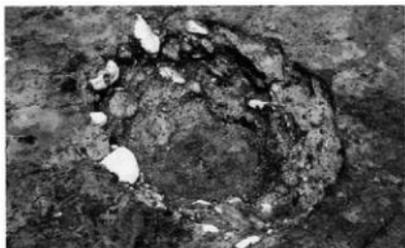
完掘状況（北から）  
ST426



検出状況（西から）



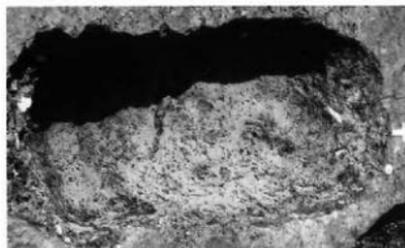
床面検出状況（北から）  
ST458



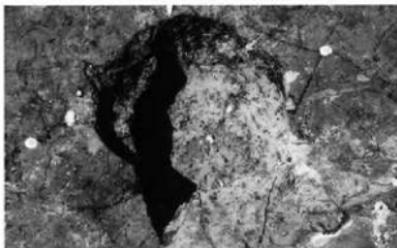
EP587 完掘状況（西から）



EP590 土層断面（南から）



SK588 完掘状況（南から）



EP590 完掘状況（南から）

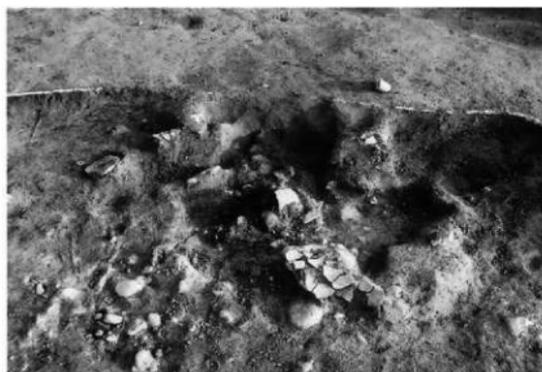


完掘状況（北から）  
ST458

検出状況（北から）



EL.791 完掘状況（北から）



完掘状況（北から）



検出状況（北から）



EL.825 完掘状況（北から）



完掘状況（北から）

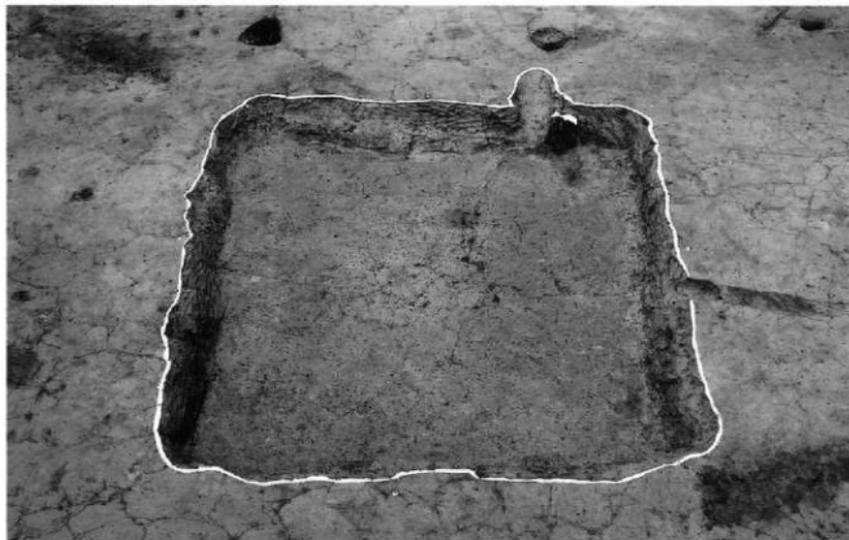




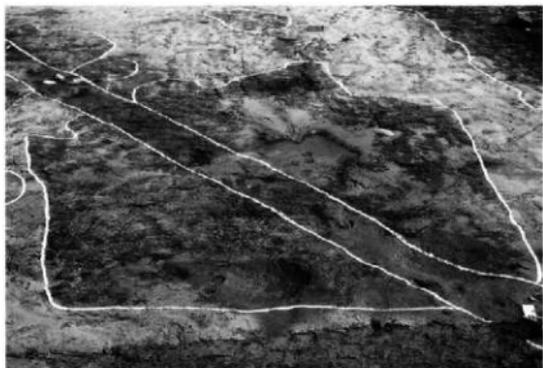
東西土層断面（南から）



南北土層断面（東から）



完掘状況（北から）  
ST835



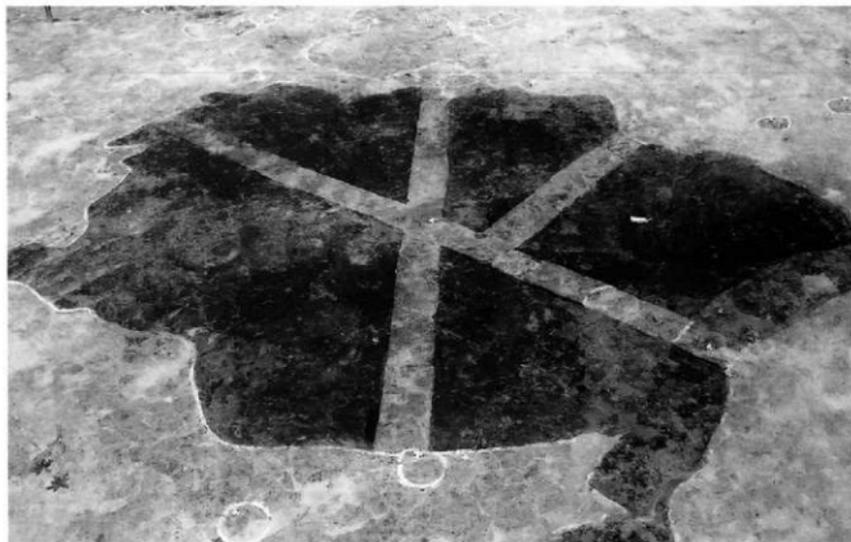
検出状況（北から）



床面検出状況（北から）



完掘状況（北から）



床面検出状況（南から）



完掘状況（北から）  
ST1181



北側土層断面（東から）



南側土層断面（東から）

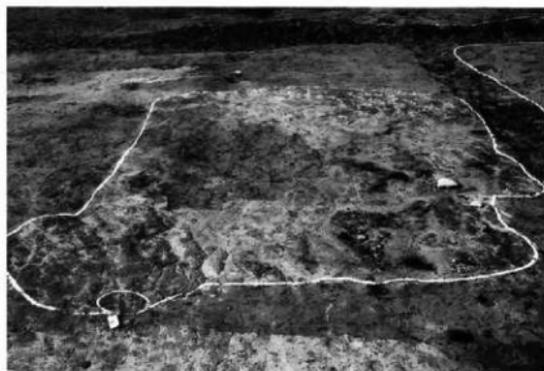


RP55 出土状況（東から）

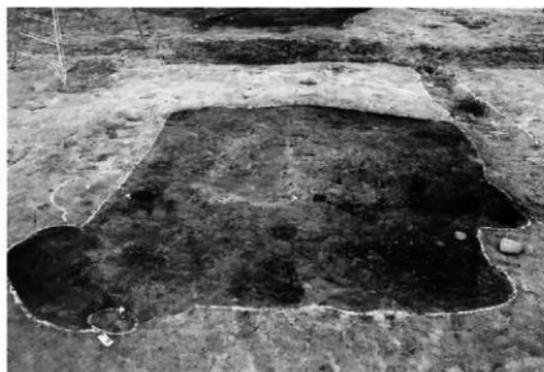


RP56 出土状況（北から）  
ST1181

検出状況（南から）



床面検出状況（南から）



完掘状況（北から）



検出状況 (南から)

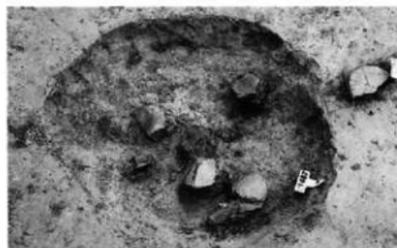


床面検出状況 (南から)



完掘状況 (南から)





EP1487 遺物出土状況 (南から)



EP1488 完掘状況 (東から)



EP1489 完掘状況 (南から)



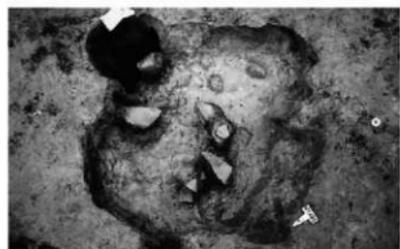
EP1490 遺物出土状況 (東から)



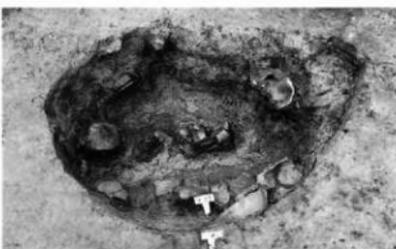
EP1491 土層断面 (東から)



EP1492 土層断面 (東から)



EP1491 遺物出土状況 (東から)



EP1492 遺物出土状況 (東から)  
ST1224

検出状況（北西から）

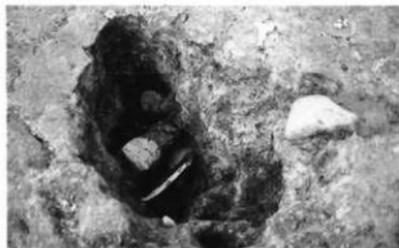


床面検出状況（北から）



完掘状況（北から）





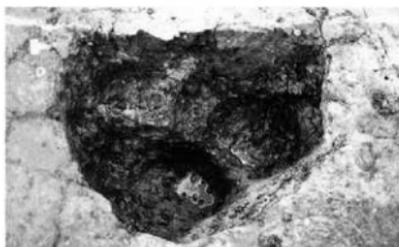
EB1355 上層遺物出土状況 (西から)



EB1486 完掘状況 (西から)



EB1355 下層遺物出土状況 (北から)



EB1297 完掘状況 (東から)



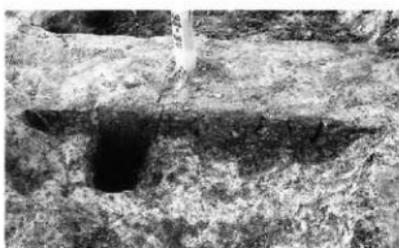
RP38 出土状況 (北から)



EL1485 検出状況 (北から)



EL1485 土層断面 (南から)



周溝土層断面 (東から)  
ST1294

検出状況（北西から）

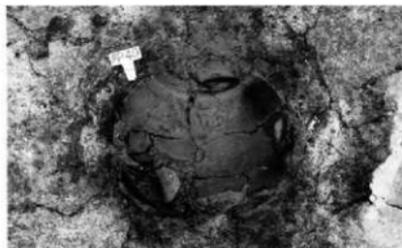


床面検出状況（北から）

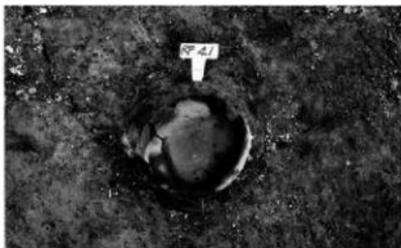


完掘状況（北から）





RP40 出土状況 (西から)



RP41 出土状況 (南から)



RP42 出土状況 (東から)



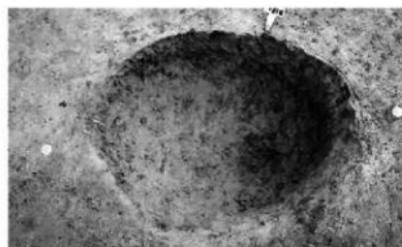
RP44 出土状況 (北東から)



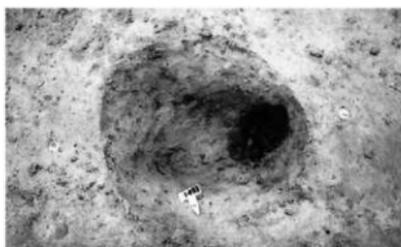
RP45 出土状況 (西から)



EP1496 遺物出土状況 (南から)



EB1316 完掘状況 (南から)



EB1493 完掘状況 (南から)  
ST1315

検出状況（南西から）



床面検出状況（北から）



完掘状況（西から）

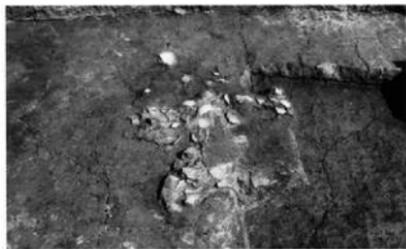




検出状況（南から）



床面検出状況（南から）  
ST1382



北西側遺物出土状況（南から）



北側遺物出土状況（南から）



南西側遺物出土状況（南から）

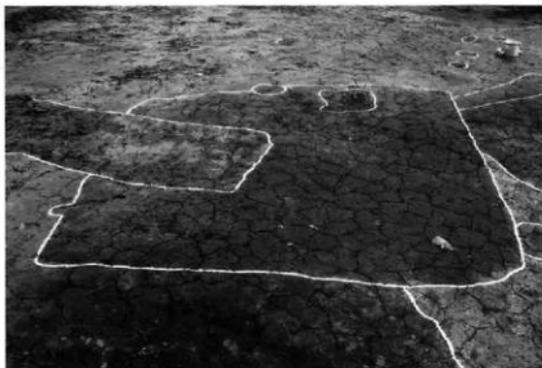


周溝土層断面（北から）



完掘状況（南から）  
ST1382

検出状況（北から）

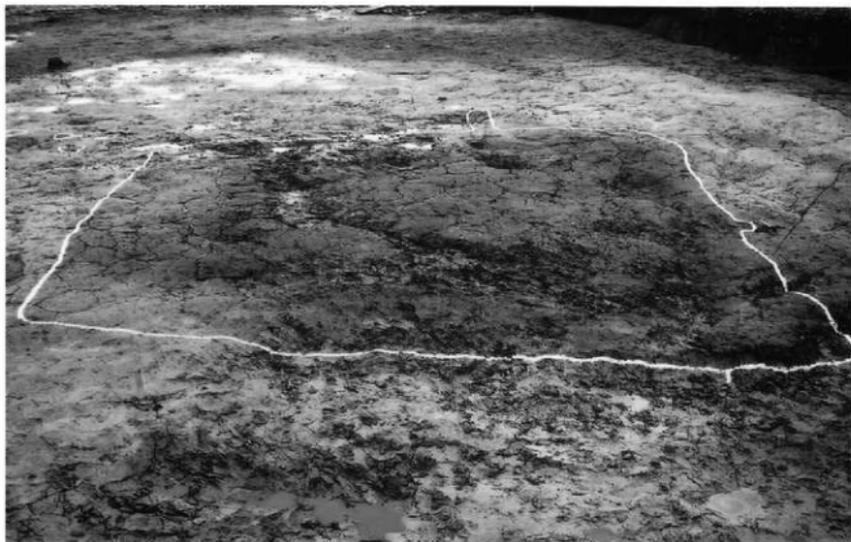


床面検出状況（南から）



完掘状況（北から）

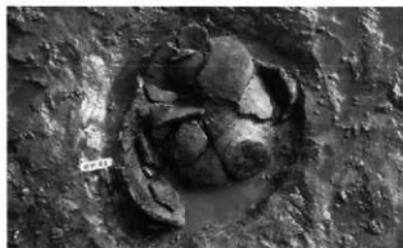




検出状況（西から）



床面遺物出土状況（南から）  
ST1440



RP51 出土状況（北から）



南隅遺物出土状況（南から）



EL144 土層断面（西から）



東側遺物出土状況（東から）



完掘状況（北西から）  
ST1440



検出状況（北から）



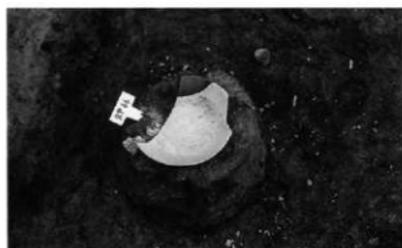
床面検出状況（北から）  
ST1878・2272



EL18790 土層断面 (北西から)



EL1879 完掘状況 (北から)



RP66 出土状況 (北から)



ST2272 遺物出土状況 (西から)



ST1878 完掘状況 (北から)  
ST1878・2272



検出状況（北から）



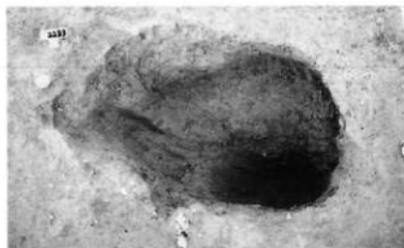
完掘状況（西から）  
ST1914



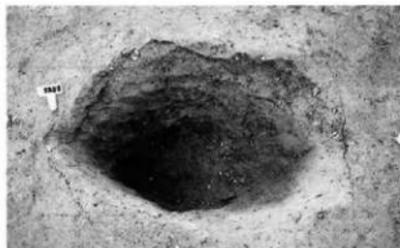
検出状況（北から）



床面検出状況（北から）  
ST1923



EB2233 完掘状況 (南から)



EB2232 完掘状況 (東から)



EL1941 完掘状況 (北から)



EL1941 立割り状況 (西から)



完掘状況 (北から)  
ST1923

検出状況（北から）

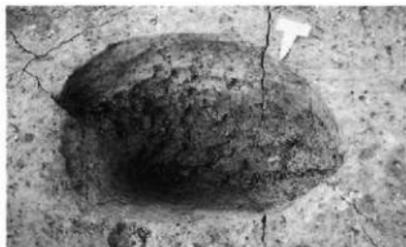


床面検出状況（北から）



完掘状況（北から）

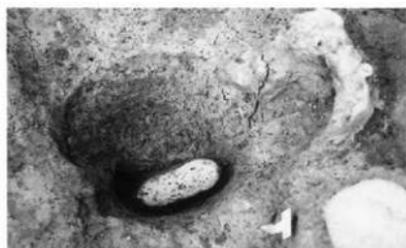




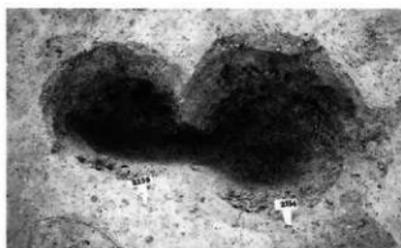
EB2251 完掘状況 (南から)



EB2253 完掘状況 (南から)



EB2252 完掘状況 (南から)



EB2254・2255 完掘状況 (東から)



RP58・59 出土状況 (東から)



南半部土層断面 (東から)



RP73・74 出土状況 (北から)



EL2262 土層断面 (北から)  
ST1960



検出状況（北から）



床面検出状況（北から）  
ST1968



EL2127 完掘状況（北から）



SK2221 完掘状況（北から）



EL2127 土層断面（北東から）



EL2127 土層断面（南西から）



完掘状況（北から）  
ST1968

検出状況（北から）



床面検出状況（北から）



完掘状況（北から）

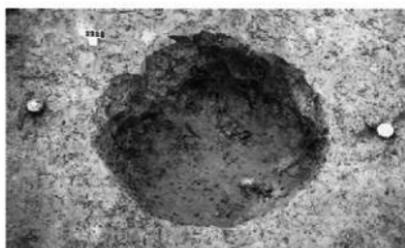




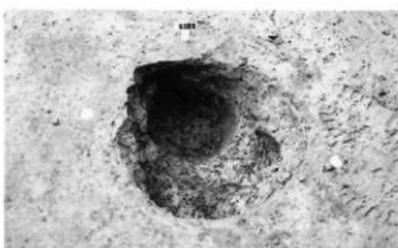
EL2277 土層断面 (西から)



EL2277 完掘状況 (北から)



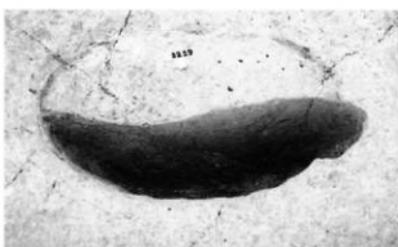
EB2228 完掘状況 (南から)



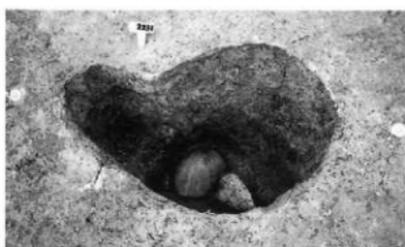
EB2228 完掘状況 (北から)



EB2231 土層断面 (南から)



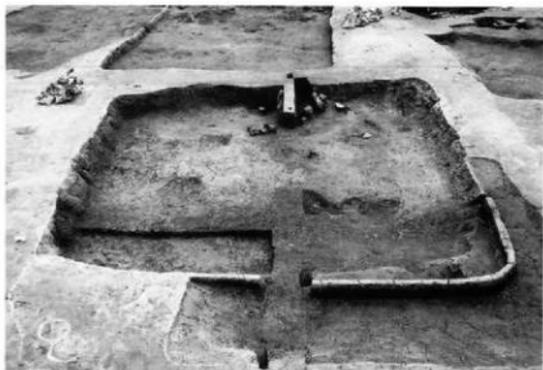
EB2229 土層断面 (南から)



EB2231 完掘状況 (南から)



EB2229 完掘状況 (南から)  
ST1976



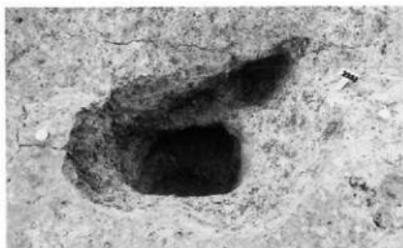
床面検出状況 (北から)



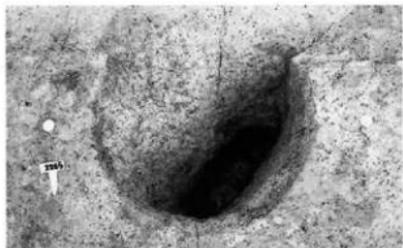
EL2226 完掘状況 (北から)



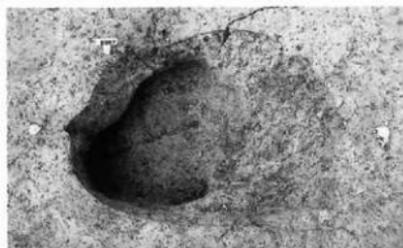
完掘状況 (北から)



EB2263 完掘状況（北から）



EB2265 完掘状況（南から）



EB2267 完掘状況（東から）



EK2299 遺物出土状況（西から）



RP68 出土状況（北から）



RP69 出土状況（南から）



RP70 出土状況（南から）



RP71 出土状況（北から）  
ST1980



床面検出状況（北から）



完掘状況（北から）  
ST1993

床面検出状況（北から）



完掘状況（北から）



EL2217 完掘状況（南から）



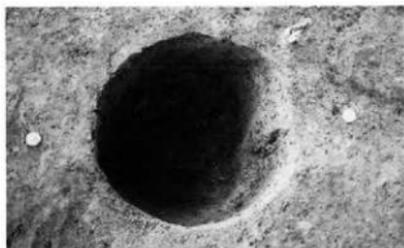


床面検出状況（北から）

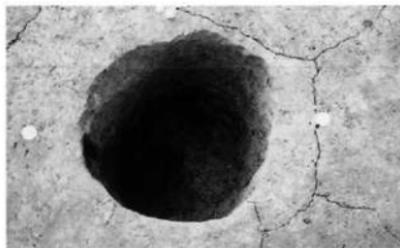


完掘状況（北から）  
ST2074

図版60



EB2268 完掘状況 (北から)



EB2269 完掘状況 (北から)



EB2270 完掘状況 (北から)



EL2227 完掘状況 (北から)



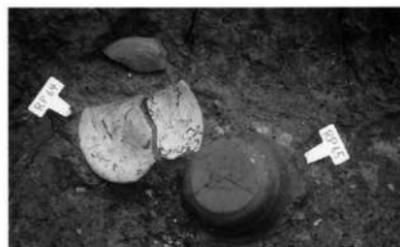
EL2227 土層断面 (南東から)



EL2227 土層断面 (北西から)



RP63 出土状況 (南から)



RP64・65 出土状況 (東から)  
ST2074



RP60 出土状況（南から）



EL2129 完掘状況（北から）

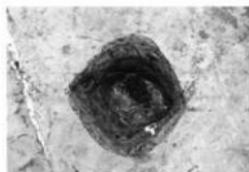


床面検出状況（北から）

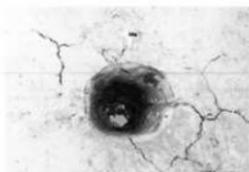


完掘状況（北から）  
ST2128

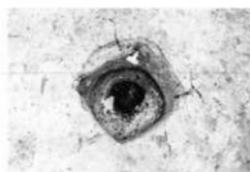
図版62



EB164



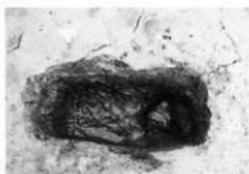
EB264



EB261



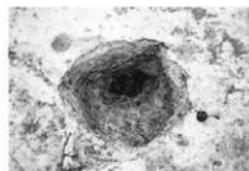
EB575



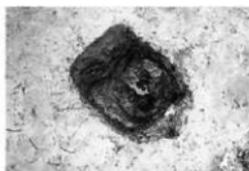
EB174・175



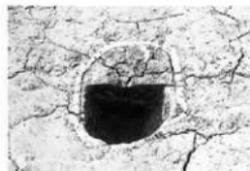
EB262



EB160



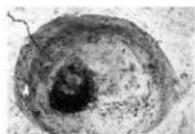
EB170



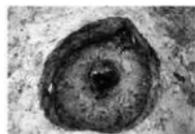
EB169



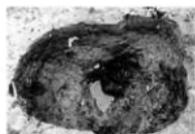
完掘状況 (西から)  
SB573



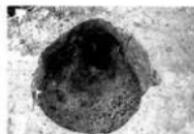
EB241



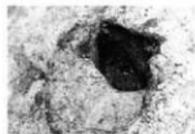
EB239



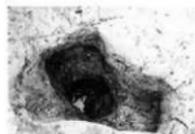
EB233



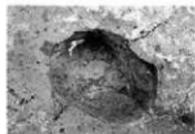
EB237



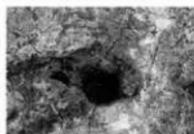
EB240



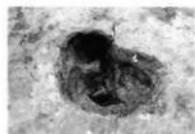
EB196



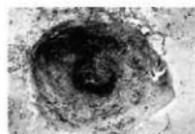
EB203



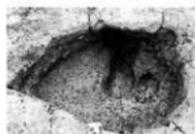
EB576



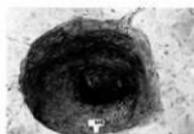
EB197



EB200



EB208



EB245

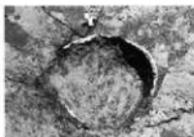


完掘状況 (西から)  
SB574

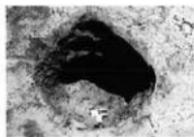
図版64



EB295



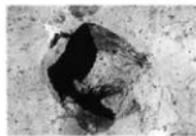
EB296



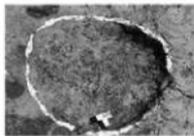
EB298



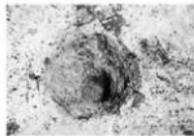
EB305



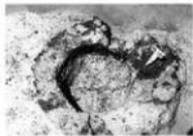
EB306



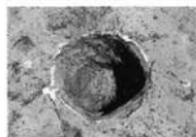
EB293



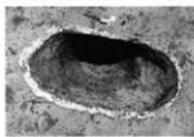
EB578



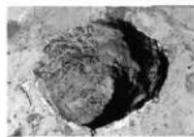
EB582



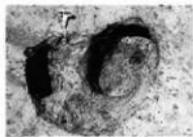
EB290



EB291



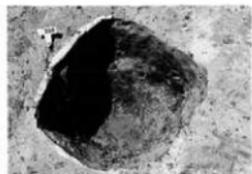
EB579



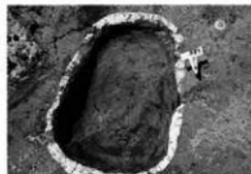
EB581



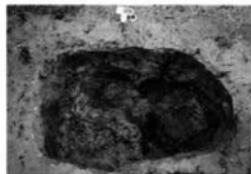
完掘状況（南から）  
SB577



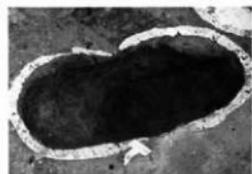
EB328



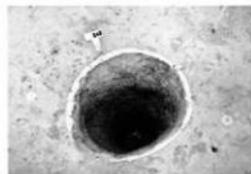
EB321



EB325



EB340



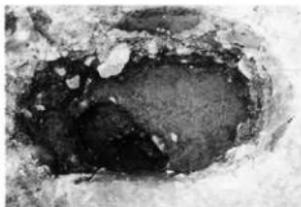
EB342



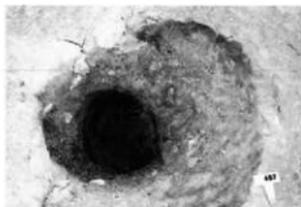
EB343



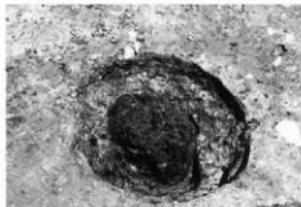
先掘状況 (南から)  
SB585



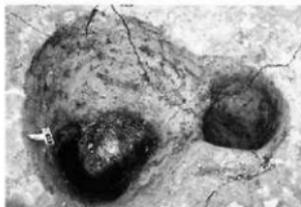
EB461



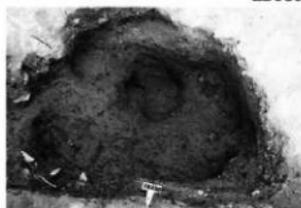
EB487



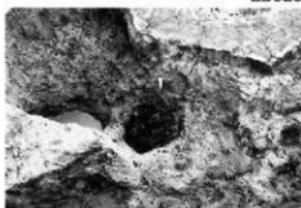
EB589



EB629



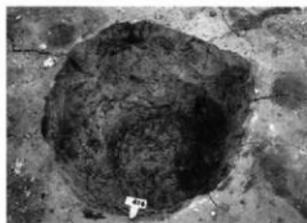
EB630



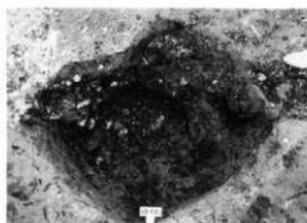
EB628



完掘状況（南から） SB631



EB474



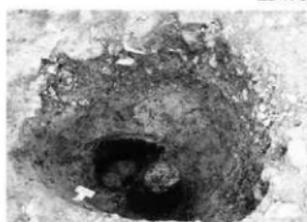
EB643



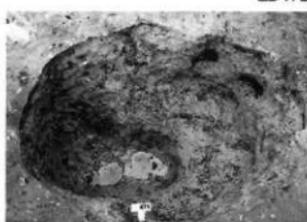
EB475



EB472



EB642



EB471



完掘状況 (西から) SB641



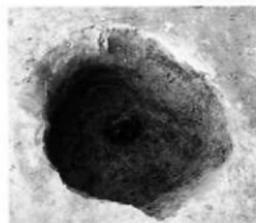
EB1504



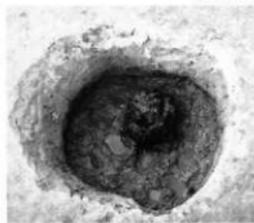
EB1503



EB1502



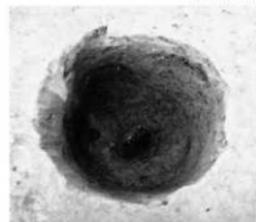
EB1090



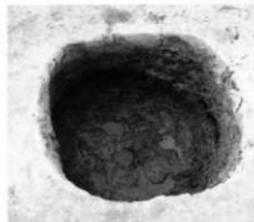
EB1092



EB1094



EB1089



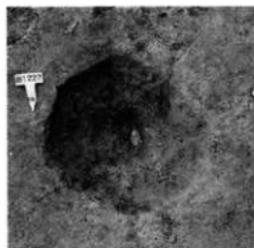
EB1091



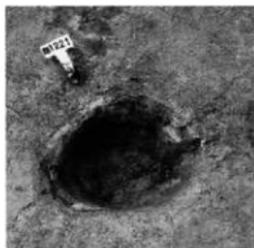
EB1093



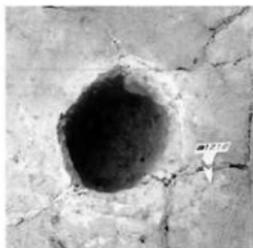
完掘状況 (西から)  
SB1088



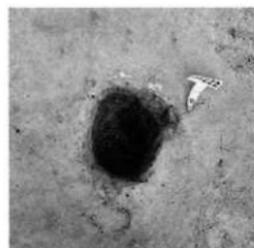
EB1223



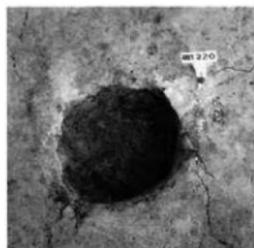
EB1221



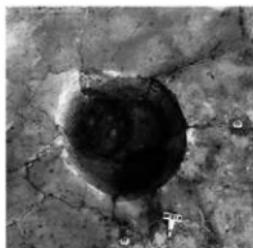
EB1219



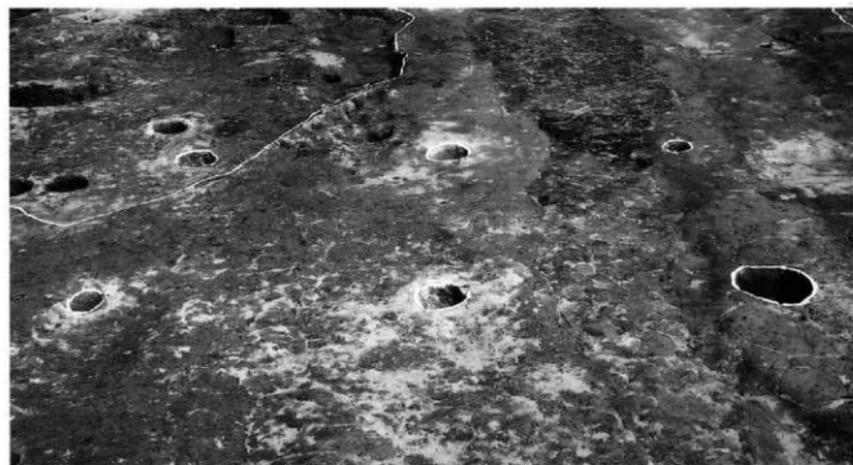
EB1222



EB1220

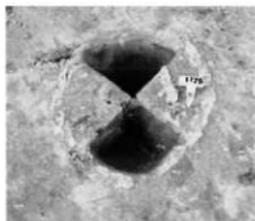


EB1218

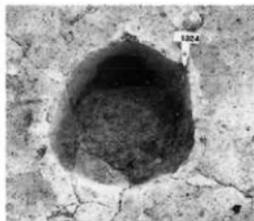


完掘状況 (西から)  
SB1217

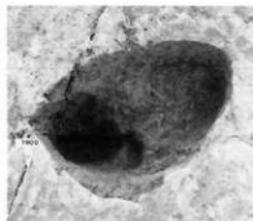
図版70



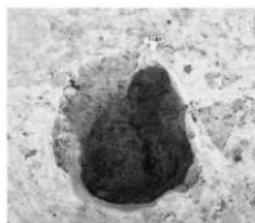
EB1175



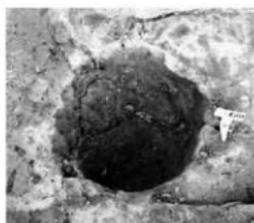
EB1324



EB1500



EB1167



EB1490



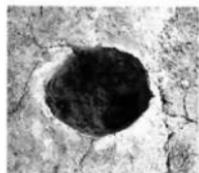
EB1165



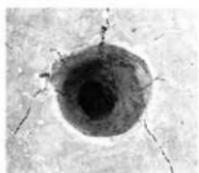
完掘状況（西から）  
SB1501



完掘状況 (南西から)



EB1388



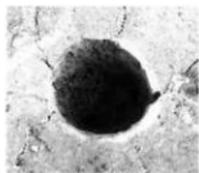
EB1390



EB1391



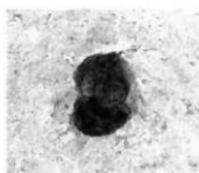
EB1392



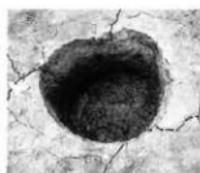
EB1393



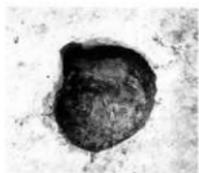
EB1396



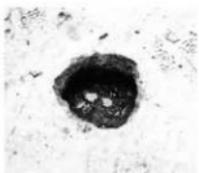
EB1398



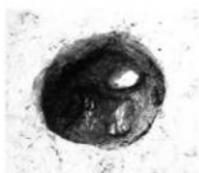
EB1403



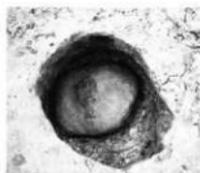
EB1466



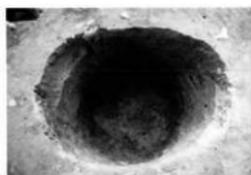
EB1469



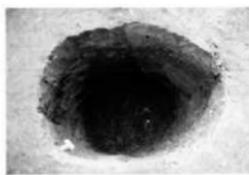
EB1470



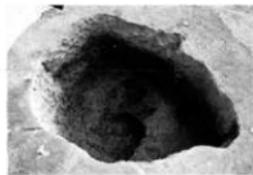
EB1471  
SB1505



EB1770



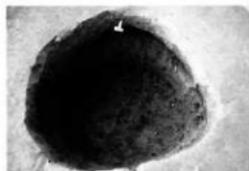
EB1772



EB1847



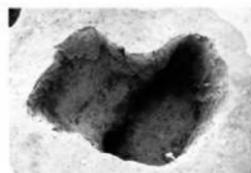
EB1785



EB1782



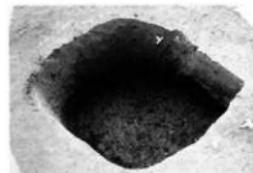
EB1842



EB1799



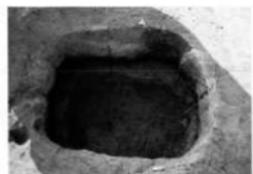
EB1806



EB1840



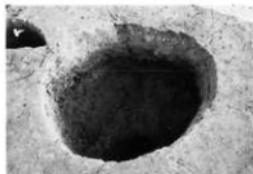
完掘状況 (北から)  
SB2222



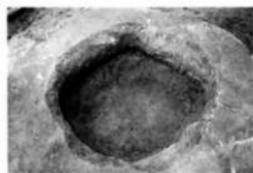
EB1670



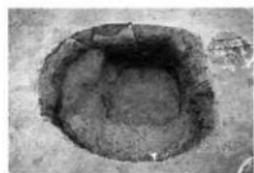
EB1674



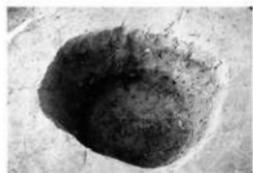
EB1677



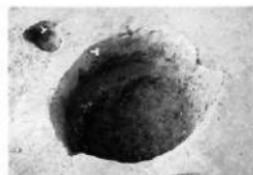
EB1718



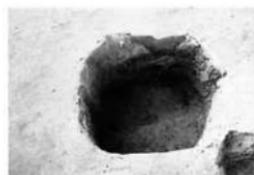
EB1712



EB1710



EB1705



EB1703



EB1698



発掘状況（北から）  
SB2224

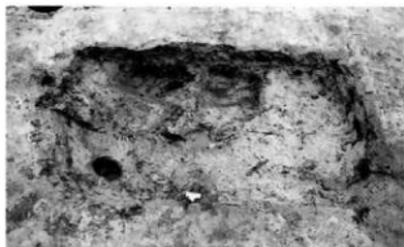
図版74



SK171 土層断面 (南から)



SK171 完掘状況 (南から)



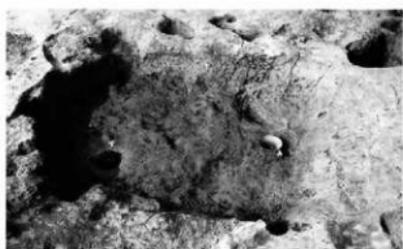
SK167 完掘状況 (南から)



SK412 土層断面 (西から)



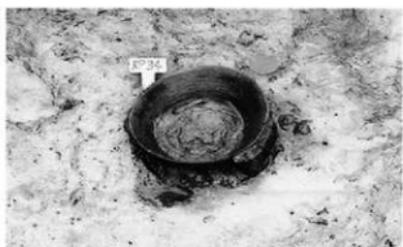
SK520 土層断面 (東から)



SK520 完掘状況 (南西から)



SK520RW35 出土状況 (南西から)



SK520RP34 出土状況 (南から)



SK449 土層断面 (南西から)



SK443・SD441 土層断面 (南から)



SK440 土層断面 (北東から)



SK440 土層断面 (南西から)



SK428 土層断面 (南から)



SK428 土層断面 (東から)

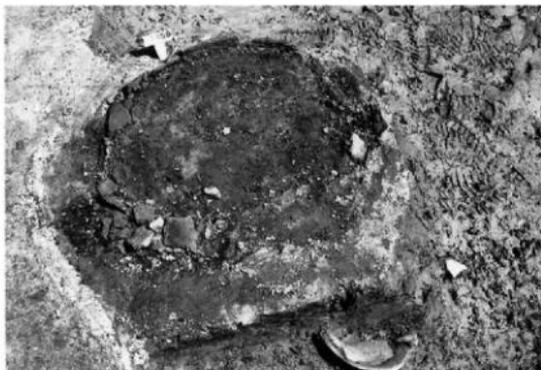


SD1296 土層断面 (南から)



SD1296 土層断面 (南から)

検出状況 (南から)



土層断面 (南から)



完掘状況 (南から)





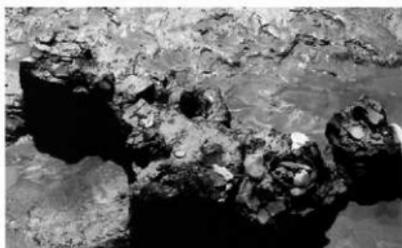
SG538 土層断面 (南から)



SG538 木製品出土状況 (北東から)



SG1155 土層断面 (南東から)



SG1155 遺物出土状況 (北から)



SG1497 土層断面 (南東から)



SG1497 木簡出土状況 (西から)



SG2131 土層断面 (南西から)



SG2131 遺物出土状況 (東から)



6-2



8-1



8-2



8-3



11-1



11-2



6-3



11-3



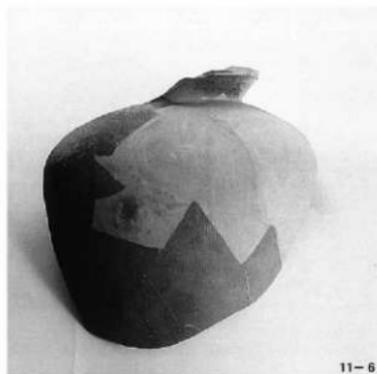
11-4



6-1



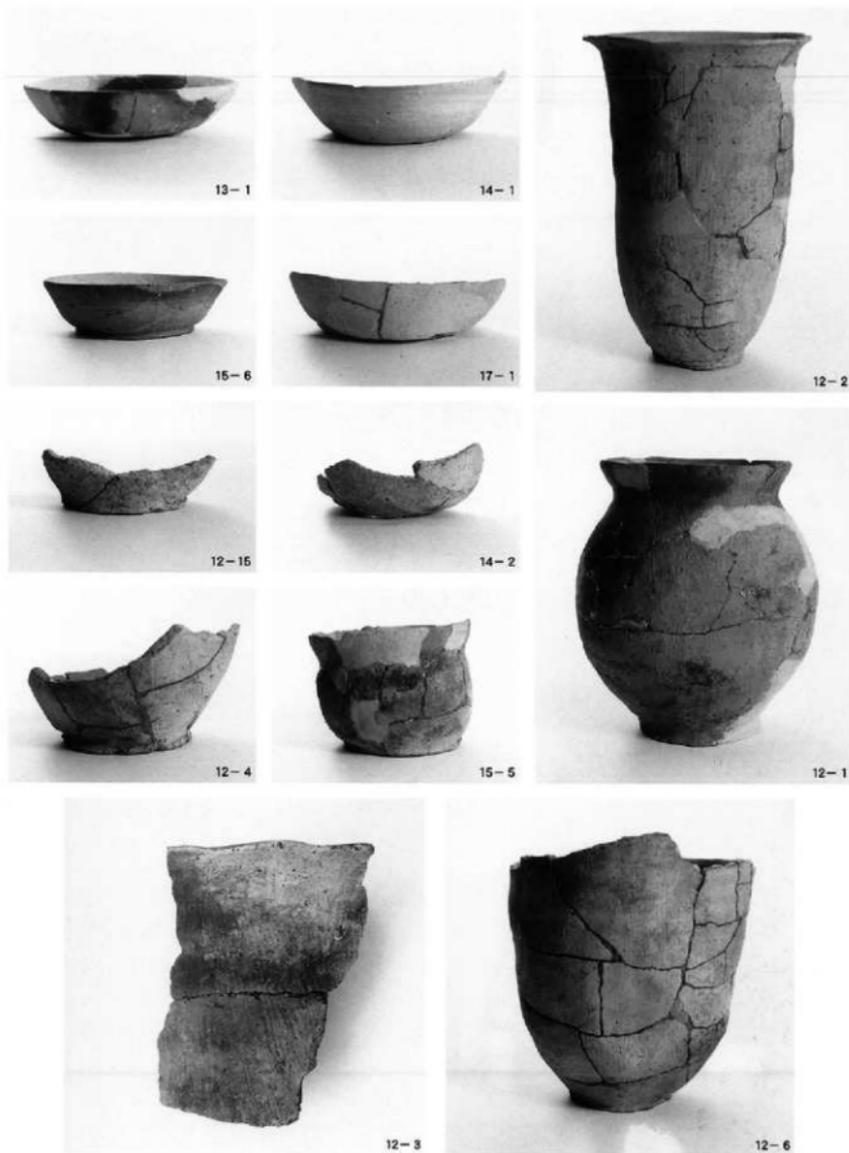
11-5



11-6

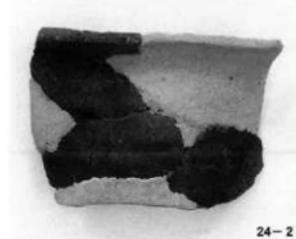


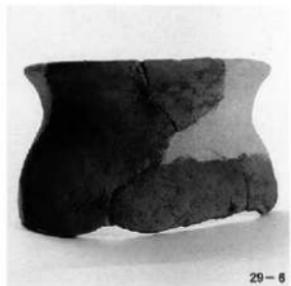
11-7



住居跡出土遺物 (2)









30-4



33-1



33-2



33-3



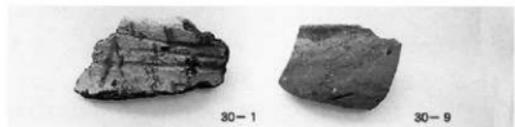
33-4



30-8

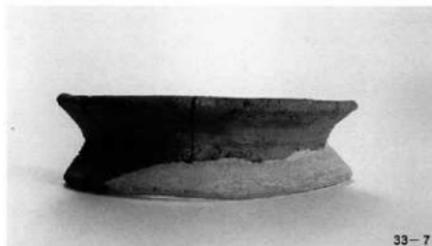


33-5



30-1

30-9



33-7



33-6



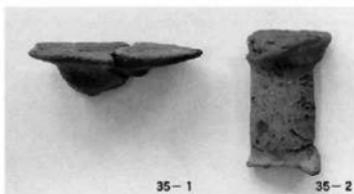
30-7

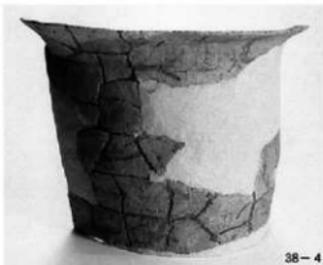


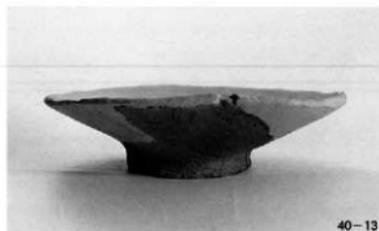
30-5



30-6









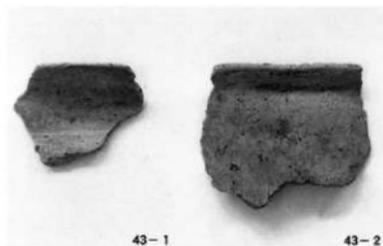
42-13



42-14

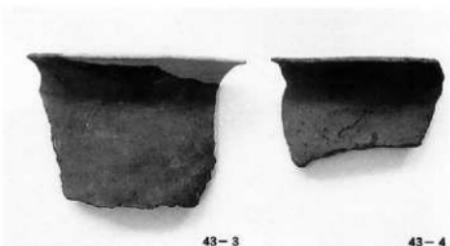


42-15



43-1

43-2



43-3

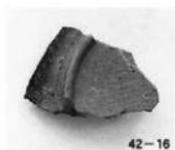
43-4



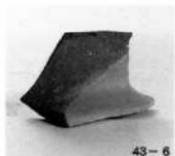
43-5



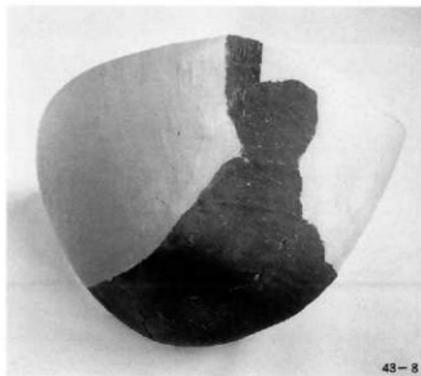
43-7



42-16



43-6



43-8



45-5



47-4





49-1



49-2



49-3



49-4



49-5



49-6



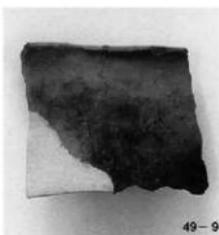
49-7



49-13



49-8



49-9



49-12



49-10



49-11



51-1

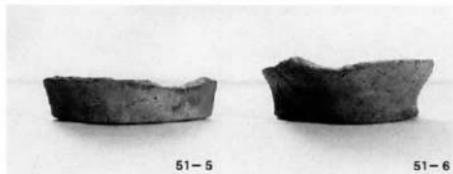
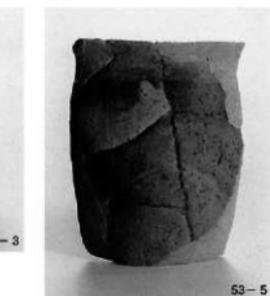


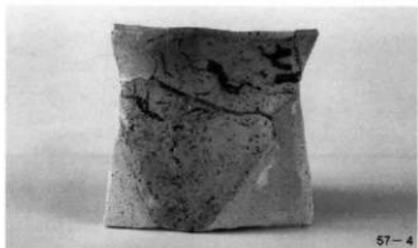
51-2



51-3

図版90









61-3



61-4



61-5



61-7



61-8



61-10



61-11



61-12



61-13



61-14



61-15



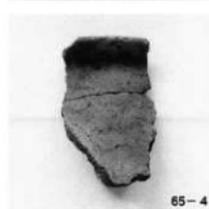
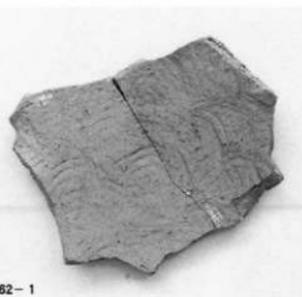
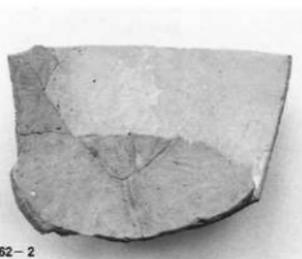
61-16

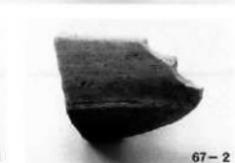
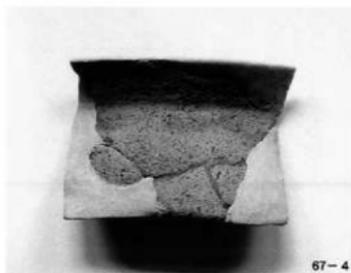


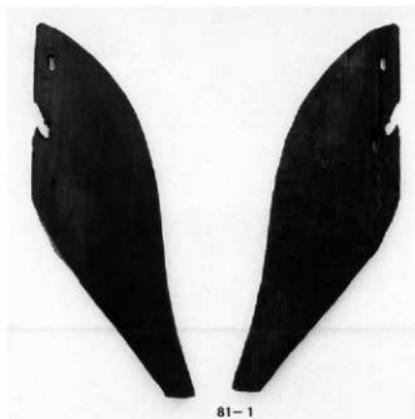
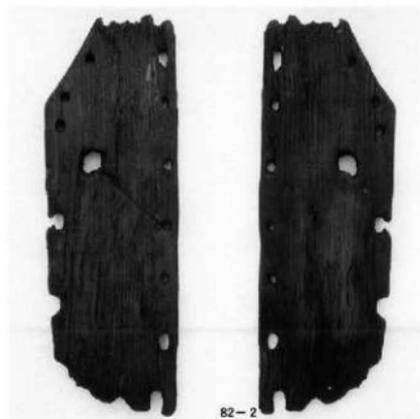
61-17



61-9









83-3



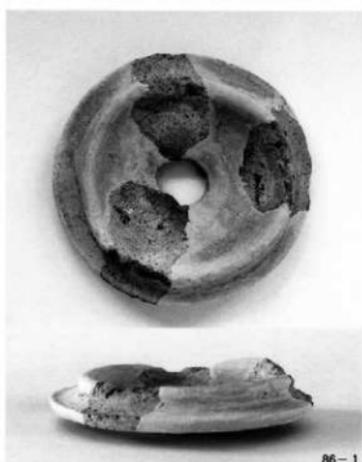
83-4



83-5



86-2



86-1



83-6



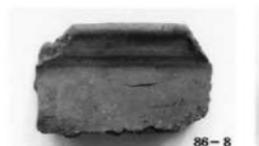
86-6



83-2



86-3



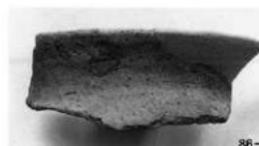
86-8



86-4



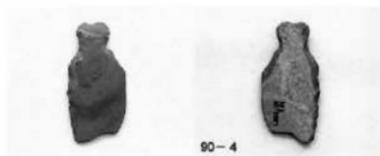
86-5



86-7



86-9









96-11



96-12



96-13



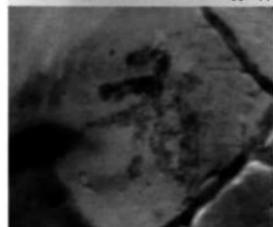
96-14



96-15



96-16



96-17



96-18



96-19



96-20



96-21



96-22



96-23



97-1



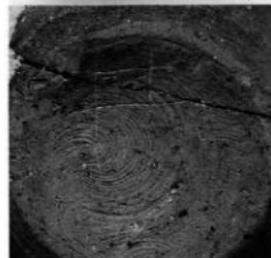
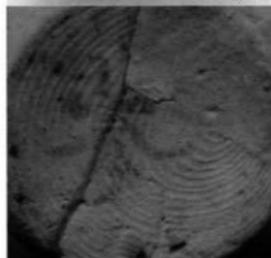
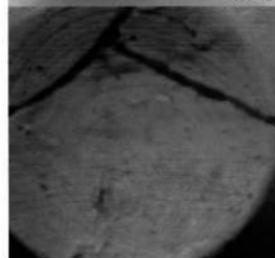
97-2

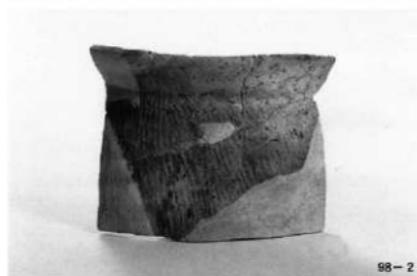


97-3



97-4







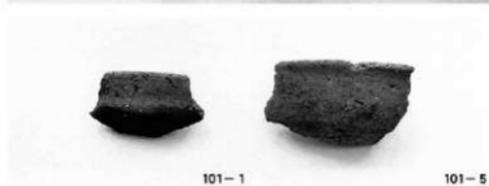




100-7



102-1



101-1

101-5



102-2



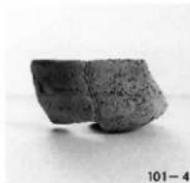
100-6



101-2



101-3



101-4



101-6



102-3



102-4



102-9



102-5



102-10



103-4



102-8



102-6

102-7



103-10



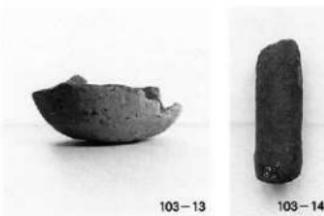
103-2



103-3



103-1



付 編

はじめに

馳上遺跡は、最上川支流の羽黒川右岸段丘上に位置する。発掘調査により、古墳時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代（8～9世紀）の竪穴住居跡および掘立柱建物跡、中世の掘立柱建物跡等が検出されている。このうち、奈良・平安時代の倉庫跡と考えられている総柱の掘立柱建物跡SB1088は、他の掘立柱建物跡と比較して柱穴が1m前後と大きく柱も太く、柱穴内には柱材が残存していた。

### 1. 試料

試料は奈良・平安時代（8～9世紀）の掘立柱建物跡SB1088の柱穴内から出土した柱根8点（試料番号1～8）である。

### 2. 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

### 3. 結果

表1 柱材の樹種同定結果

遺構名	時 期	番号	遺物番号	樹 種
SB1088	奈良・平安時代	1	1504	クリ
		2	1503	クリ
		3	1502	クリ
		4	1090	クリ
		5	1092	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		6	1094	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		7	1089	クリ
		8	1093	クリ

樹種同定結果を表1に示す。柱材は、いずれも落葉広葉樹で、2種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

### 4. 考察

掘立柱建物跡SB1088の柱は、東西方向・南北方向にほぼ等間隔で各3列、合計9本で構成される。このうち、西側の列の中央の1本を除く8本から柱根が出土している。これらの柱材は、中央の列の中央と南の2本がコナラ節で、他は全てクリであった。この結果から、掘立柱建物の柱材は、9本中8本が2種類の樹種で構成されていたことがうかがえる。

コナラ節は、カシワ、コナラ、ミズナラ、ナラガシワの4種が日本に自生し、北海道から九州までの広い範囲に分布する。一方、クリは、北海道の石狩・日高以南から本州・四国・九州に広く分布する。現在の米沢盆地周辺では、コナラとクリを主体とする二次林が海拔400～600m以下に分布し、それより高い地域ではミズナラを主とする二次林が優勢される（斉藤、1987）。このことから、今回のコナラ節は、クリと共に二次林を形成しているコナラの可能性がある。また、本遺跡の周辺地域から木材を入手したことが推定される。

コナラは、樹高15m、径60mに達する落葉高木である。一方、クリは、樹高17m、径1m（時にそれ以上）に達する落葉高木である。共に重硬で強度の高い材質を有し、クリでは耐朽性も高い（平井、1979、1980）。これらの材質から、建築や器具材としてよく利用される他、薪炭材としても利用される。とくに、コナラ節は、薪炭材としてはクヌギ節に次ぐ良材とされる。また、クリは、耐朽性を生かして土木材等にもよく利用される。今回の柱材についても、木材の強度や耐朽性を考慮した用材選択が行われたことが推定される。

奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱材については、木原遺跡跡第2次調査や宮ノ下遺跡でも行われているが、今回と同様にクリの多い結果であった（財団法人山形県埋蔵文化財センター、1994；バリノ・サーヴェイ株式会社、1996）。これらの結果から、クリは奈良・平安時代の掘立柱建物の柱材として最も一般的な樹種の一つであったことが推定される。柱材にクリが多く利用される結果は、秋田県弘田柵跡の外郭南門門柱の樹種同定結果でも認められている（バリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。この結果から、掘立柱建物以外の柱にもクリが多用されていたことが推定される。また、中世の掘立柱建物の柱材については、村山市の白鳥館跡ではコナラ節、クリ、ケンボナシ属の3種類が認められている。したがって、コナラ節も比較的多く用いられたことが推定される。今後、分析例をさらに蓄積し、検討したい。

#### 引用文献

平井信二（1979）木の事典 第2巻. かなえ書房.

平井信二（1980）木の事典 第4巻. かなえ書房.

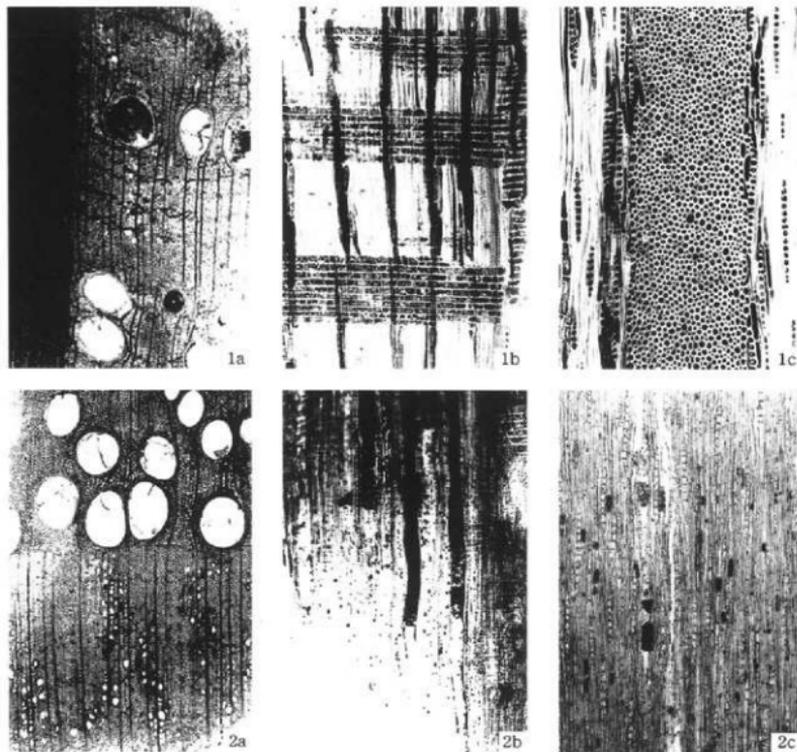
バリノ・サーヴェイ株式会社（1993）花粉分析および樹種鑑定. 「秋田県文化財調査報告書第238集・弘田柵跡調査事務所年報1992 弘田柵跡 一第92・93次調査概要一」, p. 85-89, 秋田県埋蔵文化財振興会.

バリノ・サーヴェイ株式会社（1996）宮ノ下遺跡 自然科学分析. 「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集 宮ノ下遺跡発掘調査報告書」, p. 69-79, 財団法人山形県埋蔵文化財センター.

斉藤員郎（1987）山形県の植生. 「日本植生誌 東北」, p. 478-486, 至文堂.

財団法人山形県埋蔵文化財センター（1994）山形県埋蔵文化財センター調査報告書第8集 木原遺跡第2次発掘調査報告書. 37p.

図版1 木材



1 コナラ属コナラ亜族コナラ節(試料番号5)

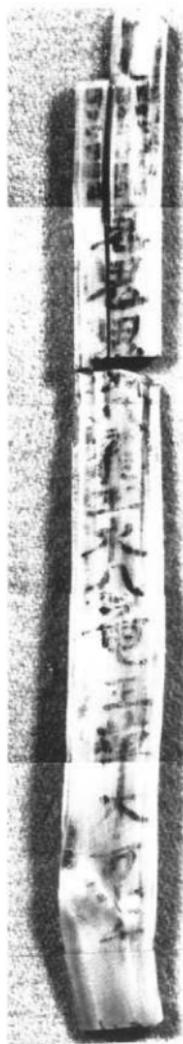
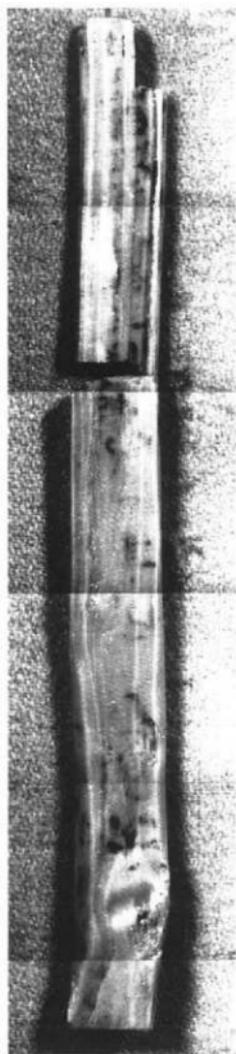
2 クリ(試料番号7)

a: 木口, b: 径月, c: 板目

200 $\mu$ m: a  
200 $\mu$ m: b, c







---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第101集

ほせい跡  
馳上遺跡発掘調査報告書

2002年3月25日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3161

山形県上市市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 株式会社 大風印刷

---